明治四十五年五月廿五日印刷納本
（通巻第百十五號）
女子文壇社發行

女子文壇六月號（第八年第六號）目次

口繪

文の活力は最も新しき形に在り

逍遙坪内文學博士序
大町桂月先生校閲
山下寂水先生編著

作法作例 新しき抒情文

全壹冊
四六洋裝
三二〇頁
定價五拾錢
送料六錢

舊套墨守は文章の死滅なり

讀者をして一擧手一投足の勞なく座ながら數十の大家に師事して、親しく作文の指導を受くるの感あらしむ。是れ本書の特色なり。

作法作例 新しき敍事文

體裁定價
送料同上

近刊

發兌元
東京市神田小川町一番地
電話本局三〇六四番
振替口座東京二一四二六番
尚文館

舞踏はてたる曉



（大江製印）

見よ◎月經なき女子◎病める婦人

▲速に女月丸を服用して効能の顯著なるを知られよ



◎本劑は學理上特効の藥種を蒐集し製劑したる良藥なれば婦人血の道月經不順月やく或は血塊など稱へ滯り或は永き間經水なき爲め腹痛する等又女子十七八歲に至り月經なき人或は月やく不順經滯りより發する病症に用ひて特効有病める婦人は必ず服用試よ

藥價 壹劑 六拾錢 ─ 貳圓貳拾錢 ─ 送料 各四錢
　　 貳劑 壹圓拾錢 ─ 參圓參拾錢 ─

にきび取藥

▲本劑はニキビ吹出物ソバカスに向て防腐させ殺菌させ收斂させ且つ脂肪を溶解さすれば一二日にして皮膚と藥液とを調和ならしむれば輕症一瓶重症二三瓶を用ひ試よ効力實に卓絶跡形なく全くキレー艶美白色と成る事確實なり試み玉へ

藥價小瓶卅五錢、大瓶一圓、特瓶入貳圓送料各八錢

本舖 東京々橋區中橋和泉町 振替口座第一〇六七七番 小富愛生堂

婦人と衞生

婦人科專科某病院長の談話（安全堂主人筆記）

若い令孃方が初期の月經を見るのは多く廿頃ですが此際には餘程御注意なさらないと意外の病氣に罹る事がマ、御座い升、初は誰も親に話すのが恥かしい者ですがからツイ不潔な物で用をたして病毒に侵され子宮病やヒステリー等に罹るのが多ふムい升、私の患者にもコンナのが澤山有升、ソシテ其人達は皆良家の令孃方なのです、其一人は病毒を含んだ手巾から（多分其家に痳疾の方が有たのでせう）若い身空で消渇になつて居るのです、其他月經初期の婦人でなくとも不完全な防經を爲さる、爲めに傳染性の病氣に罹る人が澤山有升、併作ら予が友藤川藥學士の發明された安全帶は歐米婦人の月經帶と同一ですから是を御常用になれば前陳の危險より全然脫する事ができます



定價

安全帶◎甲壹圓廿錢◎乙八拾錢◎丙五拾錢（各一本で四五年使へます）安全衣◎壹圓金四拾錢◎內地送料一組（帶、衣共）金八錢、餘は一組毎に貳錢增し◎代金引換小包料一組金貳拾貳錢 滿、鮮は卅錢

本舖 東京下谷區池ノ端七軒町四二 振替（東京）壹六九貳〇番 安全堂

關西代理店 大阪西區阿波座上一電車道角 振替（大阪）壹壹四六壹番 洋々堂分店

唯一無二文學雜誌

秀才文壇

第十二卷 第六號

六月一日發行 六月號

正價 一冊送料共金十六錢○三ヶ月分六十九錢○半年分一圓三十五錢

發行所 東京神田旅籠町一丁目 振替口座東京一九五五 文光堂（電話下谷四一九八）
賣捌 東京堂・東海堂・上田屋・北隆館・勉強堂・至誠堂

第拾二卷第七號　六月一日發行

女學世界

□菊版紙數二百八頁
□口繪原色版壹頁
□石版寫眞版十頁餘
正價廿錢
郵稅二錢



東京本町　博文館
振替貯金口座東京二四〇

六月一日より

中形浴衣地新柄陳列會

を相開き候を機とし、ありとあらゆる夏季の必要品を陳列販賣仕候間、御さそひあはされ御來觀被下樣奉願上候。

東京駿河町

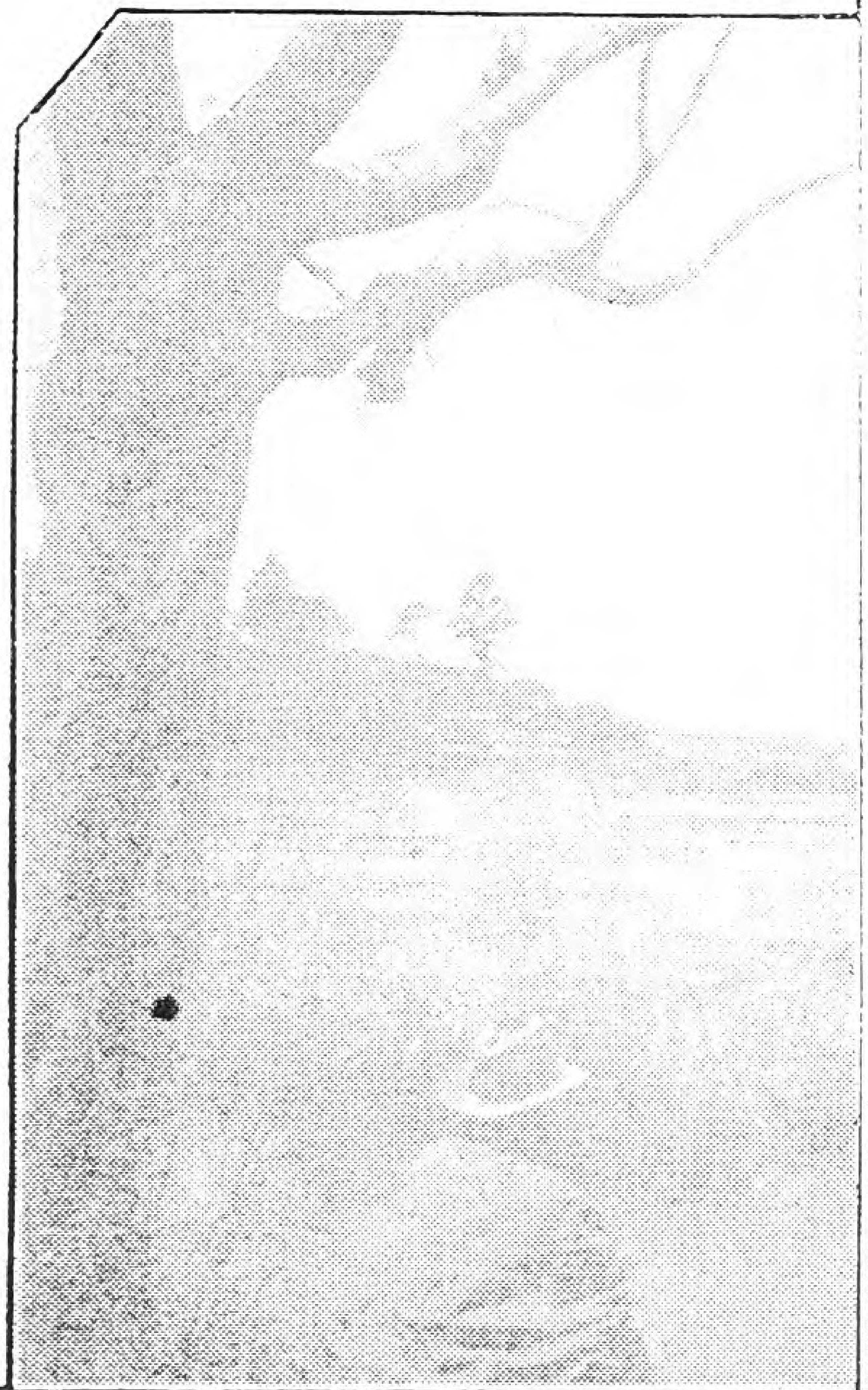
三越呉服店

久邇宮邦彦王殿下の三女王



中央　第一王女良子殿下　右　第二王女信子殿下　左　第三王女智子殿下の最近御寫眞です

綠樹

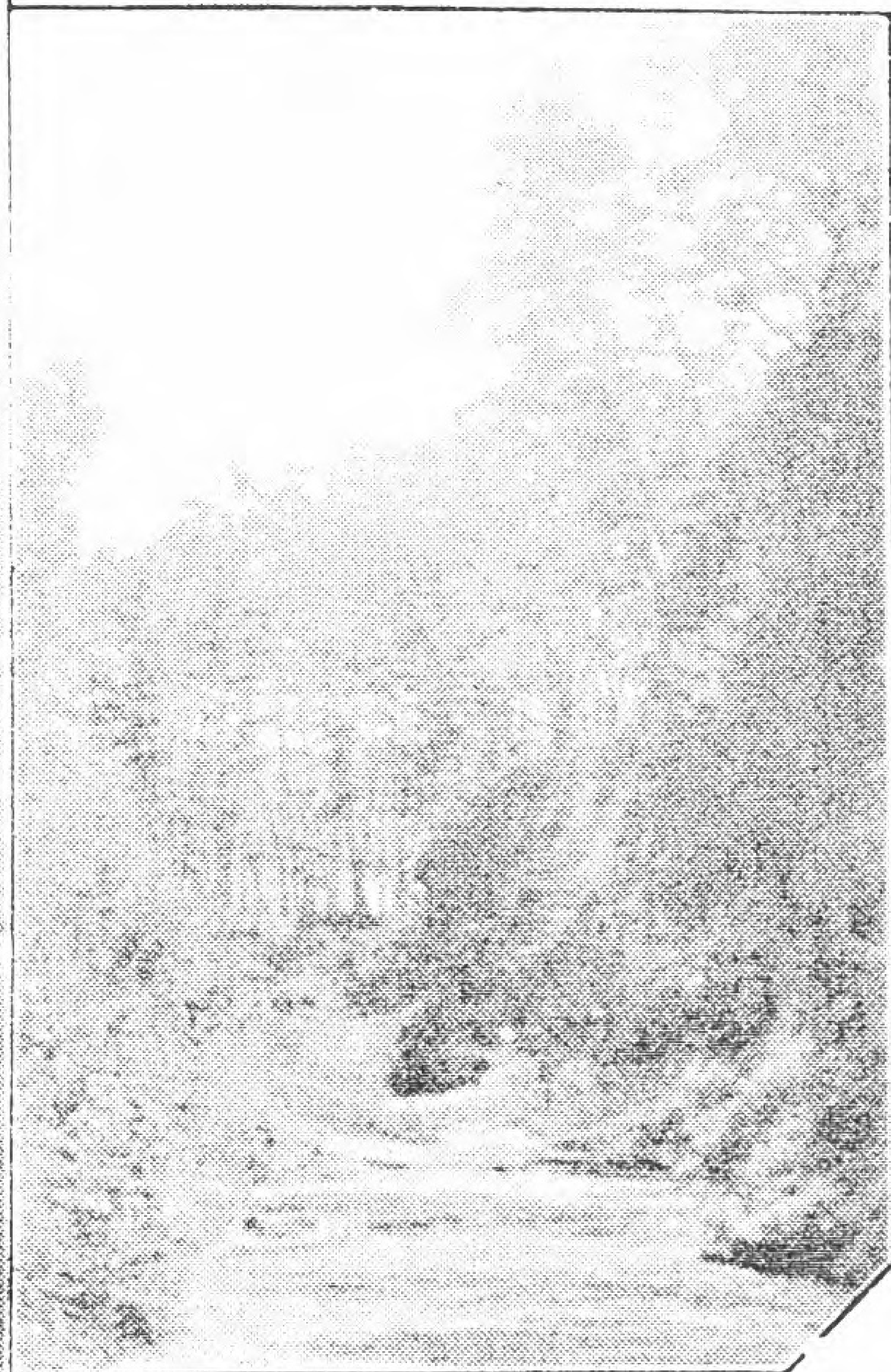




子爵伊東巳代治氏令嗣夫人



子爵大村徳敏氏の家庭



THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第一年第六號定價拾五錢郵税一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

◎◎◎◎◎　編輯顧問　◎◎◎◎◎

高島平三郎先生　倉橋惣三先生

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八

THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

六月一日發行　六月卷　一冊廿五錢　郵税二錢五厘　三冊八十錢　六冊一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

畫報

◎ひとへ衣（附錄）石川寅治氏筆二頁大パステル書　◎令孃鑑　◎愛國婦人茶話會樓上の阿部伯、濱尾男、鬪男三夫人　◎生花席花生の式

◎初夏の御庭　前に於る　梨本宮方子規子二女王殿下　◎二令孃の踊、竹柏會大會　◎渡歐する與謝野晶子女史の盛裝と筆蹟

◎朝香宮紀久子女王殿下　◎お嫁入姿いろ〱　◎女子大學卒業式　◎觀光生蕃と婦人　◎愛國婦人會總會……

◎保科子と武子の方　◎三輪田棚橋兩女史祝賀會　◎金子子爵の和洋の客間　◎サッチャー夫人歡迎　◎數名家の新郎新婦

◎跡見、山脇、美術、成女、女學館　京華　各校の遠足　◎小舟に棹す　侯爵夫人　◎めづらしき髮形のいろ〱　◎戊申婦人くらぶ春季大會……其他

讀物

▼婦人の新道德……浮田博士
▼理想の妻君……高橋義雄
▼婦人の理想……遠藤博士
▼子供の兄弟喧嘩……岸邊福雄
▼女の運……榊博士
▼育兒の栞……加藤博士
▼女學生ばかりの罪ならず……關根博士
▼古今の女歌人……佐々木博士
▼川柳に現れた嫁と姑……久保亙英

▼ある婦人に與ふる手紙（小說）……島崎藤村
▼輕便な生活法……井上秀子
▼マグダ　文藝協會公演「故鄕」を見る……宮田修
◎住居と夜具　金子子爵、加藤夫人、倉橋惣三、棚橋女史、横手博士、佐藤功一
▼都女と夏姿……巖谷小波
▼この頃の料理……吉村里子
▼母たるに必要な知識……今井政吉

東京麹町區飯田町四ノ四四　東京社　電話番町二三三九　振替東京一八一八　（全國書店にて販賣す）

割烹家龜井まさ子女史と其門下



玉だれ



ドクトル吉川春次郎氏夫人菊子

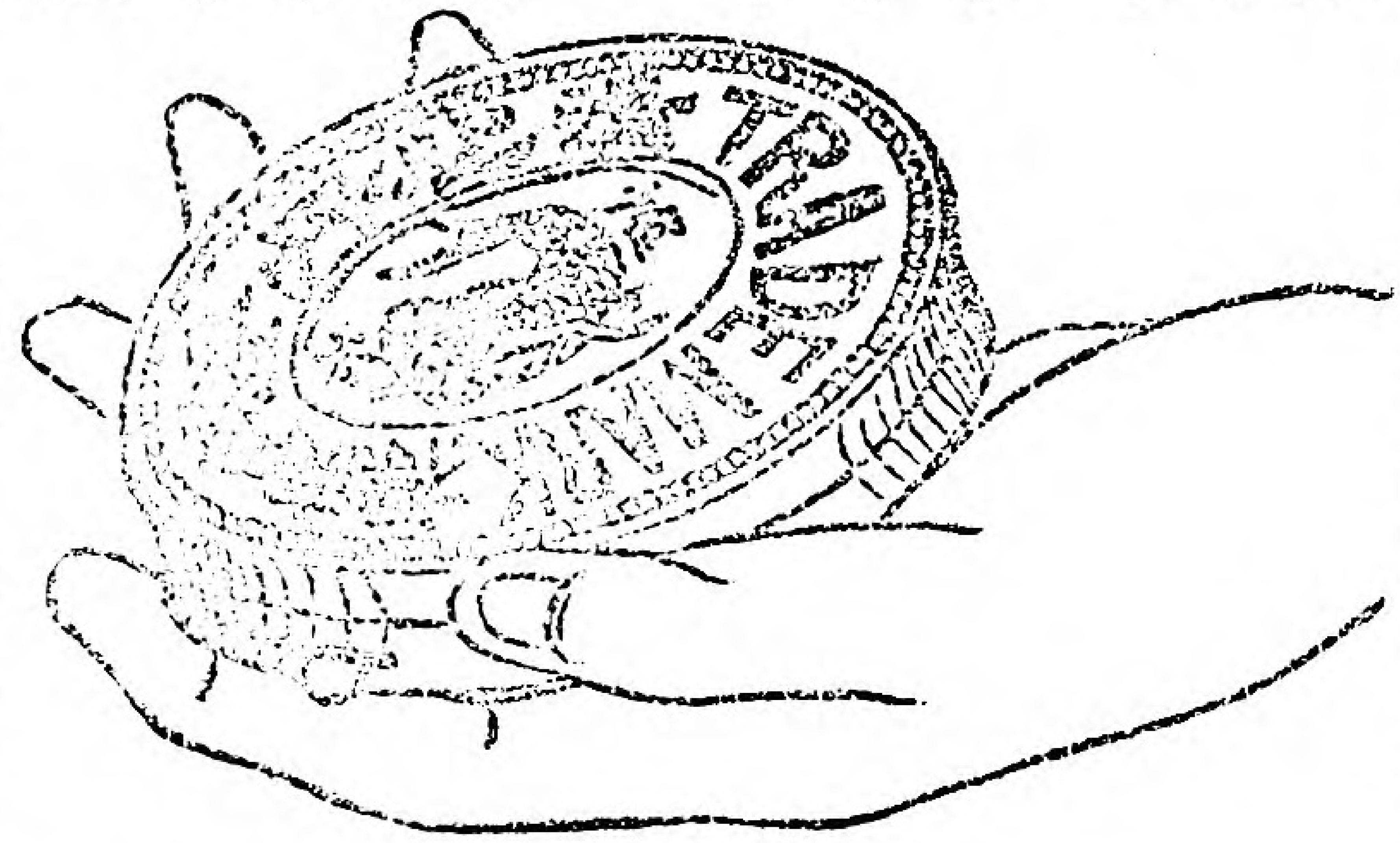




工學士加藤壤氏夫人時子



人若し薬を需めんとせば須く撰擇を要す
清心丹の三大特色は
一　効能の確實
二　品質の善良
三　價格の低廉



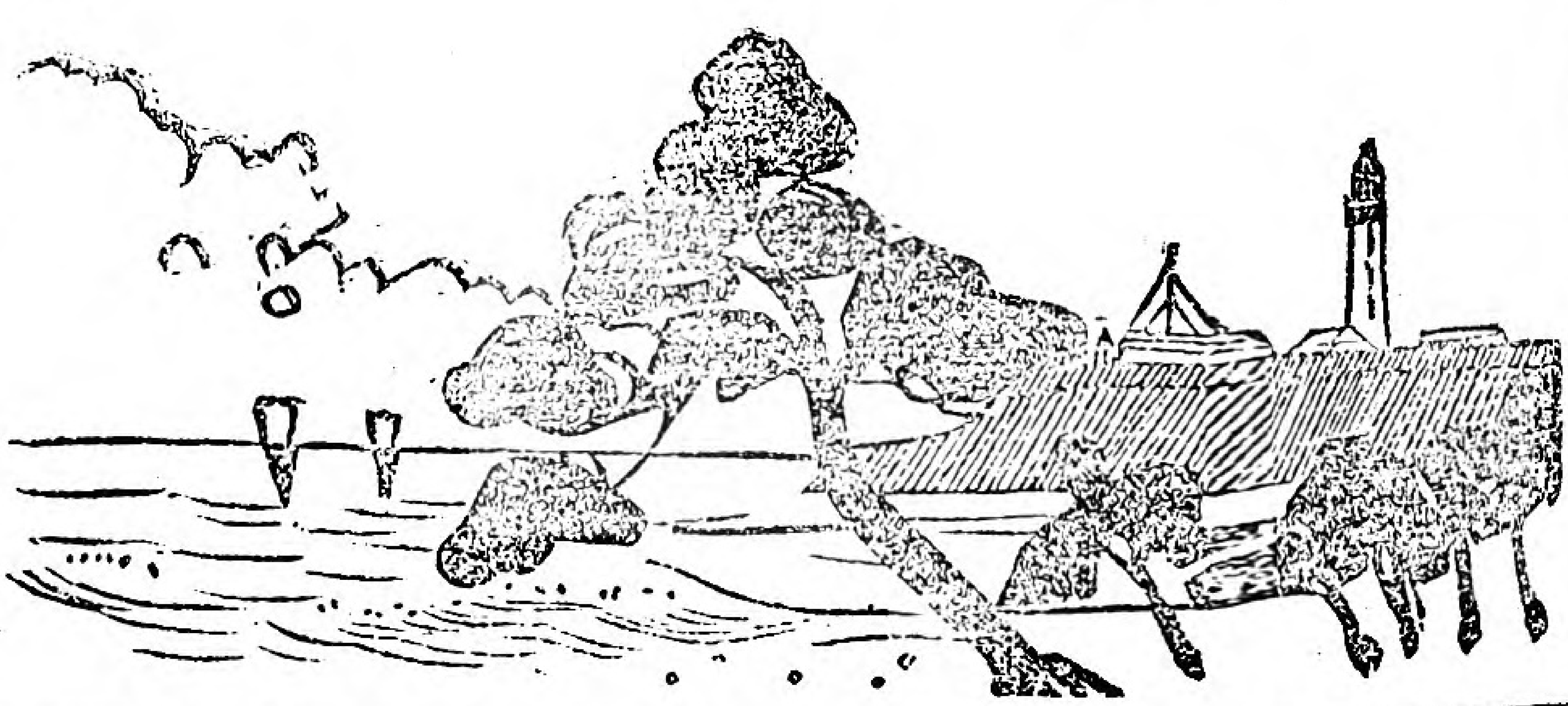
主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、悪心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢、疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、歯痛、口臭、

定價　壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢罐入　拾五錢罐入
拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾錢紙包　五錢紙包

本舗　東京市日本橋區元大坂町八番地　高木與兵衛

山十印



釀造元　千葉縣銚子港　岩崎重次郎
（電話銚子三〇番　振替口座五七二番）

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明
コールドクリーム

定價 金壹圓 五十瓦入
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

コールドクリームの美顏料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も續々これが有効なること且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて騒がれて居るコールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。從來藤波先生は皆様方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆様方に御わけすることにしたのです。コールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顏なり御手なりに摺込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し「コールドクリーム」は美顏劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顏の姉妹劑です。

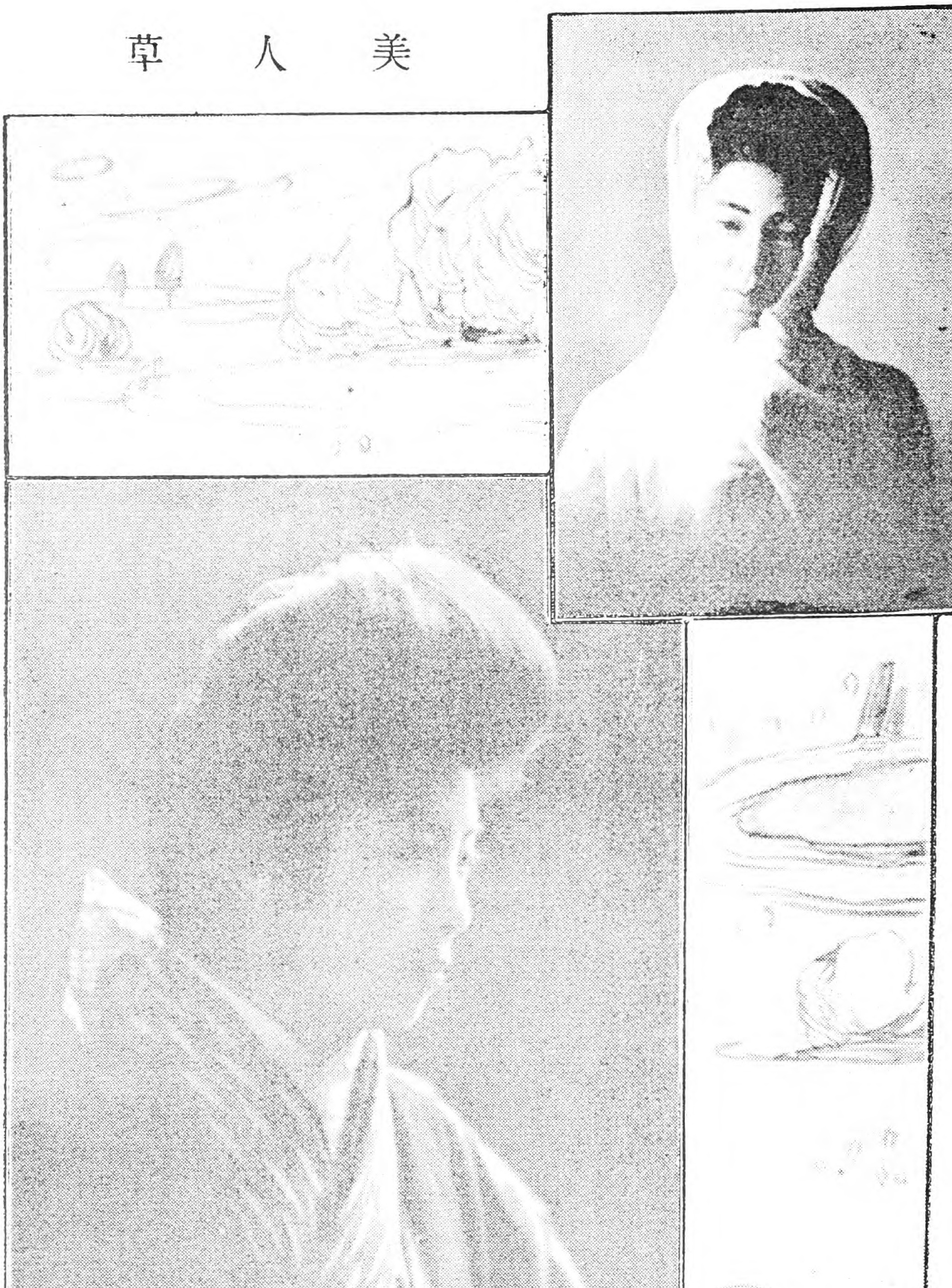
女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明
艶肌劑

定價 金六拾錢 五十瓦入
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

文明とは時間を儉約することです、「何か一品で、顏のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫人御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆様方に本劑を御わけして差上げることにしたのです。

專賣元 東京京橋區大鋸町十二番地 振替口座東京第壹七貳九番 女子文壇社代理部（電話京橋六〇七番）

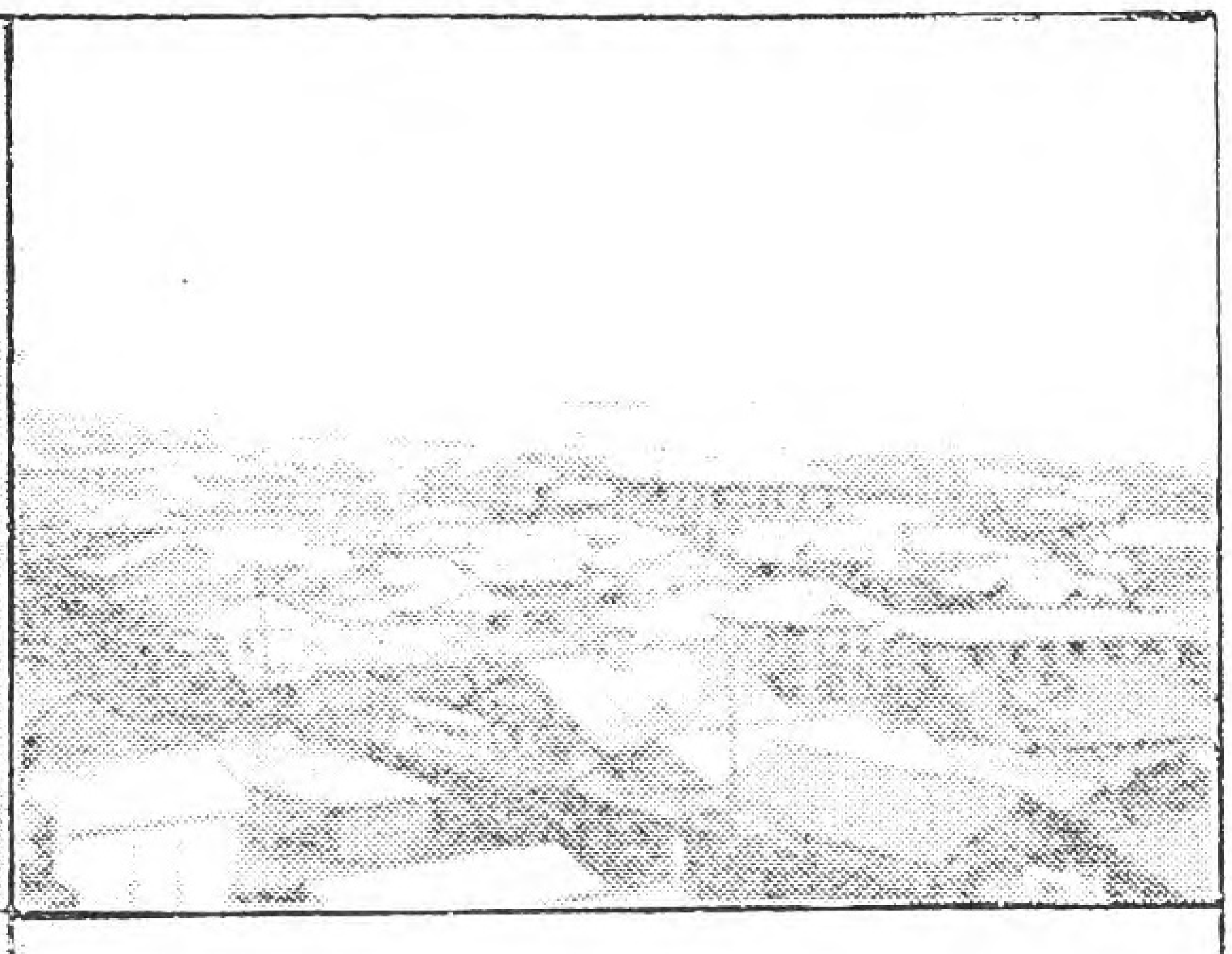
美人草

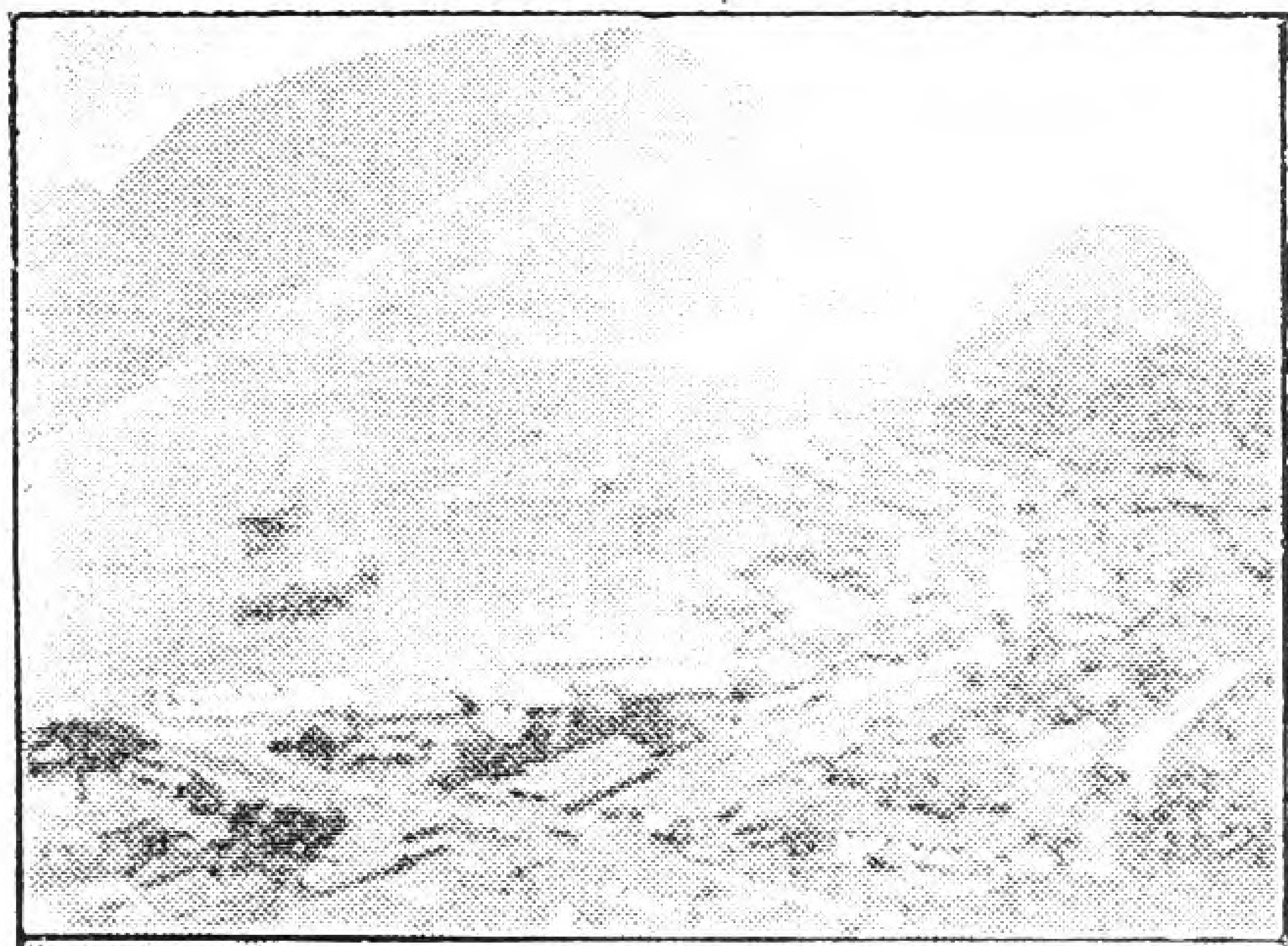


田中製革所長令嬢千代子

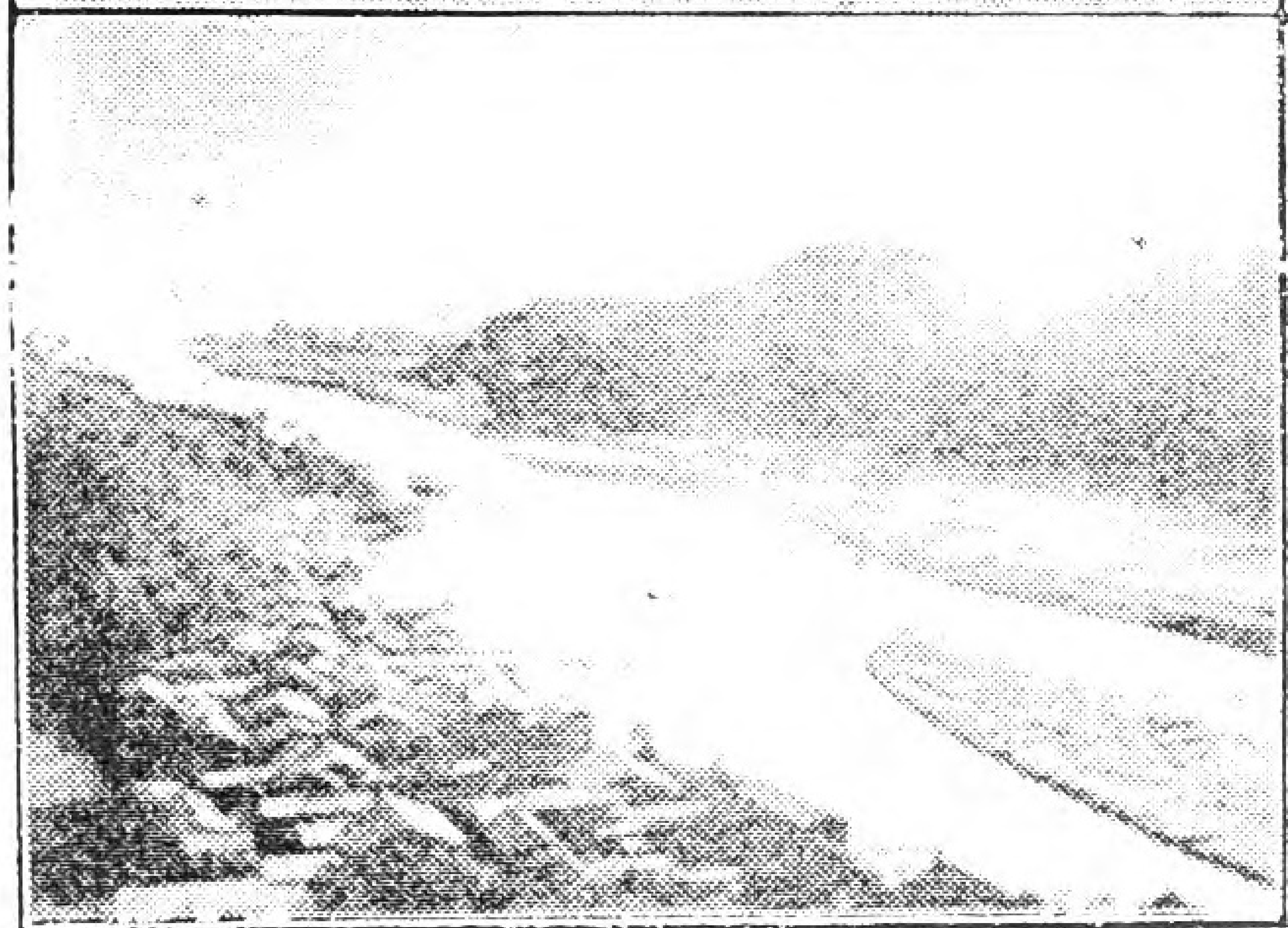
田邊さき子嬢

市街


北海道釧路港

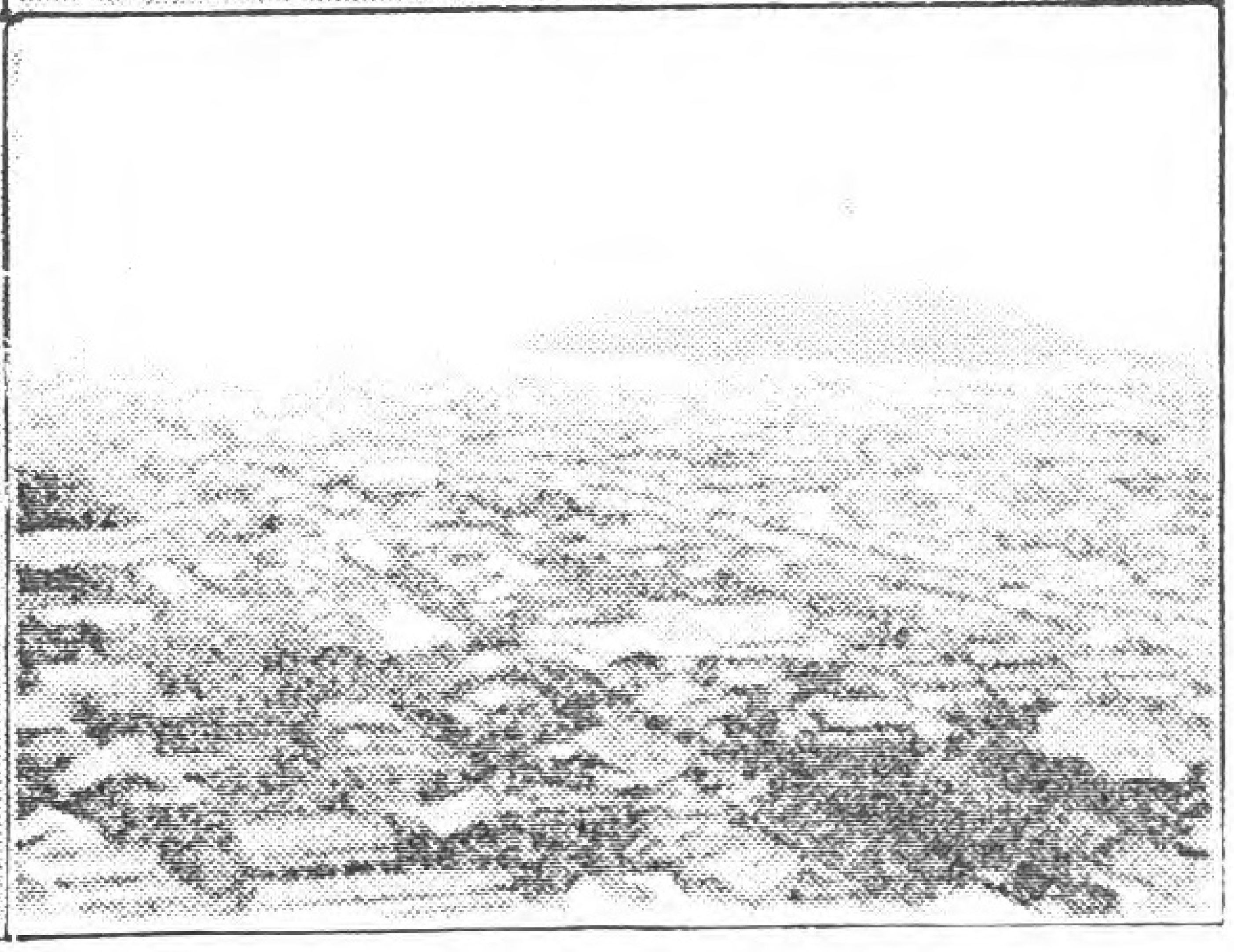

熊本三角港

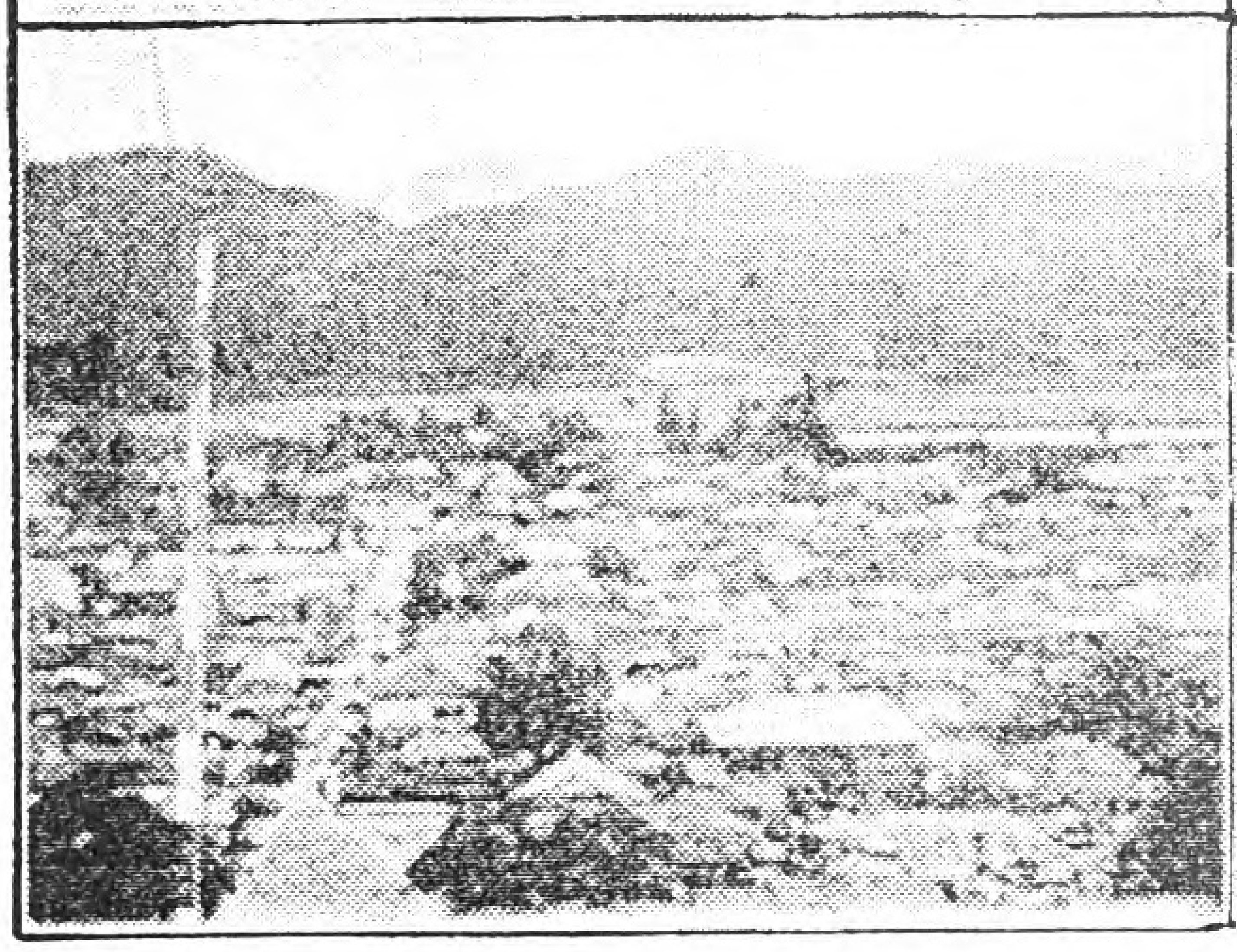

甲府市


紀伊熊野高池町


陸前石巻町


門司市


徳島市


高知市

第二回 新學期開始

實物三分ノ一大　實物二分ノ一大

本會員特典

會員大募集 入會の最好期來る 此際入會[illegible]者に依り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論を載せ會員の作品を滿載せる文學雜誌を無代進呈す◎本會員には文章其他の無料添削の特典を與ふ◎本會員には事情に依り無料講習の便あり◎本會卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職紹介の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし種々の便宜特典を與ふ

新文學講義錄

講義錄見本附き 規則書 無代進呈す

本會員總章

教授科目 文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。文學槪論。日本文學。西洋文學。雜科（各科講師は專門の學士文士）

五ヶ月卒業 會費一ヶ月金廿五錢 全學期壹圓廿錢 東京神田區西小川町 電話本局四五四七番 大日本文學會

會員募集

第三回新學期開始 入會の最好期は今なり 此際入會[illegible]者に限り種々の特典を與ふ

通信教授科目

梅の花、忘れな草、八重櫻、つゝぢ、藤の花、桔梗、朝顏、すみれ、南天、庚申ばら、菊、撫子、百合、牡丹、スウヰトピー、チユーリツプ、葡萄二種、其他和洋花瓣數種、材料の製法等本會獨特の技術に近來更に歐米の通信教授法を參酌して改良を加へ其上器械、材料見本まで一々添へてありますから誰でも容易に出來ます

美術造花通信教授

製品見本並に規則書郵券十錢送れば送呈す

本講義の特色

花瓣の裁ち方、造り方、葉の造り方、花瓣の組立方等總て造花に要する染色法並に器械の使用法に至るまで一々圖解を施した新工夫の說明がしてありますから直接教師から習ふと同一であります全く素人の方でも前記器械を以て形を造り見本と比べて組立つる時は至つて容易に熟達します

速成二ヶ月卒業 會費全學期分金三圓也 東京神田西小川町一ノ一 電話本局四五四七番 美術造花講習會

夏雲



實業家笠原文平氏夫人よし子

法學士坂本幸則氏夫人よし子

新婚の面かげ



法學士本間利雄氏及夫人八重子



工學士林氏及夫人つね子



醫學士山田要氏及夫人文子

少女 友主幹星野水裏君序
植松美佐男君著（最新刊）

少女小說 **野菊の墓**

慘酷な先生、何も知らない牧師、迷信家の母親達の烈しい壓迫を受けて憤死せる一少女の悲慘な運命を叙せしもの。本年三月著者が親しく見聞せる實談なり。都會の初夏と、秋八千草の亂れ咲く富士の裾野を背景せし一大長篇小說なり。

定價四十五錢　郵稅金六錢

植松美佐男君著
少女悲哀小說 **磯千鳥**

『淡路島通ふ千鳥の……』それならぬ、靜けき波の駿河灣、胸に波打つ悲しみを、捨てんと云ひて海原に、入りにし少女の哀れさを、今宵も歌ふ磯千鳥、其聲細く悲しくて、君戀しうと少女子の、歎く聲にぞさも似たり。

定價四十錢　郵稅六錢

植松美佐男君著
少女小說 **君影草**

定價四十錢　郵稅六錢

植松美佐男君著
家庭少女小說 **露子の運命**

前編後編全二冊
大好評參版出來！

露子は運命論者に非ず。然れども一種不思議の運命は少女露子の身を支配す。其不可思議の運命とは何ぞや。知らず慘か悲か快か樂か之を知らんと欲する人は、好評嘖々たる本書を讀みたまへ。
植松美佐男君著——好評嘖々忽參版發賣！

定價各四十錢　郵稅各六錢

少女小說 **月見草**

氏の處女作八編を收む——物の哀れを知る人は見よ！

定價三十五錢　郵稅金六錢

溝口白羊君著
少女向隨筆集 **少女パーク**　定價四十錢　郵稅六錢

同
少女小品 **さくら月**　定價四十錢　郵稅六錢

沼田笠峰君著
少女小說 **姉妹**　定價三十八錢　郵稅六錢

同
少女小說 **お友だち**　定價四十錢　郵稅六錢

發行所　東京本郷東片町十　本郷書院（振替東京一四九壹番）

賣捌　東京堂　大阪杉本　上田屋　盛文館　至誠堂　三宅（京都）前川　東枝北隆館律

青鞜

六月號　金三十五錢
本號特價

叔父ワーニヤ（脚本）……瀬沼夏葉譯
延壽（史劇）……木内錠
マルゴ（小說）……増田初二
りう子樣に（小說）……森しげ女
短歌……三ヶ島橋爪
未定（振劇）……長谷川時雨

▲附錄　マグダ
時雨　白雨　らいてう　其他　林千歲　木内錠　T.N

或る女の夢物語（詩）……小林歌津子
アンモンチイレートの樽（飜譯）……ポオ
習作の三（小說）……杉本正牛
容（小說）……笠原さだ子
俳句……白雨
日記……紅吉こいそ
同窓より——五月の評論……らいてう
編輯室より……同人

青鞜社　本鄉駒込蓬萊町萬年山内
電話下谷三七七六振替東京一一六〇

發賣所　東京堂、東海堂、北隆館、盛春堂

青鞜社研究會

社員外にても御婦人なれば出席を許す
會場、本社事務所、會費五十錢

ロングフエロー譯ダンテの神曲
每週火曜日午後三時——五時
阿部次郎氏

モーパッサンの短篇第三卷
每週金曜日午後三時——五時
生田長江氏

赤司繁太郎著

人格の修養

人格修養は現代の一大問題である、著者は其新しき宗教の見地よりして人格の修養問題を解き、信仰生活の新しき意義を説明したのである、「この書若し人格修養者の心田に一杯の水を灌ぐことを得ば其望足れり」とは著者の序文である。

五月十五日發行

定價五十錢

郵税六錢

發行所 東京本郷區春木町三丁目

菁莪堂書店

●十ケ月卒業

和歌講義錄

入會金免除す

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する、短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ

▲見本つき會則往復葉書にて申込次第無代進呈す

東京神田旅籠町一丁目廿三 大日本短歌會 電話下谷四八一九

文壇諸名家大好評

原稿用紙

用紙船來上等、ペン毛筆自由自在使ひ心地よし

▲定價表▼

(二十四字 二十字詰二種)

百枚(送共) 金三十錢

二百枚(送共) 金四十八錢

五百枚(送共) 金壹圓

東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂用達部 (振替東京一九五五)

(注意)=右御注文の節は何字詰と明細に御書添を願ひす

●有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渴を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新發●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染めし女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に蟄れたる時睡ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を强む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ら術限術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身嫁取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の秘製法●腹痛速治法●疥癬病の藥妙●生きたる鯉を遠國へ送る法●脹満を治する法●黃疸を治する法●皎肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法○痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髮を長くずる法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下痔を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫け新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新妙●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全器の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店



第八年第六號

女子文壇

六月號

さても見事に揃うた殿御、流行り模樣でドッコイ、振り込め振り込めヨイヤサ、京で一條柳屋が娘、よつはり帶をナ襷に掛けて、破れた尺八ヤレ手が御座る、じつとしむれば鳴るものを、ションガエ。御先〳〵振り振つてどう參ろ、どん〳〵どう參ろ、目もと口もと可愛らしいぢやないかいな、繻子の鬢附やトトン〳〵どう參ろ、目もと口もと可愛らしいぢやないかいな、國にかくれないよい〳〵男エ。

——桧をどり——



生活難は憂ふるに足らず

若き婦人達は生活の獨立に就いて考へよ

山路愛山

◎人眞似から生活難が起る

此の頃生活難と云ふ聲を高く聞く樣になつたが、私の考へる處では、此の生活難と云ふものは眞實生活に難義であると云ふのではない。十中の八九までは世間と一つに在る事の出來ぬなやみに過ぎない。

世間が絹の着物を着て居るのに自分は絹の着物が着られない。世間が絹張の洋傘を持つて居るのに自分は繻子の洋傘しかないと云ふ此の世間に歩を同じうし、世間の人の爲る樣にし、人並の事が出來ないと云ふ處に所謂當世の生活難は根ざして居るものと私は見るのである。つまり世間の眞似が出來ぬと云ふ不足から非常な生活の苦痛が湧いて居るものであると思ふのである。

それと云ふのも昔は此の東京市中でも交通の便利が無かつたので、一寸淺草へ行かうと云ふのでも俥に乘

つて幾時間もかゝつた。すべての事情がのんびりして居る。人と人とが何をするにも間があつた、即ち、社會狀態が離れて居つたものである。處がこの數年來電車が走る樣になつた。淺草もつひ行つて來られる上野も直ぐであると云ふ鹽梅になつたから、出來事も多くなり時間も忙しくなり、人と人との關係が密集して來て交際も繁くなつた——と云ふ處から人の風も見る機會が多く我が風も見られる機會が多い、隨つて人前をよくしたい。人の爲る事は自分もしたい、笑はれない樣にしたいと云ふ樣に考へて來るそこで人前、世間並と云ふ觀念が人の心に強い勢力を持つて來る樣になつたのだと考へる

昔は何を食つて居やうが、何を着て居やうが、乃至は何を持つて居や



うが人並と云ふ苦勞はなかつたものである。今は何から何までが世間並といふ聲に刺撃せられて、それが出來ない時の苦しみをやがて、生活難、生活難と云ふ樣な事になつたのである。

生活難を口にする人が決して生活そのものにそんなに苦しんで居るのではない。食ふ事についてのなやみがあると云ふのではない。

そこで此の樣な性質を持つた生活難の救濟は如何かと云ふと、人眞似を止めると云ふ事である。

◎世間體といふものが邪魔になる

如何なる場合にも分限に安んずる、良心が滿足し、財布がゆるす範圍内で生活をする、世間は世間、自分は自分と思ふ獨立心が生ずれば、生活難は決して生じるものではない。

どうも今の人は、人を批評をする時にすぐ世間並にして居るか、人並の事をして居るかと云ふ事に眼をつけるから不可ない。その人がよく分を守つて、自己のゆるす範圍で生活して居るかどうかと云ふことを批評の中心にしないのである。

凡て各個人の生活は獨立すべきもの、人眞似は爲すべきものではない、自己充實、卽ち自分の滿足と云ふ事さへ得らるれば結構であると思はなければならぬ。

近頃婦人の自覺とか、婦人の解放とか云つて居るが私はそう云ふ問題の根本になる此の世間體から解放せられ、自分は自分で出來る丈けの生活、獨立した生活をすると云ふ方面の努力がのぞましいと思つて居る。尤もその世間並の考から逃れ出ると云ふ事はむづかしい事である。何故なればある點まではそれが人間——殊に婦人の先天的性質と云つてもいゝのであるからである。

一體學校で學ぶところの諸禮、茶の湯、生花など云ふ事は、女を淑雅にし、家を清潔にし、人を遇する上からは、何かしら役に立つては居らうが、一面から見れば、うつかり間違ふと其れが一種の虛禮になると思はれる。此の樣な事が可成世間體とか、世間交際とか

云ふやうな事を致へ易い、而して婦人の獨立の考を防害することが有りはしないだらうか。

◎世間並に考へて居られない女

あの女は亂暴であると云ふ樣な事で人を批評する人があるが、考へて見ると、其の人に取つては矢張生活を亂暴にしなければならぬ場合がある、此の時には其の人の生活から見れば仕方のない事である。世間並、人並と云ふ事を考へる暇はない獨立した生活をするのが適當な事でなければならない



葛飾北斎と云ふ畫家の長女にお榮と云ふ女があつた年頃になつて嫁に入つたが、どうも遣り放しな女で、家のとりしまりが出來ない。遂に離緣されて歸つて來た程であるが、此のお榮に畫を描かせると實に立派な腕がある。女の繪などは父の北斎を凌ぐ程であつたが、家には竹の皮がいつも散らばつて居る。家でものを煮た事がない。何時でも竹の皮で買つて來ては食べたものださうである。亂暴な女には違ひないが、然しそれだけ獨立した生活をして居る。

◎縮緬を見たことのない女學生

近頃も此の種の女の例には乏しくはないであらう。ある人の話であるが、學問をしてゐる女學生に縮緬を見せたところが、これが縮緬ですかと驚いたと云つて一つ話の樣にせられて居る。極端な事ではあるが然しこの女を自己充實の生活をしようとするならばそれでいゝ。側から何も愚圖々々云ふ事はないのである。つまり人間が一つの癖さへ持つて、世の中に何か有用の爲事をして曲りなりにも生きて行けばいゝと云ふ方から云へば、此の女も、畫をかくお榮も共に自己を發揮して居るので、それはそれでいゝ。

總ての女を良妻賢母にしようとして統一して敎育すると、どうかすると人並にしなくては苦痛に堪へられぬと云ふ樣な考をも同時に敎へる、それがやがて生活難を語らせる原因ではないであらうか。

各自が各自の考に隨つて、人眞似もせず世間並にも囚はれずに我れは我れ丈けの生活をする樣になれば現在聞く樣な生活難の聲は必ずや滅ずるであらうと思ふ。

蝸牛は小さい殼の中で住む、鯨は大海の中で住む、蜘蛛は蜘蛛の巣で生きて居る、各々其の分に安んじて暮せば生活は平穩である。生活を強ひても人並にしなければ苦痛であるやうに思ふのは自然に背く、自分自分、勝手な生活をする事が自然であつて苦痛のない暮し方である。さうすれば所謂今の生活難は大部分破壞する事が出來るのである。

◎ハタキを拵へても生活になつた時代

凡て人の生活は其の時々の社會狀態につれて、長くも短くもなるものである。維新の時に幕軍の人達は、軍に敗れたのであるから、いろ〳〵な事をして、思ひ切つて苦勞の多い暮しをしたものだが、矢張暮せては居た、其の時、どの樣な生活をして居る人からも、生活になやむなどと云ふ聲は聞えなかつた。私の親戚のものゝ話によると、其の時分どうして居たかといふと

東京から静岡の方に行つた時、古着類を集めて來て、それを裂いて棒先にくつゝけて、はたきを作つて賣つて見たところが、東京から移つて來る人達が何よりも先づ必要なはたきの事であるので思ひの外賣れたと云ふ事であつた。

私の母方の祖母等も、どうも何をしていゝか分らないが、遊んで居るのも惡い。そこで昔は貸本も矢張寫本であつたので、寫本を作つて其れで金を得て暮しを助けたと云ふ事であつた、其の頃に祖母の和歌がある

有渡山の麓の落葉かきためて、
煙を立つる身こそ安けれ。

此の二つは其の頃の生活の例に擧げたに過ぎないが世間一般に斯樣した風に暮したものであるが、それにして、誰も何とも云ひはしない。今日は臥薪嘗膽の時であるから鬪はぬと云つたもので、



質素の中に生きて來て、暮せなくて死んだものは一人も無かつた。其の時代をふりかへつて、吾々の先祖を見れば、今の人達の生活は一帶に分に相應しては居らない、隨分と虛禮に流れ、裝飾に過ぎた暮しをしてゐるのは事實である。

元來家庭に在つて生活問題のもとゝなるものは女である。女が過去に於てもまた現在に於ても、猶將來に對つても生活の中心點になつてゐる、生活難の責任は充分に女が負擔しなければならない事となる。

◎世間體を苦にする女の弱點

おしならして考へて見ると男子はそれ程に世間體を氣にするものではない。男子は先天的獨立心に富んでゐる。宴會等で偶まフロックコートでピカ〳〵させてゐる連中に交つても、自分の着てゐる洋服が立派でないのを氣にしてたまらぬと云ふ程の事はないものである。ところが同じやうな場合に同じく女が打突る時はひとたまりもなく女は身を恥ぢて了ふ。そして世間並に出來ない自分を悲しむと云ふ樣な事は極めて多い事實である。此の間違つた弱點が女にはいつも伴ふてゐる。而して女の此の不心得がやがて一家の生活難、世間の生活難の源になるのであると考へられる。此れを免れるには、女に宗教をあたへて、宗教によつて、獨立心を養はせるのがよからうと思ふて居る。

◎一家の盛衰は女房次第

まへ話した通り、女は何時も生活の主人公である。生活の主人公の心得一つで生活はどのやうにでも動いてゆく事が出來る。それに就いて一つの話がある。或る金持が手代二人を店から獨立させるについて、相當の金を同じ程に分け與へて、店を出させた處が、數年の中に一人はずん〳〵と儲けて行つた、一人は、分けて貰つただけを增しもせぬが減しもせずに守つていつた。ある人がその主人の所に來て、二人の噂をして同じ金を分け與へられても增してゆくものと增してゆけない者とがある、どうも人才と云ふものは爭はれない

ものだと云つたのを、主人が頭を振つて、いゝや、そうではない。一人はその女房を詰らぬ所から貰つたが、其の女の心掛が宜くて共々につとめるので財産が増して來たのである。一人は金のある家から輿に乘つて來た女を女房にしたので、隨つて女房の爲に費えて行く金が多い。それをあれだけに支へて守つていく事が出來るのは、うちでしあげたものだからである。畢竟二人の別れたところは其の女房の心得一つにあつたのであるといつたのであつた。これは凡ての場合にそう考へられる。女の影響と云ふものは是れ程生活に勢力のあるものであることが解れば、充分省みる所があつて欲しいものと思ふ。

◎電車の中に生活難の影ありや

スペンサーの教育論の冒頭に面白い話がある。着物と云ふものは、何のために起つたかと云ふと、是れはもと〳〵装飾品であつたのである。それは野蠻人が、雨が降ると着物を着て居るのを脱いで裸になつて走るのを見ても解る。着物は只、人並の裝飾であつた。これが今になるとあまりに装飾が多くなつて其の爲めに生活の難儀をひき起したのである。

生活難と云ふ聲を聽かされるわりに、電車の中では美しい装ひの女をいつも見る。昔の女のやうな姿をしたのは今の東京中見掛ける事が出來ないと云つてもよい。驚くばかりの衣裳をつけて居る。此の樣な樣子で生活難もよく出來た！何の生活難だと少しは可笑しくもなると云ふものである。

一體世間の教育家宗教家達も考へが少い。どうかすると世間並を奬勵する方に努めて居る樣な觀がある。自己充實と云ふ事を深く、強く心の底に握りしめられたならば、此の樣な生活問題の苦痛を解釋するのは容易である。

自動車に乘るものでも、馬車を馳せる事の出來るものでも、心次第に生活難は持て居る。自動車馬車にのる者にも、其の社會で亦一種の世間體の苦痛がある。あへて、貧しいものに限ると云ふ譯ではない。世間は世間、自分は自分の獨立した生活を營んで、決して人眞似はしない樣にするならば、實に安らかな快よい日が送れるのである。婦人に取つては極めて此の覺悟は大切な事であると信ずる。

三味線論



三味線樂の價値

理學博士　田中正平

▲三味線の持つてゐる音

樂器の中で最も古いものは、先づ太皷の類、即ち打つて音を發するものであると思ひます。

それは極く歴史の幼稚な時に於て然うであつたのみならず、現今に於ても極く野蠻な國の樂器は打つて音を發する太皷の如き種類の物であります。

其の次に起るものは笛で、猶音樂思想が發達して來ると、何れも絃樂器が行はれる事になります。昔希臘に於きましても、彼のホーマーと云ふ詩人の現れた頃は、自分の傑作を四絃の竪琴にあはせ歌つて、而して各所に逍遙つて人を喜ばしたと云ふ事が知られてをり

ます。
無論絃樂器におきましても、種々の種類があつて、はじいて音を出す即ち三味線、琴の類、それから是れを擦つて音を出す胡弓の類、更に進んだものは絃を叩いて音を出すもの即ちピヤノの類であります。
で、その中で最も簡單であつて、味のある彈じ方はどれであるかと云ふとはじくのと擦るのとであります。而して其のはじくと擦るとには亦大に區別があつて、擦る樂器（ヴヰオリン、胡弓）によつて出す音は連續して出て來て初め出た處の音が暫時の間同じ強さで繼續して居ます無論強弱もつけられるが其の音の性質はやはり繼續した音であります。
笛の音が其の通り、人間の聲が又其の通りであります。それであるから、ヴヰオリン胡



弓を以て、人の歌ふところの唄の眞似をする事が出來るのみならず、却つて其の唄より以上の事をする場合があります。

ところがはじく方であると、彈いた其の瞬間には、强い音が出る、それから直ぐに消えて了ふものであります。それで繼續した音にはならないが、是れを以て幾分か節を現はす事が出來ます。

それはどうかと云ふと一部は聯想であつて卽ち人が唄を聞いて居つて、其れと同じ音の變化をするものがあれば、其の音がぽつ／＼と切れてあつても、心の中では續いたもの〻樣に想像する事が出來るのであります。そこで此の種の最も適當な樂器はと云ふと何よりも三味線を擧げなければなりません。

△人間の肉聲に最も好い相手

然し要するに樂器夫れ自身としては三味線は上乘のものでは無く、獨立した音樂を表はすには不十分であることを免がれません。殊に音がきれ／＼の音であるところから、嚠喨たる音、澄みたる音を發揮する事が出來にくい。殊に靜かな所謂天來のもの、高尙な音樂にはなり兼ねるのであります。

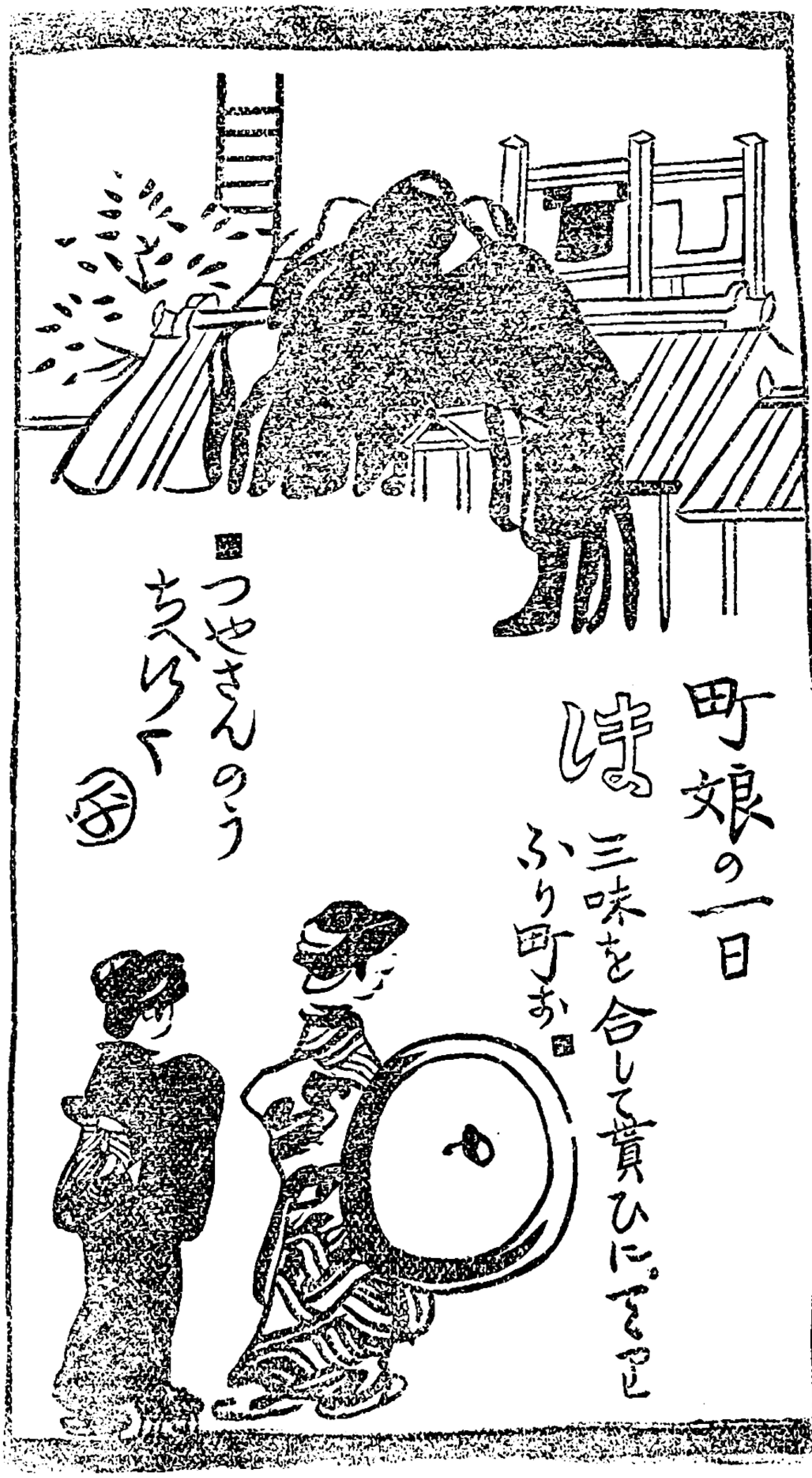
然しながら、聲の對手としては上乘の樂器であると言はなければなりません。それはどうかと云ふと、音の連續する性質の樂器におきましては、それに伴ふて唄ふと云ふ事は困難であつて、又唄つたところで、其の效果と云ふものは必ずしも美ではない。それは何故かと云ふと聲も繼續した音である、樂器も亦連續した音である、同じ性質のものが二つ一緒になつて聞えると、云はば音が擦れ合ふと云ふ事になつて、樂器をひいてゐるものも苦しい割に愉快を感じないし、歌つてゐるものは猶更、殊に聞いて居るものに取つては、迷惑を感じない譯には行きません。

凡て、物事が和合をするには陰陽と別れたのがい〻と云はれて居る樣に同じ音が寄り合ふと結果が惡いと云ふ原理に基づいてゐるのかも知れません。何しろ、きれ／＼になつたところの器音の間に繼續した肉聲が

はさまつて、其の間を縫ふが如く進んで行くと云ふ事が實に心持の好いものであります。

▲琴と三味線の優劣

其の彈いて音を出すところの絃樂器は、日本で申しますと琴と三味線の三つになります此の琴と三味線は器樂としてよほど進んだ處はあるやうであるが、合奏でもすると云ふ樣



な事になると、どうしても他の樂器でもつて組織されたところの合奏にはとても及ばないものであります。即ち、琴や三味線を何挺つらねても、西洋の樂隊の樣な面白い音色の變化と云ふものが出ないのであります。それで、琴や三味線をもつて、單純に器樂として、發達させようとするのは無理であらうと思ふが、唄の對手としては仲々結構なものだと思ひます。

それならば琴と三味線とはどちらが此の點に秀でて居るかと云ふと、是れは申すまでもなく、歴史と實際とが示して居る如く、歌の伴奏樂器としては、琴はとても、三味線には及ばないのであります。から云ふと少し語柄があるかもしれないが、三味線の方が琴よりも應用の範圍が多いと云ふ事が云はれます。最も出る所の音數は琴と三味線とはあまり違はないと云つてもいゝ。手のこみ入つた處はむしろ琴の方である。それから琴の方の音色はまざりのない純粹なる樂音に近いものであるから、其の奏するところは溫和しくて、雅な所がある、此の點に於ては、西洋人は三味線よりも琴の方を上乘のものとして好むと云つて居ります。それはどうかと云ふとどちらかと云ふと西洋の音樂器に近いからであります。

然し日本人として私の感ずる處を云へば、三味線の方がずつと面白い。嚙みしめて味のある所がある。卽ち其の音色の變化はどうして琴の及ぶところではありません。

△日本には三味線に匹敵する樂器がない

殊に三味線にはもう一つ樂器がついて居る。單純な絃樂器ばかりに止まらず、絃樂器の上に今一つ太鼓がついて居る。卽ち撥を以て三味線を彈ずる場合に、撥の先であしらへば絃の音が出る。然し是れを叩きつけると太鼓の皮の上へ絃をおしつけていつて、絃が撥を放れる時に、慄へながら太鼓の表を叩くのみならず、撥の先が今一つ太鼓を叩く。

そこで此の三の場合の音が續いて出て來るところが非常に面白い理由だと思ひます。

是の樣にして面白味のある音の變化が起る、是れが三味線の力であつて、唯嚠喨たる音を出すに至つては、外の樂器には及ばないが、そも〳〵力を發揮する必要ある時、或は豪壯を要する場合に於ては、何物にも劣らぬ、尤も適當な樂器であります。

前にも云つたとほり三味線そのものでは喜怒哀樂を現

はす事は六ケ敷いかもしれないが、人の感情にもとづいて作つてある文章にそれ相應の節調がついて居る其れの伴奏としては三味線程重寶なものはありゃすまい。樂器の性質から論じても三味線は確かに好個の樂器、殊に日本の國民的樂器であると云ふ事が云へます。

此の樂器が本邦に於いて行はるゝ事三百年の間に是れに匹敵する程の樂器は外になかつた。それで表情ある音樂を奏するには、此の三味線を除いては、日本は何にも持つては居らないのであります。それで其の發達と云ふものは實に盛んなものであつて、國民の音樂思想と同じ様に歩いて來たと云つてよいのであります。今更此の三味線を離れて、日本の音樂上の思想を論ずる事が出來ない程であります、即ち三味線は善い意味に於ても、惡い意味に於ても、日本の國民的樂器と云はなければなりません。



▲三味線の表情が三味線を薄命ならしむ

ところで此の三味線の樂音が、大に表情に富んでね

ると云ふ事が此の三味線の爲めに却つて害を爲るに至つたのであります。云はゞ美人薄命と世の中に云ふ、其れと同じ運命に遭つて來たのであると思ひます。其れは何故かと云ふと、是れに就いての歴史的理由もあるであらうけれど、餘り此の表情の力に富んで居る事が、役に立ちすぎて、却つて三味線の愛せられる世間が狹くなり、卑しいものでゝもあるかの樣に誤解せられて、上流社會から離れてしまふ事になつたのであります。

くはしく云ふと、三味線は總ての點に於て、微細なる人情の發現に應ずる事が出來る。此のすぐれた點がやがて、是の三味線を卑しいものゝ樣にさしたかと思はれます。

▲上流社會の誤解

由來人間と云ふものは、社會の組織上、上下貴賤の階級區別の生ずるのは免れられぬ事であります。ところが、卑しいものゝ下のものが、貴いものゝ上のもの、眞似をしたがると云ふ事が起るのも亦已むを得ない事であつて、成丈卑しい人の爲る事はしたくない、卑しい階級に持たれるものを持ちたくないとかう思ふ。

それから總ての點に於て貴いと自ら思ふ人達が卑しいと認める社會から遠ざからうとする傾きがあります日本には殊に其の弊は昔から甚しく、今に於ても猶其の通りであります。無論此の狀態はいつまでも免れる時機はありますまい。

此の樣な社會狀態の處へ持つて來て、三味線と云ふものが、雅なるものにでも、卑俗なるものにでも、十分に其の効用を現はす事が出來たについて、社會一般に盛にもてあそばれて來る事になり、其の中には自然卑しいと上流社會から見られて居る社會へも、三味線の勢力が廣がつて行つたのであります。

そうなると上流社會に比して數の多い下層社會ではあるし、愛用せられる事も激しい中には、幾分か此の社會の風俗にもなじむと云ふ事もあるし、亦幾分か卑俗な聯想を呼び起すと云ふ樣な事になつて來て、樂器

そのものには何の罪もなくして、上流社會から擯斥せられるに至つたものであります。それで三味線は益々下層社會の專用物でゝもあるが如き觀が起つて上流社會のものは是れを手にもしないと云ふ結果に立ち至つたのであります

是れは獨り三味線の爲めに悲しむべき事であるばかりではない。何よりも我が日本の上流社會の爲めにも惜しむべき事であります。

▲樂器の改良は困難なり



何故ならば前にも云ふ通り、我が國民的思想を音樂にのせて適當なる處の樂器は三味線である、其れを上流社會は自ら捨てゝ了つたと云ふ事になるのであります。捨てたるものに代るものありやと云ふとなかく三味線に代る程の立派な樂器と云ふものが一朝一夕に出來るものではない。昔からもさうでありましたらうが、此の十年乃至二十年前に、世の識者は盛に日本特有の樂器の改良を唱へまして、三味線の代るべきもの

をしきりに求めたものでありました。恐らく今も其の考の人も有らうとは思ひますが、然し此の望みと云ふものは果して何時達せられるかと云ふ事は解らないのであります。

三味線に改良を加へた樂器と云ふものも、三味線に代へる立派な樂器と云ふものも、なかく一朝一夕に容易に出來るものでもなく、また案出されたにした處が、是れを多數の人の耳に膾炙するまでにはより多くの困難が伴なふものであります。

▲泥中に沈める三味線を救へ

かへすぐも上流社會が三味線を擯斥したと云ふ事は日本音樂の爲に殘念な事であります。社會の爲にも殘り多い事であります。何故ならば是れにかはる樂器がない爲に上流社會には國民的音樂から快樂を受ける機關がまるで無いのであります。

元來國の特有なる高尚な音樂と云ふものは上流社會がこれを擁護しなければならないものであります。いづれの國でもさうであります。また高尚な音樂があると云ふ事で其の國の上流社會の美點と云ふものが發揮されるものであります。

吾が日本が今日の社會に於て、社交上、或は家庭の娛樂上常に寂寞を感じて居るのは何故であるか、即ち適當なる樂器がない。三絃と云ふものを下層社會へゆづつてしまつて、其れにかはる樂器を見出して居らないと云ふ事であります。

三味線は元來卑しいものではない。三味線樂には、隨分高雅なものがあるが其れは今も無視されて居ります。若し幸に今後の樂器上一種の力を具へて居る三味線が、多くの人に廣く愛せられる樣になつたならば、必らず此れに依りて現代思想の美點を發揮される事か出來るであらうし、猶一歩進んでは、將來の純日本音樂の發達に大に資する所があるだらうと私は考へて居ります。例へて見ると泥中に沈んで居るやうな三味線樂を、救ひ上げる事が出來るならば、實によろこぶべき社會の利益だと云ふ事を考へるのであります。

三味線と德川期のにほひ

せいせつ

三味線のことなどは僕には一向にわからない。だが、三味線の發達につれて各種の歌謠や、淨瑠璃や、演劇が發達したことは、文學史の研究上からも見ることが出來る事實である。

歌謠から云ふと隆達節といふ古風な謠が廢れて、江戸朗調となり投節となるに至つて、我々の『よしこの』とか獨々逸とか稱する七七七五の形、卽ち歌謠中の短歌とも稱すべき普通の形式は成り立つて、しかもそれが三四・四三・三四・五といふ細かなリズムを作つた。思ふにこれは三味の諧調から來たものである。

加之、三味の曲は、德川の初期までにも既に非常に發達してゐて、此曲に伴ふべき歌詞に不足を感ずる程であつたので、已を得ず、在來の小唄を數首續けて謠つてゐたのが組唄と稱するものであつたが、その不統一な異樣な姿が漸く失はれて、組唄に代るべき長篇の新曲が漸く出來上つたのが端唄とか長唄とかいふもので、これ等の比較的趣味ある長篇の歌謠が出來たのは、偏に三味線流行の力である。萬葉以後我國の長歌といふものが滅絶して、抒情詩は總て三十一字か乃至は七五四句の今樣に過ぎなかつた（少數の滑稽的のものや語り物を除けば）のが、今、三味の流行につれて、長篇を出すに至つたのである。それ等の歌謠には門左海音などを初め名家の作物もあつて、俳句や和歌などに比すれば、清音な奇拔なものに富んでゐるのである。

淨瑠璃と三味線との相伴ふたのは、慶長の保澤以降といはれてゐる。これも、當初は平家琵琶や薩摩琵琶に於る琵琶と同樣に、唯拍子をとる丈のものであつただらう。今の難波節の三味線などが、まづ古淨瑠璃の

三味線であると見て大差はない。然るに、播磨や加賀や半太夫の頃から、所謂節事即ち三味と肉聲とか細かく調和した、全體を拍子にかけて語る種類のものが多くなつて、終には近松が新淨瑠璃も出來たのである。從來散文的な難波節的なものであつた淨瑠璃が、著しく七五調に近くなつたのは、これ亦語り方のみならず、三味線の發達に因する所が多いと信ずる。

三味は又歌舞伎に入つた。徳川初期には能と同樣に、大小鼓、太鼓、笛のみで舞つてゐた歌舞伎に寛元以降新に三味が加はつて、しかも、江戸には杵屋喜三郎、上方には山本嘉市、岸野二郎三などの名手が輩出したといふ事實は、所作事風の劇に一大改革を與へたもので、三味が淨瑠璃と歌舞伎とに共通する樣になつてより、院本と脚本とは頗る接近し初めた。この接近が又兩者をして交々相影響せしめてその發達を助成したものであつた。

三味のない芝居といふものを想像して見給へ。徳川期の遺物中の最も華やかなものなるお芝居——種々の意味に於て批難はあるもの丶、今なほ許多の見物人から尠からぬ觀劇料を集める丈の力をもつてゐるお芝居——恐くは徳川期文藝の遺物中最も現代人の嗜好に適してゐるお芝居、その生命は一半を三味線に負うてゐるといふことは、何人も否み得ないことであらう。三味線は近代文藝の主要なる因子である。

否々、我々が眞に徳川期のなつかしい香に醉ふ樣に感ずるのは、三味線をきく時である。理智に於て發達してゐる現代人の心は、徳川期の小說や劇に對するも動もすれば、その背理とか不自然とかいふ點に反感を起す、今の所謂舊劇と稱して見ても、脚本は古の通りであつても、左團次の聲に現代の響がある、段四郎の口にも金齒が輝いてゐる。どうしても江戸のお芝居見物といふ心持にはなれない。だが、我々は、それ等の人々が口を閉ぢてゐて、床のメリヤスの靜にひゞく時に於てのみ、往々數千年の昔に復ることが出來るやうに感ずる。

或る音樂家が、たまき女史の歌劇を目を閉ぢて聽い

たといふことだが、僕も小劇場の一隅に、屢々瞑目して古めかしいお芝居を聽いてゐることがある。現代人と徳川期との浮橋が纔かに三味線の絲によつて繋がれてゐるやうにさへ感ずるのは、この時々の實際の心持である。(談)

* * * * *

三味線は彈く姿勢がよい

文學博士 幸田露伴

三味線のことを精しく知らうと思へば、高田與清の『三味線考』を讀めば三味線に關する大抵なことは分る。又『積玉全集』にも三味線のことが書てある。三味線は三筋の絃に限ると思へば間違ひである。三筋の絃のものもあつたが、絃は必ずしも三筋と限られては居なかつた。それから三味線には譜がないと人は言ふけれど、全く譜のない譯でない。古い淨瑠璃本を見ると、謠本の樣に一々譜が書てある、この譜にたよれば、三味線に合ふ樣になつて居る。

日本の音曲の中で最も廣く行はれて居るものは、先づ三味線と琴である。そして琴は貴族的で三味線は平民的と言ふ傾がある、恰度碁と將棊と程の相違がある。然し琴の方は成程高尚は高尚であるが、之を彈ずる人の姿勢がよくない。この點に於ては三味線の方が優れて居る、三味線を彈く人の姿勢は、琴を彈ずる人の樣に、身體を屈めて、姿勢を惡くする樣なことなく、ちやんと姿勢を正しくして居られる。

音曲としては三味線は決して下等なものでない、三味線は彈く音で誠に爽快な音である。總て音曲は、胡弓とかバイオリンとか言ふ樣な摩擦より出る音よりも

三味線やハモニカなどの彈く音の方が餘程爽快である日本人の樣な爽快を好む人間には三味線は最も適當したる音曲である。この意味に於て三味線は決して卑しむべきものでない。然れども如何せん唄がよくない、三味線そのものは決して卑しむべきものでないけれど三味線の唄は如何も高尚でないのには困る。三味線の唄が高尚でない爲め、三味線までも高尚でない樣に思はせる。これは何とか工夫をすればよからうと思ふ。

地唄と江戸唄

須藤南翠

▲三味線は樂器中の名器なり

三味線と言ふものは、日本の樂器の中でも、最も趣きのある、變化のある、そして優美な樂器である。世界中の樂器を集めても、三味線程簡單で、而かも變化の多い樂器はない。のみならず、世界の樂器中で最も人間の技倆を要するものは亦三味線である。如何なる樂器でも三味線程技倆を要する物はない、して見ると、三味線は樂器の中でも、最も美術的の樂器と言はねばならぬ。斯う云ふ名器が我國にありながら、これを餘り尊重しない傾きのあるのは誠に遺憾の至りである。

三味線のことを言ふ以上は、勢ひ三味線唄のことに及ばねばならぬ。この三味線には地唄と江戸唄の別がある。地唄は上方の唄で江戸唄は東京の唄である。私が初めて地唄を聞たのは、上方の藝者でなく、吉原の老妓であつた、この時私はさう思つた。三味線の眞價はこの地唄に在ると、つく〴〵感心した。東京の女が地唄を唱ふてさへこれだけの感じを與へるのであるから若し本場の京都へ行て、本家本元の地唄を聞たなら、

一層の趣きがあであうと、京都へ行て地唄を聞くのを樂しみにして居た。

▲地唄には名文句あり

其の後私は大阪で住む樣になつたから、早速京都へ行て地唄の名人を搜した。幸に地唄の上手な藝者があつて、この女の地唄を聞たが、然し失望した。東京で地唄を聞た時は、東京の女でさへこれ位巧く唱ふのであるから、本場の女が唱ふたら如何なに巧からうと想像して居たのが、全く當がはづれたのには少なからず失望したのであるそれと言ふのは、唄そのものも、東京の女が唱ふと、何となくしんみりとするが、京都の女が唱ふと、如何も感じが鈍い、又合手の三味線のツル〱と言ふのも東京の女が彈くとピッタリ唄に合ふて、少しも耳に障らぬが、京都の女



が彈くと、如何も耳に障る樣に思ふ。斯く京都の女の唱ふ地唄には失望したが、然し地唄そのものには決して失望せぬ。イヤ失望せぬのみならず、京都の樣な閑寂の天地に入つて愈々地唄の妙味を感得した。三味線を以て俗な樂器とか下等な音曲とか言ふ人は、地唄の妙味を知らない人である。地唄の唄にしても三味線にしても、其の妙味を味ふた人は、三味線を以て俗だとか下等だとか言ふことは決してない。三味線を俗だとか下等だとか言ふのは、三味線其の物に對して言ふのでなくして、三味線の唄の或る部分に俗なものがあり、上品でないものがあるからである。ところが地唄には餘りさう言ふものがない、地唄は孰れも高尚で、却々名文句がある。

△地唄を盛にすべし

何故地唄は高尚で名文句に富むで居るかと言ふに、江戸唄と地唄とは作者の人格が違ふからである。江戸唄の作者は如何も下卑であるが、地唄の作者は人格が高い樣である。斯くの如く上方の三味線には立派な地唄と言ふものがあるから、大に之を發展させればよいのであるが、事實は反對である。上方には斯う言ふ獨特の地唄があるに係はらず、自ら之を卑しめて反つて江戸唄を賞美する傾向がある。上方の者に言はすと、地唄は如何も陰氣でいけない、三味線は何と言ふても江戸唄の陽氣な方がよいと言ふ。が然しこれは大なる心得違ひである。上方には、上方の人間の音聲に適當した地唄と言ふものがあり、東京には東京人の音聲に適當した江戸唄と言ふものがある。それは孰れも其土地の人間の發音語勢等に適する樣に出來て居るのであるから上方では飽まで地唄を發展せしめ、東京の江戸唄と競爭せねばならぬ、否一歩進めて江戸唄を壓倒せねばならぬのである。何故地唄が江戸唄を壓倒せねばならぬかと言ふと、地唄は高尚であるが江戸唄は高尚でない、それ故に三味線の品位を高めるには如何しても江戸唄よりも地唄を盛にせねばならぬのである。地唄には斯くの如き重大なる使命があるにも係らず、京都

の人は之を捨てゝ其の發音語勢に不適當なる江戸唄を唄ふのは、何と言ふ心得違ひであらう。それよりも三味線唄として最も尊重すべき地唄（殊に繁太夫節の如き）の發展に力を盡して貰ひたいものである。

△上方の稽古と東京の稽古

地唄は地味で陰氣だと言ふが、成程舞臺や大廣室で彈くには派手でないかも知れぬが、四疊半の茶室の樣な所で彈くには、誠に靜で優美なものである。殊に雨でもしと〳〵降るか、月の冴えた夜などには、よく周圍の情緒に適ふて言ふに言はれぬ趣がある。斯う言ふものゝあるのを、土地の者は餘り尊重せず、他國の者は其の眞價を知らず、自然の荒廢に任して置くのは誠に殘念なことゝ思ふ。殊に本手組など言ふ高尚なものは追々廢れて行く樣である。斯う言ふものは音樂學校あたりで可然方法を以て保存の道を講じてもらひたいものである。それから上方の人は自分の柄に適らない江戸唄を好むで、上方の人情風俗に適ふた地唄を虐待するのみでなく、唄そのものを虐待して居る。東京で三味線を敎へるには、最初二三ヶ月の間は、三味線を持たさず唄ばかりを唱はす、斯うして初の間は唄で三味線の調子を了解して置いて、稍唄が三味線に合ふ樣になつてから三味線を敎へるのである。斯う言ふ樣にして敎へるから、東京で三味線を習ふた者は皆唄が巧い、唄が巧いから自分の土地の江戸唄は固より、假令他國の地唄でも巧く唱ふのである。これと反對に、上方では三味線を敎へるに、最初は三味線ばかりを敎へて唄を敎へない。三味線が少し手に入つてから唄を敎へる、恰度東京と正反對である。斯う言ふ風にして三味線を敎へるのであるから、自然三味線の方は上手になるが、その割に唄が巧くならない。唄の方に上達して居ないもんだから、我が土地の地唄を唱ふても東京の者に負けねばならぬことになる。地唄の發達を圖らんとするには、上方で三味線を敎へる場合に、東京の樣に先づ唄の唱ひ方を敎へて、それから三味線を敎へる樣にしたならば、上方の人でも東京の者に負けない

で唄が上手になるであらうと思ふ。

▲地唄の保存を圖る必要

何故京都では三味線に重きを置て唄に重きを置かないかと言ふに、これには原因がある。それは外でもない、京都では昔から三味線を敎へるのは主に檢校であつた、無論自稱檢校も多いが兎も角盲人が三味線を敎へて居たのである。この盲人と言ふ者は、生理上の關係から如何も聲がよくない、音聲に濁がある、それが爲め唄を主にせずに三味線を主として敎へたのである然してこれは檢校が自分の聲が惡いから斯う言ふ手段をとつたのであるが、今日では最早檢校時代でないから、斯う言ふ惡い習慣は捨て丶、上方の名物とも言ふべきこの地唄の保存發展を圖らねばならぬ。又地唄には却却優美な振がついて居る、雪と言ふ舞なぞも傘一本持て舞ふのであるから餘程趣きのある舞である。要するに三味線は決して下等な樂器でない、樂器としては恐らく世界の名器であらうと思ふ。然してこの三味線の唄と言ふものが、江戸唄の中には隨分如何はしいものもないではないから、自然唄の爲めに災されて、三味線そのものまで下卑たもの丶如く思はれるに至つたのである。これはこの名器に對して誠に惜むべきことである。三味線をしてこの災より脱せんとするには、唄として高尚な地唄、殊に本手組などの保存發展を圖つて、三味線の品位を保つ工夫をせねばならぬと思ふ。

▲南翠氏の來信

拜啓先日は不用意の事のみ申上赧顏の至に御座候。就ては彼の中引例致し候繁太夫節の義は、小生も歌浄瑠璃孰れに屬するものか不明のまゝにて申上置候に付、一應取調候處、現今常磐津の祖たる宮古路節の一派にて、やはり宮古路繁太夫と名乘りたる事に御座候、其系統は、

京都太夫一中――京宮古路豐後掾――大阪宮古路繁太夫と成る順序に御座候、豐後は初め都國太夫半中と稱して一中の高足に候處、遂に一中節を變化して一流を起し、享保三年冬、大阪竹本座にて開演、當時は國太夫節と申候。享保の末江戸へ下りて、宮古路豐後掾と改めたる事は申すまでもなき事と存じ候、繁太夫は國太夫の高弟にて、またく一流を語り初め、是は大阪を根據として專ら島の内に流行したるよしにて候。

本元の大阪にても、繁太夫に精通する師匠のなき如く、京都にても殆ど道を絕ちて、一昨年なりしか友人瀧節庵、京大の友人とゝもに辛く一人の老師匠を求め聽きたることありしも、僅か一二の外は、忘れ果たるよしにて候。東京にても圓八の如き、富本の如き、事實上絕滅したるものある今日、大阪に於てのみ行はれし繁太夫の斷絕は珍しからぬ現象に候得共、可惜と申さば可惜き事に御座候。右御參考迄追申仕候不一　五月十日夜

光暉女

三味線を初めて彈た人

三味線は言ふまでもなく支那から渡來した樂器で、元の時代に既にあつたのである。蛇の皮を張つた蛇皮線は琉球に行はれて居た。正親町院の永祿年間に琉球より蛇皮線と二絃器とが渡つて來たが、如何して彈くものやらさつぱり分らぬ。誰一人之を樂器として取扱ふ者がなかつた折角斯うして、遙々琉球から渡つて來た樂器を、誰も彈く者がないと言ふのは誠に殘念な次第であると言ふので、何人でもあれ、この樂器を彈く者があれば申し出よと言ふことになつたが、我れこそ其の樂器を彈かんと申し出る者がなかつた。すると和泉國堺津の瞽者で中小路と言ふ琵琶法師が見事彈いて見ようと申し出たので、其の樂器を中小路に與へた。中小路は之を受けて見たことは受けて見たが、さて何うしても彈くことが出來ぬ、然し自分から見事に彈いてみようと言ひ出して置いて、彈けないとは言はれぬ。命に代へても彈かなければならぬと、中小路は初瀬の觀音へ參詣して、一心不亂に祈願を籠めたのである。

滿願の日まで何の驗もないので、がつかりして堂を下らうとすると、何ものか足に纏ひついて、思はず階段から下へ轉び落ちた。すると四邊に何とも知れぬ好い音がした、琵琶の音でもなければ、琴の音でもないハテ何だらうと思つて、足に纏ひ附いたものを取上げて見ると、三筋の絲であつた。

中小路は其絲を打つて何心なく彼の蛇皮線にかけて彈いて見ると、琵琶でもない琴でもない、言ふに言はれぬ微妙の音色が出た。中小路は正しく初瀬の觀音の御利益にて、我に此樂器をか彈しめたまふなりと、悅び勇んで家に歸り、其後もいろ〳〵に工夫を凝らした結果、見ごとに三味線を彈き出したと云ふ傳說がある

その後瞽者虎澤出でゝ、本手破手など言ふ調子を作つて人に傳へ、瞽者澤住また此技に妙を得て、淨瑠璃小唄などに合すやうになつた。

淨瑠璃は小野於通に始まり、小唄は堺の隆達に始まり、唄も盛んになれば、三味線も盛んになつた。

（撫　松）



且耕し且歌つた農村の歌人

文學博士　佐佐木信綱

自分は利根川の風光を愛して屢々遊んだ。彼處には鹿島、香取の古い社があり古い歌舞の地なる潮來がある。

其の大江の流れ水國の有樣は、南淸の揚子江の面影等が思ひ浮べられて、江の水に白帆の霞む春、眞菰のうら枯れた秋等屢々訪ふた。

此の利根の風光は近世多くの歌人、歌學者を生んだ其の重なるものは、伊能魚彥、神山魚貫、椿仲輔、鈴木雅之、伊能穎則等であるが、今は其の中の神山魚貫について語らうと思ふ。

利根川の下流に近い飯岡と云ふ、今は成田から佐原に行く間の停車場に近い此の村に七八十年前神山三左衛門と云ふ貧しい農夫があつた。彼れは貧しい農夫の子であつたが、幼い頃算術を敎はつた先生から、百人一首とか其の他の古い歌を敎はつた。

素朴な幼い彼の胸にそう云ふ古い歌のやさしい調が美しく響いた。彼れは歌と云ふ者を自分も詠んで見たいと思ふて、春は雲雀の聲を聞き、秋は木々の紅葉を見て、其のつくりかざらぬ感じを歌つた。

然し極めて田舍であるから、誰にも其の和歌をなほして貰ふ人が無かつた。が、段々と年の長じるまゝに歌を愛する心は深くなつて、殆ど歌が彼の生命と云ふ事になつた。

或る時は田を耕して居つたら、後から大聲で怒鳴るものがある。彼れは驚いて振り返ると、お前は何處を耕して居るのだと怒鳴る。氣が付くと、歌を考へつゝ



耕して居たゝめに、いつか我田を越えて、隣りの田の畔をしきりに耕しつゝあつたのである。

ある夕方には馬を引いて家に歸る。例の一日の勞働の歸り途に樂しく歌を思ひつゝ歩いて居ると、脊中を不圖なぐつた者がある。美しい歌の夢から醒めて後を見ると、お前は何をして居るんだ。お前の馬は手綱から離れて彼處の木に縛つて置いたぞと云はれる。彼れが見れば如何にして切れたか、短かい手綱の切れが自分の手に下つて居るばかりである。馬が



後からついて來ると思ひつゝ歌を考へながら歩いて居たのであつた。

然う云ふ風に彼は歌を愛して居たが、彼れの父母は更でも餘り強くない我が子が、晝は田畑の勞働に勤め、夜も亦夜業をしながら其の後で歌を考へるのを見ては、且は其の虚弱い身體にさはりはせぬかと案じ、且は近邊の者等が、彼を指して、狂人の樣に思ふて居るのを嘆じて、或る時、堅く意見をした。

汝は農夫の子である、田を耕して居ればいゝのだ。然ら云ふ歌とやらんで生命をちゞめるのは愚かな事である。ととゞめたのである。

彼れは此の時、涙を流して、何卒此の事だけは親の命にそむく不孝の罪を許して貰ひたい。自分が此の志した歌を遣り遂げなければ猶一層郷黨の物笑ひになります。家の業を捨てゝ、歌ばかり詠んでは惡いかもしれませんが、夜業の後に爲るのであるから、晩くまで油をつけてゐるのだけ許して貰ひたいと泣いて賴んだ

その熱情に父母も我を折つて、其の後は、夏の夜は父が蚊いぶしを焚いてやり、冬の夜、時とすれば夜更けて疲れて、歌を思ひつゝ假睡をする彼の脊中に、母は布團をかけてやつた。

歳月は速く過ぎて、彼れは五十歳をも超えた。其の年月の勞働は、貧しき彼れの家をやゝ樂に爲る樣になつた。それとゝもに、彼れが自得した歌は一家の風を成して、其の近邊の村でも町でも彼れの名――伊能魚彦を慕つて自ら付けた歌の名、神山魚貫と云ふ名を知らぬものは無いやうになつた。

彼れは其の五十何歳かの時に自分の歌の集「苔清水」と云ふのを撰んで三卷、立派な書物を版にした。

其の序文に、自分は農夫であつて、學問をもしないから歌は拙い。然るにかゝる集を版にするのは、おゝけないわざであるけれども、我が父は世を去つて、一人の母が年を取つて猶ながらへてゐられるから、せめては、母に見せたいと思ふて此の集を撰んだ。かう云ふ集には、貴い人や、傑い學者抔の序文などを賴むのが世の常になつて居るが、自分は故あつて自ら我が集の序をしるすのである。それは斯く斯くと、前に述べた樣な事が書いてある。

その序を讀むと自ら彼れが歌を如何に愛し、如何に歌に身を捧げたかと云ふ事が忍ばれて、涙がこぼれるのである。

高麗人は内裏にまゐりて鴻臚館あした靜かに牡丹花ちる　　信

山百合の幾千の花を折りあつめ集めし中に一夜ねてしが　　鐵

想ひ出の傷しさ（イブセン）

加藤朝鳥譯

慣れたる熊の舞ふを見て君は笑ふ。
されど知るや。その舞のいはれを。

大鑊のなかに熊をば固く縛り、
その下に薪を積むいく重ね。

さて手風琴を持ち出して、奏るは、
『過ぎ去りし戀の歌』。熊の耳邊に。

かくて焙らるゝ熊の足裏。焦げつけば、
靜坐に堪へず。狂ひて躍る。又躍る。

その刹那に魅いる、歌てふ惡魔。
熊の足裏ゝ不思議にも、舞ふぞ足裏。

一度は、吁、われも亦、大鑊に、
大爐の中に焙られぬ。歌に煽られ。

かの時の地獄の猛火。炎の浪や。
創痕の痛むくるしさ。吁。此の創痕。

『歌はざる可からざりし時』を思へば、
眼に刄、鋭くも突かゝる痛さよ。

しかもその刄。今は深くも、腦を刺し
歌てふ足を爪だてゝ躍る痛さの、傷しさ。

☆　☆

白雁

（イプセン）

白雁は北人の棲む國に遊べり。
凍れる磯をかむ、浪の灰色。

君こそは胸の、柔き羽毛を拔き、
巣に溫き、內敷をばつくる。

されど漁夫は來つて、愛を破る、
攀ぢ來ては、捥ぎ毟る白き內敷、

暴風にも似る、漁夫の强奪にも、
君は再び拔く、胸のやはら毛。

再び巣に敷けど、又も漁夫は來る。
あはれ三度目に、君は拔く胸の眞白毛

三度犯し來る漁夫の强奪！
遂に君は翼ひろげ、『春』を願ひ始む。
裸なる胸もあらはに、夜の闇に
まぎれて南。光の國に君は飛べり。

みなづき

こもりうた
かぜにうかびて
あたゝかに
ひはてりわたり
たのむぎは
たりほうなだれ
いばらには
あかきみじゆくし
をがはには
このはみちたり
いかにおもふ
わかきをみなよ

テオドル・ストルムー上田敏氏譯

ある男の日記

きそむ生

七月五日。

何を悲しみ何に泣くか。目下の吾がせめてもの願は、その「何」を解釋せんとすることあるのみ。惡しき「ふさぎの蟲」を攫み出して之を檢出せんとすることあるのみ。

惡しき蟲よ執拗に吾が腦に巣喰へる惡しき蟲よ。汝に對するわが戰は過去幾年の間無効に繼續せり、吾竟に汝の正體を見る能はず。

S—よ、吾は汝を戀ふるものにあらず。然り戀ふるものにあらず、されど吾汝に執着せり。別離以來已に週日わが腦は濁色の雲に重く閉ざされたり。吾は吾を意識する能はず。嘗て幾何の難問に物理の解説に整正と鋭敏とを以て自負したるわが腦髓は、さなり大理石と水銀とを以て飾られたるわが庭園は、惡しき蟲の跳梁に委せられたり。

何故ぞ何故ぞ、悔悟の叫は無益に追及して止まず。

初めて相見しとき美しと思ひき。されども未だ戀ふるに至らざりき。相抱くの時、ゆるびたる肉體の疲勞に明方の薄明ほのかに射し込みたる時、われは葡萄酒の如き紅き毒の霧より免れんことを希ひぬ。靜に朝の空氣を吸ひて制服を着るとき、われは感情を笑ひ情緒を罵れり。君と共に在るの時、只の一と時も心より君を愛したることも竟に無かりき。而かも別離以來この憂

愁は何の故ぞ。何の故ぞ。

今にしてはかなき罪の戀を回想す。あゝ惡しき遊戲なるかな、そは甘き密語と密語との交換に過ぎず。肉體を毀損するたまゆらの歡樂を交換するのみ。はかなき遊戲よ。惡しき取引よ。吾ははかなき歡樂を得んが爲にかくまでの辛く重き給付を餘儀なくせられぬ。

七月十一日夜。

戸外には闇き雨降れり。吾遂に眠られず。何故に吾は戀を樂しみ得ざるぞ。何故に樂しく戀し得ざるぞ。

あひ遇ひし時吾は寧ろ別れて獨り寢にさびしき戀を味はむと願ひぬ。さびしき戀、そは吾が年來夢想せし所のものにあらざるか。肉體の暴虐者より情緒の幼兒を救ひ出さんと希ひしにあらずや。而かも今相別れて焦慮、心は夜雨暗き戸外を狂奔せり。

あゝ吾嘗て戀を夢想せり。さなり悲しき戀を夢想せり。甘き悲しみと、樂しみ愁とを夢想せり。而かもあゝ今得たるものは何ぞ、色も潤ひも無き空漠の苦しみのみ。

あゝS―よ。あゝ吾竟に汝を戀せるなり。否吾は吾が戀を戀せるなり。吾は今、瘦せよろぼひしわが「悲しき戀」に故知らぬ年來の悲愁を負はせ、鞭打つて之を遠く行き去らしめんとすあゝ吾は酷き『戀』の虐待者也。

八月一日。

わが後頭部は重き鐵板を以て封せられ、而かも發作的に何者か酷き鶴嘴を以て頭蓋骨を穿つものあるが如し。

八月廿日。

白日をまともに受けて紅く爛れた薔薇の花、その痛々しい心よ、そつと自分はつぶやきたい『忘れよう、何もかも、皆忘れよう…』

＊　＊　＊　＊　＊

人を戀ひ、人を忘れた後の心のさびしさ、はた空しさ…

自分は唯無意味に只馬のやうに働きたい。犬のやうに無意味に生きたい。

考へる人間に何故生れたらう。あゝ無益な事をぼんやり考へる人間に何故生れたらう。

烏瓜が無意味に紅く熟れて居る――只無意味に紅く…

こゝに川があり堤がある。堤を真直に歩くものは、道徳の慣習の敎へるまゝに、「何故」と問ふことなく只歩いて居るもの、幸である。併し或る物に躓いた轉んだ水に陷ちて溺れた。而し溺れた者は、溺れ得るものはまだ幸である。ああ自分は溺れもせず、歩みもせず。只靜に水に映る『自己』の姿を見んとした。

＊　＊　＊　＊　＊

約らない、約らない、

あゝまた始まつた。惡い病が。

「約らない」この言葉が青白い姿になつて自分にとつゝいて離れない。自分が朝、蒲團の中で眼を開いたとき先づ一番に頭の中へ、蝗の樣に飛び込むで來るのは此奴である。そして起きようとした自分は重い頭を枕におしつけて突伏して了ふ。

あゝ約らない、檐に出て見た。併し約らない座敷の中をぐるぐる動物園の熊のやうに回轉して見た。併し何が得られやう。

あゝ惡い病。

汝は蛇である。青い色をした、滑らかな、そして冷たい手觸りの蛇である。青い蛇、此奴が一度私の眼に止まつたと云ふたら最早離れないどこ迄も、いつ迄も伴いて來る。走け出さうが停らうが、手を擧げて欠伸をしようが、彼奴、青い蛇、ちやんと眼の前にぶらさがつて居る。

婦人と新聞紙

國民新聞社會部主任　千葉龜雄

◎サラ、ベルナールを巴里一の女優たらしめたるは新聞記者の功なり

巴里に生れて、世界現代の傲りと呼ばれる女優サラベルナール、彼女をして、自分に女優たるべき資格があるとの堅い自信を踏み固めさした者は誰であつたか誰でも無い、實に巴里の新聞記者であつた。卽ち彼女に今日あらしめて、現代文明の大黒柱の一人たらしめた者は、取りも直さず、巴里の新聞記者であつた。「巴里印象記」を書いた、マクス、ノルドウが斯う說いて居る。而してノルドウは猶ほ斯んなことも云つて居る。巴里新聞記者のベルナールの天才を褒め立てた仰仰しさと云ふものは、釋迦基督でも卽座に見得坊になる程の素晴しいものであつた。況して心の弱い、女性一人だ、忽ちに自分を圓滿無比な、世界女優の女王樣と思ひ込ませる位は、極めて當り前のとつ突なのであつたと。

一體此のサラ、ベルナールと云ふ女性は、至つて移り氣である上に、何にでも趣味を持つ、そして大抵の事は初段黒人位にやつて退る多才の女性であつた。一八七八年、彼女はユーゴーの「エルナニ」（確か此脚本は本郷座でも演じたと思ふ）のドソナ、ソルの役を演じて大評判となつた。然るに移り氣の彼女は夫れに慊らぬ、折柄巴里に世界博覧會があつた、彼女は夜は佛蘭西座へ出て居乍ら、日中は毎日々々其頃大流行の輕氣球に乘つて、空中高く登つて博覧會の人出を觀察した

そして其の結果をば博覽會が閉會した時に、"In the Clouds"「雲の中に」と云ふ題名の本にして出した。之れが又た大評判で彼女の虚榮心を高める一手段となつた。然し彼女は未だ未だ之れ位では滿足しなかつた。「雲の中に」の成功で、何處までも自分は藝術家たる才能があるものと信じて了つた彼女は、今度はグローブ新聞の美術擔任記者となつて、毎日サロンを押し歩行いた、其れが珍らしい見ものだとて、周圍に集まつ



て來るわい〳〵連中が盛んなものだサラは其中に圍まれて、女王のやうに傲然と構へ込み、一つ〳〵繪の前に立つては、何とか彼とか短かい評をして廻る、夫れが一つの評判となつたので、サラはもう得意滿面の姿此儘で行けば、現代劇界の唯一の傲としたるサラは、遂に物數奇な、平凡な美術批評家に終つて了ひさうなのを再び劇界に頭を向けさしたのは、實に我が巴里の新聞記者であつた。サラの咳一つ嚏一つをも、決して見逃

さずに書く新聞記者であつた。つまり彼等はサラの書いた物にも、批評にも總て敬意を捧げることを忘れなかつたが、殊に彼女の劇の天才を極彩色で褒め上げた斯くして彼等はうま〳〵と、遂に現代文明の傲りの一つを一手で作り上げたので、即ち此の現代文明の傲りはやがて巴里新聞記者の傲りでもあつたのだ。之れが我れ我れ新聞事業に携はる者の、いたく興味を感ずる所である。

◎男性の解放、亭主の解放

然し之れも巴里でであつてこその面白味だ、サラは日本の意味から云ふと、隨分のお轉婆でもあり、極端な見得坊でもある。女だてらに撃劒が好きで、荒馬に乘るのが得意だ。收入も多いからだが生活などは素晴しい豪奢なものだ。然し夫れが悉く何等かの、藝術的の意義を付けて新聞や雜誌に吹聽される。つまりは佛蘭西にサラが生れたのは、佛蘭西でなければ生れられぬのだ。夫れと云ふのも佛蘭西では、社會の理想を統轄する者が、女性であると云ふことが一つ。も一つは、佛蘭西が藝術の國であつて、藝術の人に對しては、其他の總てを犠牲としても、唯一の藝術の天才だけを尊ぶと云ふ事――夫れも周圍と社會が、訓練された藝術の才能を持つて居ればこそ出來るのだ――にあるのでどちらも日本の現在には當て嵌るまい、其の代り日本の女性がノラに暗示されて漸く目が覺め掛け、婦人の解放などと叫んで居る時分に、佛蘭西にはもう「男性の解放」の「亭主の解放」のと云ふ言葉が、事實の上に眞面目な問題になつて居るのだ！。

◎新聞記者たりし婦人

サラも此通り新聞記者であつた、昨年ノベル賞金を得た瑞典の閨秀小説家、セルマ、ラゲレーフも新聞記者をして居た。伊太利の閨秀作家マチルダ、セラオも確か一時新聞に關係して居たと思ふ。有名なルウマニヤの皇后で、カルメン、シルバの雅號の許に、多くの傑作をものされ給ふ御方も、折々婦人論などを新聞に

投書され給ふ。然し日本で新聞の記者として、通信者としての女性は、未だ發達して居らぬ。政治批評家として、ハンフレエ、ワード夫人の如きは勿論無い。美術藝術の觀賞家としては殊に少ない自分はショウペンハウエル以來、多くの今日の藝術家が非難するやうに、女性の悉くが模倣者で創造の才が無いと斷言する勇氣はない。又た日本の現代の女性にもそうした才能が有るか無いかを容易く斷定され得ぬ。唯だ貧しい經驗の



敎へる所によれば、之までの日本の女性の新聞記者には、新聞記者としての女性の特有な才能を見せられたことが殆んど無い勿論其女史が、女中になつて或る料理屋に入り込み、現代紳士の暗黑面をあばいたなど云ふことはあつても其れは亞米利加の女探訪記者などのやる、餘り女性としての權威を振り廻すことの出來ぬ性質のものだ、少くとも知識と云ふ點で、新聞や、社會の注意を惹起したやうなものは殆んど無い。之は我

國に限つた、女性の位置と境遇に依るだらう又一つは記者になる女性其人が、文章を書き得ることが、新聞記者たる唯一の資格だとばかり考へるにも依ると思ふこれでは何時まで經つても進歩の望みがない。之れからの夫れには、男性の夫れにも増して、欲しいものは頭腦である、廣い趣味である、而して廣い實地の世間の經驗である。機敏な耳目である、機智である。

◎新聞は道德の敎科書でない

舊い道德家や女子敎育家などには、新聞を道德の敎科書と思つて居る人が多いが、是れほど間違つたことはなからう、新聞は文部省の發行では無い。新聞の職務とする處は、正直な事實の報導にある。勿論醜惡な事を描くのは、新聞ならずとも惡いことだが、或る點までは醜惡な事實の眞相は、醜惡な儘に書くのが好いのだ。自然の仕事は人間の仕事よりも遙に廣大無邊だ人間の新聞記者の小さな頭で自然の現象に對して彼れ是と批判するのは間違つたことである。自然の現象は現象として其儘に、無垢に提出する方が、却つて自然の目的に叶ふので千萬の讀者が、夫れを互ひの考へで互ひの意見に解釋するが好いのだ。若し讀者の頭腦が進歩して居るならば、其讀者は其の醜惡な記事によつて、却つて自らを敎へる好材料とするであらう。其頭腦や批判や進歩させるやうに謀る、其處が敎育者の任務なので敎育者や家庭が新聞の記事がどうしたとか、勸善懲惡が何したとかやきもきするのは、やがて自身の權威の腰の定らぬことを自身で白狀するやうなものだ、繰返して云ふ、文明が進むに從つて、新聞の唯一の目的は、益す單なる報導と云ふことに向つて行く決して道德の敎科書とはなりはせぬ。尤も今日でも進歩した頭腦を持つた敎育家や家庭では、其子女に自由にどんな新聞をも見せて居る。日本の婦人のやうに、家庭にばかり閉籠る階級に、活社會の智識を、日に時に變化する、世界の現象を吹き込むには、新聞より以上のものが無いのだが一般の敎育者の頑固な家庭は、夫れをせぬ爲め、其子女が活きた社會に出て、物の善

し惡しの標準を定める智識が無く世間の事物に對する敎養が無い道德も智識も蒟蒻玉のやうにふらくして居るのは、卽ち新聞を道德經と見て居る誤用である。我等は女性に新聞に對する見解を求めて、一度も滿足した、突込んだ、固定した批評を得たことが無い。而して新聞なるものに對する、興味の薄さにも驚かされる。それだけ日本の女性は、生きた文明と遠かつて居る。

◎話題の中心、問題の中心

今日の新聞の話題の中心は何であらう。少くとも女性として、話題の中心になつて居るものは藝妓と云ふ階級である。敎育が進んで趣味が進むべき筈である。そして文明も敎育も進んで居る。文明の敎育を受けた第二の國民も多くなつて行くのに、日本の藝妓の統計表のみは、月に年に增して行くのはどうしたのであらう、第二第三の國民の母たるべき、敎育ある若き女性は、直接に家庭に影響ある此問題を、如何に眺めつゝあるであらうか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

新聞が眺めた現代女性の問題は、唯だ貞操と云ふ點にある。何か一つ事件が起る、先づ主人公なり、或は其副因たる女性の貞操が興味の中心となる。若い女性にも、舊い女性にも、そして女性の智識などに關する問題は、未だ未だ向ふのことであらねばならぬ。之は歐米の新聞に對して、餘り名譽のあることでも無いが然しそうしたことばかりを問題にされる日本の女性も餘り名譽でも無いのは勿論だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

餘り長く書き過ぎた、豫期の中の一つであつた、新聞に現はれた日本の女性、其の活きた實例に就いての研究を、其中に書いて見ようと思ふ。



紅燈夜話

三味線草

「この寒いのにネルなんぞ着る人がありますか」と老女はたしなめるやうに言つて、うは眼でにらめるまねをして見せた。

「だつて」

あまえたやうに肩を揺りながら、夕顔は

「あたし寒かないわ。ね、後生」

手を合せて拝むだ。

「ま。ねんねえにはお母さんどんなに世話がやけるか。あなた叱つてやつて下さいよ」

言ひつゝ立つて、タンスをあけた。樟脳のかをりがふつとたつて、白つぽいキモノが眼に新しい。

「さ、御内所がやかましいんだからお座敷だけですよ」

「あいさ」

「ま、ごらんなさい！」

「うれしいわ」

夕顔は襠をぬいで、うしろから老女のきせかけるネルのキモノに手をとほした。草色のネルの縞は、柔かい曲線を描いて肩から胸へ、ふつくらと流れ、なげやりに結むだ伊達帯の間へやるせなく消えいる。

帯からのがれた悲しい線は、いたいけな腰をめぐつてすらりと艶に裾へみだれて、爪紅の花がさく。



男は默つて、女がキモノを着て、自分のわきへ――長火鉢のまへへ坐るまでじつと見てゐた。女はつゝましく袖をかさねてそこへ坐ると

「早く、いつもこんなキモノを着てゐられるやうになりたいわ」

と思ひ入つて言つた。

男は、女がわざ〱自分のためにかうして素人らしく裝ふて見せるいぢらしい心根をうれしく思はぬではない。また杵屋の格子をくゞつた頃、呼び習した幼名前を男の口から呼すてにしてよばれたい願をも知つてはゐれど。

男は曾て自分の愛した女と「生活」した爲、「戀」を失つた悲しい經驗を忘れることは出來なかつた。

「後生だから、もう世帶を持つ話なんかしないでくれ」

「また『濱のムスメ』に言つたやうに明日のことは言ふなつて仰るのね。あなたはそれで好いでせうけれどあたしは現在こんな苦海に身を沈めてゐるんですもの、せめて足を洗ふ日なりと考へなきや一日だつて暮してゆけない身の上なんだもの」

「…………」

「でも曲輪を出たからつて、一所に暮せないんならつまらないわねえ。こんな世界にかうしてゐればこそ威張つても通られるもの丶、素人になつた日には誰が見返つて呉れるでせう。それを思ふと心細い…」

「だから明日のことなんか考へないで、その日その日を送つてゆけば好いのさ。どうせ人間は死ぬんだよ。はかない未來に望をかけて、現在の身をさいなみ制へてゆくなあ馬鹿さ。昨日の次の日の今日でもなけりや明日の日のための今日でもない、たゞ今日の自分のための今日なんだ。

おまへはどう思つてるか知らないが、俺は夕顏といふ遊女と今宵一夜をおもしろくをかしく歌ひ明せば好いんだ。おそでといふ可愛い娘の手を取つて泣うとは思はない。

まあこんなじみ〱した話はよさうね。」





青葉の頃

三宅やす子

きのふの雨風にひきかへ、今朝は早曉より窓洩る日かげ明るく、此日をむなしく家には籠られぬ日和。花見衣はいつしか輕い初袷とぬぎかへられて、菖蒲粽の香も高う、鯉のぼり勇ましく五月晴の空に飜る今日はお節句の日である。

多摩川あたりの新綠、それも捨て難けれど、それよりはいつそ都の人の杖ひかぬ越ヶ谷あたりに遠出しようと靖國神社の大祭で人あまた出る朝、都の賑をよそに龜澤町をすぎ業平橋の終點で電車を降りた。橋の際には、龜戶、柳島早船三錢と大きく旗を立てゝ鈴を振つて客を呼んで居る。今日を見頃と龜戶指して行く人が忽ち船に充つ、此あたりの川のけしき舟のゆく樣が山手住居の眼に新しく、丁度名所圖會にある樣な昔の面影殘る心地がせられ、都離れた氣分にもなつて物めづらしくあちらこちらを眺め乍ら淺草停車場に入る粕壁の藤や、館林のつゝぢを觀にゆく人々で停車場は非常な人ごみ、特等（二等）は滿員になりましたからと出札掛が皆に斷つて居る。

曳舟、鐘ヶ淵、と靜かな田舍道を汽車は可成な速力で走つて行く、あれが今戶燒をやく處と、そちらこちらの小屋を見てゆく廣々とした畠や田、遮る物もない一面の綠の中に散在する茂みの側の茅の屋根には彼處にも此處にも鯉幟の立てられたのがたま〳〵綠の一部を彩つて美しくも心地よい北千住、西新井と次第に進む、とヒタ〳〵と連打つた田面に白い鳥が首打かたむけて止つたと見るとハタ〳〵と群になつてとび交ふ。もう穗の出た麥畑、高くのびた蠶豆の青々とした中に果もないと見ゆる許りのれんげばたけがところ〴〵に得ならぬ眺を見せて居る。あかぬ眺を越ヶ谷で下車すると乘合馬車が待つて居て吉川、吉川と大きな聲で

客を呼んで居る。やがて馬車中の人となつて越ヶ谷の町の坦な道をゆられてゆく、四邊の樣が皆面白く思はれる。「オーイ、自轉車が衝突して怪我人があつたとよ、「町の若い者がすれ違ひ樣馭者に聲をかけてゆくとどれ早く行て見よう」と一鞭あてゝまつしぐら。何々醫院とある家の前には人が大勢立つて覗いて居る。「大丈夫だ、大丈夫だ」そんな聲をきゝすてゝ馬車はまた走る、そして馭者は人に逢ふ度に「自轉車が喧嘩して人死があつた、」と大げさに話すと皆それ見にゆけといふので走つてゆく。呉服屋、肴屋、すしやなど軒を並べた賑やかな町は今晝時でかなり人があるいて居る、馭者は馬追ふ手を止めて、とある青物、鹽物など並べた店先で、まぐろの切身をあがなつた。

途中でだん／＼乘客が增して、男五人女六人、それに子供四五人と米俵、魚の荷など積んだ車をたゞ一頭の馬がひいてゆくのであるから、乘りなれぬ身には心許なくおもはれるけれど、誰も一向平氣なもの。街をはづれるとたゞ見渡す空の碧と、木立の綠、同じ青々した雜草のしげみの早初夏の景色である。蒲公英、れんげの咲き亂れた堤のわきをゆる／＼、流れるといふよりは水を湛へた荒川の流はうねり回つて靜かである。此あたり、此春の太平洋畫會展覽會には「越ヶ谷の初夏」「春光」「春」「吉川の春」など其他にも多く、おだやかな綠色の美しい畫と描かれて場中をかざつて居る。今より少し以前、此草のまだ丈のびぬ頃、草の實がまだ黃色い花で咲いて居た頃は、此邊に畫伯の足跡しげく／＼とゞめたのであつた。

吉川村までの途中に當る大相模不動尊の前で降りると「御歸りは何時」ときいて、またピーピと笛の音高く馬車は吉川指してゆく、丁度もう十二時はよほど過ぎた、茶店に憩つて用意の包を開き、店でこしらへてくれた名代のあんころに舌皷を打つてやがてぶら／＼と川端の方に出て見る。

川は吉川村に入ると中川となる、此處ではまだ／＼幅せまい川の中に、橋杭のあと空しく朽ちて岸につながれた一艘の小舟を、客ある每に岸の小家から十四五許りの娘が出て來て渡す。右も左も廣い平野がたゞ青青と續いて居る、少し木立の茂つたあたりに流れがうねつてかくれてしまふ、岸には硝子の器持つて小魚すくふ童の群、笠かぶつてあちこちに糸垂れて釣に餘念もない人、岸に茂つた灌木の中ではチ、チ、チピチピと「かけす」が囀り交す。少し遠く不動の森の方に

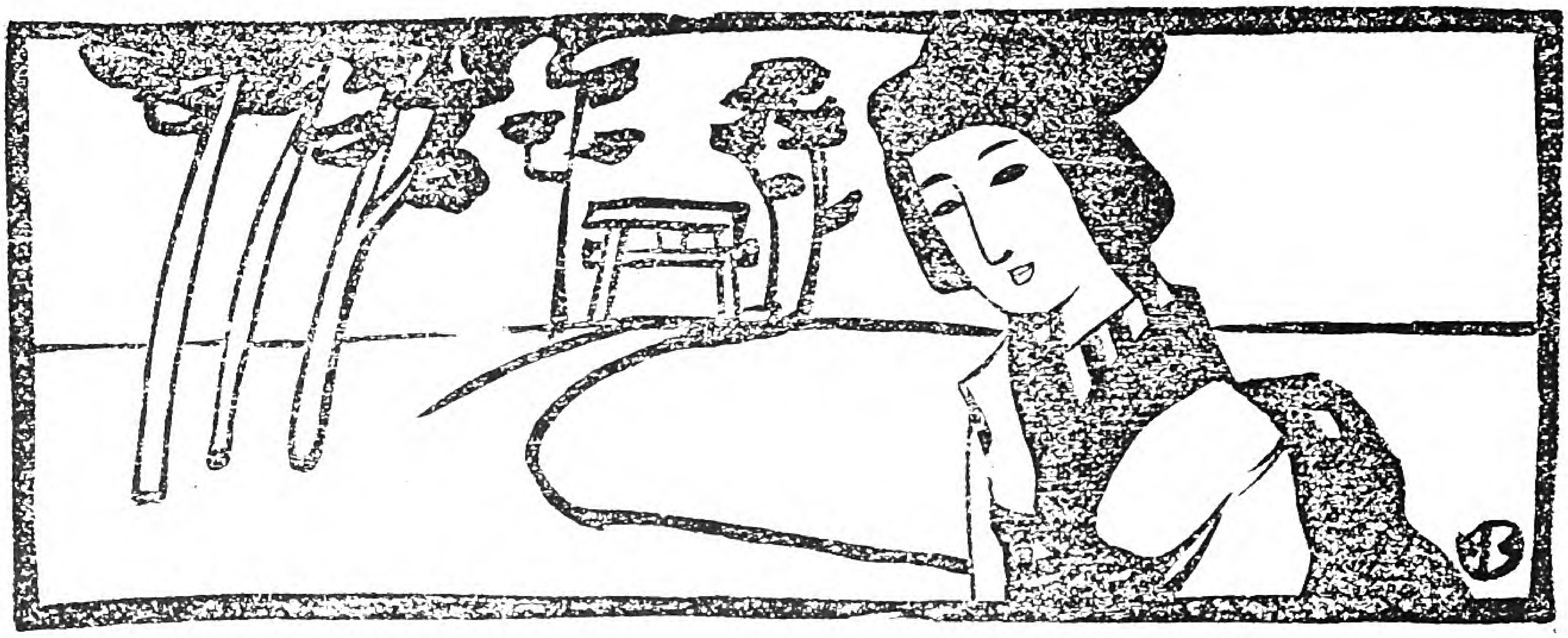
當つては、テヽツポツポと山ばとの聲が長閑にきこえる。「此岸からあの森をかいて居た方がありました、何でも二三日掛つて大きな額をかいてました、女の方も去年二三日かきに來た、」などと釣する翁は語り出して「此魚は燒いて鋏でチヨン切つて、鳥に呉れてやりますだ」ボツ／＼話す翁の竿先に蜻蛉が高く低く飛んで居る。

蒲公英や、れんげを少し摘みためて、再た茶店に戻り、生みたての玉子をゆでてもらつて皮をむき乍ら、聞くともなしに村の話に耳かたむける。昨日松田の家で婚禮があつた、婿さんは十九で嫁御は十六、女はよくも無いが婿殿の男振は立派だなどとおはぐろつけた女房が話してゆく。入違ひに巡査が來て、今年はラムネはまだ始めないか、始めるなら去年の鑑札でよろしいなど云て自轉車に乘つて行つてしまふ。土手に跣足で立つてる居る三十あまりの女を指して、あれ御覽ぜよ、捨てられた亭主を慕つて、歸つてくるか／＼とあやつて川の向を毎日眺めて一日うろついて居ます、仙臺の者だとやら、こつちに身害もなければ構ひ手もなし、警察でも手あまし者ですと亭主は話す、不動樣の藤を見ようとこれも亭主の言葉に裏手から境内をぬけて九間四方、一杯に花をつけた、ほまれの藤といふのを見る、藤紫のゆかしい色が青葉の中に涼しさうに見える、此側に梅も多くある、飛龍梅、和樂梅、など皆札がついて居ていづれも年經た木である。

またもや茶店にもどつてコヽヽと鷄遊ぶ庭の側に、亭主が一服してはひき出す臼の靜かなきしりをきゝながら、徑ゆく人、乘合馬車、そんなものを眺めつゝ童など相手にしていつしか五時まで過した。

さらばまた來ようとあまり暑くならぬほどにまた訪れよう、秋深くならば枯草の色をめでに來ようと惜しい名殘を告げて、山ばとの聲に送られ乍ら夕陽さす野を乘合馬車にゆられて今朝きし道を過ぎ、再汽車に打乘つた。窓外を見ればあたりは次第々々に夕暮れそめて靄こめた森、薄白みを帶びたれんげ畠、それもやがては薄ずみ色に消えて、いつしか暗になつた頃、燈火うつくしき淺草の停車場に着いた。

なみしづかなるいけみづに
　きみのかたちのうつるかな
きみのかたちとなつばなと
　いづれうるはし
　　いづれやさしき



愛憎

小笠原さだ子

手紙を讀んで終つたお玉の心持は、驚いてすくんで終ふ樣であつた。どうしてこんなに腹を立てたのだらう？
あんなに親切で優しい男だつたのが……お玉は今讀んだ事がどうしても自分の讀み間違ひの樣な氣がして耐らないので、一度も二度も讀返して見たが、其度に男の怒がます〱自分の身に迫つて來る許りで、どこをどう見返しても、今迄のやうなやさしい所は見出す事が出來なかつた。
どうしても男の怒が解けさうには思へなかつた。「どうしたのだらう」思はず障子を見つめたまゝ、かうつぶやいて見た。
お玉は、もう彼の男とは逢へないのかと思ふと、彼の夜いつもの通りに別れて終つたのが、いかにも殘り惜しい樣な氣がして耐らなくなつた。どうにかして亦男の機嫌を直して仲よく遊んで見たい樣な氣もしてきた。
あの樣にやさしかつた男が、今自分にこんなに怒つて居ると云ふ事が、お玉には、何んだか眞實には思へなかつた。
今自分が男の傍に行つて「貴方、どうしたの」と云つてやれば、必ず男は此手紙の事なんぞは知らない樣な顏をして、笑つて居るに違ひない。狂言かも知れない、きつとそうだ……お玉は手紙を膝の上にひろげたまゝ、久く茫然して居たけれどもどうしても彼の男と、これつきり別れて終ふのだと云ふ氣にはなれなかつ

た。

「うそだ、うそだ」彼の人は怒つてやしないのだ、どうして彼の人が怒らう、彼の人は私に惚れてるんだもの

お玉はかう心に云つて見た、が何んだかそんな事はどうでも好い樣にも思はれる、心配する程の事ではない樣な氣がする。

と心の中に男の顔を浮べて見たが、恐しい樣子は少しも浮んで來ないで、やはり彼時別れたまゝの當り前な顔形が眺められる。そしてこんな手紙を貰つたのはもう一月も二月も一年も前にあつた事で、今は何でもなく、仲直が出來てる樣にも思はれてきた。

一時ハッとして心がすくんで終ひさうになつたのがいかにも馬鹿々々しい樣に思はれる。

すると今迄物におびやかされた樣に顫へて居たお玉の心はだん〳〵陽氣になつて行つて、風にあふられる風船玉の樣に、フワ〳〵と止め度もなく色々な事が浮んできた。全體どうしてあんなに驚いたのだらう、彼の人なんか私に何が出來るものか、私に嫌はれても何んでも私を忘れる事が出來ないんだもの……一體私はどんな男にでも可愛がられる所をもつて生れたのだわ……こんな事を思ふとお玉は無性にうれしくなつて來て、から胸を一つぱいにひろげて笑つて見たい樣な氣持がしてきた。

萬が一に彼の人が私を打つとか、何とかしようとしても、外の男の人等が其を默つて見て居やしない、きつとかたきを取つてくれる、きつとそうしてくれるに違ひない、私は誰でも味方にして終ふ事が出來るのだもの。

お玉は自分の可愛げな笑靨の深い笑顔や身振を想像してくると、自分が男の歡心を得るに都合の好い素質をどれ程深く持つて生れたかゞ、つく〴〵嬉しく感じてくる。

「お玉ちやんは何んでも無い事を云ふのにでも、恥かしさうにして涙ぐむ人だね、だけど其が不思議な程男の心をかきむしる樣に感じさせる」

いつか進さんと戸山ヶ原に遊びに行つた時、靜かな靜かな林の中に坐つて、二人はもう非常に幸福を感じながら、こんな事を男は語つた。

お玉は桃色と淺黄のダンダラ染になつたフックラしたひぢつきや、讀みさしの國語の本の中から、燃ゆる樣な紅の絹レースのしぼりのふさが見えてる机の上に兩肱をのせたまゝ、障子に照つた日足が、靜かに少し

づゝ伸びて行くのをじッと見つめながら、自分の身のまはりにちらばつて居る色々な若い男の影を眺めて樂んで居た。

男つてなぜ女を可愛がるのが好きなんだらう、男の中にだつて女よりも美しい人が澤山有るんだのに‥。

暖かな光が體の中にだん／＼心地よく浸み込んで行つて、お玉は溶けさうな氣持がしてくる。

と庭をへだつた向ふの家から、いつものたど／＼した琴の音が聞えてきた、そして未だ七つか八つ位の小供の細い聲で唱つて居るのがよく透つて聞える。



へかにまよふ‥‥うめがのきばのにほひどり、はなにあふせをまつとせの、あけてうれしき‥‥テン‥‥けさうぶみ‥‥チ、チ、テン、ツンテ‥‥シャン‥‥

お玉は小供の唄がつと耳に入ると「マア彼の子は未だあれが上らないのだわ、もう半月も同じ事許りやつてるのに―

こんな事を思ひながらいつか自分も、

へひらくはつねのはづかしく、まだとけかぬるうすごほり‥‥ゆきにおもひはふかぐさの、もゝよもかよふてひのやみ‥‥

と小供の聲に合して、手の指を琴をかきならす樣に動かしながら、口の中で唱つて見た。

是が上つたら彼の子は何を習ふだらう、ひな鶴かしら、でなければ西行かしら。

お玉は男からよこした恐しい手紙の事などは、もう心の中には跡もなく忘れて終つて居た。

とサク〳〵と人の足音がして、やがて、

「郵便！」と云つて玄關に何か投げこんで行つた脚夫の姿が垣越にチラと見えた。お玉は其が目に止ると急に目が覺めた樣になつて、立ち上ると急いで玄關に出て行つた。戸を開けて見ると靴ぬぎの上に、少さな角の洋封が投げ込んであつた、拾ひ上て見ると、其は近頃好く手紙をよこす青年から、自分に送つた手紙であつた。

まア好い時に私が出てと思ひながら、お玉はそッと大事さうに懷に收つて、自分の室にもどつて來た。

「玉チヤン、何？」

奧の方から母親が聲をかけた。

「私の所に來たのよ、お友達から」

お玉はどこか甘えた樣な口調で云つて机の前にべつたり坐つた、そして小さな封筒を懷から出して机の上にのせたが、そつと後の襖を眺めた。そしてピッタリしめてあるのを見ると、安心して、今度は封筒を手に取つてめづらしさうにしげ〳〵と眺めた。白の封に横に村井玉子樣と書いてあるのが、友達の名か何ぞの樣になつかしく讀まれた、何だか直ぐ開いて終ふのが惜しい樣な氣がして、裏を返して見たり、表を返したりしていぢつて居たが、やがてうれしさうに封を切つた。

「貴女に御目にかゝつたのは此前の日曜でしたね、未だ三日か四日しかならないのに、僕はもう耐らない程淋しいのです‥‥

此間××座の椀久を見て參りました、榮華をつくした椀久が松山を從がへて黃金をまき散らす幕よりも、親に捨てられ、世に捨てられ、戀に捨られて氣が狂つてからの方がホロリとさせられる。住吉の濱邊を十德を着た亂れ姿でさまよつて居る所が、何とも云はれぬ程身にしみました、僕はアナタと一所にこんな芝居が見たい、そしてアナタの淚にぬれたいぢらしい横顏をソッと眺めて居たい‥‥」

讀んでゆく內にだん〳〵お玉の胸の中にはその人の姿が浮んで來るのであつた、長い縞のマントを着た脊の高い姿がなつかしく思ひ浮べられる。

讀んで終ふと久らく字の形や筆づかひなどに見とれて居たが、思ひ切つて封の中にをさめると、ホツと輕い吐息をもらした

どこかくすぐられる様な妙な氣持がする、お玉は手を懐に入れてじつとその青年の事を思つて居たが、つツと今自分をひどく恨んで居る男があるのだと思ひ出すと、急に心を引しめられた様に眞面目な眞險な心持がしてきた。

「氣樂な事許り書いてある…：私は今其所ではないのだのに」お玉はそれ所ではない、自分はいま大した事に當らねばならないのだと思ひ始めた。



男の怒がほんたうだつたら、どうしよう、と思ふとまた急に心配になり出した、自分が書いてやつた手紙がそれ程強く男の心にさはつたのかと思ふと、不思議の様に思はれる、お玉はしひてそんな事を忘れようと今の優しい青年の事などを思つて見たけれど、何となく弱々したその青年では賴りにならない様で心細い氣持がして來る、でお玉は一旦收つた手紙を引出から取り出してくりひろげて見た…：。

「……………長き間小生は御許に欺かれ居たる事を知り申候、今回の如き侮辱を平然として忍び得る

程の弱き男には之なく候…………………
此後冷酷なる腹黒き男が、貴女に對して如何なる御返禮を爲すべきか笑つて御待ち下され度く候…。」

かう云ふ文句を讀んでゆくと、お玉は血走つた恐しい目で睨まへられて居る樣な氣持がした。

讀む度に男の怒がハッキリと胸に燒きつけられて來る樣に覺えた。もう何と云つても眞當に男は怒つて居るのだと思つた、此男と自分はなぜ喧嘩をしなければならないのだらう、男があんな事を云ひ出してさへくれねば、いつ迄も美しい仲で居られたのに…から思ふとお玉はつく〴〵情ない氣持がしてくる。

お玉はつひ先夜他愛もない事を語り合ひながら、銀座を歩いたのだつたが新橋際で、

「また近い内に活動にでもつれて行つて頂戴」

「エ、、お玉チヤンの都合の好い時に手紙を下さい」

男はソッとよりそつてお玉の手を握つた、そして別れたのであつた、それだのに今からうしていがみ合の樣な喧嘩をしなければならないのかと思ふと、眞當に淺間しくなつてくる。

「貴女はきつと御母さんに知れたら…と其を心配してるんでせう、僕は今となつてはどうして此情緒をすり消して終ふ事が出來ませう、色々と語り度い事も有る聞き度い事もある、×日の夕方には必ず××迄來て下さい、水國の樣な××あたりで、靜かな燈影のもとで一夜を語り明したい、どうでも僕は××行を決行したいと思ふ…」

彼の翌日から云ふ手紙を受取つた時、お玉は燒き爛れた鐵に、ウッカり手をふれて終つた樣に心迄も火の樣に熱くなつた、お玉の胸の愛も男の熱で消されて終つた樣に覺えた、でふるへながら、

「私は貴方が大好ですの、そして兄樣の樣な氣がいたしますの、ですけれどわたし、貴方を戀してはしませんわ、ネ、どうぞゆるして下さい、後生ですからあんな事を云はずに今迄通り可愛がつて下さいどうぞ〳〵此妹を苦しめないで下さい、わたし貴方が大好なんですの、好きは好きなんですけれど…………ですから何とおつしやつてもわたし××迄は行く事が出來ませんの…」

こんな事を甘つたるい口調で書いて送つた、そして男は自分の云ふ通になるものだと定めて居た、そして、

「もし貴女がどうしてもそう云ふお心だつたら致方がありません、僕はどうしても貴女を愛さないわけには

ゆきません、我愛する君よ、僕の心の内に永久に愛すると云ふ自由だけでも免して下さい」

と、かうした弱い憐れな手紙をよこすに違ひないと思つて居た、そうしたらどの樣にも慰めてやらうとお玉はそうきめて居た、あく迄も度量が廣く、そしてやさしいが彼等の本性だと思ひ込んで居たのであつた。

「……弱き男には之なく候……」

お玉の美しい夢はメチヤ〳〵に破られて終つた。

ジッと手紙を見つめて居る内に、お玉の心は次第に曇つて沈んで行つた。



生やさしい假面をぬいで終つた眞の男が、野獸の樣な怒を發して、自分の所を睨んで居る樣に思はれた。

もう男の心はどの樣な冷酷な無慘な事に出逢つても其が却つて快く感ずる程、いつの間にか變つて終つて居るのだとも思はれて來た。

とお玉は自分の笑や、色彩の衣服などは、もう男の心には何の力も失つて居るのだと思ふと、手紙を眺めて居るさへ怖しい樣になつて來た。男といふものはかう云ふものなのだらうか。

では此優しい青年も、あの進さんも、一度は假面を脫

いで恐しい野性を表はして、私をさいなまうとする時が來るに違ひない。かう思ふとお玉は自分の身の廻りの若い男等が、猛獸の群の樣に思はれてきた、そして丁度自分は猛獸の檻の中に入つて眠つて居る其猛獸の脊によりかゝつて居るのと同じだ。そしていまに眠からさめた猛獸の爲に、此うすい柔かな皮膚や、赤い血しほはまたゝく間に滅ぼされて終ふのか、かう思ひつめたお玉は、もう心が亂れて終つて、ジッとして居られない樣なハラ〱した氣持になつて來た。

母親にすがらうか、學校の先生に懺悔して助けて頂かうか、お友達に打開けて力になつて貰はうか。

お玉はどうしても家の中にジッとして居る事が出來なくなつた。うるみをもつた美しい瞳は、はげしい恐怖の爲にすつかり色が變つて終つた。耐らなくなつて手早く机の上の國語讀本を包んで其を抱へて立ち上つた、次の間に來ると母親は講談か何かを讀みふけつて居た。

「お母さん、私、宮澤さんとこへ行つて來てよ、明日國語のお點取が有るからお習ひして貰つて來るの、好くつて？」

「アヽ、早く歸つて入つしやい」

母親は本から目も離さずにかう云つた。

お玉は外に出ると冷たい風が熱い頰にヒヤリとした胸迄も冷たさがしみてゆく樣に覺えて、不思議な程恐ろしい心をさそつた。

宮澤さんは入つしやるかしら、もし入しつたら、何んて話さう…、お玉はこんな事をくり返し〱考へながら路の片はしを歩いて行つた。

「村井さん、おすまし！」かう耳もとで云はれるとポンと脊中を打たれた、お玉はハッとして首を上ると、同級生の一人であつた。

「あなた、どこに入つしやるの、隨分ネ、知らない顏をして…」かう云つて友達は笑つた、お玉は自分の心を見すかされる樣な氣がして思はず顏が眞赤になつた。

「アラ、そう云ふ譯ぢや無いわ、全く知らなかつたんだわ、かんにんして頂戴、あなたどちらに入つしやるの」

「私、お使ひに行くのよ、あなたは」

「…私、一寸近所まで…」

お玉は友達も一所について來はしないかと思はれたのでわざと云はなかつた。

「そう、あのね明日五年生とマッチがあるんですつてテニスのよ、それでね、今度こそ四年生をまかしてやるつて昨日五年のチャンさんが云つてたわよ、負けやしないか、ねえ貴女‥‥ア私大急ぎなのよ、左様なら、明日お目にかゝるわ‥‥」友達はにぎやかに云つて向ふにかけ出して行つて終つた、お玉は其後姿を久らく眺めて居たが、一人取り殘された樣な淋しい氣分になつた。

あゝ彼の人には怖しいものが無いのだ、誰にも憎れては居ないのだ、恨まれても居ない‥‥

フトお玉は自分は近い内に死‥‥殺されるんではないか‥‥こんな事が電光の樣に頭にひらめいた。こんな所をうつかり歩いて居る内に、彼の男が後から白刃を光らして切りつけでもしはしないか‥‥、そんな事を思ふと血相の變つた男の顏が、マザ〳〵と目先にちらついて、足もすくんで終ひさうになつた。

お玉は夢中で友の家にかけ込んだ、そして涙を一つぱいためた瞳で、ジッと友達の顏を見つめると、

「宮澤さん！　後生だから、私の親友になつて頂戴」と云つて、友の兩手をシッかり握りしめたまゝ、どうしても離さなかつた――。

田中祐吉氏の『人性の醫學的觀察』

一體日本の女は、小説とか講談とか振假名つきの本でなければ讀めないやうに心得て居る、それは大きな間違ひだ。女だからとて自然科學の書物は勿論、醫學とか生理學とかの本も讀んで、其智識をゆたかにせねばならぬ。今の書物は以前と違ひ、高等女學校卒業程度の者には、少々專門的のものでも大抵は分るやうに出來てゐる。本書なども其一冊で、殊に著者田中祐吉氏は、屢本誌にも現れるから讀者も知れる通り文章がなか〳〵巧みである、醫學的と云つても決してむづかしくない、能く了解し出來れば、また珍しい興味を持つてゐる。死の瞬間に於ける人間の心持とか所謂不思議と云ふことの解釋とか、奇拔な題材を面白く說いてゐる。殊に婦人に關したものでは人口の制限と云ふことより引いて、產兒の制限を論じたもの、生殖器と云ふものゝ人體に於ける不調和を論じたもの、或は醫學上より見たる女性など、皆眞面目な議論であると同時に、大膽な說も多い。性慾問題などいふ事は一つの流行のやうになつてゐるが、此書は流行を趁ふて出たものではない、著者に自信があつて出したものだ、其點は本書の內容を見れば自ら分る、菊版美本（君）（定價金一圓、本鄕區龍岡町南山堂出版）

○日本文學物語

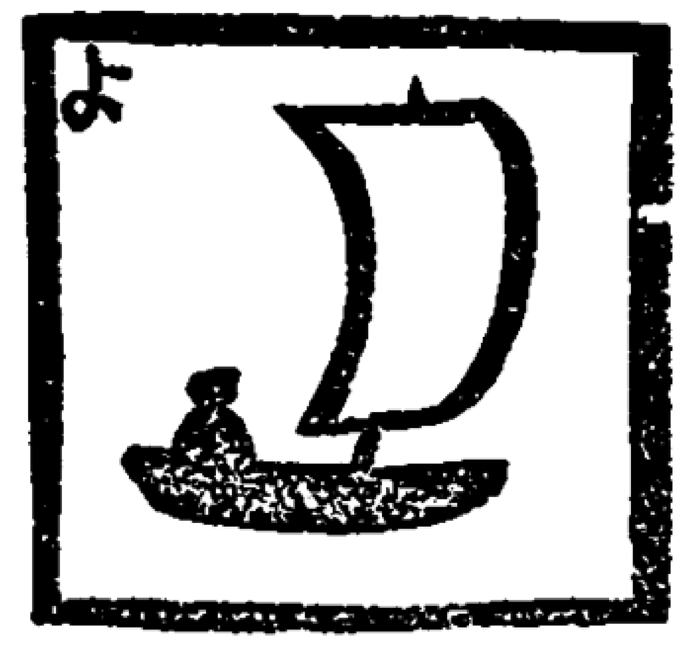
芝野六助著

學校の教科書以外、家庭で讀む健全な書物と云ふ意味に於て、本書の如きは尤も恰當のものであらう、日本の文學中、有名な書物の梗槪を著者の消化した智識で、巧みに按排したものだ、本卷は歷史の卷だから古事記を初め大鏡や榮花物語や五六部の話が集めてある、函入美本（定價金七十錢、神田駿河臺興文館出版）

○英國歷史物語

西村晃一著

此書も右のやうな目的で著はされたものだ。英國の歷史を女や子供にも分るやうな優しい文章で書き綴つてある、面白く讀んでゆく中に知らず識らず歷史を覺えると云ふ利益がある、函入美本（定價金五十錢、同上出版）



南洋の思ひ出

花山院貴美子

▼もう一度行きたい南の島へ

「新綠の蔭戀しくば、生の充溢せる彼の南洋に至れ」周圍が慌しげに動搖して、凡てのものが綠に眼覺め、綠に洗はれて、若々しい生命を傳ふる初夏の頃になると、何時でも憶ひ起す南！といふ言葉。不斷に深き綠の蔭、少女の血が注がれた樣な、眞紅の花咲くかの國よ…美くしき情緒と、華やかな戀を持つてゐる島の少女クララよ。

行き度い、もう一度、逢ひたい、憧憬して止まぬ心よ、わが願ひよ、再び—行くべき時は何時であらう。

住みなれし母國を後に、幼い兄妹が父樣に伴なはれて長途四千哩の旅へ上つたのは、千九百年も暮んとする師走中旬であつた。××解纜の獨逸汽船に乘り、小笠原附近を過ぎて、だん〳〵周圍が變るにつれて、珍奇らしいことばかりなので、私の小な胸は躍り、たゞ驚きの瞳を睜るのみだつた。

赤道直下になると、內地は冬の最中なのに、熱さは九十度以上、朝夕涼しい頃になると船長の許可を得た水夫等は、短艇を下す者、泳ぎ廻るもの、さしもの髯武者男が、全で小兒の樣、この時甲板に登つて愉快氣なる光景を、眺めるのが何より樂しみであつた。

幾週間、何所を見ても、只蒼き空—果しなき浪—僅に曉の色と夕日の光が美はしい變化を大空に與へるばかり…けれども地平線の彼方に、遙か一帶の黑影を見出したる瞬間、幼い胸に刻まれた印象は、未だに忘るゝ事が出來ない、左右に魔が大手を擴げし如き島を、後へ、後へと、漸やく着いたのはフヒシー群島中の、トクウと云ふ所、船から上陸つた私達は、出迎へて吳れた島司の家に泊つた。

▼人間を食物とする土人

茲は南洋群島中、最も開けた地であるが、夫れでも幾年か前までは、難船して漂着した者は、土人等の食物になつたと聞く、なか〳〵野蠻な地である。

西に遠くニユーヘブライズ諸島を望み、四面は渺茫

たる絶海である。地質は概ね火山質よりなり海岸には多くの珊瑚礁が連いて、所々昔噴火した樣な跡がある。際だつて高き山はなく、全島は平野がつゞいてゐる。島の周圍は大抵急峻なる斷崖で、西南にわが浦賀に似たる、へうたん形の灣があるけれど、風浪高くして船舶を着けるには困難である。

住民の多くは西班牙人との混血兒で、純粹なる土人—パプアン種族に屬ける者は僅に過ない。

往昔、ムムの領土たりし故か、未だに殘りし子孫の勢力は強く、言語の如きも西語と土語の雜つたもので、英語や佛語を語るは、主にハイカラな若き人に限られて、それすら稀であつた。



▼獰猛なる姿と優しい心

土人は男女とも赤裸々で、肩から腰のあたり、丁度袈裟の樣な布を纏ひまるで赤銅色せる皮膚を惜げもなく露はして跣足の儘、何處でも構はずにひよこ〳〵と歩き廻る。

家屋より高く繁茂せる椰子樹、ゆうかり樹に似たる高木の間に、點々として散在せる掘立小屋の中から蓬々たる毬栗頭の

ぎよろ〳〵眼ばかり大きく光らして、アケビの如き唇のあたり、さま〴〵の文身したる土人が、ぬつと現はれたる樣は、いかにも原始時代の現狀が偲ばれる。姿を見れば凄くも恐ろしくも思はれる。けれど獰猛なる容子に似げなき心優しさ、質朴なる感情は、人をして可憐の情を起さしむるのである。

　私達のなれない當座は、いろ〳〵な土人が、かはるがはる奇妙なる物を持つてきて、言葉も分らず、彼等は手づかみのまゝで、口に一杯ほうばるから驚かされた。

　土人の多くは綿花やマブラ（椰子の實にて石鹼の製造用として現に我が國にも輸入されつゝあり）の栽培に從事してゐる。

　本國より派遣せられたる役人は、月に何度となく廻るけれど、實權は殆酋長の手に歸して、まるで王樣のやうな權勢を持つてゐる。

▼年齡も知らず姓名もなき貴婦人

　貴婦人とも云ふべき女達は、下半身にスカートを着けて大きな乳房のあたりまで、動物の骨、植物の實をつなぎ合せた首飾りをして別に年齡も分らず姓名もない、文身の形によりてその階級を知るのである。

　私達の通ふた學校は佛蘭西の宣敎師が建てたので、十六世紀時代の天主會堂風な、立方體の多い極く粗末な建物で、生徒の數は總て二十何人だつたが、棕梠の葉で編んだ籠へ本を入れては通ふた。初めの中はよく素裸のまゝで來たけれども、宣敎師達が苦心して、女の子には、下着の如きものを、男子には水兵服を着せたら窮窟がつたのが一笑話として傳へられた。

▼尊長の一人娘クララ

　程度はごく低く、慥か尋常二三年位が漸くであつたと覺えてる、私は尊長の娘のクララと共に敎はつたのである。

　紅い綿の花が熱國の朝にひらく頃、片手に籠持つて素足のまゝひや〳〵と、心地よき濱邊傳ひに、丈より高い芭蕉の實をとりに行つたり、夕方人跡まれなる巖影に、神祕な島の傳說を聞いたり、信天翁の群が飛び交ふ沖の方へ舟を出して、眞紅な大きい月の昇るのを仰ぎながら、奇蹟に富る島神の物語を聞いたりした時は、どんなに嬉しかつたらう。あゝなつかしきクララよ、南の海よ。

クララは酋長の一人娘、母は伊太利の人で瓜哇で產れたとか、此の島では稀に見る美くしい少女である。母の面影やのこせる、碧き瞳、ゆつたりと黄金の波打つその髪よ。誰か土人の子と見やう。何時でも『大きくなつたら瓜哇へ行く』と、口癖の樣に云ふて居たが……今は何處に居るであらう。あの玉の如き顏に、入墨されるのは。口惜しい。

▼十二三歳で結婚する

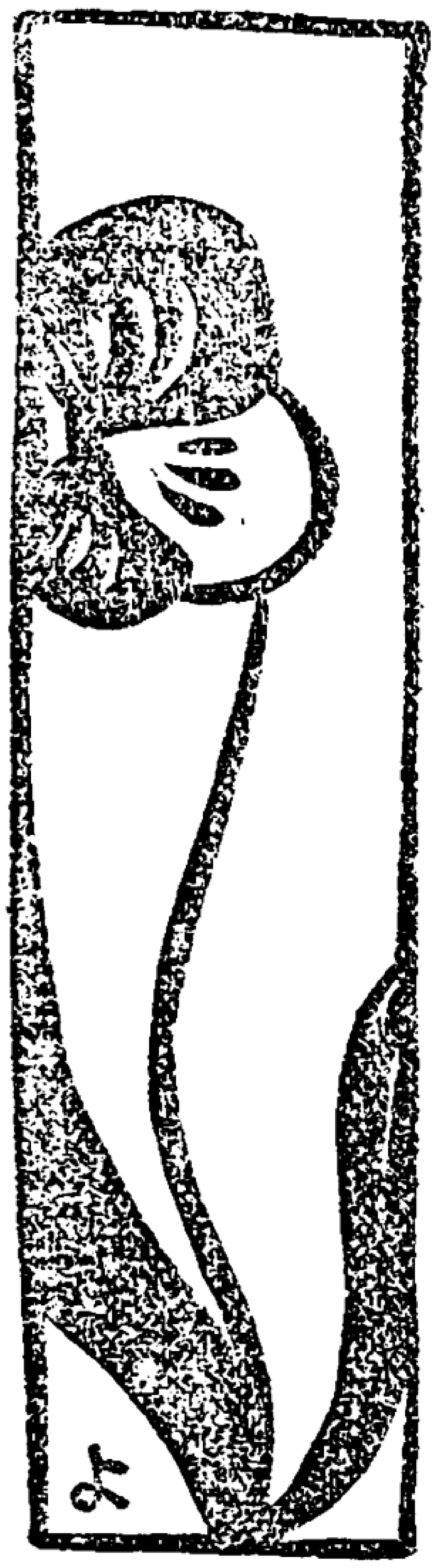
此の土人等は野蠻な者に似氣なく、人道は正しく、他の諸島の如くに亂れてはゐない。總て早婚の風があつて、大抵十二三歳位になると、親達がしきりに配偶を擇ぶ。毎年二回宛行はれる島神祭の時には、年頃の娘を持つた親達は、赤や黄などの色彩の强い、どくどくしい繡のある衣服を着飾らせて、駝鳥の羽で出來た冠を被らせて、狂氣の樣に騷ぎ廻る。

其の中で一番階級の高い女が中心となつて、奇聲を發して歌ひながら、身振足振をかしげに踊るのであるそれが丁度相手の心を引きつけるやうに巧にやるので……男はその中から、自分の氣に適ふた者を家へ連れて行く、三日ばかり經つと、酋長初め頭目たちが、一定の場所へ集合り、新婿となるべき試驗を行ふので、硏ぎ澄ましたる槍の如き物で、脇から肋へかけて三回許突くのであるが、もし呻き聲を出したり、弱味を見せたりすると、女は會衆の中できつぱりと拒絶する。男は滿座で赤恥を掻なければならぬ破目になるので、大抵の痛さは我慢する相である。斯くてその資格に合格した者は、茲で目出度く緣を結び、新たに家庭を作るのである、何方かと云ふと大概男の方が年が上であるが、中には弟の樣なものもある、外島の土人達は厭が來ると又他へと……まるで循環結婚で、系統の如き、亂れ放題であるが、この島は然うでない、一つは基督敎の思想が交つたからであらうと思ふ。

出產の時は產婦は別に小屋をたてゝ、其の中で一人ですつかり始末して、決して誰にも見せない、嬰兒は別に產湯をつかはせるでもなければ、何樣するかよくは覺えぬけれど、隨分ひどい取扱ひをする相だが、割合に丈夫に育つて行く。

* * * * *

あゝ南へ！南へ！、もう一度行きたい、あの雄大なる曉を、あの莊嚴なる落陽を、あの美しき娘クララを再び見る機會は來ないであらうか。



六月の光

長曾我部菊子

行く時であつた。霧で曇つた朝の九時過ぎで、風はそよとも動かない。而して重たい此の霧との間に幾一枚の隔てを置いたばかりで今にも薄暗い雨が、早く時機をと待ち掛けてでも居る樣な氣持がするのであつた麥畑の凡ての表面はしつとりとした重い水蒸氣に壓し付けられて、頭さへも上げられぬ物苦しさうな有樣は、日本の家で女の生活を其の儘に見せられる樣である。然し寂しい雨前の此の危い平和はまだ二時間ほどは維持する事が出來る樣であつた。

溢れる計りの畑の黄白色は如何にも靜淑と落ち付いて、舐め付けられた樣に土地を包被んで居る。土地の色は黒々と濡れ色を見せて絹絲を引く樣な霧の足に觸つて居る。

如何して此う佗しいだらう！と眼の前の麥畑を見て心の中に呟きながら歩いた。

＊　＊　＊　＊　＊

不思議に日直りがして憂鬱な空の色がすい〱と白く禿げて來て、日輪の丸い姿を彼處と指差せる頃になつて歸途の足は以前の麥畑の前で、自然に佇立つた。しつとりと濡れて居る土が、煙の樣に水蒸氣を吐き返すにはまだ間があらう……けれどもやつと顏を出す事が出來る樣になつた太陽がくわつと照り笑つた。と、……戀に腦亂した樣な激しい表情が眼の前に浮んだのである。私の眼はその女優の顏ほどに表現力に富んだ麥畑を貴い心持でじつと諦視めて居る事がどんなに快よい事であつたか!?!

蹲居んで見渡すとまだ葉の下蔭には青味が匂ふ樣に漂ふて居るが、立つて眺めると黄ろい色が濃淡を波動させて、ぎら〱した濁水が堤をおし切つて溢れ廣まつた樣なもの〱しい姿である。見れば見る程畑は廣く、遠望の眼を遮ぎるものは僅に紫色に霞んだ小さな森ばかりである。而して畑の膚の弛みと、張つた處とは麥の穗浪の高低に見えて居る。

遠い處では見別が付かないが、直ぐ眼の前では黒穗が多く交つて居る。而して其の黒穗は、健かな麥穗よりか丈が小さく、そつと隱れ腰をして人目を盜んで居る。ある場處では膨れた大穗の重たさに辷られて堪へ兼ねた樣に左のうねから轉び、右のうねから轉んで、ぐつたりと抱く樣に撞れ合つて居る。ある場處では強い腕に襲はれてやつと身體を轉した樣な聯想を起させる。一つのうねを眺めても其れが決して直線には見えない。左に迂曲り右に迂曲り起伏をたちどころにした一波動一波動の苦しみは、私の胸を痛いほど刺撃して自分の感情の姿を此處に見せられると思つた。それほどに私には矛盾があるのだつた。

物好奇に立ち寄つて黃ろい穗の上に掌を觸れて見る。すると思つたよりも乾いて居て、さや〳〵と淸撥の樣な微妙な音が起る、

此の不可思議な幽かな韻！神秘……と思ふ言葉が心の上に浮き上る。

それはかりではない。斯うした熟れた麥の穗から麥の香氣が強く發散してほとんど煙つたい程である。強い此の香氣の中に立つて凝乎明るい濃黃な其の穗と、やゝ淡黃な光つた莖と、黑味を帶びて茶がかつて、乾いて縒れたり反り返つたりして居る葉とを凝視て居ると眼が快よく疲勞を感じて、燃え漂ふ外光に氣持よく死に得る樣な感觸を胸に起して來る。

くわつと日が明むと、麥畑の表情はたちどころにいきいきする。而してそれ〳〵に明黃色に光つて、而も互に似たところのない色をして居る。その日が曇るとくんなりと萎れてしつとりとして、互に特殊の色を見せて暗黃色の敷物と變つて來る。

* * * * *

白い蝶々が穗の上を飛んだり隱れたりして數點を畫いて居る。而してそれが兩方から行き合ふと、ぴつたりともつれて、鎖を組みあげてでも行く樣に下から上にからみ合つて上る。高く空に上つてどうかする間に呆れる程、速かにつういと兩方に別れて了ふ。

『明るい日の下の靜かなあひびき』

と私の唇は思はずから云つた。

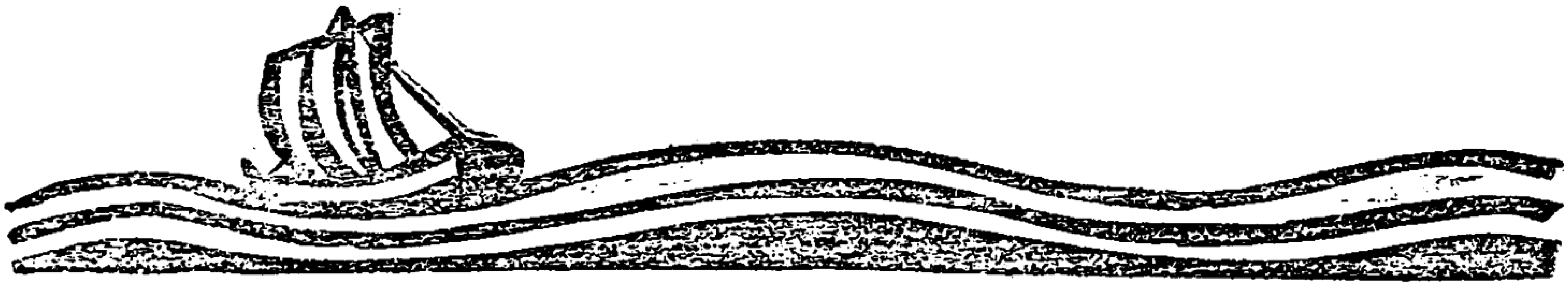
眼に涙の滴る程に私は心が微動するのであつた。

涼しさや裸で越ゆる函根山　子規

夕涼み夕顏一つ見出しけり　乙由

涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲　蕪村

下涼み月ひるがへす木の葉かな　蘭更



二つの心

原田琴子

玉二つ並ぶにひとし心をも似るものながら同じ世ながら

この戀も二人がよりてなげくことなほつきぬまに幕となれかし

ひたすらに身を思ふことあぢきなし人のいさむる戀もしてまし

わがたのむものなりながら危うげに甲斐なきものに見ゆる戀かな

わが戀はめでたくやすし一息にはせ下りたる坂のごとくに

思出のうつくしさよりなほ彼をゆるす心となりにけるかな

罵られ石をうたれて街をゆく身の若きこそいとあやうけれ

相あるを人の罵る天地の破滅を謀る者のごとくに

われはやく人に及ばぬこと知りて後に低く石をひろへる

あたはずと云ひて再び仇をばたのむやうにも泣かるこの戀

春の夜の都大路に身を捨てんかどわかしにも拾はれましと

やごとなき姫を見返るその眼もて田舍娘のわれも見返る

つくろはぬわが初戀のうつくしさ人の覗くもゆるすべきかな

數しらず春は男に逢ふごとくはては鏡ものもうくなりぬ

三十のたはけの與太が大力にゆる大寺の山ざくら花

春風に袖の遊ぶもあぢきなし知らぬ男も來よといふごと

俄にも三世の外にうつりたる身かと思ひぬ君とあるより

東京市京橋區大鋸山十一番地　女子文壇社發行　（振替口座東京壹七貳九）

本誌の特色

▲最も上品な記事を滿載してあるのが『少女』の特色!!

▲毎號泰西名畫の美しい三色版を載るのが『少女』の特色!!

▲すぐれた作文を一番澤山揭げるのが『少女』の特色!!

▲無要な虛飾を省いて內容の善いのが『少女』の特色!!

本社には取揃あり

少女

六月號發刊

毎月一回　一日發行

口繪原色版、寫眞版色刷數葉極美

定價　一冊（送共）拾壹錢　半年前金六拾參錢

◉今の高等小學以上の女學生で『少女』を見ない人は少いさうです。『少女』は作文練習の爲になる上に。女らしい美しい感情を養はしめる高尙な雜誌です。尙幼い人達の爲には初等部の設があつて。毎號懸賞で文章や詩歌の外。面白い新案の考へ物の題を出して當選者に美しい賞品を呈してゐます。

若き婦人の誇

女子文壇增刊 好評

新文章

紙數二百頁美裝
特價拾錢
送料壹錢五厘

●一呼吸

●七色の虹

▲生の斷片
▲覺め際の淋しみ
▲自ら警める記
▲學生の都會
▲初夏の人々
▲寢息

○男子の手紙に迷ふ
○不躾緻な私の哀懇
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○揚子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣寥

◎轉宅（小說）
◎淋しい道（小說）
◎溫泉宿（小說）

▲梅雨日記
▲姉の家
▲心の離散
▲黑き洋傘
▲別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあらはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

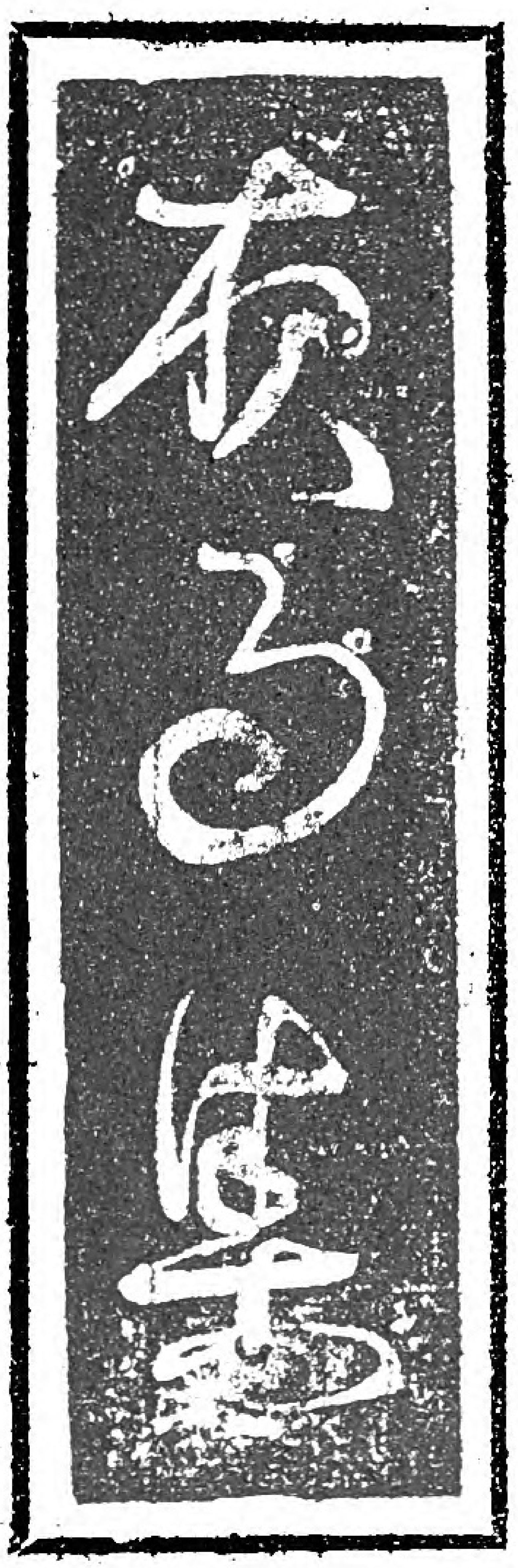
◎課題
△顏△髮△浴場
△山△海△劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人
服部貞子　早川[illegible]子　長曾我部[illegible]子　小川夢の女　小笠原[illegible]子　太田喜志子　若杉[illegible]子　河野[illegible]子　加藤[illegible]子　高橋りう子　田中[illegible]の女　內藤千代子　野村[illegible]子　水野[illegible]子　山田邦枝子　松田梅子　松岡妙子　前島[illegible]子　松村らく子　月[illegible]子　江森[illegible]子　佐藤[illegible]子　佐分[illegible]彰　木村あやの　夕はし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木[illegible]子

●發行所 東京市[illegible] 女子文壇社 （振替口座東京第七九[illegible]）賣捌 全國書店●

横瀬夜雨先生新著



全一冊中判三百卅頁
舶來ラフ紙印刷鮮明
色クロス金天顔雅裝
定價八拾錢送料六錢

諸新聞評

報知新聞評

著者は筑波根詩人として知られ詩壇唯一の閑靜なる研究者として十年一日の如く常陸大寶湖畔より自然の聲を齎らせる第一人者なり、痛ましき病軀を擁して興到れば筆を採り詩によつて活き文によつて慰むもの總てこれ名利の他にあり即ち著者が多くの知己を有する所以たらずんばあらず、本篇收むる處の散文十九篇は一面著者の人生觀を語るものにして哀艶の詩を讀むが如く又常陸平野の大自然を敍しては蟲歌淋しき田園の風情を詳かにせり、徒らに動搖し易き文壇の一劃に著者を得たるは大に歡ぶべく茲に純化せられたる自然の啓示をこの一本に盡せるは更に〳〵感すべき也

國民新聞評

夜雨は天成の詩人也自己を飽くまでも其憧憬の出發點とする點は夜雨の先天的境遇已むを得ざるに出づる處夫だけ狹けれど深し隱逸にて且つ沈痛也殊に此集には戀に對する執着の影に人間としての詩人の現世に對する苦悶を描いて多恨胸を捩つて痛恨せしむ文藻の豐麗と相俟つて彼の詩に醉ふものに無限の感銘を與ふ新調と否とは早や問題に非らず。

評判記

大阪毎日新聞評

筑波山下の病詩人夜雨君が清寂なる境界に居つて筑波根の自然を歌ひ其感懷をありの儘に發露せる新詩と文と十九篇を集めて一冊としたものである「いつぞやの日記」「旅より旅まで」「雲雀鳴く野より」の三篇は著者の詩才の凡ならざるを窺ふに足るべき名篇で讀過幾回吾人の感興を惹いた清新の味に富む好著。

萬朝報評

著者は今筑波山麓に不斷の坐臥にあらざるべからざる薄倖の青年詩人にして愛戀の夢と想との縺つて成れるもの即ち此集なり詩、小品、紀行、日記、隨筆、手紙等集むる所凡て十九篇、新しいロマンチツクな幻影は獨特の筆致と相俟つて自ら一種の色彩をなし紀行日記最も見るべし裝釘又瀟洒なり。

出版元 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社 (振替口座東京壹七弐九) 全國書店取次販賣

耳袋（六）　猿丸太夫

▲到るところ『金』ほど難有がられるものはないらしく歐米には金貨を頭上から浴びて喜ぶ人が少くない。近着の北米の雜誌に掲げられたその實例の最も可笑しい二つ三つを紹介致さう、有名な洋琴家パガニニ氏は、同氏を大立物として行はるゝ合奏會から、報酬を拂はうとすると、氏は必ず幾千弗でも總て金貨で受取らなくては承知せぬ、金貨を受取ると氏は洗面盥にそれを總て打ちあける、そして得心がゆくまで兩方の手をザク〳〵と金貨の中に突き込んで、金貨で手を洗ふのを此の上もない樂しみとする。次に佛蘭西で有名な小説家スーリエ氏は先頃『惡鬼の傳』と言ふ大變な小説を書いたところが、これが意外に當ッて本屋から二萬圓の報酬を金貨で受取ッた。スーリエ君顏の色を變へてホッと歎息を吐く本屋の主人驚いてドウかしたかと聞くと、ス君手を無暗に振つて『イーヤ違ふ、よく覺えて置きたまへ、これが現代的文士の詐らざる喜び極つた表情である歎息である』といつて再びホッと歎息を吐く。本屋の主人が退き下ると、ス君貰つた金貨を悉皆そのまゝ自分の寢室に持ち運び、足を洗ふ小盥に打ちあけ、靴を脱いで裸足になつて金貨の中に矗乎と立ち、口には大きなハヴアナの葉卷をパッパッと燻らせながら足の先で金貨を無暗に掻き廻すこと一時間半に及んださうな。お次は巴里の或る雜誌記者、不圖したことから鐵道株を少しばかり買ひ込むと、それがトントン拍子に騰貴り出し、二週間ばかりの中に七萬六千餘の儲けとなつた。彼れはこれらの總てを金貨で受取つた。そして大きな袋から自分の寢室の蒲團の上にその金貨を悉く打ちあけて好きな三鞭酒をウンと煽つて、その上にゴロリと轉がつて『これが本當の昔々ミダス王が湯浴みしたと言ひ傳ふるパクトラスの金の砂だ何ともいへぬ好い心持だ』と金貨に身を擦り附けて一寢入りしたところ、何といつても金屬の敷物ゆゑ、醉ひ醒めに一層冷え込み、性惡の感冒を引き、それから肺炎を併發して大に苦んだ。おれもちと苦んで見たい。

▲オクラマホ州にペリーといふ小さな村があ

る、停車場が無いのを遺憾として、美貌花の如き小女を二十八選んで鐵道會社に請願書を出した、交換條件として社長に接吻を捧げるといふのだ。社長の顔が想像される。

▲ラブレターを讀んで了つたらよみ殼はどうしますかといふ問をかけて、答を募つた雜誌社があつた。之に對して或者は肌身離さず占て寢るといひ、あるものは讀んで了へば燒捨てるといひ、色々あつた中で最も奇拔な新發明とて名譽の懸賞品を贈與されたのは、艶書製の洋杖といふのである、此偉大なる發明家の苦心と其製造法とを承るに、件の發明家英國戰鬪艦グローリー號乘組の兵曹長ブイ君の話によると、抑も其の妻君とは四年間の戀中で目出度く結婚して妹脊を契る迄には其の苦勞並大抵の事ではなく、ブイ君から數百通の艶書を贈り妻君の方からも前後四年に亘つて無慮三百三十三通の三倍字にも餘る艶書の數を重ねたと云ふ此數多き艶書殼を流石に肌身離さず愛惜む譯にも行かず、それかと云つて捨てもならず苦心慘澹の末此に案出したのが此艶書の洋杖である、之ならば二六時中身の廻りから離さずともと夫よりは艦内同僚の目と暇を偷んで根氣よく千通に餘る艶書に移り香罩めて一枚づつ棒狀に卷きては又卷き、更に其上へニスやラックの樣な塗料を萬遍なく塗り上げて遂に上等の洋杖が出來上つたのでブイ君は覺えず包み切れぬ嬉しさを唇に締めて熱い接吻をニス塗の艶書の上に印したと云ふ譯である。「しんき辛苦に今朝結たかみをさまがみだしやる」それならで、一々枕紙にするのも可あいさうだ、といつて達磨樣のはりぬきを拵へる隙人ばかりもゐまい。燒けばキナ臭いと言はれるしステッキは要らない尤もほぞの緒切つて只の一度ラブレターを貰つた例がないから、私には分らぬ筈だが……。

▲華族で、子爵の當主で、中尉で、騎兵で、習志野に勤務せる軍人有り。名高き金もちの繪かきから娘を貰つたら四月目に子を生んだ。「俺の妻になつてからなら許さんが、生んだ子は拵へた男に返せば濟む、吾輩も軍人だ、一旦貰ひ受けた妻だから永久に返さぬ、刀にかけても返さん！」腹は貸し物と見える。

▲實物は天滿燒けの一甜にあふて今以て燒跡に草茫々の「大阪府立商品陳列所」の案内が、現在現今御叮嚀に歐文和文兩樣に、電話番號まで明記した大揭示板が中之島公園入口前と梅田停車場前に大威張で立つてある。嘗て西横堀は尼ヶ崎橋の橋燈に「尻ヶ崎橋」と書き

損ねて久しく通行人に噴飲させて居たことや、南海電車難波乗り場の掲示札に、貼紙剝れて「佐塚」といふ佐野と貝塚の混血兒の珍地名にお客を迷はせてゐたことなど、フイと聯想し、戸毎に張紙を覗き廻ると、隨分と面白いのがある「此の家貸さぬ」借りるもんかいと言ひ度なる、「注文外の新聞代は支拂の義務なし」は理窟つぽい書き樣、人氣稼業の料亭の門先きと來ては更に不向きだ。「丁稚入用」、「小僧入用」、「十三四歲の子供お世話下され度候」と三樣三通り、同じ奉公さそなら第三の家へやり度なるも人情ぢや、「丸京用事」は飛脚の呼込みなり、水入用は水道出來て影を匿したが、電信電話小包通運をよそにして今もあり、「犬の外小便無用」「荷車の休息を禁ず」と頗る振つたのがあり「屑屋用なし」は繁文縟禮の好文範、小使募集に「成年五十歲以下、幼年十五歲以上」とあつた、珍又珍。かつて「小便無用」と書いて其上へWCと銘を打つたのを東京で見たことが有る。西洋人の外はとなせ註をしないのだらうと不思議でならなかつた。

▲或る夜札幌の市中を通りかゝつた男、夜鷹蕎麥のちりん〳〵を見つけて立留つた、蕎麥屋は丁度水が切れたので笊で雪をしやくつて、と釜の中へ打込んで、へい暖かい所をと進めた。これはタネがはひつてるのか誂へたのは盛だぜ。へツ承知してをります、たゞの盛で厶います、さうかな、でも金海鼠のやうな物が有ると、客は大分甘さうな匂ひがするので内々悦んで大きくあんぐりと參つた、ペッペッ。豈料らんや、いんのくそであつた。蕎麥屋の奴雪と一しよに珍物をさらひ込んだのである。

▲中人の行つたり來たり呑みたい半分の談判を面倒がつて、自分で先方へ行つて話を定めて了ひ、嫁入の日には聟の家からの迎を待たずに仲人も何も置いてきぼりにして抜懸に一人で乘込んだ女の事がつひ先達の萬朝に出た。過般の坂東太郎の「夜話」には祝儀の日を待ちきれずに先方へ手傳に行つた嫁の事があつた。現代なる哉と嘆ずるを止めよ、三河豐橋の在に東田村有りそこから嫁を娶ることになつた男、親達が仕度が無くてはと二の足を踏んで破談にしようとしたのを息子殿駄々繰て承知せず、たうとう話が纏つて輿入されたのは舊臘中だつた。すると友達が年始をかこつけに押かけて行て、スコブルのBなんだらうとからかふと、いや有難う、髮の赤い頰の出た鼻は低いし背も低いし正月には誂向だよと澄して御秘藏は見せなかつた。

☆

新舊對照　新世帯一諸道

東	
大關	火打箱
關脇	米櫃
小結	鍋釜
前頭	たゝみ
前頭	走り廻り
前頭	丸あんど
前頭	蚊帳
前頭	はうき
前頭	たらひ
前頭	茶呑茶碗
前頭	ふきん
前頭	いかき
前頭	煙草盆
前頭	風呂敷
前頭	手拭
前頭	炭取
前頭	紙屑籠
前頭	手水鉢
前頭	算盤
前頭	雑巾
前頭	火ばし
前頭	徳利

行司

めし櫃　櫛笥　針さし
竿竹　物干　灰汁
井戸車
桶　うち盤
また木　横槌　土瓶
杓子　火鉢

勸進元　神棚

差添人　佛壇

西	
大關	寺請
關脇	女房
小結	小便たんご
前頭	膳碗箸
前頭	寢道具
前頭	提灯
前頭	こたつ櫓
前頭	のれん
前頭	はんざう
前頭	掛硯

頭取

押入　瀬戸物
箪笥　戸障子
屏風　錠
長持　襖
鍵　段梯子

世話人

雪隱　火吹竹
すり鉢　すりこぎ
鹽壺　九つ梯子
から臼　雪駄
下駄　くさおけ

具見立相撲

尊き方は和田信次氏の所藏にして天保十一庚子年六月の新版、新しき方は臺町生が明治四十五年壬子年五月の考案

大關	マッチ
關脇	時計
小結	瓦斯竈
前頭	絨氈
前頭	エプロン
前頭	花電燈
前頭	除蟲菊
前頭	放水ボンプ
前頭	洗濯板
前頭	珈琲茶碗
前頭	ナフキン
前頭	冷藏函
前頭	灰皿
前頭	オペラバック
前頭	タヲル
前頭	捲莨入
前頭	郵便さし
前頭	花壇
前頭	家計簿
前頭	ブラシ
前頭	キルク拔
前頭	コップ

行司

金庫　化粧箪笥　ミシン器械
電話　露臺　曹達
水道栓　バケツ　双眼鏡
消火器　寒暖計　珈琲沸し
タイプライター　體温器

勸進元

貴顯肖像

差添人

肖像寫眞

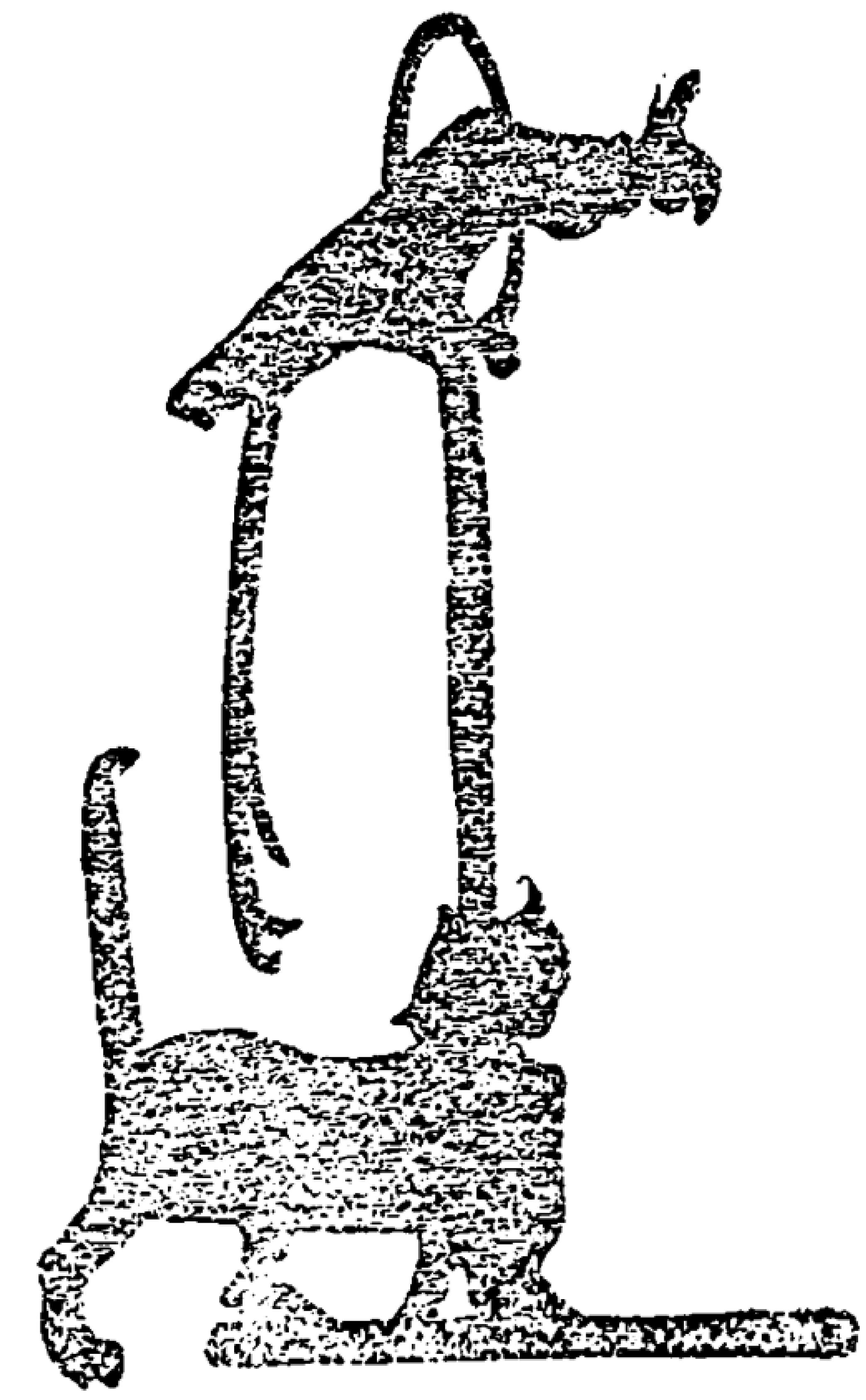
大關	戸籍
關脇	奥樣
小結	月經帶
前頭	食卓、西洋食器
前頭	寢臺
前頭	懷中電燈
前頭	ストーブ
前頭	カーテン
前頭	石鹸入
前頭	萬年筆

頭取

トランク　郵便受
書架　ドア
椅子　テーブル
ソファ　油繪
オルガン　ハンモック

世話人

玄關　呼りん
帽子掛　ステッキ立
洋服掛　エレベーター
パラソル　空氣草履
靴　ごみ溜



一高紀念祭を見る記

森江つゆ子

金曜は魔日、おまけに雨降りでせう、と云つて今日は紀念祭の日ですもの、見逃せるものですか、行かうか、止さうかの間に立つて胸中の議論いつ止むべしとも分かぬ間に、少し空が明るく成つたので、もとより行き度いの一點張だつた心が美事凱歌を奏して仕舞たそれ娘子軍の將たるや雨中の行軍も又一興と、お召の着物に揃ひのコート着て行けない悲觀なんか隱して、澁り切つてる美いさんまで引張り出して十一時半家を出る。總勢四人。

四谷から電車に乘る。春日町は一杯の人、三臺目でやつと車内に押し込まれる、雨降りの故か一高に行くらしい人はほんの四五人、此の分なら樂に見物して來られやうと思ふまもなく、

本郷三丁目――三丁目ッ。おや〱忙がしい事、美いさん、みいさん、下車りるのよ、お優さん大丈夫？

通りへ出ると流石に三々五々打ち連れて、行くらしい人が目に着く。此分ぢや又込むんだらう。三郎さん年數靴で近所構はず泥土をピチャン〱て大股に歩くお優さんはね上げられて大弱り。

『あら酷いわ三郎さん、こんな處にまで‥‥』恨めし氣に半ゴートの裾の邊りを見返る。もつと温順しく歩けだの、靜かになさいだの怒られて今度は三郎さんが閉口してる。

『ひどいなア、これだから女と歩くのは嫌だつてんだ』

何方が嫌だか知れや仕ない、黒毛布巻きつけたやうなマントに、庇が落ちかゝつた帽子、外聞が惡くて困りますのよ、はあお優さんの從弟なんですの。

石疊の上をカラ〱バタリ〱、足駄と靴の音が入れ交つて響く、取り止め無い想像話の中に一高に着きました。今しも門から出て來る山高の紳士。

『先生、稻見先生』やつと氣がついて莞爾と御會釋遊

ばす…人込みに紛れて其の儘に成つて仕舞つた。
半身像の處に立つてるホワイト、ツーライン兩名、ふと此方を見る、『あら…』馳せ寄て「一彥樣、進樣！」
「あゝつゆさんか…」等しくほゝゑんで。
目を移して後に續く三人に、
「やあ三郎さん、お優さん、よく來ましたね、出嫌ひな美津さんまで、中々盛だな」
「おや、歡迎して下さるの、冷かしてらつしやるの、一體何方？」
「なに大に歡迎してるんさ、今日は進君と二人甘んじて君のガイドに成つた一事でも知れるでせう？」
「まあ御挨拶ね」アハヽホヽヽの笑ひ聲賑かに、いよいよ向陵健兒のお腕前拜見にと罷り入る。
矢張込むで居りますのね、ともすれば放れ勝ちに成るので一彥樣眞先に、進樣其の後から私の手を確と握て人波搔き分けながら一々說明して下さる、私の後は美いさん、お優さん。三さんは殿り、珠數つなぎに見物して廻る。
流石お職掌柄丈に工科は電氣應用のが一番多い、ベニスの夜、池畔の夕、ロンドンのタワーブレッヂ、蜃氣樓、靜中動ありなど目に殘りました。が、まあ大同小異ですのね、振つてるのは確かL(？)工科なんかそれこそ此寒いのにメリヤス一つで、遣り損はないやうにと心を配つて居るのに、何も無いガランとした部屋の中に床上に板切で一つの歌が書き並べてあるばかり生徒なんか何處かへ行つちまつて一人も居りませんの、茶かされた樣でしたわ。茶かしてるつて云へば、暗闇の中からヒヨツトコのお面なんか出されてびつくり仕てよ、あんまりですわねえ、三さんてば男の癖にわつて飛び退くんですもの、大笑ひでしたわ。鏡を置いたのも見えました。でもお面程驚きませんでしたことよ。
題は忘れましたが、…白馬嘶くつて書いた紙の下に、櫻木に駒を繫いだ一室、あれ、一番々々氣に入りましてよ、如何にもゆつたりして懷かしう思はれますすね嘶りはあんまりね心持が惡うございましたわ、靡利劍、少々危險なや無かつたでせうか、アメリカンが見物仕たら如何ならむと一寸心配も仕た次第。
氣がきいて居たのは、芭蕉の俳句に因んだのや有友自遠方來の詩句に因んだのでした。布團二つの間にお茶、お菓子、煙草盆、淡泊な道具立がすつかり氣に入りました。一高時代の享樂主義、江知勝はよござんした

わ。

渇かば我に來れとてホーリーバイブルを左手に、眞正面に大きな酒樽。對照がよいぢや御座いませんか、隨分皮肉つてますのね。覺醒せよなんて呑み明けたビール瓶や目覺時計、向陵遂に千鼠のものならずは少し苦しいもぢり方ね。

一人の寮生が屈んで何か仕て居る。一樣肩越しに覗いて、

「ずるいぞおいつ」驚いて身を引く途端、名刺受箱に目を注ぐと、あらまあ——、訪問人の名刺を裏がへして、伯爵大隈重信、新渡戸稻造、尾上菊五郎なんて書いてるの、ぢや先刻に文科にあつた北原白秋、與謝野晶子なんかも矢張此の類だつたのね、心憎き仕業かな

私すつかり欺されちやつてよ。

「春本萬龍なんて名刺出しとくと面白いわね」つてお優さんに囁いたら、後に居た角帽四人、聞きつけて笑ひ出すんですもの。進樣正面から來たお友達に

「おい如何した？」つて聲お掛け遊ばす、

「うゝん……」なんて妙な返事仕ながら室に躍り込むでピシヤンと戶を閉めて仕舞ふ。見ると貼紙がして、

「寮生の外入るべからず」其の脇におほゝゝゝゝ。

「開かば叩かれむ」ですつて、振つてるわね、思ひきり笑つちやつた。

入口出口悉く、寮歌と繪葉書賣る寮生で固められてる。寮歌召しませ繪葉書も　の優しい賣人ならで何れも破袴弊帽の御輩が蠻聲張り上げて、

「おい君、買つて呉れませんかッ」ぢやあ内氣な方なんか近寄れませんわねえ。は？私？　えゝ買はせられましてよ、歌集二つ、繪葉書は七組。

一先づ切り上げて大學生の寄附に成る樂隊を聞きながら、汚れた椅子に腰を下す。

「あゝ、疲れちやつた」つてお優さん大きな聲を出すんですもの、美さんの方が反つて極り惡がつて眞紅に成つてますのよ。

「おいビール取らうか」つて一樣、

「およし遊ばせよ、そんな物——」つて言へば、

「お汁粉がいゝわ」つてお優さんが云ふ。

「あら……お汁粉？」美さんが不平顏——。

とゞの詰りは三郎さんの、

「ぢやあ壽司と兩方取りやいゝぢや無いか」でお汁粉をとつて、それからお壽司と衆議一決。御椀が六つ運ばれました。

「何室一番氣に入つたの？」一様に問はれて三郎さん
「僕ァ最後の勝利が一番いゝと思つた」
「まあ嫌、あんな氣味の惡いもの……」優さん不賛成。
「それよりか私ペングインのが宜かつたわ」つていふ。
「ペングイン？あんな暗くてよく分りましたね」
「えゝ進樣に教へて頂いたの……」
「私ねえ……」つて美さんが、「あの題がよく分ら無かつたけれど、ほらあの大きな一高の帽子と下駄があつた室



ねえ、あの隣室に神話めいた飾り付けがあつたでせう、あれ好きよ」ふと思ひ出して、
「さう〳〵、彼室眞實に宜かつてね」うつとりと微笑めば、進樣も御點頭遊ばす。一樣も莞爾遊ばして、
「大抵の人は氣に入つた樣でしたよ。つゆ樣は宜いと思つたの彼丈？」
「いゝえ他にも澤山御座いますの、あの少年の春の墓ね、私別に宜いとは思ひませんでしたけれど、たゞ此處にもあんな念があるのかと思ひましたわ、嬉しい樣な悲しい樣な氣が

仕て仕方が御座いませんのよ」

「やあ食つた、食つた」。皆等しく見れば、まあ、三さんの前に空の御椀が七ツ、御壽司のお皿も……。

「如何仕たんです、女の方は……？」一様三人の顔グルリと見廻る。

「だつて、おほゝゝゝゝ」顔見合して笑ふ。いくら何でも場所がありますわねえ。ボウーーオーつて云ふ法螺貝の音を機會に、御馳走様と御箸置いて假裝行列を見に行く。

變化も何も無い僧兵計りの行列やら、雜多な者の行列やら……

革命軍の御大將、辮髪なが〳〵と繰り出すもあり、中々に面白い中に可哀想なのはペーペー力士、此寒さに丸裸にされて、筵を化粧まはしに、雨に降られながら行列の中に入つて、ノコ〳〵歩き廻る慘めさ。其の直ぐ後から褞袍を山と着込んだ蠻殼な寮生が、

「裸で道中成るものかア」つて大聲で皆を笑はせる。

「如何？、隨分凄まじいでせう？」肩を叩かれて振向くと、進様が後に立つておいで遊ばす。

「まつたく、風邪でも引いたら如何なさるんでせう？」

「なアに、風なんか引くもんですか」ですつて。

行列を見る爲雪崩れを打つて來る人に妨げられて、パラ〳〵に成つて仕舞つた。進様、

「歸りは送つて上げるから心配仕ないで居らつしやい」つて仰しやりながらズン〳〵運動場の方へお行で遊ばす。殘した人が氣掛りながら、御後に添ふて行くテニスコート御座いませんのつて申しましたら、御愁傷様で……。憎らしい方。

「進様、如何して此頃さう御口惡にお成り遊ばしたの」恨み顔の私を、振り返つて凝と見詰めて、

「どう仕てつて言つたつて。つゆさん！　僕ア僕ア頃日酒も呑むんですよ」太い息をホッと一つ……。

「此處に」と病室を見上げて、「今日でも出られ無い様な患者が居るんです、僕は代つて遣り度い、身體ばかり健全だつて何に成る!?」御目には涙が一ぱい。

進様、貴女ばかりぢや御座いませせぬ。私の、私の胸だつて……けれど口に出して言へない。言へば此胸は和むでせうけれど――。

見て面白き世の中に、聞て悲しき人の上あり。離れ離れに泣きませう、おゝ進様――。

遙かに見える上野の森、しゞまな晝の攝生室の下に立つた儘、ハラ〳〵と泣きました。

目早く見つけて、つと寄り樣肩に兩手を……

「つゆさん、何が悲しいの？　え？　何故泣くの？　許して呉れ給へ、君の心はよく分つてる、もう何も言はぬから……」目を閉ぢてお仕舞ひ遊ばした。

人の近づく氣色に、ハンケチを袂に、さ、まゐりませう、と促す折しも現出た人。

「やあ此處に居たの？探してたんだよ、でもあの二人はね、きつともう露樣は歸つちまつたんだらうつて、今しがた歸りましたよ、僕は檄を見落したから見に戻つたの」三郎さんを先に一彦樣も行らつしやる。

二人の打ち解け無い顔見て不審氣に

「また議論でもやつたんだらう、つゆさん相變らず詩の國に舞つてるんですね、進さんと二人を放心放ぽり出しとくと、何時も詩歌論で果しが無いんだからなア」

二人は苦笑ひする他無かつたのでした。ア丶ハムレツトやオセロを熱心に伺つたり、テニソンのエノックアーデンを小聲で美しう歌つて下すつて、果は二人とも涙零して笑ひ出したりした昔が沁々忍ばれて、戀しう御座います、わ！

變りましたわね進樣！　時は何故斯う總てを運び去るんでせう!?

檄も見ました。

「まだ見度い處がありますか？」つて一彦樣、

「萬年床、萬年床ッ」つて三さんが嬉しさうに叫ぶ。

思はず三人とも莞爾する。

「ぢや行かう。然し、つゆさんは如何？」

「え丶結構……」

「こりや手嚴しいな」、笑ひながら先にお立ち遊ばす。

荒男子の中に唯一人、紫矢がすりの絲織に今樣浮出模樣の緋博多の丸帶、コロネーションに結び上げた髮には柏葉の造り物を添つて、お納戸カシミヤの全身コートを手に持ちながら、寢室さして行く姿を皆目を聳て丶見る。三さんまでが氣が付いて、

「つゆ子樣、貴姉と歩くと注意人物みたいで閉口だ」ですつて、一樣つてば微笑みながら振向いて、

「實際今日は素敵だ、實にい丶、僕ア始め誰かと思つた」

「いやよ——、貴兄まで……」。そつと進樣の御顔見ると、憂はし氣に下向いた儘一段と力入れてゐらつしやる。

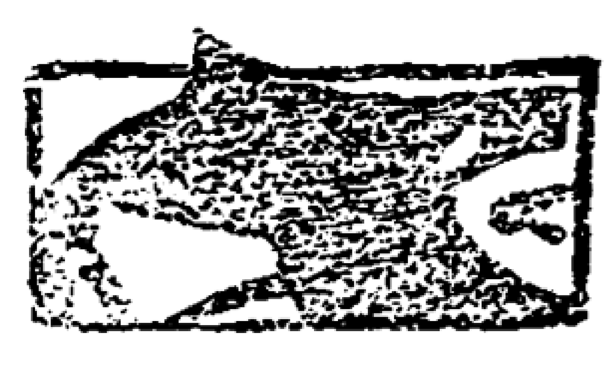
「さあ——」一樣が寢室の入口開けて見せて下さる。

途端、眞紅な大達摩が飛び出す、「あれ」思はず聲が出

ちやつた。一樣笑ひながら、晩に一高出身の帝大生と寮生との親睦會の時、餘興に使ふんですつて仰る。
名に背かでずらりと並べた萬年床、枕元には蠟燭臺スバル、三田文學、端唄集、聖書、新渡戸博士の修養
「よう視學官ッ――」どつと囃されてびつくり、振向くと、五六人も戸口へ詰めかけてる。
「あら、御免遊ばせッ」眞紅に成つて逃げ出す袂摑むで、名刺置いてけつて如何しても聞きませんの、持つて參りませんからと言張つて、漸く關所を切り拔けるとある寢室の入口へ、ボロ靴が重なり合つて脫いである。其上へ『靴を持ち去るべからず』だつて
「こんな靴賴まれたつて持てけ無いわ」放心云ふと、
「いや御令孃、御手柔かに願ひます」つて三郎さん。ほゝゝ前に申し上げた通り三さんの靴大ボロなんですのよ。
ライブラリーの側も通つた、もう此れで心殘りは御座いませぬ。懷しい時計臺におさらばを告げて、校門を後に三丁目迄送つて頂く、時雨亭は皆樣のお贔負の由江戸川行きが來たので、三さんと二人車中の人と成りました。

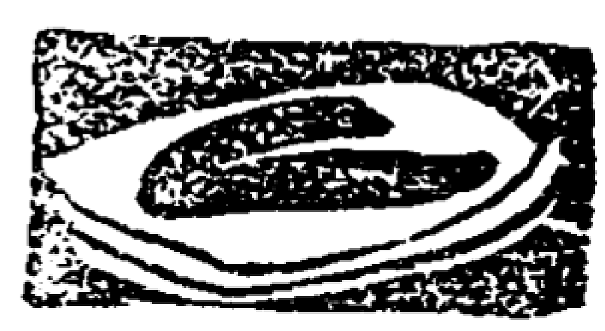
『平家の人々』を讀む

『平家物語』は多くの人が少年時代から讀み熟れてゐる本で、熟れた書物と云ふものは、其割に價値を低く見て了ふが、能く考へて見ると我邦の小說、劇、詩歌の類に到るまで、『平家物語』以後の文學が、『平家物語』の恩惠を受けてゐることは何の位廣く且深いか知れない。それだけ此書には、文學界のオーソリチーたる素質があるので、自分は單に『平家物語』を文範とのみして見たくない、此書の文章は良いは良いに違ひないが、現下に於て文範とするべく、既に型が舊いのである。寧ろ『平家物語』に表はれたる悲劇的要素の方を、今の文壇に於ても重く見て貰ひたい。高須梅溪氏は果して此邊に着目したものであらう、文章に囚はれざる『平家物語』とも云ふべき『平家の人々』よ、氏の手に據りて著はされた。この復活したる『平家物語』は氏が多くの時日を費したる勞作の結果だけに、氏が多くの述作中最も藝術的の香が高い、日本のロマンチックを其まゝ傳へるのでなく、斯う云ふ意味の復活は最も現代の文壇に適當なる事業だと思ふ。（茗）



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉



○直接拙者へ御質疑下されて未だ返事を御受取にならぬ諸子へ、城西妙子さんよりの御手紙によれば、昨年十月頃郵券封入の上直接私宅宛にて御質問下さつたのに、今日まで何の返事も御受取りにならぬとのこと、私としては實に案外で、つとめて忠實に御返事申上げて居るつもりですが、何分多忙な身の上なるに加へて、諸方面の方々よりの御手紙や御葉書も少くなく、殊に屢々旅行致して留守の日も多いので、時に或は妙子樣に對するやうな思はぬ御無禮を致すこともないとも申されませんが妙子さんには誠に申譯ないことを致しました、で今度の御手紙に御住所御姓名が御明記されてあつたなら、直ぐと御詫の書面を差上ぐる處ですが、今度こそは必ず御答申上げますから改めて御質問下さいまし、右樣の次第故、斯の如きの御無禮をわれ知らず犯して居るのは恐らく妙子さん御一人とも限らないかも圖られません、若し他にも同樣の御方がございましたら、其旨何卒仰せ越しゞ願ひます。

問 漂白劑とか申すものを飲みますと、身體が白くなるとも云ひますが實際でせうか、又それを飲みましても害にはならんでせうか、而して先生に御調製願はれますまいか(岡山、詩美惠)

答 漂白劑と申せば過酸化水素水のことでせう、それは外用劑で内服藥ではなく、これを飲んでは大變です、外用白色劑としては、効能ありますけれど、眉毛や生際に少しでも御つけになると毛色まで脫白させますから、これを御使用なさるには甚大の注意を要します。

問 私はのぼせ性で顔が赤くて困ります、直す法はございますまいか、又四月號に色を白くするのに白檀、密陀僧など御書きになりましたが、あれは藥屋に賣つて居りますか(愛讀女)

答 のぼせの爲め顔の赤いのは、むしろ醫師について其のぼせを直して頂いた方が捷徑です白檀、密陀僧等は藥店にあります。

問 頭に腫物が出來て禿となつたものは、脫毛して禿たものと同じ處置をして發毛致すものでせうか(石川縣、さよ子)

答 出來た腫物の性質によつて異同がありますから、御尋ねの文意だけでは可否を申上げることは出來ません。

問 (一)身體に無害で、而して一時的でない脫毛劑は何がよいでせうか、又腋の下に毛の生えるのは何人も普通のことでせうか、(二)疳の性で筆などを持ちますと手や首筋のつるのを直す法を、(三)輕き近視眼ですが、電燈のもとなどで手許のよく見える法を(本所の愛讀者)

答 (一)藥劑で確實に永久脫毛さすといふのは雄黃劑、即ちトルコルスマに優るものはありませんが、併しこれは猛烈なる毒素ですから、電氣分解法を應用なさるが安全です、而して腋の下に發生するは無論普通のことです、(二)催眠術の治療を受けて御覽なさい、(三)醫師の治療を御受けになるより致方ありますまい。

問 化粧問答に投書致しますのに葉書ではいけませんか(山口、梅香)

答 差支ありません。

問 私は二十歲になりますが三四年前からニキビでない細かい吹出物が顔に出まして其あとがなかなかとれません、又脂肪が多い故でせうか、顔がいかつて白粉をつけましても直ぐる崩れて了ひます、何かこれを直す方法を猶顔の色を白くするに比較的効果のあるものを御教へ下さいませ(洛中、夕月女)

答 氣永に[illegible]肌劑を一日二三回づつ御つけになれば其痕もとれ、白粉のもちもよくなります又色を白くする外用劑としては、ペトロリームがよいでせう。

問 (一)年十九歲ですが、肥つて困ります痩せる法はありませんでせうか、(二)又常にのぼせて顔が赤くほてり、白粉をつけましても肌理があらくて、直ぐむらくになります、多

血性ゆゑ此樣にのぼせるのでせうか、肌理を細かく美膚となる法はございますまいか（京都、露子）

答（一）精しくは田村化三郎氏著（肥える法瘦せる法）と題する本を御覽なさい、（二）のぼせて顏のほてるのは醫師について御聞きを願ひます、肌理を細かく美膚となるには、文壇社からコールドクリームと艶肌劑とを御求めになつてそれを法の如く御つけなさい。

問（一）四五年前から顏におできが發生致し、その上にエボのやうなものまでが顏一面にできますので美顏水をつけて居りますが効能がありません、何か早く直ります藥を（二）顏や頸の黑いのは何をつけたらよいでせうか、（三）姉妹劑は何處へ申込んだら送つて下さいませうか（荏原のみつ子）

答（一）おできとかエボのやうなものとかだけでは正確に御答する譯に參りません、御序の節に拙宅まで御出下さい、一應拜見した上で申上げませう、（二）コールドクリームと艶肌劑を御つけなさい、（三）女子文壇社へ規定の代價を御拂込みになればお送り致す筈です。

問 顏から脊中までニキビが出來て、一向に直りません、早く治する方法を（尾張、ニキビ女）

答 神田旅籠町文光堂からニキビ劑を求めて御つけなさい。

問（一）襟に長い毛が濃く生えますが、剃れば尙濃くなりますから、藥か何かで拔いたら如何なものでせうか、（二）頭髮が縮れて居る上に、先が割れて居ります、これが療法を（久枝）

答（一）脱毛劑で御ぬきになつたらよいでせう、脱毛劑としては硫化バリウム二匁五分、タルク、澱粉各三匁五分、石鹼五分、ベンツアルデヒード二匁をよく混和して、この混和劑一に對し三倍の水を加へ、それを塗布して五分間程したら海綿で洗ひ落すのが比較的無害で有効です、（二）重大問題で玆には答へ盡せません、精しくは拙著「新式化粧法」を御參考願ひます。

問 毛深で悲觀して居ります、何卒その療法を（川島の女）

答（久枝）さんへの（一）の答を御覽下さい。

問 白色劑としての過酸化水素水の分量を御敎へ下さいまし、又それを何時使用しても皮膚に害はございませんでせうか（下野、松）

答 一回二十滴程づつ御つけになればよいでせう、併し其人の皮膚の性質並に脂肪性と乾燥性とで增減があります、而して乾燥性の人には無害として御すゝめ致すことは出來ません。

問 先生の御敎へ下さいました脱毛劑としての藥品が當地へは皆そろつて居りませんが、先生の御手許で御こしらへ下さいますれば誠に嬉しう存じますが（淡路、百合子）

答 調製して差上げませう、直接私の宅の方へ御申越し下さい。

問（一）私は此間から艶肌劑とコールドクリームを用ひて居りますが、朝洗面の際クラブ洗粉を使ひ其後にコールドクリームを塗つて夕方入浴の後に艶肌劑を下に塗つて其上に大學おしろいを用ひて居りますが、艶肌劑を下に用ひるのとシモンクリームをおしろい下にするのと何れがよろしいでせうか。

（二）コールドクリームを夜分寢る前に塗つた方がよいでせうか、實はこの三月末まで學校に參つて居つてお化粧のことは一向存じませず、殊に生際の邊りにのみニキビが出來て居りますので、これを直し、又おしろいのノリをよく致したいと存じますが、どういふ風に姉妹劑を使ひましたらよろしいでせうか。

（三）先生の御著書中、博文館のと實業之日本社のと何れがよろしうございませうか、殊に姉妹劑の用法を示されてあるのはどちらでございますか。

（四）腰が太く、軀の割合に顏が小さいので、從つて臀部も大きく、衣類を少し長目に着ますと其部分だけが出て困る故、藤波先生に御願ひしてこれを見よくする方法を伺つて呉れと友人に依賴されましたが、何卒御力を御かし下さいませ。

（五）文壇の廣告の所に、コールドクリームはこれをお化粧なさる上によくお顏なり御手なりに云々」といふことを書いて、終りには「世のクリームのやうにお化粧下の用にはたちません」とありますが、そんなら艶肌劑をぬつておしろいをつけ其上にクリームを用ひるのでございますか。

（六）私は生際が薄くて困つて居りますが、それにはどうやら軀の秘密に屬することまで申上げねばならぬさうでございますが、如何樣なことでせうか、事柄によつては是非私にもその良劑を御わけして頂きたいのですが（山口、花ふゞき）

答　御尋ねの箇條も多く且つ長篇に渉るので實は他の方々の御質問との釣合を取る爲め、大部分を割愛さして頂かうかと思ひましたが、何れも多勢讀者諸子の質疑の叫びを代表して居らるゝ重要の意義を含んで居る故、特に一一御答へ申すことに致しました。

(一)全然間違つて居られます、第一クラブ洗粉は感心致しません、洗顔料としては寧ろオートミールとフスマを等分に合せたものを綿袋に入れて御使ひになるか、然らずんば花王石鹸で御洗ひなさい、而してコールドクリームは只ベタ／＼と顔に塗つたのみでは何の効もなく、その儘拭き取らずに置かれては却つて吹出物を發生させます、でこれを御使ひなさる場合には、先づ適量を顔に塗り、それを指頭で輕く擦りながらよく皮膚に摺り込み、クリームのカスが灰色になつたら美濃紙か半紙でよく拭き去り、その上に艶肌劑をつけるのです、又おしろい下としてはシモンクリームがよいでせうが、艶肌劑はおしろい下とはならず、お化粧下の用をなすもの、即ち皮膚地をよくするといふ役目のもので、おしろいのノビやノリには關係ないのです。

(二)コールドクリームを夜分つけて御休みになるのは無論よい方法ですが、(一)に申上げた方法により其上に艶肌劑を御つけになることを御忘れになつてはいけません、斯くして皮膚地さへよくなりますれば自然おしろいのノリもよくなり、ニキビ其他の吹出物も發生せぬやうになります。

(三)「新式化粧法」に書いてないことが「合せ鏡」にあたり、「合せ鏡」以外の研究事が「新式化粧法」にあたり致しますので、私の化粧美術を知りたいとお思召さるゝ御方なら、是非兩方共御覽下さいと申上げねばなりません姉妹劑の用法として特に明記してはありませんが、これ等の化粧法も兩方に出してあります。

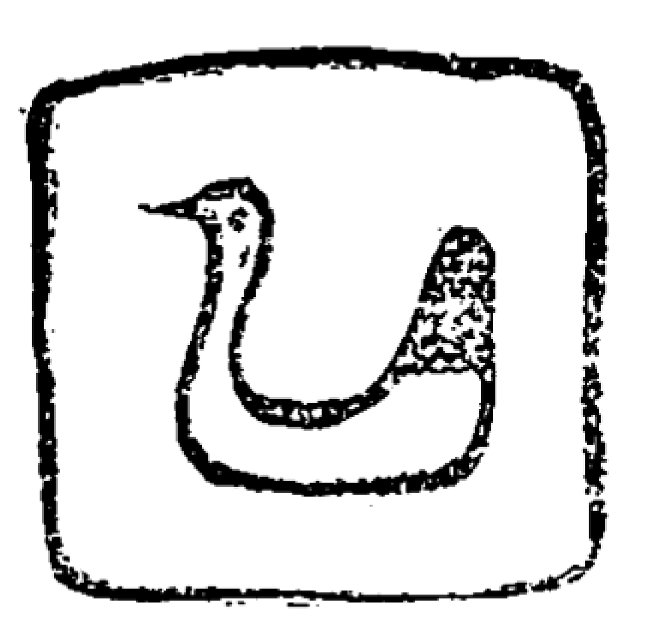
(四)の御尋は、本欄で御答の出來る程簡短な問題でありません、近き將來に於いて「美容式體育術」と題し詳細の講述を致すつもりですから、それを御覽願ひます。

(五)お化粧なさる上にの上は、前にといふ意。御化粧下とはおしろい下の意、茲には世人がおしろい下もお化粧下も同一に心得て居らるるに因みお化粧下と申したので、艶肌劑をぬつておしろいをつけ云々は(一)の答にて御わかりのことゝ存じます。

(六)其人の體質及び其原因にして解りさへすれば必ずしも其上に、何も秘密に屬することを御伺ひするともありませぬが、場合によつては、どうしても其所まで御尋ねせぬと原因の分明せぬこともありますので、それで豫めそれ等のことまでも御答へ下さる御心組で居て下さらんと適劑を量定することが出來ぬからです、而して其所謂秘密とは實を云ふと萬人共通の或秘密で、殊更に秘密といふ程のことではないのですが、誌上で斯々との明言は少々憚ります。

問　或醫者に聞きましたら、毛を生やす藥を調合するに、體の秘密も何も尋ねる必要はないとのことでしたが、先生には、どうして其必要が御ありなさるのでせうか（長門、さつき女）

答　人の考は其人の學問の深淺、實驗の厚薄によつて違ふものですから、私の見て必要とする所も他の人からは無意義とも思はれるでせう、而して之れを無意義と見るを信じ、必要と思ふを嘲けるは又これを判斷する人の智識の程度如何による所ですから、私は斯かる人と眞向きになつて議論するの愚を演じたくありません、若しその醫師の云はるゝ如くして見事生毛の實結を得らるゝならこれに上越す結構なとはない譯ですから、論より證據この御醫者さんに適藥を調劑して頂いたらよろしいでせう、但し私がそれを必要と致すは、私一個の私見から割出したのではなく化粧學者は勿論、先輩大醫の著書にもこれを必要と致へてあり、且つ自身にも乏しいながら實驗して居るからのことです、今その一例として水戸の名醫本間棗軒先生の大著「活物窮理瘍科秘錄」の一節を引證致しませう「虛證ならば神應養神丹を與へ、車軸の油を塗るべし紫雲も亦用ふべし實證ならば亂刺して血を去り紫雲を塗り防風通聖散を與ふべし此二法にて癒えざるものは難治とす多房失精にて毛髪禿落するは桂枝加龍骨牡蠣湯に宜し」即ち脫毛の原因によつて深く與藥の方劑を異にして居ります而も其御醫者樣は其必要なしと猶も斷言なさるでせうか、のびる程土に手をつく柳もあるに、のび過ぎて人にふまるゝ總柳、自分ながら無學の身より辛きことを切々と感じます。



臨時の誌友會

吉田夕草

時は去る二月十三日。四五日續いた好天氣でもうすつかり春らしく暖かくなつた。廻章は二日前から使に持たせて廻してある「來る十三日午前十時から當別莊で梅見かたぐ文學の話でも致したいと思ふので何もおかまいは出來ないがお茸を差し上げたいから是非何か文學の話なり本なりを用意して?」と言ふ意味で……

さていよく十三日となつた。會場は程近い私方の別莊。小さい併し風流な板橋を渡つてすぐ向ふ。待合を、下の西洋室に當てた硝子障子越しに五景の一なる松島が見える直ぐ眸の下は臼杵川の澄みきつた流れ!少し左手に離れて底さへ知れぬといふ大淵がある、何丈とも知れぬ斷崖の上には老松鬱蒼と茂つて、動かぬ樣な水の面には松ケ枝がら隱見する松島神社の得も言はれぬ影がうつゝて居る!!!

二階の、十二疊と十八疊の二間を今日の席に當てた。正面の床に、梅と水仙(私の活けた古流)が生けられて在る。少し下手に、本宅から持つて來た大發音機と、お琴が置かれて、其のすぐ側の小さい机に、私の手許にありとあらゆる文學雜誌が數十冊。時は正に九時三十八分。追ひく定刻になると思つて居ると、玄關に足音下婢が私を呼ぶので行つて見ると、溝部茂代さん?

其の内に、一人來る、二人來る。神ならぬ身の知る由もなき人々「大變よく梅が咲き揃つてますね、今日は有がたう」と……數人の缺席者があつて總てゞ十一人。短歌を作る人が四五人に詩を作るのが私一人、他は單に文學好きと言ふにすぎないけれど小よりして大は成る!私の友人と言ふのが六七人其他は餘り親しくはないけれど、短歌を作り文學好きなので誌友會と言ふ心ばかりの名に對して呼んだ。それでも之れ等餘り知らぬと言つても差支ない位の人がよく親しくもない自分の宅に快よく來て呉れたと思ふ。之れが今後盛大になる動機ではあるまいかと思ふと、たまらなく嬉しく、自然獨りではゝ笑まるゝ。誰言ふとなしに「女子文壇く」と言ふ聲が幽かにチョイく聞える!!!

ゴタくの中に各自の席が定つた。人數の少ない割に間が廣くて、何だか物足りない。第一に私が蓄音機で「君が代」をする。其まゝ席を替へて「寳は梅見は第二で第一が女子文壇の誌友會を開かうと思つて——併し初めから誌友會等とふれては誰も來て呉れまいから此樣な事をして何卒かあしからず、そして御自由に何なりと御氣にむいた事をしてゆつくり遊んで呉れ」と簡單に開會の辭は、そこくにして走る樣に席についた。皆「あらく」と顏見合せて居る。幹事が私一人なので大變忙がしい本宅から來た給仕の下婢に、茶と菓子を運ばせる。それから思ひくの話になる。大分して餘興にならうとすると膳が運ばれる。——主なる餘興

等曲七草(山田流)私　今日は?(話)　木部
同雲に棧(生田流)溝邊　須磨の曲(獨唱)　私
心のまゝを(話)足立　小野の山(二絃琴)汀藤
無藝(落語)　油野　蓄音機　數十枚
誌友會に付き私の願ひ(話)　私

其の他色々暇なく次ぎくに出演する其の内にも私は、集つた皆の腦裡に「女子文壇誌友會」なるものを深く刻み込まうと、一方ならぬ腐心した。

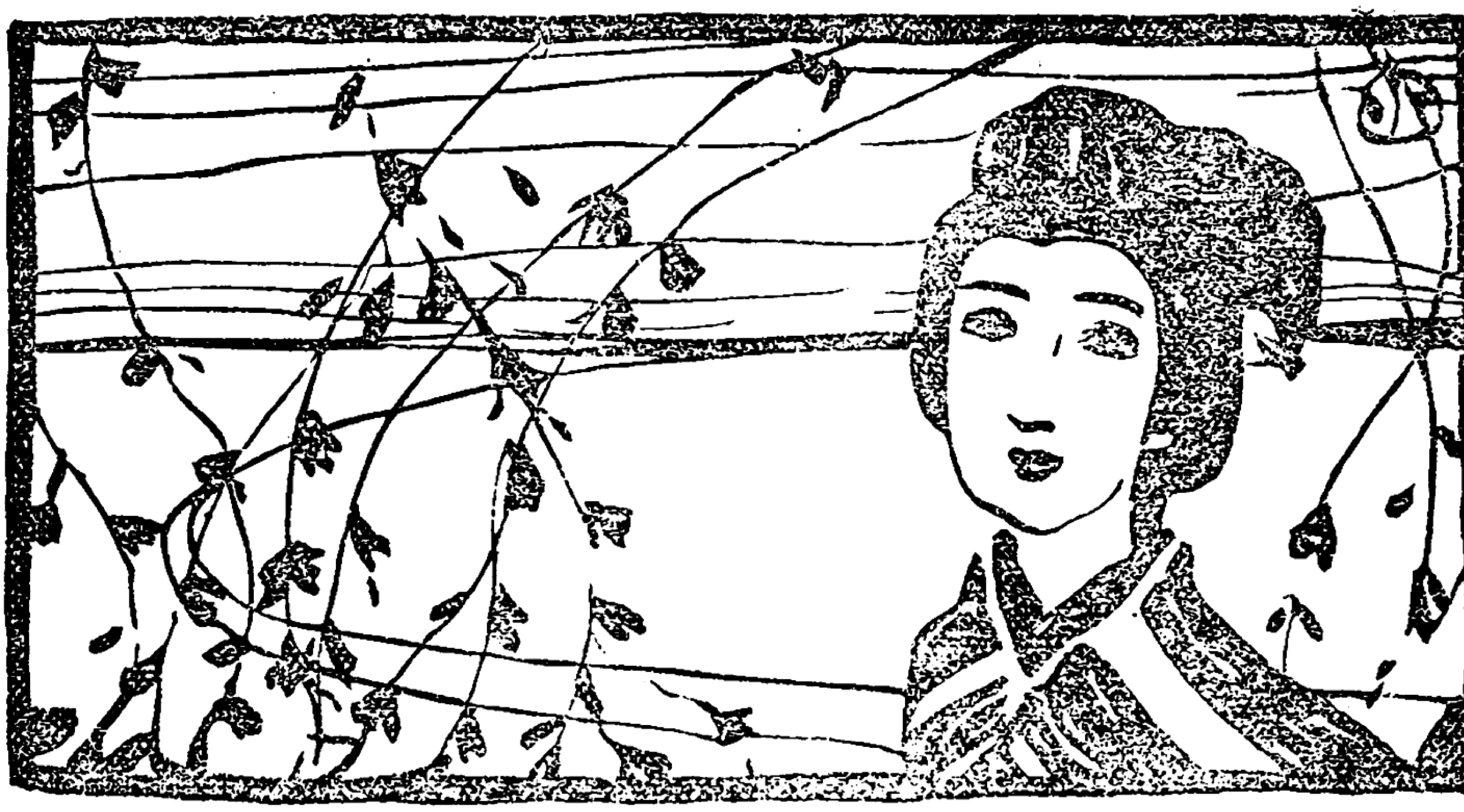
皆が今日の此の會合をよろこぶ事は、大方でなかつた。そして思ひくに私に禮を言ふ。今度皆樣と共力して盛大な誌友會を開きたいと言ひつゝ、一同の顏から前の膳に目を注ぐ。滿足の意全面にあふれて會はまだ盛なれど如何にせん、膳の皿や椀には、もう殘るものどれ程もないものを?……

時は早、五時過る事十五分、電燈は双つの室にあかくとついて、皆樣のお顏が一入美くしく見える。下婢が「お元さん本宅から電話で御座いますと手をつく。行つて見ると「もう後かたづけに人をやつてもいゝかとの事、いゝえ今からこそ花が咲くのですもの」と言へば、「まあずゐ分……」とやさしい嫂樣のお聲……

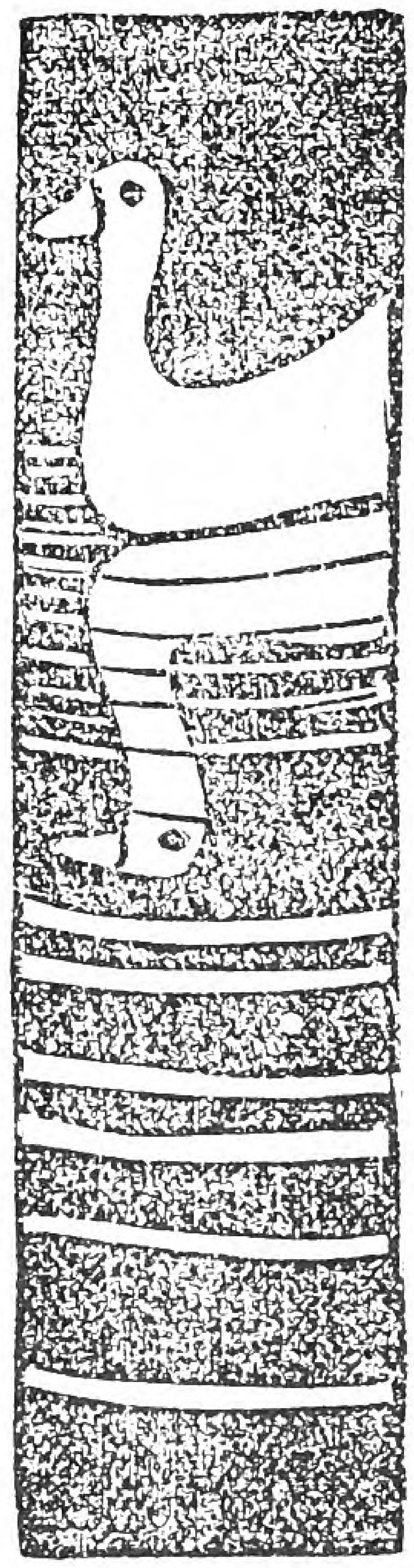
席へ歸つて見ると、皆がどやくしかけてゐる。少し相談があるのでと、一寸まつて貰つて今度は第二回の、本調子の誌友會を是非開きたいからと定めた。油野さんが幹事の一人は是非私に賴みたいと言ふ。よろしい請合つたと快よく承知した。そして福引になると又大變、にぎやかになつた。

餘りおそくなつてもと散會したのは六時少し過ぎ、うす暖かい春の風は、花の樣な歸りゆく美くしい、諸孃の後をなぶる。梅の花が散る、板橋の音、下を行く水、何ていゝコントラストだらうと獨り叫んだ。

あとの始末は、下男と下婢の三人に任せて。皆の歸り行く後から私も家路へついた。巷の薄暮のにほひは、何となしに若き心をそゝりたて大柄なお召の矢絣の着物と羽織は、自分ながら嬉しかつた。



誌友欄



小說

○天網島

水野葉舟選

横濱市　島田京子

總見の日だつた、清子は東のうづらで餘念なく舞臺面を眺めてゐた。

中幕は河庄で驪て中程を演つてゐた、丁度紙治がくやしさの餘り、小春と取り交した起證文を惜しさうに懐から出して、孫右衛門に渡す縁切の件である。

「……月の始に一枚宛取り交したこの起證——都合合せて二十九枚……」と切つて、小春を睨んで、「三年この方、よくもよくも騙しくさつたナ」と、臺詞の末が慄える、孫右衛門はその起證文を受取つて見て、「血つ……血がついとる、汚ないやないか……」

「滅相な——女子からそれを貰ふになか〳〵の事でおまへんがなア」と、勿體句調の大阪風で言ふ。

小春は默つたまゝ、左の胸へ手を當てゝ、さめ〴〵と泣いてる、うつりの良い赤い襟や、意氣な帶、水々しい髪の嫋々した姿が清子の目へ深く〳〵沁みて、犇と心を責めた。

小春はおさんからの餘儀無い賴みに自分の燃ゆる戀を犧牲にして、かくまでも誠をつくす心の中を太く同情して清子は知らず知らず、劇の人になつてしまつた、孫右衛門は小春の懐からおさんの手紙を見つけて、初めて小春の心中を想つて、

「小春さまへ、紙屋のさんより——この手紙は——」と、小春をしげ〳〵と見入つて、

「小春どの忝じけない——」と片手で小春を拜む工合は得も言はれぬ程情がうつゝて、いつか清子の目には熱い涙が滲み出て、胸は潮の如にこみ上げる。

殷賑な所で物をふと感じると、孤獨より以上の寂寥を感じる慣である、清子も等しく、自分の境遇の似よつてゐるのに引き較べて、小春の情に魅せられて了つたので、何かにつけて追懐するのは男の事である。

別れてから今頃は何處を彷徨つてゐられるであらう——今でも自分を以前のやうに想つてゝ呉れるであら

うか？　萬更忘れ切りはすまいければ——現に自分を見捨て行つたのを、自分はどうして這麼に未練なんだらうと、身を思つては嘲つ、そして幾度か虚心平氣に返らう、念頭から放さうと強ひたけれど想は募る許りであつた、遂に愚痴が昂じて愁を感ずるやうになる、あんな卑しい稼業柄にも似ず、男に操と誠とを盡す小春をいぢらしく思つた。

「清さん、何故そんなに鬱いでゐるの」と、伯母が見兼ねて何氣なく注意する。

「いゝえ、妾何んにも——」と、紛らはして、尚綿密に所作を見てた。

「兄はん、あたい、あいつに一言言ひ殘した事がありますので、ほんの鳥渡——鳥渡逢はしてお呉れやす」



（地賞）ねざめ　宇都宮　松井綠子

と花道で治兵衞が拗ねる、そして小春の心變りを太かに蹴つて責めるのであつた。其の時は清子の心は治兵衞であつた。軈て××丈へと筆太に書いた幕が引かれて、囃子方の調べが急になる。小春の泣き沈んだ痛々し氣な姿と、あせつた治兵衞の顏とが、まざまざと幕へ浮んでゐるやうだ。

「小春と治兵衞はあれから奈何なるの」と、清子は聞く、「兩人で網島で心中するのさ」と伯母は答へた。

「さう、幸福だわね」とつぶやいた、兩人で美しい戀を全うしたまゝで永久に葬られるのが羨しかつた。

幕の中は男の事ばかり思つてゐた。

男が自分に一言も語らずに、家出をした當時の有樣を記憶から呼び返してみた。

大切は日高川の人形振りであつた。

「安珍さまゐのう――安珍さまゐ喃う」とやるせない川端で男の名を頻りに呼ぶのも清子に想を增さしむる原であつた。

清姫が遂に日高川へ身を投じて忽ち丈餘の蛇に化して宙乘すると、青や赤い花火か一面に火を吹いて、極彩色の裡に幕になつた。

清子と伯母の連中は合羽を着て茶屋口から出た。

白い絹糸の縺るゝ如な雨が颯々と傘を搏つ。

「伯母さん、寒いわね」と寄り添つて步いた。

途中まで來て振返ると、小屋の窓から流れ出る淡い光が雨を縫つて、小春の戀と、清姫の戀と、自分の戀とを呪ふやうに見えた。（天賞）



○朝湯

横濱　月草女

此の單調な何の變化もない大阪の片田舍に來てから毎朝浴湯に行くと云ふ事が、私には一番樂しかつた。

トップリと透き通つた湯につかつた後で大きな鏡の前に坐つて淡いお化粧を濟すと其顔から襟から漏れる微かな白粉の香が鼻に柔かく浸入つて何とも云はれない感じがする、手拭を口に咬へ乍ら黒塗りの後丸を突掛けて戸を開けると、ソーッと柔かい春の風が頬を撫でて行く。

淡藍色の地に『玉の湯』と大きく白で染め拔いて、其下にところ〴〵鳶色に散らした菱形の中に「新地小力」「大とみ席歌子」等と書いた、のれんを、ついと屈る時何時も私に父から聞かされた實母の若い昔を偲ばずには居られなかつた…………。

淺草代地の二と下らない縮緬問屋の總領娘に生れたお濱は何時も無邪氣なく美しかつた。

細おもての色は寧ろ青白い方で、うつとりさした、頬紅の際だつた姿に其頃流行つた荒い黄八丈の襟の掛かつた着物に淺みどり　赤の匹田にしぼつた帶を締め

て、胸に紫の舞扇をはさみながら毎日山谷のお師匠さんまで踊の稽古に通つたものだつた。

「成駒屋が好いわねえ」「あら、私い立花屋の方が好き」なんぞと芝居の噂でもする外は何の苦勞もない彼女は尚々兩親から可愛がられた。

五つ下の姉のお仲は妙にいぢけた性質の女で無論姉とは吊合はず、いつもそつと火鉢の前に坐つて許り居たお濱は又それを氣にして、

「仲ちやん、お出でなね、明日は家橘の傳兵衛だからさ」等と白元結をキリッと結んだ奴髷の根本を地烈たさうにゴシ／＼搔きながら、動かうともしない妹の手を引張る樣にした。

那麽風にして育つた彼女は踊や常盤津の文句の外は何一つ出來るものは無かつたのである。

が、仇めいた優姿は近所の若衆達もおろそかには見過さなかつた何かと少女の手から渡される結び文も多いのに、何故か「又嫌な」と眉をひそめて浮いた心は夢にも起さない樣な十七の春、不圖、水天宮の歸り



（人賞）日比谷にて　澁谷　井上もと

に堺町の角で逢つた角帽姿の學生が忘れられなかつた
無論向ふでも凝と見詰めて居た……。
今迄靜だつたお濱の胸はそれからだん〳〵ふさがつて來て時に淚なども飜す樣な女になつて終つたが娘に目のない母親の厚い情で何の苦もないやさしい望は叶へられた。
當時二十六の大學生だつた私の父は美しいお濱と一所に水天宮の古風な表門を入る時甚麼に其順調な戀を誇つたであらう。あゝ妙なる情緒のゆらめきよ！、
幾年かすぎて私と云ふものが生れてから三年の後、どうしたいさくさか知らない、母は里へ歸されて其處で未だ二十三の若い姿を思ひ死に死んで終つた……。
「まつたく奇麗だつたお前のその口がソックリだ」とお濱の事を云ふ時、屹度父は斯う云つて、
「お前は大久保のつゝじを觀に行つた日、出來た子なんだよ、だから花が好きなんだね」と昔を思出す樣な眼付をしてうつとりした。

＊　＊　＊　＊　＊

此思出がきつと、のれんを屈る私の胸にひらめく。
どう考へても母は死んだ樣には思へなかつた。
數へてみると三十八だ、そう仇なやつて姿も見られまいけれど、矢張りあの代地の何所かのお湯で細そりした撫肩の下から垂れた白い手で、
「仲の町一竹中家若吉」「江戸町初音やお俊」などと染めた、のれんをかきあげながら遠くの昔の人を思つて居るんぢやあるまいか？
頭の上で雲雀が鳴く、淡碧の空の色やはらかい春の日光がぼか〳〵と物思ひつゝ歸つて行く私の脊中を照らして呉れた。（地賞）

〇二度目

本鄉　禮枝

「松ちやん、今日の髮は馬鹿に根が上つたね」とお安は緋縮緬の長襦袢を縫ひかけた手を休めて前に坐つて新聞を讀んで居る妹の島田を、まじ〳〵と見つめ乍らそう云つた。
「そうそんなに馬鹿に上つてゝ？」と後の方から手をあげて、無造作に觸つて見たが「そうでもないわ」と自分にでもなく、姉にでもない樣な言葉を二人の間になげ出して無頓着な目を細かい新聞の字の上に、目使ひの浮々を落ちつけた。姉のお安は思ひ出したやうに

横坐りの膝の上にジトリと縫物を廣げて、二度目の婿をとる妹のことを、づら〳〵しいとも、辛からうとも思つて見て時々自分の前の光りある島田まげの上に目をちら〳〵させた。

そうしていろんなとを考へて居る内に長襦袢の襟が付いてしまつた、何日の間にか自分の頭には妹といふものが去つて姉の自分を嫁にやつて、妹に婿を取つて家をつがせた母のしうちを自然にそうならねばならぬはめになり乍ら、それでも口惜しいと思つた、お安はそんな未練腐いことを考へるきざな女ぢやないけれど、どうかするとむかつとして里に居た時分、母から女中扱ひにされて居たと許りが思ひ出されて、母がてゝに居たらしがみ付いてやり度といふ氣分になることがあつた。



田舍娘　米澤市　氷室くさ子

お安がどんなことを考へて居やうと一向知らない妹は目をはなれた新聞を二ッに疊むで、「姉さん昨日實はね見合に行つたのよ」と薄笑ひ乍ら云つて見た。

「そうどこで」とお安は驚いた樣子もない。

「やつぱり番町で」

「フームどんな人」

「そうね、どつちかと云へば野暮な方ね背だつた先の人の樣にスラリと行きやあしない、目だつて顔の割に小さいのよ」

「松つちやんおまち先の人と比べて居るの、ありやあ別物だよ、あんないい男を見付け樣てエのは、あんまり虫が好過ぎるわ」

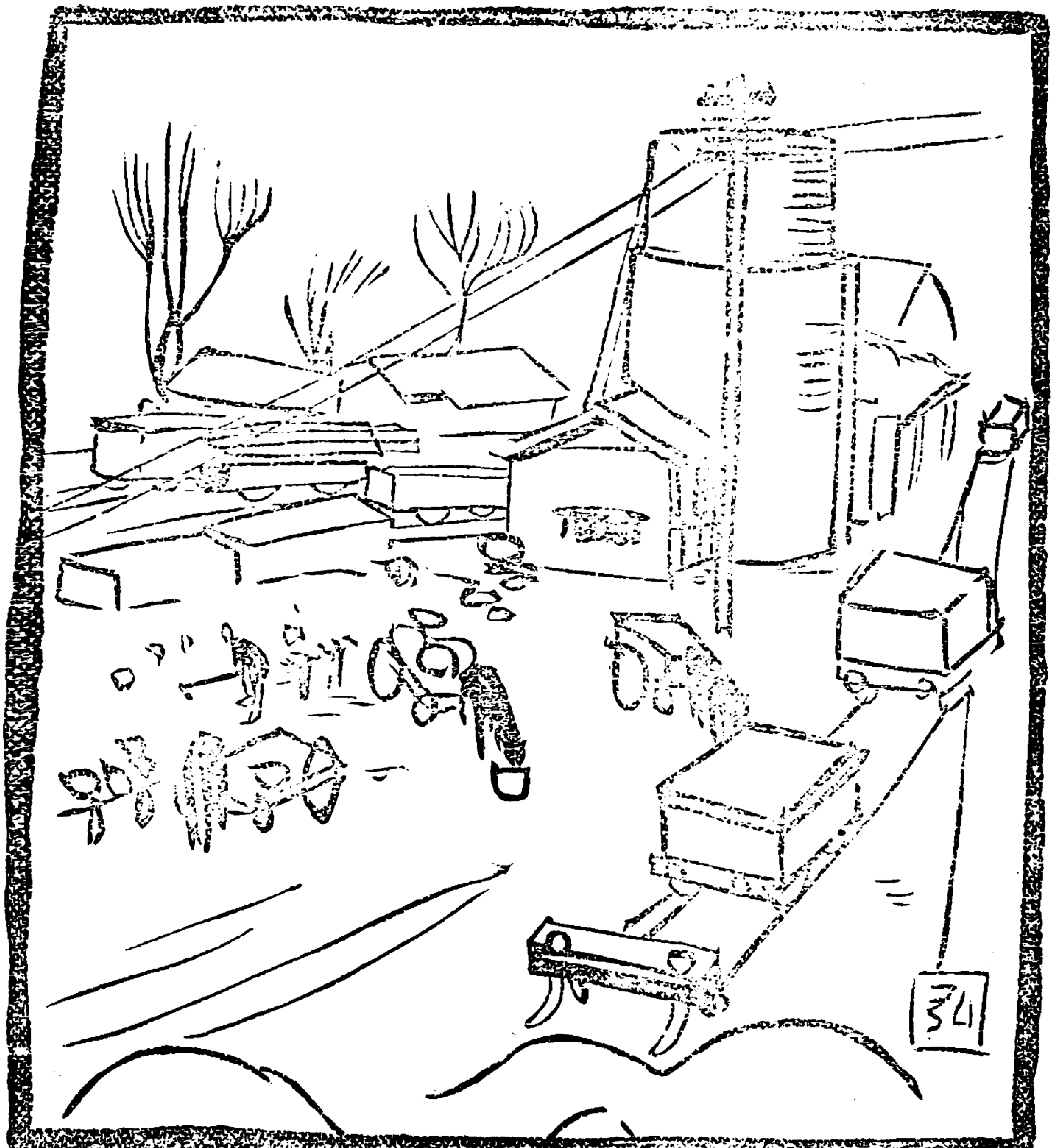
「だから見付け樣なんたあ云つちや居ませんよ」「だつ

て背が低いの目がどうのと男振り計り、氣にしてるぢやあないか」

「氣にしてるわけぢやないけれど、ね姉さんそうでせう一時間や二時間にらみ合つてた處で大きいか、小さいか、高いか低いか、位が解るのが關の山でせう」そう云つてまた新聞を引よせた。

お松は父が大工の頭梁であつて見りやあ、そうやたらな婿をとるといふ譯にも行かなかつたので、あれやこれやとしきりに選り好みをして居るといふことも知つて居ながら、店に坐つて居る大助に思をかけて居た、嚴固な父親はそれからはねつけたが、お松をかうも我まゝものに育て上げた母親がよつぽどの骨折りでたうとう父の頸筋を縦に折つて仕舞つた。けれども頭梁の後をつぐにはも少し勉强をしなくてばならぬ大助は、毎晩二階の机の前に坐つては居眠りの勉强をして居たものだつた。「オイ二階が馬鹿に靜だ見て來い」と父の癇走つた聲がかゝるとお松はトン〳〵とわざと梯子を荒くふみしめて上つて見るいつでもくんだ腕を机にささへて、しだらのない顏をなげ乘せて居るのであつた「しつかりして下さいよ、お前さん」とゆり起しては降りて來るもの丶……そうして父にも、母にも「勉强ですよ」としらを切つて居た、父や母も白を切られてだまつて居た、机の前で居眠りをする大助は總べてのことにらちのあかぬ男であつた、顏立ちの勝れて居るといふ事とすなほであるといふことの外、とりえのない色男然とした色男であつた。店の小僧等に迄も馬鹿にされて居た。何を聞いても「そうですね」と不得要領な受答をするので「そうですね」とあだなされて居た店に番頭として坐らしておいた時の大助と自分の亭主となつた大助とは、あゝも、かうもしてもらひ度いと思ふ。自分から出る欲といふものをさし引いて見てもどうしてかうまで懸隔のあつたものかと、お松自身にさへ不思議に思はれた。そうして家の爲にならないからと云つて大助の離縁を進められた時、皆さんのよろしき樣にと、斷念させた程お松にまで愛想をつかされて仕舞つた。お松は我まゝものでこそあれ、不人情の女ではなかつた、店の番頭のまゝで居たなら無事にあるべき男一匹を、しかも今は自分の良人が家の爲にならないからと云つて、追ひ出されて行くのを、人一倍氣の毒に思つた。おとなしい德で、すなほにお松が出してくれた新らしい足袋と、下駄を穿いて出て行く良人の後姿を見送つた時、今一度父に詫て見ようかとさ

へ思つた。けれど思つたゞけで云ひ出しはしなかつたその後へ番町の叔父が庄さんといふ新らしい二度目の婿を世話しようとして居るのである。
お松が、目を上げて見つめて居た姉の指先が、忙しさうに働いて居たが、キユーと糸をこいた後、頸をひねつて縫目を一通り見渡して



新宿にて　青山　中村弘子

から、妹は何をして居るかと思つたらしく、ひよつと顔を上げた目と目が合てフームと鼻の穴の入口で笑ひ合つて「それぢやあ庄さんにするの」「しないわけでもないの」。お安は相談に乗つてやらうといふ風でもなかつたお松ものつてもらひ度とも思つちやあ居ないらしい。「庄さんを連て來て居た人が、何ていふ人だか大變いゝ男

だつたわ。」お松は番町でした見合の座敷を思ひ出してこんなことを云つた「ホヽ、ぢやあその人にするといゝわ」「いゝ男にはもうこりちやつた。」お松は大助のことも思ひ出されて、そうして今でもやはり横濱で、何もしずにのらくらあそんで居るのかしらと考へ乍ら、頸をひねつた拍子に縁端の夕日が目についたので急いで帶のしわをのばして「姉さんもう歸りますよ、兄さんによろしく」と云つて立ち上りざま、小さい聲で「姉さんの方が、私より幸だ。」（入賞）

階上の書齋より

葉舟生

△今月は豫定より要事が多かつた爲めこの選評を書く事が一週ばかりおくれた。で、とりあへず、今回の選評から始める事とする。

△一女の「お由ちやん」は幼いものである。斯う言ふ程度の人にこれ以上を望む事は無理であるかもしれないが、こんな水の上に浮いた麩のやうな他愛のないものを書かない程になつてほしいものだ。長谷川水女子の「置時計」は極めて放漫な空想で作り上げたものであつた。たゞヒロインを書く處に感情の影が微動して居るのを見た。紫蘭の「二人のさびしさ」極めて幼稚な我儘な女の心持が書いてある。斯う言ふ種類の作を見た時に、自分は作者が人間として必然の力から書いたものとは思はれない。むしろ背景になつて居る作者が、極めて無智で我儘である事を思ふ。樋口優香子の「工場の女」は表皮を刺す力位しかない作ではあるが何處となく周到な筆で書いてある。たゞ自分にはこの作が暗示したものの印象が弱く思はれた。これがこの作の大なる缺點である。世良田優子の「失意」この作のセンチメンタルであると言ふ事を自分はとがめない其センチメントの洗練されて居ない事を反省せられよ。禮枝の「二度目」は可成の興味を持つて讀んだ。不足を言へば限りは無いが、ともかく東京育ちの人でなければ書けぬ作である。豆龍の「口」はも少し、心がしつかりして居ねば、いゝ作にはならぬ。手法はこれでいゝが、如何にも肝腎な中心の心が、型の如きものであるのでやはりよい作でない。かすみの「負け惜み」も少し、目の向つて居る世界が深く且つ徹したものであつて欲しい。矢澤榮子の「奉公口」この人の作が少し進んだ。しかしこの作では僅かによく描くやうになつたと思ふに過ぎぬ。明子の「隣の家」この作位の才があるのに、如何しても一息といふものが書けぬかと思つた。巧みにはなつて行くが、この人の目が光つて居るとは思はれない。山崎都鳥の「伊達帶」は何事もなき作である。たゞ次第に書き馴れて來る筆の跡を見る。露の玉の「寂しい女」は梢々複雜した心持が書かれて居る。書き方も可成だと思ふが、全體に生々した光が無い。月草女の「朝湯」には化粧した女の顔から來るやうな或る匂が含まれて居た。しかし極く有り來りの型が、固い殼がついて居るやうに全體を包んで居る。劣つた作とは思はぬが、非常に勝れたものとも思はれぬ。若葉子の「新婚の人」たゞ事に近い。貧しい。才の無い人とは思はれないのに、も少し中から出る力のほしいものだ。わかばの「朧夜」は心持よく落ち付いた、靜かな態度で書いてある。何處となく確とした處が出來たやうで心持がよかつた。島田京子の「天網島」はよく書けて居る作である。も少し背景になつて居る自分がまざまざと見えるやうに書けて居たら可成立派な作であつたらうが、ともかく、この外の藝に對して居ながら、內の自分が波立つて居る處が一通面白かつた。この人は自分には山崎都鳥と同一の人と思はれた。何故斯う言ふ事をするか、その意が解らぬ。それで今回は天網島の方をとる。英の「寫眞」如何もふわふわして居る。野の人の「逝く春」これはまるで言文一致で書いた五七調の出來そくな

いた所謂無智な美文だ、たか子の「雨の日」拙劣。さすらひの「學校」は幼いが、生まじめに心が見た儘を書いて居る。一寸いゝ多都子のお美音の家」は所謂小説だ。葵の花の「蒼い顔」には老實な處があつてよかつた。しかしも一歩だ。

△今月は書きたいと思ふ感想もない。近頃は方々の雜誌で頻りに新作家の評を書いて居る。それは重に斯う言ふ人達の上についてゞある。長田幹彦、谷崎潤一郎、水上瀧太郎、久保田萬太郎、田中介二、鈴木悦、加能作次郎、白石實三、後藤末雄、江馬修これらの人々の中で自分は長田幹彦氏を一番すぐれて居ると思ふ。

△四月の雜誌は容量だけは非常に重かつたが、作に注意すべきものは無かつたと言ひ度い。正宗白鳥氏が脚本を公にして（中央公論）居られたのが一寸珍らしかつた。しかし自分は讀みかけて止した。

△自分は今月旅行をするだらう。東北の方に行き度いと思つて居る。次の號にはこの旅行について書き度く思つて居る。

△自分は五月の本誌で菊池幽芳氏の議論を讀んで不思議に思つた。不幸にして自分の藝術が氏に實感を起させたので、いゝ目標にされたのを苦笑したが、それも自分にとつては一の好機會だと思ふから自分の意見だけを書いて置くとする。

△第一、に一つの場合、一人の場合を以つて、日本の娘を議する事は、極めて不理解な話である。日本の或る娘が、如何に放縱な生活をして居たとしても全體がさうであると言ふのは、解らない見方だ。

第二、日本の娘の自由な生活は一つの反動から來たものとすべきであらう。決して生噛りの西洋思想——實に不愉快な言葉だ。——は多くは形式として輸入されて居るが決して、それに依つてのみ日本の社會は變化はして居ない。自分の見る處では、もし日本の娘が、少しも拘束されて居ないとしたら、その背後には必ず無智な兩親があるのである。その無智な兩親は自分の娘を如何にすべきかを知らないのである。その點から出發して種々な狀態を作つて居るに違ひない。

第三、自分は西洋フランスの社會狀態は親しく見ないから知らぬ。しかし必ずしも氏の言はれるやうな生活をして居る人ばかりではないと思ふ。自分の小説より以上放縱な生活をして居る家庭もあるだらう。と同時に日本の家庭にも、氏の言はれたより更らに立派な——所謂立派な——道德的な、しまりのある家庭がある。氏に限らずであるが、一つの目でものを見て、それを全體として言ふから誤つた言論が出來て來るのである。斯う言ふ事は現今の敎育者に多い氏なども、も少し自ら日本を研究して理解してほしいものだ。と共に人間と言ふ事も——道德のお化でない人間と言ふ事も。

○朧夜

近江わかば

お染は藝妓鑑札を返上して、只の素人になつて、身二つになる迄、實家で養生するとになつた。實母が土地にゐるのを幸ひ、それに面倒を見て貰ふことになつた。養家では妓共も大勢居るし、何かと手廻りかねるので、實母が土地にゐるのを幸ひ、それに面倒を見て貰ふことになつた。お染は子供の時分から彼歷した場所で育つたのを、急に場末の斯んな淋しい住居に引込むやうになると、何だか薄暗い穴藏に息をひそめて誰かに隱れてでも居るやうな氣がして物淋しかつた。初めの間、斯うホツとしたやうな、肩の荷を下したやうで、ゆつくりと氣樂に感じたそんな氣持も此頃では取れて了つて、斯うして只寢たり起きたり食べたりする他には、何の用事もない單調なしがない生活が只つまらなかつた。時には勝手元を手傳つて見たり、自分の襦袢などを洗濯つて見たりするけれど、それも馴れない業なので長く續けてゐられない、針を持つてもすぐ欠伸が出るし、貸本屋から小說本など借りて來ても、身體の故かすぐ肩が凝つて長く根氣を續けて讀んでゐられなかつた。そうした怠屈な時に妹のお紋でもひよつこりと顏を出して無邪氣に話しかけると、お染は暗い洋燈の心を捩ぢ上げたやうに、くさくした心がパツと明るくなつて、一所につりこまれて燥ぐこともあつたが、時にはもう煩雜さくつて早く彼方へ行つてくれゝばいゝと思ぶやうなこともあつた。お染は斯んなにして、毎日ぶらくと物懶さうに身體一つを持扱ひかねた。

斯うした暇な長い一日に倦み疲れて、夕暮ぼんやりと緣に佇んで見る

ともなく行く雲を詠め入る時なぞに、二階からお紋の稽古三味線の華美な撥音が聞えると、お染は何かしら只じつと斯うしてゐる淋しさに堪えきれないで、狂氣のやうに踊り狂つて見たいやうな氣がした。

其日も朝から氣分が惡いといつて、起きなかつたお染が、夕方頃にしどけない服裝をしたまゝひよつくりと起上つて來て何と思つたか、

「お母はん、妾斯んなのをしてると此邊のお湯屋へいつては目立ちますもん、お紋ちやんのでも借りまひやうかしら」と斯んなことを云ひながら羽織下の細い博多の帶を締めかへしてゐた。

「そやかて、彼歷赤いのを締めてはもうゑづくろしいやないか」と母親が煙管をはたきながら云ふのを、お染は、「そいでも、町の娘はんなら妾位な年で何んぼも」と云ひかけたが、ふと自分の身重なことに思ひが走しると、もうこれで母親になるのかしら——とふいと笑ひたいやうな氣になつた、がすぐとそれが不安な心持に變つて行くのを覺えた。

「あゝあ、お湯へなといつて來まほ」お染は欠伸をしながら、土間にあつた下駄を突掛けた。

「按配が惡るいのに、お湯屋へいつてもえゝのか」

「でもかへつて、さつぱりするやらうとおもふて」

お染は斯う云ひ捨てた儘サツサと出ていつた。

濡れたびんの毛や、まだ石鹼の香の殘つてゐるやうな頰を、微溫湯のやうな風に吹かせながら、うつとりといゝ心持になつて、お染が湯から歸つてくると、もうちやんと夕飯の膳立てが、出來てゐて、親娘は長火鉢を挾んでお染の歸りを待つてゐた。お紋は今お稽古から歸つたばかりと見えて、手拭に包んだ踊の扇が側に投出されてあつた。茶卓臺の上に小ぢんまりと置き並べた皿小鉢や、拭きぬいた長火鉢の荒い木目や、お紋の友禪の華美な羽織やが、ニツケルの明るい洋燈に、さも落附いたやうな暖かい色に照らし出されてゐた。狹い茶の室は小淋しいながらも平和な光が充ちてゐた。

お染の顏を見るとお紋は、いきなり、

「姉さんのことが出てるの」と大層らしくいつて落ち散つた新聞紙を拾つた。

「えゝがな、そんなもんあとで見たら」と母親は何氣なさゝうに、お飯櫃を引き寄せた。お染はそれでも氣にかゝるので、

「お紋ちやん何處にあつたの、その新聞は、」といつて湯上りの痒い頭髮を簪でごしく〳〵搔きながら、其指示す花柳だよりと云ふ處を見た。

「お師匠はん處へいつたら、お紋ちやんの姉さんのことが出てるつて云はるゝさかい、賴んで借つて來たの」とお紋も一所になつて覗き込んだ。

「三好屋の染吉拍子は木魚講に加入致し、先月限り鑑札を返上致せし由目下御親類筋へ交渉中に候とか」

お紋には、其意味が分らなかつたけれど、別に訊きもしなかつた。お染は何だこれ丈かと少し飽氣ないやうな氣もしながら新聞を投り出した

御飯を了ふとすぐお紋は、

「姉さん今日習うて來た處を浚へとくれやすや」といつて三味線を持つて來た。

「姉さんは、お按配が惡いさかい」と、母親が止めるのを、

「そいでも、忘れるとかなはんさかい、一寸丈」といつて、お紋は袋を取つてサツサと引き出した。學校を退がつてからは、一心に踊と三味線の稽古を勵む他には、何の苦勞もなさゝうに見えた。お染は妹の無邪氣さうな顏を見ながら此子も、もう近々にお披露目をして矢張斯うした自分の跡を蹈んで行くのかと思ふと、何かしら可愛相に思はれた。斯んな玉のやうな無垢な少女が見すく〳〵濁され汚されて行くのを見るに忍びないやうな氣がするのだつた。

——所千代まで翁草菊の四季咲、四季三番、可愛らしさの姬小松——お紋はいたいけな聲を張り上げて、雛鶴三番叟の始を一心に引いてゐたが、お染があまり身を入れてやらぬので拍子拔けがして可い加減に三味線を片附けて炬燵に凭れて、うたゝねをして了つた。

先刻から勝手で夕飯の後仕舞ひをして居た母親は、火鉢の側にホツと息を吐いて煙管を取上げにかゝつたが、思ひ出したやうに、

「先刻、美濃屋が來たさかい、赤兒のにと思ふて友禪を二色三色取つて置いたが」といつて簞笥の上から、紅入だの、紅なしだのゝメリンスに白モスの裏まで添へたのを取出した。

斯うした間に出來た子——何うなるかまだ落ち附く先さへ分らない子にでも、母親は初孫だと思つて、早くから產着の準備までしてくれるん

だと思ふと、お染は胸が塞がつて泣きたいやうな氣がした。自分のやうな者に宿つた薄命な子、男にしても、女にしても、其歴子の行末はどうなるものであらうぞとそんなことまで思はれた。

それからそれへといろいろのことが思ひ廻されるのであつた。

母親はそれとも知らずしきりと物尺を當てゝ小さな着物に見積つてゐたが、

「あゝ眠たうなつた」と背を延しながら時計を見上げて、それを疊みにかかつた。

「あゝもう寢まひやう」お染もそういつて立上つた。雨戸を繰りに縁へ出ると、庭には月の光が白く流れてゐた。屋根瓦がまるで霜でも下りたやうに薄白く輝いて垣根越しに隣の彼岸櫻の白く咲いたのも見える。これが朧夜とでも云ふのか、萬象が薄絹にでも包まれたやうに、しつとりと底深い艶を持つて、見處のない小さな庭も中々に捨て難い詠めであつた。丁度去年の今頃、花にはまだ早い嵯峨の宿に、「或旦那」と隠れ遊びをしてゐたことを、お染はふいと思ひ出した。



藤花の下　大分縣　井上艷子

○蒼い顔

廣島縣　葵の花

「何うしたの？病氣つて何處が惡いの、昨夜來る積りだつたのだけど俥が皆出て了つて一臺も居ないものだから今朝早くにしたのよ」

芳枝はコートとボアーの丸めたのを片隅に押しやつて窓際の空いてる處へやつと身を落つ着けたせまい室には机と本箱と火鉢とを枕元に並べて弟の寶が室一杯になつて寢て居た、芳枝は冷たい火鉢に障はつて見てオヽ冷ッ!!!火はないのたのと分り切つた事を問ふ樣に云つて兩手を懷につゝ込んで暖を取つた。

「火を入て貰つて上げようか」蒲團の下から上半身を起してから云つた寶の顔は凄い程靑かつた。

「イヱよろしい面色が大變惡いよ一體何處が痛むの？」

「初めは頭痛もするし風邪だと思つて學校も早引したんだか一昨日からうみが出るやら痛むやらたうとう痳病になつて了つて苦しいの何んのつ

てーー」

　實は身體をひねる樣にして眉をよせさも〳〵苦痛でたまらぬと云ふ表情を見せた。

「夫れで醫者に見て貰つたの、

「醫者に?、姉樣自家の父樣位冷淡な人は有りやしないぜ！此の間から二度も手紙を出すのに錢一文も送つて呉れないのだもの、吉野に五十錢借りて賣藥を買つて呑んで居るんだよ、昨日の電報も其の前の手紙も岡山の兄樣へ手紙を出したのも皆吉野に出してもらつてあるんだよ、わしなんか何んなに困らうと死うと我不關焉だからの?、是れ見るが好いこれを」、

　實は腹立たし相に机の引出から取出た金入を芳枝の膝の處へ投げ出した、博多帶の友切れで何日か縫つて遣つた金入からは二錢銅貨が一つ飛び出した。

「たつたあれつ切りで十日餘りもずつて居たんだぜ！然も病氣なのに」と口惜相に云つて實は枕に俯伏した、「夫れや實樣かうなのよ、」芳枝は辯解らしく、「お父樣は此の間から商用で出られてもう一週間許り留守なのだ、私は實樣の手紙を見るには見たが父樣が出られる時には留守中の差圖は皆して置かれるのに其事に就いて何とも話がないものだからもうお金は送つてある事に思つて夫れなりにして居たのだ。昨日の手紙で實は吃驚して丁稚を郵便局へ走らせたのだお父樣が冷淡と云ふわけぢやないのだがつまり事が多いのと年が年だからよく度忘れをされるのよ、で」芳枝が言葉を續けようとした時、宿の娘が火を持つて上つて來た。

「どうぞおあたり下さい」と云つて娘は下りた。

「あれたの！實が寫眞を持つて居たお糸とか云ふ娘は?」

「あゝ彼女が一人よく親切に何も彼も世話して呉れるよ」

　芳枝は云はう樣なき腹立たしさを覺えた、二十にならぬ實を墮落させたのも彼の娘である。

「彼女が親切にして呉れりやお神のやまが惡いよ、」

　實は平氣な面でこんな事を云つた。

「當り前だよ夫りや私でも怒るよーー、」

　お糸は再びお膳を運んで來た。

「アラおかまい下さいますな私は頂きませんから濟みませんけど持つて下りて頂きなさいあの私は頂きませんから實樣は早くして頂戴」、芳枝はこんな事を云ひ乍ら兩手を火鉢にかざして娘の顏を正面に見た、丸ぽつちやの可愛顏で上氣した頰には白粉を濃過ると思ふ程塗つて居た、「少しなりとお喰り下さい」、と云ふ口元は憎い程愛らしかつた「イヱ今朝たくさん喰べて出ましたらまだお腹が空きませんから實の分程置いて頂きましてあと持つて下りて下さい」、心の中では、此の色魔と罵つてやりたい程なのに表面は絶えず笑を帶打とけた體でかう云つた、「實樣早くなさいよ」、と芳枝が云ふと實は大儀相に襟汚の付いた寢巻を脱ぎかへて居る處へお茶を持つて面の大きいお神樣が上つて來た。

「どうぞ何もありませんけどーー、」お神樣が芳枝に云ふ實はお神さんと冗談口きゝ乍ら下りた。

　お早いお着でしたが何時頃お出になりましたの、

　お神樣は氣を代へた樣にかう云つた。

「三時を打つと出ました昨夜來る筈だつたのですが倅が居なかつたもんですから今日は精一杯早くと思つて、」

「然でしたか隨分寒くてお困りで御座んしたらうーー」

「えゝ根つから夜が明けないもんですから、幾等仰つて見ても仰つて見ても暗いんでせう、全く心細くなる樣でしたよ、たうとう水源地の處で火を消しましたの父も母も居ないもんですから今日は日歸りする積で出ましたのでーー」「へえ夫れは夫れは、」

「糸さんーーお糸さん、」階下から實の呼ぶ聲がした、お糸は下りたお神樣も芳枝も同じ思ひに不快らしい顏をして口をつぐんだ、

「姉樣俥屋が待つて居るが如何かするんぢやないか?」

　斯う云ひ乍ら實が上つて來た時にはもうお神樣は居なかつた。

「今日晝から歸らうと思つて待たせてあるのよ、」

　芳枝は火鉢の中程へ火箸をグツとつき立て其上に兩手を重ねて丸く動かし乍らかう云つた。

「今日?私は十日許り看護て貰ふ積りだつたのにぢや態々電報打て迄來てもらう必要もない」實は投る樣に云つた、「十日許り?、芳枝はわざと仰山らしく、そんな事が出來るもんですか父樣も繼母樣も留守で家もお店

も全然他人任せにしてあるんだのにそんな事が出來るもんか、夫れも實樣が手の引けぬ病人と云ふんなら兎も角もだが――」

「いゝや勝手に歸るがいゝ麻病だつて馬鹿にはならんよ吉野の友人の親類中にや麻病で死んだつて昨日も云つて居たぜ死んだつていゝんだらう家の者は薄情者の冷淡者のより集りだからもう決してかまつてもらはない、」

實は怒つた樣な面をしてつけ〳〵かう云つて俯向いた。蒼い顔細い頸氣のせいかいたく痩せて見ゆる腰のあたりをじつと見て居る中に芳枝の心は全然り變つてしまつた「ぢや實樣かうしよう今夜は泊つて明日歸る事に決定めやうのう留守と知りつゝそう何日迄も家を空けるわけにもゆかないから――」

「あゝぢやそうなとしなさい、」で芳枝は今日歸らない事と明正午迄に迎俥をよこす事を極かんたんに認めて俥をかへした。

朝飯がすむと實を醫者にやつて芳枝は散らかつて居た室をざつと片付けて了つて窓を開けるとぱつと明るい日光が流れ込んで何とも云へぬ心地よさを感じた。

前二階をへだてゝ通りの方では俥の音や騷々しい人聲が沈んだ芳枝の心を引き立てる樣に何時迄も何時迄もはしやいだ樣な響をつたへて居た、芳枝はこんな處にじつとして居るのが何だかすまない樣な氣がしてならなかつた、留守宅も氣になつた父や繼母の事も思つた、家に居れば身體が二つあつてもたりない程忙がしいのにこんな處に泥として居るのが又なく辛かつた。そして空俥を返したのが取返しのつかぬ事でもしたかの樣で堪え難い程いら〳〵して居た。



芝居にて　群馬縣　新井つま子

口

新橋　豆龍

（一）

笑次が清元のお稽古の戻り道に、蜜豆屋へ寄つた時は、路次のお内儀さんや女中連が、くちや〳〵と喋舌り立てゝ歸つた後であつた。

『おや……今お戻り？』

と、内儀は、敷居を股ぎかけた笑次の顔を見て笑つた。その顔の奥底には言ひ知れぬ秘密でもあるやうに笑次に見えた。と、笑つたのが態とらしく感じられて、よらなければよかつたと、今更悔ひられた。

『もう龜井戸の藤はよいでしやうね……小母さん？』

と、笑次は其まゝ柱に身をもたせた。

『もうあなた……』

と、内儀は力のある云ひ方をした――丁度去年の今頃、小川と樂しき會話をとり替したことが、とりとめもなく笑次の小さき胸をかき亂した其考へ深い笑次の顔を内儀は冷笑を含んだ面持で見詰めて居た。

『あゝ……』

と、おもはず笑次が嘆息したので内儀は笑次の心の底を見透かした樣に一寸薄笑ひをして、

『小川さんから便りがありますか』

と云つた。笑次はハツとした。が、至つて平氣を裝ふて、

『私……困つてしまふわ』

『どうして？』

『だつて小川さんから手紙が二度程來たのよ……他の人に變におもはれ

るから斷つてやらうと思ふんだけれど……』

…こゝまで云つては見たが、此先云ふのも小川に對してすまない樣な氣がしてやめてしまつた。

『戀におもはれた方がいゝぢやありませんか』

と、内儀は意地の惡い笑ひ方をした。笑次は藝妓こそはして居れども未だ初心な處もあつた。ましてや小川とは云ひ替はしはせぬけれどもお互の口のきゝ方や、身振りで末の末迄もと、云ひかはされて居たのだから……それが二月前に小川は田舎の新聞社へ聘せられて行つた。

『──自分は決して小川さんを戀して居るのぢやない……老いたる父を失へば後は繼母丈で兄弟はなしするから、小川さんを兄さんとおもつて忘れられないのだ……』

と、笑次はやるせない胸の慰めに、いつも自分で自分を辯解して居るのだ。笑次はなほも考へ込んで居た。内儀は絶えず意味あり氣な笑ひ方をして笑次の顔を見守つて居た。

（二）

今日は何となく、くさ〳〵する日だと思つて、笑次は湯から戻つて來た。姉さん株の蔦若が、

『ホヽヽヽ、笑ちやん、今日は奢るだらうね』

と、云ひながら、一葉の葉書を出した、笑次はなんの事やら解らぬので只ぼんやりと出された葉書を受取て差出人を見ると──金澤停車場にて、TO生と、書いてある。笑次には英語は解らぬが、いつも、小川から來る手紙の上書に書いてある英語であるから、すぐそれと悟つた。と胸の中が急にドキ〳〵と波打ち出した、自づと顔も赤くなつた。裏をかへして讀みは讀んだが徒らに字の上を目が走る丈で、なんと書いてあつたか分らなかつた。

笑次は騷ぐ胸を強いて靜めてゆつくりと、一字々々の意味を解釋する樣な氣で讀んだ。

都合で今金澤出發上京致します。

と、のみ書きなれぬらしい楷書で鉛筆で書いてあつた。

──小川さんが歸つて來る──

なんとなく嬉しい樣でもあるが、自分が蜜豆屋の内儀に冷かされて心にもないことを云つたことが、大變な罪惡の樣に、恐ろしく感じられた。自分の云つた事を内儀が小川の友人に告げて、其友人から小川の方へそんな手紙が行つたので、憤つて歸つて來るのぢやあるまいか──もしそれでないにしても歸つて來れば無論蜜豆屋へ行くだらう、そうしたらきつと耳へ入る……と瞬間に電の如く笑次の胸にひらめいた

『なにぼんやりしてるの？オホヽヽヽ、情夫から手紙が來たつてそんな芝居でもない身振をしなく〳〵ともいゝぢやないの……』

と蔦若は冷笑を口元に漂はせながら、笑次の葉書を見詰めて佇んで居る脊中をたゝいた、ハッとして笑次は我に返つた。

『情夫ぢやないわ……あんな野郎……隨分人を馬鹿にしてるわ』

と思はずから云ひ放つてツンとすました。

（三）

それから一週間許り過ぎた。姐さんや半玉などが一寸外から歸つて來ても、

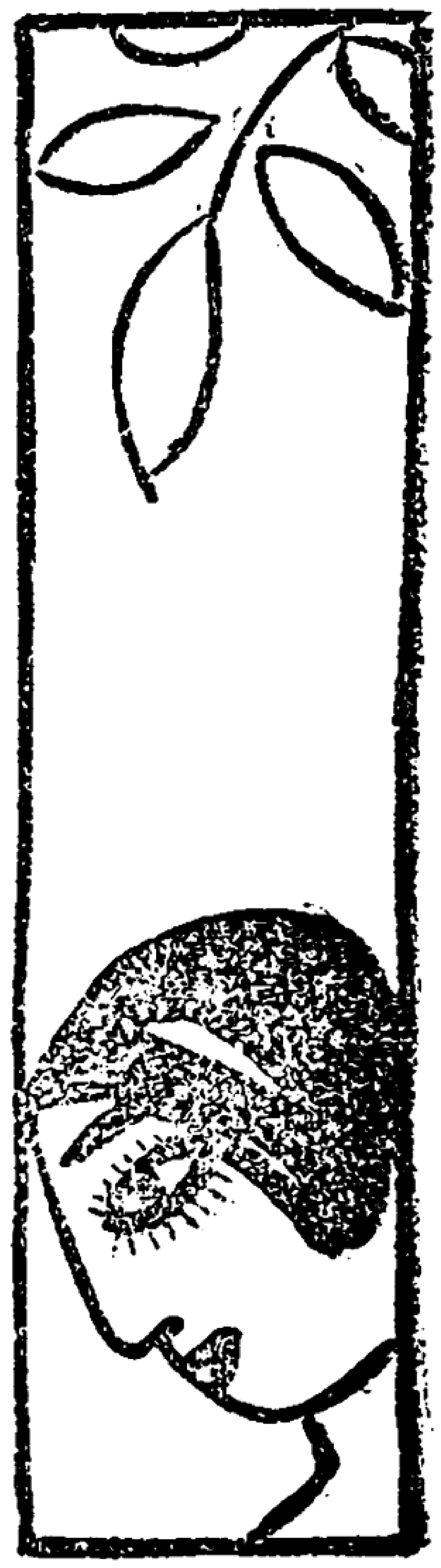
『笑ちやん小川さんにあつてよ……二月許りの間に莫迦に老けてしまつたわ』

『小川さんが笑ちやんによろしくつて──』

こんな斷片的な消息を冷かし半分に笑次の耳に入れた。其度毎に小川から歸京しても何處に居るといふ通知の來ぬことが甚だしく氣になつて今更に口から出まかせに云つたことを、笑次はつく〴〵後悔せずには居られなかつた。

和歌の選評に就いて

從來本誌の和歌選者たりし與謝野晶子夫人、今回洋行されしに付き、歸朝まで本誌の和歌は編輯局にて、代つて選拔することゝなれり、夫人御歸朝の後は、無論從來の如く、選評の勞を取らるゝ筈なれば、此段諸嬢の了承を請ふ（記　者）



人事（散文）　編輯局選

○明暗

横濱　夢の花

人の肩の間をすりぬけて斷崖の上の柵に凭りかゝつた時、私ははじめて暗い天地を見た、海には船の灯も見えぬ、暗い海を抱いた港の町は、輝きのない天の下に、強烈な熱と光を包んで不斷の活動をつゞけて居るのだ。

明暗の劃のあざやかな港の町。あゝわが横濱！と私はつよく胸を抱いて立ちつくした。

いつまで佇んで居たのであらう。ふと瞳をかへすと、傍に黒い姿のそふのを見た。

「氣をおつけなさい。先刻あなたにつき當つた男があつたらう。うつかりして居ちや危險い」

わかい男の聲がひゞいた。私はまともに目をあげたしろい美しい男のかほがぢつと私を見てゐるのであつた。靜かに足をかへすと、男はつと寄つて。

「わたしを知つて居るやうにして居れば大丈夫だ。彼の男は何だか知つてますか。有名な惡徒ぢやないか。通りまで送つてあげよう。」

をとこよ。みだらな戀をもとめて近づいた男よ。風はちまたをかけめぐつて、白い埃りが高くまふ。

珠玉商人の店頭のけいはくな金の色と、カンテラのかげにふるへる夜の草花よ。緋鹿の子のゆめの醒めた港のまちの處女たちと、顏しろき濱の男の群にまじつて、哀愁ににじんだしづかな心を抱いて春の夜のちまたをながくあるいた。

戀と歡樂と漂泊のはげしい強いよろこびとかなしみとのはてに跳る開港場の荒い情調は、すさんだやりばのない心にどんなにふさはしいものであらう。

「ちよつと。」と男はたちどまつた。四辻に立つたのである。

「こつちから行きませんか。え、いゝでせう。」

男の姿はうすくらがりに浮いて見えた。わたしはたちどまつて、ほゝゑみもない羞恥もない、まじめなかほを向けて、ぢつと男を見かへしたのである。（天賞）

人自救ふの力無ければ唯顚落有る而已、愚劣なる誘惑、淺浮なる手段に乘せられて一歩を誤れば其差毫厘千里、またもとの身にあらざる也。修養なる哉、ひとり人妻なるが故に毒手に罹らざりしのみと謂ふべけんや。

君言ふ、わが筆の辯きはすでに地に墜つと、餘りに早き結婚は其うたの芽を萎縮せしめて、心靈やゝくもれるのみ、しかも君にして浮華輕佻彼れが如き××某に親まずんばいかで今日の嘆きあるべき。（評）

○春の日記

高知　櫻木紫華香

四月五日。ポット吹き出た桑の綠が一雨毎に次第次第に濃くなつて行く、蠶の出るのもぢきだらう。

密柑の手入に雇うた日雇が、頬冠はづして草の上へねそべつて、スパ／＼やつて居たが、のつそり起き上つて、又コト／＼打ち始めた、彼等は今日がなければ又明日位に思つてゐるから少しもはかどりやしない。

もう南京豆を蒔くに好い時分だらう、小室先生に教はつた樣にして蒔いてみよう、澤山取れたらお餅やお菓子にしてと、かう思ふと、甘い唾液が口中一ぱいにホヽ、脂肪が多いから此上肥えても困るけれど……

「菖蒲をくちや／＼に踏折つた者は誰だ!?」何處へ雷樣が落たかと振りむいて見ると眞赤な顏して小兄樣が杜の下に突立つてゐた。一番可愛がられて、一番甘やかされて又一番叱られる末の子の私を、皆がいつ迄ネンネと思つてゐるでせう、ほんとに八つや十のやんちや坊ぢやあるまいし、そんな無風流な惡戯はしやしないのに、小兄樣はプン／＼怒つてゐらつしやる、きつと松か吉三が踏で默つてゐるに違ひない。

四月七日。あゝやつと綺麗に垢が落ちた、たやすく汚すものゝこんなに汚れた物をこれ迄に落すには餘程骨が折れる、自分ながら「洗濯は實にうまい」とほとほと感心してしまつた。

金市のは久保さんと横濱へ行つた時に潮の溜つた岩をピチヤ／＼歩いて、小タコやウニを取つてだいなしにしたが、かう洗ひ上げて見ると內穿にはまだ／＼上等だ「ついでに此を洗つといておくれ」羊羹色にドス黑く汚れたメリヤスのシヤツをぐつと鼻のさきへつき付けられた時には、どう仕樣かと水にほとびた手を見つめて泣き度なつた、イラ／＼するのをぢつと我慢してやつと三足迄洗ひ上げたのに……………小兄樣はおいとひなしだからたまらない、シブ／＼ながら受取つて盥へ入れた事は入れたものゝ、一々丁寧に揉んでゐた日にや、手の皮もすりむけるから、少々地質はいたんでもズップ川の石へぶちつけて、それで垢を落しませう、

り水に浸しては引上げ、引上げては白い丸い石へたゝき付ける。

幾度も幾度もかうして居る中に、やつとシヤツらしい色になつて來た。ホット一息姉樣冠をはづして顏でも洗はふと俯向くと、桃われに赤い襷がけの田舍娘の姿が流れの早い谷川の水に映つて、すぐメッチヤ〳〵にかきこはされて仕舞ふ。水につかつた足首から下が氣味の惡い程白く見えるすぐ向ふの方へポンと石を投て惡戯して行く中學生がある土佐特有の紺袴に紺着物着た色の眞黑なアメリカンインヂアン式のいたづら小僧だ三谷山からの歸りであらう、折たばかりの櫻の枝へ、一尺程のびた虎杖を一束とつゝぢの小枝をくゝりつけてゐる。



初夏の風　横濱　黄金扇

柳の木の股へ止つてた小つちやい雨蛙が、思ひきつた樣にピヨンと隣の枝へ飛びうつッた。（入賞）

土佐江口町といふと村山咲子を聯想す、鬱田順子も一ノ宮の人だ、才人まさに輩出す。（評）

○帳簞笥の中

長崎　夕月夜

半ば白う變つたかしらを黑ビロードの夜着の衿に深う埋めて、息絶えた如く眠つてゐる父を憚り乍ら、青い銹の見える帳簞笥の引手に兩手を掛くる間もなく、スーと七分目程も引出した。不安と恐怖に強く胸をつく動悸が數へられる迄意識されてゐた、優しく離すつもりであつた眞鍮の引手、はツト震へる私の指を辷つて、靜かな室の夜氣にカタカタと響を流した。

父の寝姿は元のまゝであつた、まだ誰かの瞳に怖れてゐる私は、狭い梯子の昇目から二階を覗いて見たが、ランプの灯のいつか消されてある闇の中には、私をうかゞふ物の氣もせなかつた。

一ぱいに詰つた引出の手前の方には、所々塗りの落ちた黒の文箱と、蟲付いて細かな凹みの一面に出來た桐の小箱が二ツ、何れにもかたく打紐が結ばれてゐた紫地に同じ薄色で、木の葉形の模樣を見せた、細長い紙箱には「書翰」と鮮やかにしるされて、傍の薄い帳面には「町費通」と大きくくねつた文字が滿されてあつた。軟らかい何やらの古びた布で、蛤形に縫ふた袋には、ギザ〱のある黄色い大珠の珠數が一かけ「祖母樣が京のお土産よ」と昔の母は敎へてくれたが。

どれも〱妙な色に變つた古寫眞が、三枚箱の片隅に置かれてある、薄れた臺紙の中の、淡々しい人の影は、父の昔であるまいか、母の若い姿では無かつたらうか。

奥の方に陶器仕入帳と書いた部厚い帳面と、同じ巾の長いのに大福帳と同筆でしるしたのがある、氣もなく私の手で繰られた其中は、品物の名や價をつけた文字へ、横に斜に無數の消し棒が引いてあつた。あゝ十年前の丸み有る父の筆跡だ、昔は〱と繰り返す其人は彼の如な文字によつても樂に居られた其頃を偲ぶであらう。

隙間を惜んで深くつめられた帖類や、小箱のさまざまに多き底を覗けば、一ツ〱にさがして見る氣は私になかつたのである。一枚の罫紙の下にしぶ色で塗つた父の古い手箱を見出した、父があの箱を開く度に、ソッと傍へよつては、其蓋裏に張られた頰の赤い惠比須の面の刻み繪を無心に眺めてゐた幼ない我が姿のまざまざと眼に映つてくる。

求むるものゝ若しや此中に納めてはあるまいかと、音を憚つて開いた箱の、昔の儘の其内側には、何やらの證書が四五枚と、怪しう眼に映つたのは、てまかく疊んだ底の紙である、豫期してはゐたけれど、折り目を延ばして青い罫の一行目にしるされた、「死亡診斷書」の五字を見付た瞬間、私は氷の如な鐵の器でズント頭をおし付けられた樣に、冷えきつた一筋の血は總身をめぐつて慄えたが「病名肺結核」「美志磨つ」の大きい文字は人事の如に見まもつて居た時は胸も心も何時もの靜けさに返つてゐた。知りたい知りたいと願ふた心の、暗い陰影は母の病み破れたる胸をほ

とばしり出た眞紅の色、あゝはいけつかく、母は、そうで有たか…………

ランプの火光をもとの如に大きうねぢ上げても「暗いもつとあかるくもつと」瞳の鈍い眼をすがめ〳〵した母が純白の夏服涼しげな海軍の人の靴音多き港の町に、永く眠つたあけの日である。白い掩い衣をはねて三十九にくしけづられずなつた黒髪惜しいかしらを起して束ねようとした時、赤黒い血塊がしまりのぬるい唇を漏れてダク〳〵と流れ落ちた、「おゝこの塊がさぞねえ」とあわてゝ娘の紅い色を拭ふ祖母のうるんだ瞳は、悲しかつた、母なれば見なれば血の塊もいやでなからうに、私は、私は、

あの痛ましく病める母が終焉にさへ「母樣」と縋るべきなつかしい情を持たなかつたけれど。(入賞)



月見草　新潟　寒川元江

探偵小説をよむやうな氣がする、一年三百六十日親仁の留守の日といふが無いやうに、つまらぬ細工をしたものだ。(評)

○三十女

岡山　ゆみ

二十七、二十八、二十九と指を折つてふつと『來年はもう三十ですよ、姉さんは――』思出してだしぬけにいふと、『え、』と私の高ごゑにおどろいて、『三十?そうそう、自分の年まで忘れてた位だもの――』とつかれた瞳を、うつとりと湯殿の丸まどになげた三十女の淋しく荒びた面ざしに、日に映えた白壁の強烈な光りと木犀の部厚な葉の濃みどりの沈鬱な色彩とがごつちやまぜに青白く冴えてたのが、私にはいた〳〵しくて

たまらない寂しさはかなさだつた。

三十!!と思へば若々しき、女の命の亡ぶる、荒びたる暗き日のやうに考へさせられて、姉の手に動かされてる紫紺地の矢絣も、膝にこぼれかゝつた緋綾の輝やかしい、御殿女中のうちかけを想はせる、色彩も三十女の姉とは全然とんでもない不調和のやうに思へて私は泣きたいやうに思つた。

『備前屋のおふくさんが久松で、私は赤い帶を結びばなしにだらりと下げた小さいお染だつたのよ、九ツか十だつた頃。』といへば、『そりやよかつた、大きな舞臺に白粉と紅とを塗つて、おふくさの久松をひざで押しながよいと言つて、お染さんの親御の顔がみたいやうと、棧敷の人が口々に言つたつけ』と母がありし日の得意を思ひだしていふ時、お傚の舞臺に立つた美しかりし昔の姉と、一人の愛し子を守たてゝ先を、先をと期待する三十女の今の姉との間が、あまりのかけはなれのやうで、私はいつも默り込むのであつた、娘時代の姉は何よりお化粧が嫌だつたといふ。

何を思つてか此頃うつすらと化はひして、地味ながら身仕舞をするのを私はよく見かける。すき見してはうつとりと昔の姉と今の姉とを心に並べて居たのだつた。朝々、かなり廣い額の隅と耳と衿とに宵越の白粉の痕が、際だつてかたまつて居るのが淋しくて拭ひとつて上げるのが私には何よりも嬉しかつた。

人はとがめるだらうされど私は默つて見て上げたい追憶が華やかなだけ、夫亡人として、一人子の母として、三十女としての今の生活がより以上地味でつらからうと思つて――。かうした感情のもとに姉を思ふとき私の瞼はしらずく熱くなるのであつた。

ようしめてねやれと後家の味氣なさ。地味もへつたくれもあつたものではない。女はたゞ之れ終世女なるのみ。(評)

○かみ　　大分　みね子

初心な、人馴れない田舍の風が嬉し相に、自分の顛や足に纏る。髮亂れのまゝ楊子をつかひ乍ら野菜畑にたつてたら、伯母が、

「なんだねえ其髮は、おちよ(狂者)の頭の樣ぢや、お竹がくるから結つてお貰ひ」

「エヽ、なに結ひかへます」と言ひ乍ら憎い程ばらくする洗毛の柔りした髷を當つて見たら、くるく巻いた端が片足踏みはづした樣に、だらりと下つてるので覺えず苦笑して世話のがれに御意に從ふ事にした。

朝飯後直ぐ、四十位の田舍嗅い髮結が來た。棕梠竹や雜木の葉が陽を受けて、美しゆう淺い草色に透いて見える中庭の緣で我黑髮はとかれた青い邊りに若い女の顔を白う見せる。のす、梳く、あらつと思つてる間にだらくする椿油を塗つた、大事に造つた押花を掃き捨てられた後の樣に、唯もう腹がたつた。びんも前髮も思ふ樣に出來ず、銀杏返しの輪をする時は、焦々してるのに、手ぬるひので振り壞してやりたかつた。

痺りをきらしてやつと出來上つたが、びん一つ搖く氣にならず、此麼髮で二三日辛棒しなきやならぬかと凝つと鏡を見詰めてたら

「町は、どんな風の髮が流行る」

問ふでもなく獨言でもなく不器用な物云ひをした。馬鹿めつ、流行るもないもんぢや、其麼事尋ねるのは始の事、人に此麼髮に結つて呉れて……「知りませんよ」と、計り立つて廊下傳ひに離れへ行つた、お前見たいなのに敎へた所で、强張つた血の氣の失せた手ぢや、ゆつたりと餘裕のある若い男の好く女の好く髮は出來はしない。

廣緣の隅に夏冬打通しに置かれた籐椅子に、身を投げる樣に置いた。焦々した、腹立たしい目で遠い空を見て居たが、餘り能く晴れすぎて、懷しみもなく濃い納戸色に澄し返つてるのが、たまらなく嫌な感じがして目を伏せた。

俯向いてる自分の髮に、陽が一つぱい當つて犬のねぶた樣にテカく光つてると思ふたら泣きたくなつた。

壞す！　最うどんな事があつても壞す、そして洗ふ吁、あの櫛の齒の鳴る樣な洗髮！

何だつてかう頭ばかり氣にするんだらう。(評)

結つては壞し、壞しては結ふのが仕事。(評)

○猛火と狂馬

小石川　甲橋秘筐子

西月十四日午後八時。

ひる頃より吹き初めた風が夜に入つて一際強く吹きすさむ、縫ひ物をかたづけて床しかばと立つ、と、强風にまじつて聞ゆる警鐘の音、すはと、父共々玄關に出づれば西の空は一帶の紅、大學附近に見える、幼い妹は、おろ／＼聲、おとなりのお小母樣と共に、蓮華寺の墓地あとへとかけ出した。

廣い原はもう人が蟻集してゐた、大久保だらうと人々は話し合ふ。

一面に燃え上る火焰はさながら百萬の惡魔の荒れくるふかのやう、風は愈よ强く、頭上の古樹はげにも吹き折られるかとあやぶまれる、猛焰は烈しくなつて右へ、左へと、ひろがつて行く、寒さとおそろしさに立ち得られなくなつて、家に歸る、母さんは未だ見えなさらない、折からパカッ／＼とはげしく馬の駈けくる音がする、いぶかりつつ窓の戸を明けると、暗を衝いて七八頭の軍馬が行く、父は戸山學校だな、といはれた。

あゝ如何したらよからう？　若しや母さんに……と思はず口に出ると妹も、どうしよう／＼といひ出した、父も不安らしい顏付をしたが、ナニ大丈夫だよ子供ぢやなし、お前達が案じたとて仕方がない、外へ出るな落ついて居よ、と……けれど私はどうしてもじつとしてをられない、夢中で二三間かけ出ず、とまたも蹄のひゞきにハッとして其家の門へ身をよせた。

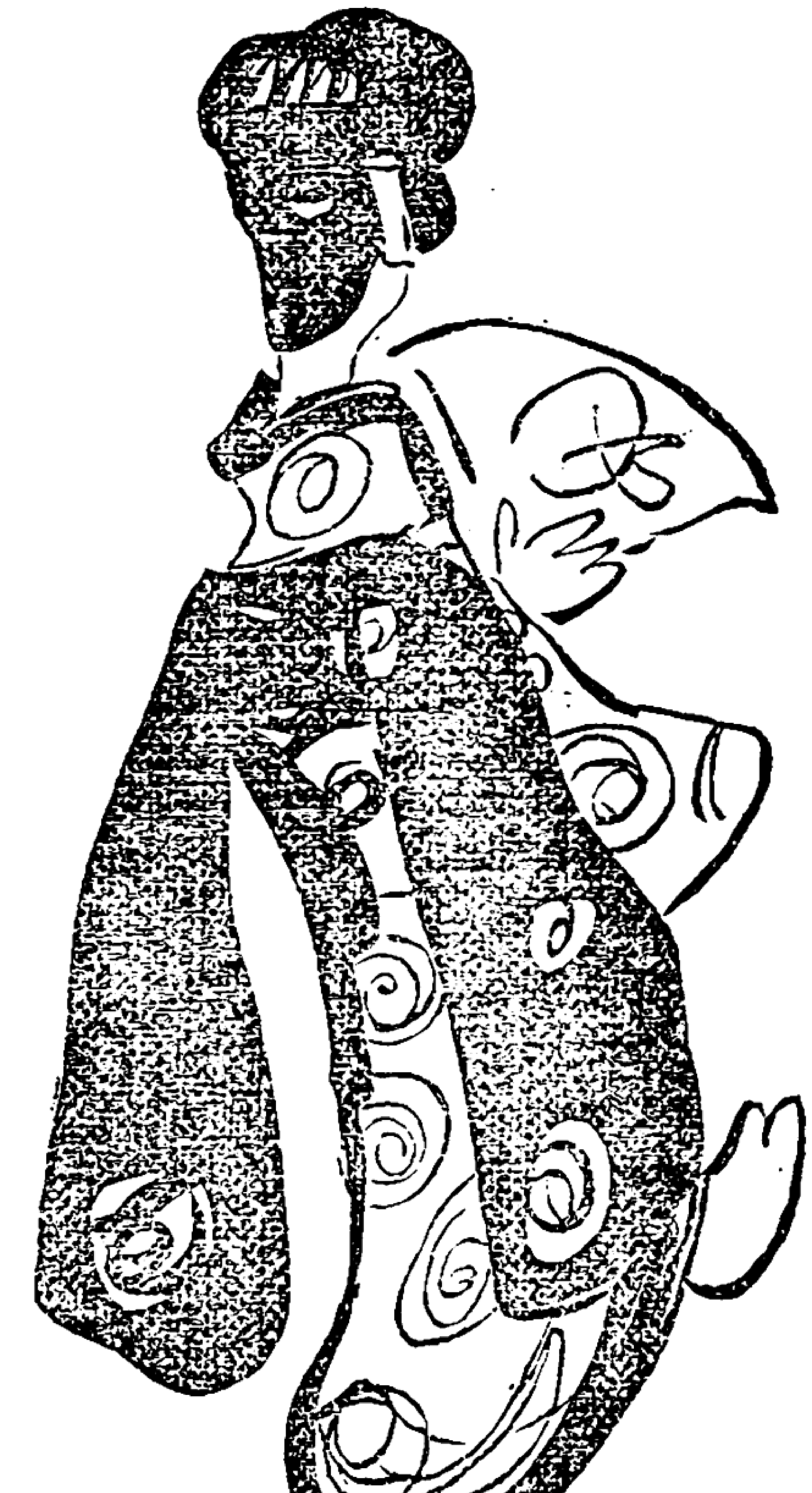
火焰におどろいて狂へる馬は、一目散に目白坂を駈け下る、私は胸がふさがつて、暫くそこに立ちすくむだ、一度は歸らうかと思つたがまたも兩の袖にしつかと胸を抱きしめながら、後に心をくばりつゝ、とぶやうにかけ出した。人は何と見たらう？　その姿を……

江戸川橋附近は、火事見る人の浪、馬は山吹町通を眞直に矢來方面へいつたといつてゐる。

あゝ母樣、母樣はどこにゐらつしやる……なぜ私は出て來たらう？　父樣は案じて居られるだらうに……けれど／＼私には落ついてはおられなかつたんだもの……折柄ワッと起る、ときの聲、またも十五六頭の荒れに荒れたる狂馬は、人浪を駈けぬけて山吹町通から江戸川端へ……煙の如く、砂塵を吹きあげて……そのものすごさ……

蹴られたッ蹴られたッ、聲におどろいて私は電氣にうたれたかの如く二三歩小走りにはしり行く途端、秀子ぢやないかッ……アッ母樣母樣ッ、とばかりうれしさとおそろしさが一時に胸に込みあげてすがりついた、涙はとめどなく流れ出る、……

名文。と一口に片つけて了ひたくはないけれど。（評）



をどり　芝小鳥

○幼き日

神戸　綠髮子

赤入らずの大柄な友禪に白い兵古帶を結んだ私の姿はよく男の子と間

違はれてゐた袖丈はさすがに長かつたがそしていつ頃からか知ら坊チャンと呼ばれた。

長い間埋まつてゐた雪がだん〳〵に消えて黒い土がそろ〳〵顔を出す頃から坊チャンは外へ出て遊ぶ事ばかり考へてる。

春がきてはこべにも小さな花が咲く時にはもう毎日の樣に兄樣達と輕い改良服着て野や山へ遊びに行く。

かうした時にも姉樣はめつたに出なかつた、仕度が面倒だから兄樣達はあまりに連れて行かない、あかい着物に帶をしよい込むでいつも稚兒髷にゆつてゐたと覺える。姉樣と遊ぶのは飯事する時位だつた。でもよくお人形の着物を縫つて與れた、お人形の樣な風の姉樣をやんちやな兄樣方はそんなに好きでなかつたかも知れない。私は今でも知つてゐる面白い事がある。

それは毎日三時前になると仲兄樣が「あれをするから皆呼んでお出でよこうちやん」と云ふ。さうすると私は下の兄樣二人と姉樣とを引つぱつて奧の間へ寄る。

さ、いゝかい、皆大きな聲で云はなけりやいけないよ、そら一二イ三かあちやん何か頂戴なアツハツハ……もつと聲を揃へて云はなけりや解らないよ、しつかりいゝかね。

かあちやんを幾度も繰り返す、大きな人が何ですねと母樣は笑ひ乍らきつとお八ツを下さる、私は一番先に戴く。次に姉樣にでも廻らう物なら「なんだ坊チャンならいゝけれど女のくせに男より先つて事があるものか」と速く抗議が出る。

末つ子で身體の弱い私は我儘でも皆よく聞いてくれる、けれど只一つ十歳に足らぬ私と小兄樣と二人とはお守りの目を逃れて向ひの濱に出る、そして手早く海岸につないだボートに乘つては遠く港の外まで出ようとする。

蒼い水がザブリ〳〵と船べりを打つ波の音が堪らなく好きであつたから、落日の光が波の上にきらきらと輝くのが譬辭を知らぬ幼い目にも沁沁美しいと思つた、浮船の多い港の中に私の櫂とりで幾度か浮船にぶつけてボートをひつくり返しさうにする、其度に兄樣はオールを捨てゝこうちやんを抱えようとする。

今日こそ、赤い海のはてへと勇むで乘り出すけれ共でたく〳〵のうちに爺が、坊チャン方あぶないつて小船で迎へにくる。

其後濱の家から山の家へ移つて水には全く遠ざかつてしまつた。濱に育つた私には宇賀の浦の水の色がなつかしい。

一二三！　かアちやん何か頂戴なと兄弟して吐鳴れば大概お母さんも降參するだらう、惜しい事におれも行るのだつた。(評)

○暮るゝ窓より

豊後　吉田夕草

帶の間に兩手を差し入れてる時は、無上の悲哀に身のやりどころがない時である「あゝ又してもいろんな事考へて悲しくなつた――」とふと現實にかへつた時は、きつと帶の間に、規律正しく、兩手を差し入れてゐる。――「何故此樣なはしたない癖がついたんだらう――」と、自分で自分を叱かつては、そしてすぐ「あゝすまなかつた許して？」と、自分に詫をする。

「私」と言ふ人間は、二人あるのではあるまいか？」などと、こんなまぬけた事を時々思つて見る。――眞の私と、そして極めて薄い影の樣な私と――そして、影の私が、眞の私を、いゝ樣にチヤかして、樣々な廢物を私の周圍に近づけたり、あられもない空想にふけらしたりなどして、あがらうにもあがり得ない樣な、深い淵の中に私を落し入れ樣としてゐるのではあるまいか？、そして上が上にも私を、ひねくれた女に仕樣と……………いゝえ、思ふこい、こんな事を思ふと、私はもうたまらなくなつてくる。けれど、どうしよう、思ふまいと思へば一倍深く思ふんだもの――、只茫然として部屋の窓にもたれて、暮れがたの哀愁にふるつてる樣な、空を見入つては、泣くに泣き得ぬ、それかつて、泣かぬでは餘りに物足りない樣なやるせなさが込み上げて來る、私見たいに、名の付け樣のない、悶えをする人が二人とあらうか？…狂氣の樣になつて顔

んでゐた「ヴエルテルのかなしみ」も、もう此の頃はすつかり飽いてしまつて、見返るものもなく、机の下に、なげられてある。

頰杖ついてゐると、溫珠のある涙が瞼ににじむ、何が悲しいのか、如何して此樣まで涙つぽい女になつたのか？　私もよつぽど、へんてこな人間になつたものだと、可愛想な樣にもあれば又、自分ながら愛想がつきる樣にもある。

一久野さん、ごらんよ、あれはお梨代さんの情夫なのよ」

「えゝあの方が？　お梨代さんの………」

「お梨代さんにはよすぎるわね」

「ほんと？」

「お梨代さんの情夫つて言ふと大變氣に入らないでね」

「情夫なんて、そんな汚ない事言はないで戀人つて言つて頂戴」つてね、ふるつてるわ」

と、こんな事面白想に、高く言ひ合つて歩く若やかな女の聲がすぐ下で聞える。何事も餘り氣にかけぬ樂天家だな。と、かう思ふと、何かたまらなく、懷かしい樣な、嫌な樣な氣がして、ご其の二人の女を見たくも思はれる。

さうやたらにたまらなくなつてはお母さんもお困りでせう。（評）

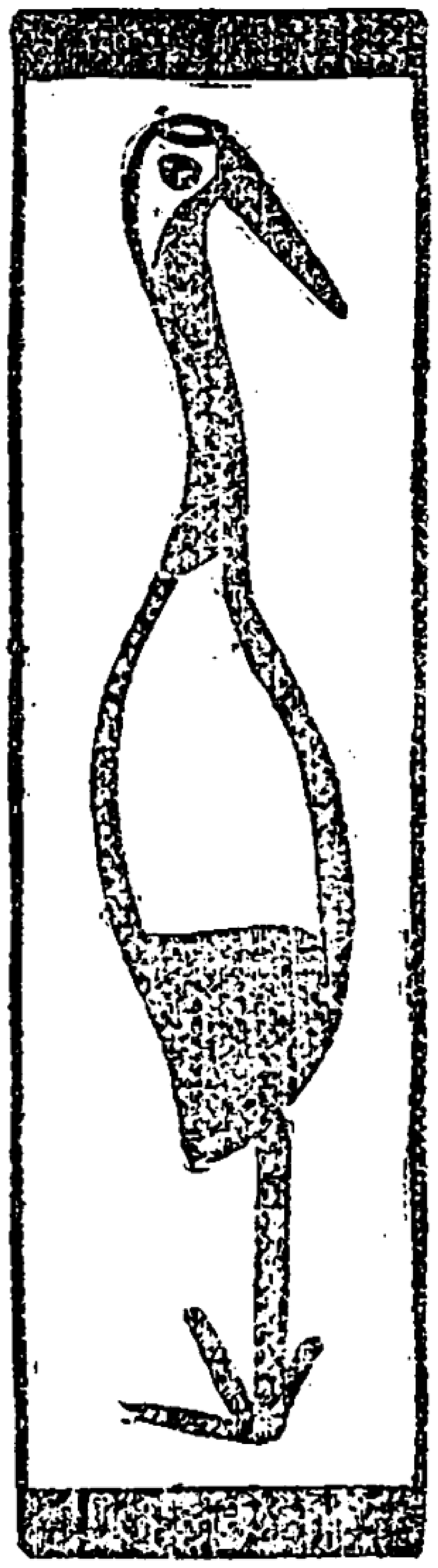
○暗　黑

野　の　女

私は何日ものやうにお夕飯をすまして机によつて本をよんで居た。今晩は。とB樣がきた。外の人ならいつも一寸こしかけてお話するのだけれどいろ〳〵と毎日お世話になつてるBさん故すぐ居間へ案內した。

はじめの中は四方八方のお話をして居たが。急に鉛筆と紙を貸して下さい。と云ふから私は貸してやつた。すると、何だかゝいて私によこした。見ると、今晚用がなければ一寸門の外まで出て下さい。話したい事があるから、とかいてありました。こゝでは話せないこと。ときいたら成るべくは出てもらひたい。と小ごゑで云ひ出すからきつとお金でもかりに來たのだと思つて出ました。で門の側まで來て、お話つて何。と云ふと。もう少しこつちへ。と云ひながらBさんはずん〳〵先へ行くから私もあとついて行つたら、Bさんはもう前の桑畑の中に立つて居ました。一體何のはなしかと思ひつゝ行くと中々話しさうもないので何のお話ですか。こんな遠くでなきやできないのですか、私いやですわ、こんなくらやみでしかも男と立話なんか人樣にみられてもこまります。有るなら早くはなして下さい。できることなら聞きますから、と云ふと漸く口をひらいて。

私の話つて何でもないですが。その……あなたは……あなたは……あの……と云つて後が一つも出ないので私が何ですか、早く云つて下さいこんな淋しい所にいつまで居るのはいやですからと、私は全たく恐ろしくなつて體がぞく〳〵ふるえながら云ふと。こゝでいやなら僕の家に來て下さい。何なんでもない話ですから、私はいくら信賴した人とはいひながら男と立話などしかも此のくらやみの畑中でたとへ惡い話でないにしても見た人は必ずよくは云ふまい。何だか大きな罪でもをかしつゝあるかの樣で心配で心配でならなかつた。ではお宅へあがりませう、私あとから行くから一足お先へ、と云つて家へかへつた。で餘程行くまいとは思つたが一旦した約束をやぶるのは私の一番きらひなこと故、提灯つけて羽織をきて行きました。道々一體なにを話すのかしら、と思ひBさんの家につきました。で私は成るたけ早くはなして下さい、と上るや否や云ふと、Bさんはいつになく恐しい目で私のかほをじつと見ながら、あの……あなたは、とまた畑の中の樣なことを云つて。おあとゝりですか、と云ひました。私はあんまり問の意外なので、えゝッ、と答へた。すると失敬にも、あなたはですね、若し誰かゞ嫁に行かないかと云つたらね。何と答へますか。例へていふと私のやうな者がね。私の所に嫁にきてくれないかときかれたら何といひますか。つてやつぱり前の樣なかほをして私が何う返事をするかをまつてゐるやうであつた。私は問の意外なのに驚くと同時におそろしくもなり又腹立しくもなりました。で私は、こんな時弱點を見せてはならぬと、袂からマッチを出して歸る用意否逃る用意をして、私にそんなこと聞いて何になさるの、其返事からお先きにと、返事を待つまねして、提灯持つて一目散に五町程の吾家の方へ――。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　大阪市　小泉貞子

藏に泣く若衆姿の久松がものいひにこし春の夢かな

○（地賞）　福島市　木下春子

みこゝろに住ひて嬉しやどかりのかにのたぐひにあらねどもわれ

○（人賞）　陸前　小岩やなぎ

この頃の日のはなやかさ花巻の藤木の神の藤こひしけれ

佳作

○　佃野の百合

うすいろの直衣の君が蹴上げたる鞠より散りしたちばなの花

○　鹿兒島　中尾しげの

世の外を歩める故ぞ群集のどよめきにゐてもだしてあるは

○　若狹　城子

われ少女山の小鳥よ馴れがたき戀をば汝れに告げんと來る

○　月草女

狂ほしき我が文うくる人もがなかくて涙す雨のこのごろ

○　尼ケ崎　泰子

六甲は溪川の水清くして麓に建てる灘の酒倉

○　岐阜縣　佐藤央子

初春の朝の湖しづかなる小雪まじりに翡翠のとぶ

○　栃木縣　うすむらさき

をんなの手君がとりしを見しでとき驚きふとも胸をおほひぬ

○　栃木縣　愛媛宮子

寂しさも水に浮きたり悲しさも水に浮きたり春の夕川

○　京都　川原つぎ子

逢ふごとに君たのしまず解きがたき謎のみ飽かず云ひ給ふかな

○　本郷　平塚白百合

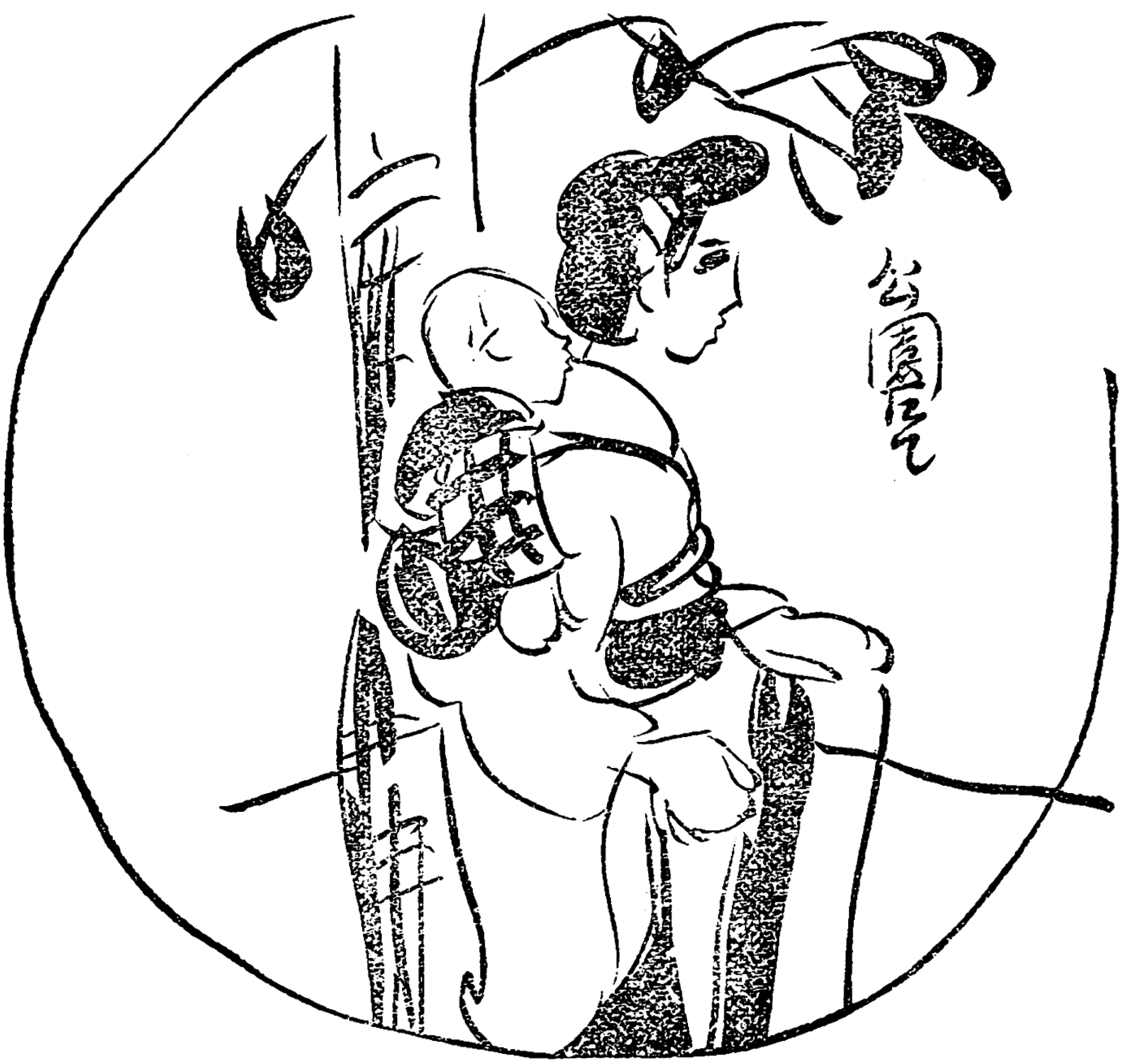
すがやかにあかるき五月野の色に光をさせるいさゝかの風

○大阪　村田擴子
ゆく春や口三味線のたはれ女の歌ふに似たるかなりやの聲

○大和　白葩城
うば玉の髪のほつれをかみしむる女の部室のくらき灯の色

○仙臺　橋本志久子
うたひめが人をまつまの絃の音になき合すらむ初冬の鳥

○愛知縣　瀧本逸子
吹く風になつらへてさく夏山の木陰の白き一重なる花



公園にて　芝　後藤明あさ子

○群馬縣　新井つま子
地の下に大鯰ゐて地震すると思へりし日は安かりしかな

○和泉　高添みどり
大木のうつろに咲ける花のごと淋しきままに散らむとすらむ

○靜岡縣　田中ゆり為
目とづれば錦の衣のさゆらぎの音とも聞ゆ初夏の風

○和泉　高添みさを
つまかはのよだれに光る街燈のやるせなくして五月雨ぞふる

勢　伊　子

○我科を神の責むると死をゆるめ胸に抱かす千斤の石

岡山市　桃の村女

○駒の脊に小唄をうたへる人渡る河の中洲の菜の畠かな

京都　くれなゐ

○炎吐く山を並べる心地して騒しきかな男とあれば

淡路　高田清子

○うち吸はれ夢てゝちすれ絹のごと冷き春の夜の唇に

山口縣　椰良美那子

○夕闇に何とも分かぬ黒き影出ては誘ふ我が涙かな

岩手　清子

○水色もはた桃色もうつろひぬあまた年へしわが戀衣

徳島縣　杉山雪月花

○落椿ふみて少女が物思ふ春の夜にあるおぼろなる月

徳島縣　蔦紅

○悲しみを知らざる戀の如かりき朝の湯槽に身をひたすとき

福井縣　土屋智惠子

○去年の今日君とかたりし大寺の庭のまがきに桃の花ちる

大分　みね子

○行き詰り死よりなき日を思ひては猶此胸に涙のにじむ

石川　まさ枝

○いく年のしみがやどせる針さしのひぢりめんにもおもひでの湧く

本所　かすみ

○植ゑ替えし鉢の菫は明方の雨に倒れし胸騒ぎかな

山形　藝子

○星一つ流れてさびし天地も死せるが如き墓場のあなた

高知市　北村美佐夫

○夏衣長など延ばし少女子は春と別れのさも待たるゝや

兵庫縣　伊藤美佐子

○月は入り日はいき出づるあけぼのに君呼ぶ鳥のなつかしきかな

下京　大井順子

○すが〱し若葉の香などふかくすひつかれし魄をねぎらふわれは

伯耆　新田文子

○春風に夢さめしごと青麥の輕きゆるぎに哀愁のわく

牛込　花山院公子

○舞ひかざす金扇に灯の影更けて雨靜かなる祇園の町よ

伊豫　高橋政子

○なの畑に太陽は今落ちて七色の彩雲寫す湖の面

紀伊　夕浪

○野の獸ゑさをねらへる爪のごと鋒をつらねて起てる世の人

山口縣　いさを

○いち早く世に別れこしわれ故に樂しむ外にうらめしさなし

函館　藤本鳥羽子

○ふさ〱とこぼるゝ髮をくしけづる鏡の中の白きかひなよ

宮城縣　ふく子

○日の神はうす紫のとばりよりゑみていでます花匂ふ朝

福岡市　小岩井なみ子

○つれ〲に拾ひし松露まおらすと胸やむ人の磯のことづて

京都市　島本久惠

○花ちればあはぬ日數のかなしさよかへらぬ事をせし心地して

大分　佐藤露草

○成らざりし三度の戀のはかなさを想ふに春の夕べはよろし

福井　明ノ星

○今日も又蜜柑のやうなうすあまき戀の香ひを强く覺ゆる

奈良縣　安浪ふさ子

○急流に垂れし柳に微なる音して下る朝の舟哉

○　東京　藤田美夜子

なほ今もあきらめかねる我胸に強くむち打つ君いますずや

○　信濃　保科伊津子

あゝ若葉其の靜けさに我はおて戀しき君に文まゐらする

○　鹿兒島　葵の花

白桃の花さくほどに春の雨すゝりなきするまひるしづけさ

○　京都市　佐々木野菊

咲き匂ふ櫻の花を見る春に君がいまさば嬉しさのます

○　近江　瑠璃香

こそ／＼と軒打つ雨に一人居の春の灯佗し心も佗し

○　備中　小見山春

氷雨降る夕なりけり黑髮のほつれにも見るものゝさびしさ

○　愛知縣　中村百合香

いとやすく死なむと誓ふこのふたり生きてある日は翅ある如し

○　新潟縣　矢作綠

たえだえに若き男の名を叫び牡丹の如き血をはきて死ぬ

○　越後　星野かへで

萠え出でし我戀の芽と木々の芽と共にのび行く春とはなりぬ

○　長野市　みどり

紅き花去りにし春を慕ひては葉蔭に一人物思ひする

○　橫須賀　いなめ

朧夜の靑さ靜けさほのかにも咲きし花あり散りし花あり

○　大阪　本山すま子

吾ひとり戀を知らぬにあらねども戀ひぬべき子が戀しらぬなり

○　下野　早乙女久枝

寂しがるひと日なりきと悲しがるひとひなりきと夕草かむ

○　栃木縣　早乙女隆子

みづからの捨身つくるも堪へがたしやぶれし戀をわするゝなくば

○　渡島　美津子

春雨のけぶる眞晝に浮世畵をみる目もさびしうつろなる我れ

○　上毛　小澤竹子

ほのほてり手にも來りぬ面伏し春の夕を一人數けば

○　群馬　關口ちよの

箏やめてしばし心をとゞむれば雲井遙にほとゝぎす泣く

○　水戶　小湊春雨

夢に似し美し少女の笑むがごと花咲く頃の月はあるかな

○　栃木縣　加藤うめ

何事か云はんとはして言ひはてず拍子ぬけたる幼子の顏

○　仙臺市　三浦藤江

わが淚君が淚と相よりて野草育てゝ花咲かすべき

○　上總　鈴木喜子

朝霞わが思ひのせ君おはすかなたの窓にうすくひけかし

○　渡島　露華

人並に笑ふてあれど少女子は悲しき胸を抱きてぞ泣く

○　失名

君を待つ少女心のわびしさに散りゆく花に思ひをよせぬ

○　堺市　浪香

春の日は錦飾りし少女子をながめて泣きぬ我は人妻

○　橫濱　白濱春子

傷きし血汐のにじむ指さきを淡き音立て吸へる悲しみ

○　仙臺　春野光子

そよ風に頰をばかすめて散る花を君は見つめて淚ぐみける

○　下毛　美代子

姉君と花見に行けばはや散りて道行人の踏めるかなしさ

○　佐渡　中山かず子

この指のよしや朽つとも折らるとも書かじとせしは君が名なりき

○　大阪市　寺井しぐれ

桃の花幾ひらとなく浮びては君住む里に流れ行くかな

○　岐阜縣　初音

我胸の熱き血汐の高鳴りぬ君の玉章手にふれし時

○　信濃　籠の女

若き戀清水の中に投げ入れむあつき血潮の冷え終るまで

○　神戸　緑髮子
讃美する赤酒と白きかひなとは吾がわかき日の憧憬にして
○　京都府　竹村槇子
おだやかに水に群れ居る白鳥に朧月さしぬ春の夜越しに
○　茨城　田村紫色
晩春のたんぽぽ一つ摘み取りて口にてかみぬ君思ひつゝ
○　新潟縣　上村恒
そのかみはある一人故ねつも血も多く持ちにし少女子なりき
○　横濱　荻月子
美酒の香にいつとなく寢入りたる翁のごとき春の横顔
○　横濱市　石川八重子
白すみれをれてしぼれて庭隅に枯るゝを見ればあぢきなし世も
○　大分市　小原芳香
羞づかしく嬉しく戀のわか君と歩けば人の目のけはしけれ
○　加賀　村田糸子
菜の花のつゞく彼方の山かげに火葬の煙の立ち上る見ゆ
○　加賀　朧峨野
春の風花吹雪ずれかろやかに髮よりうすき羅をかつぐわれ
○　神田　高橋千代子
君を得し我が喜びと誇りとは世の男の子らを土くれと見る
○　神奈川　浮草
夜もすがらはた日もすがら物思ふ幸なさを少女と云ふや
○　東京　若菜子
歌舞伎座のはな道をゆく心地しぬ二人してさす紫の傘
○　下澁谷　櫻谷ゆき子
わが白刄の前にひれ伏す男等のおもひによりておまりそめつる
○　廣島縣　宮垣はつ代
八重櫻其の下をゆく眞淸水に夢をうつしてほゝ笑めるかな
○　岡山市　桂木淑女
あゝ四月うす紫の花つみて遠き昔の夢もしのばむ
○　日本橋　村木露子

紫の衣買ふ人の美くしや花粉飛ぶ如街の雨降る
○　金澤市　宮澤愛子
只だ一人あらむばかりに墓にきてたたずむ人に梅のもの云ふ
○　前橋　みづ枝
雜草の中に生れし草いちごこの赤きみよたれに似るらむ
○　下總　浮舟
新らしきこのしら壁にわが影のやつれ覺えてさしぐまれぬる
○　濱松市　玉枝
病みませる我姉君のなぐさめにおらずにのこれ山吹の花
○　信濃　山口青子
淋しさよ爪をかみつゝ戸によればふと胸をつくたき火の匂ひ
○　千葉縣　坂本ふさ子
御神に我が戀のこと願ひけり櫻ちりなる春の夜にして
○　三重縣　米田きよ子
春三月野邊に花つむ少女子よ雜草のみはのちもつみそね
○　靜岡縣　田中ゆりゑ子
かりに見し君を戀しと思ふらし涙をぞする悲しからずや
○　下關市　財間濃生子
春は來ぬされど歸らぬ我が姉のみ墓に椿淋しく散りぬ
○　東京　白鳥正江
わびしさも春の小鳥の宙がへる白楊のかげにあざわらひつゝ
○　山口縣　宮原よし子
我が涙色のつきぬるものならば赤とならましよれるおん胸
○　山口縣　松尾倭文香
白き花散りたる頃の夕よし闇と光の地を迷ひ居ぬ
○　越前　櫻尾律
なつかしとおん文抱きふと我に返りし後の恥らひ心
○　芝　仁八八千代
しめやかに春の雨ふる午過ぎに琴とりいだしひきぬはらから
○　播磨　梅香女
おぼろ月櫻の精か知らねども木かげにたてる人の淸らさ

○むらさきのふくさもあかる少女子が花の中まりいで來りける　大阪　石黒つや子

○蛸うかぶ汀に櫻ちりまがひ四月の末の日のくれてゆく　京都市　林田逸子

○大阪市　本山しげ子
なんとなき少女心のなつかしさ赤きえりなど見入る雨の日

○安房　吉田秋子
昨日までわが知らざりしこし方を聞くも儚なし母なしにして

○阿波　行雲女
夢にだに人の情にすがらじと心なしたる孤兒あはれ

○羽前　長澤美也子
我が織はかゝはりなしや名なくとも愛づべき花を折るが如くに

○いみじかる清き眞白な少女てふ名のもとにゐぬ淋しき人も　北海道　美夜子

○そのかみのわれらはらからの水汲みし井に今もたつ山ざくら花　吉備　小田美鳥



しやぼてん　京都　久芳ほづ枝

○君思ふ泪に曇る眸をば見ましと鏡取り出でしかな　山形縣　伊藤智惠子

○北海道　露香
何故ににがき盃強ひたまふ我は神の子少女子なるに

○小石川　富美子
野邊めぐる七里つゞきの楢林夕靜かに紫をずる

○熊本　白萩
女にて獨り生くべく思ふ世と冷たき笑に君を見上げぬ

○那須　森尾光子
もの思ふ身には石とも思はれぬ胸に散り來し花の一ひら

○竹尾古代子
よろこびの玉を抱きてありつるとふとこゝろづく時のくるしさ

○　仙臺市　赤間くに子
春雨のそぼ降りつゞくこの頃はわが思出の胸のいたまし

○　周防　財間のぶ子
夜の更けて小溝流るゝ水音す琴彈く友のいとゞ戀しき

○　越後　幸子
梅咲けど木蓮咲けど冬越しのわが浮き立たぬ心さびしき

○　本町　百合花
朝夕見れどもあかず嵐山白き櫻に緑交りて

○　美作　橋本紫
一本の老木も若葉吹きそめてうらなつかしき初なつとなる

○　牛込　鈴木武子
落散りし椿浮べて奈良の児が遊ぶ小川の春の夕ぐれ

○　呉市　山本哲子
そのかみの美女のをはりもかゝりしと鐘のひゞきて櫻ばなちる

○　京都　壽賀子
いと少さきことに苦しむ我なりき何事にさへおびへぬるかな

○　はりま　鶴岡みつゑ
來ん春は共に愛でむと植ゑにたる花は咲けども君は世になし

○　豐後　帶刀ふみ路
あたゝかき一日を淸き川べりに笑ひて泣きて君と語りぬ

○　京都　要司村福子
街かどに芝居もどりのひとむれはさゞめきあひて別れゆくかな

○　佐渡　藤村ちか子
囚はれの籠の小鳥の囀りは春を呪へる聲と聞かずや

○　日本橋　仁村はづき
夢にさへ君住む町をさまよひぬ初戀つくる十五の少女

○　滋賀縣　絃聲子
玉をなす青葉の露も何時しかは風に散る身の哀れ果なし

○　姫路　靜子
亡き父のみ墓に香る水仙花冷たきつゆに撓むあわれさ

○　備中　大西千登勢
白砂に君の名をかき我名をも並べてぞ見る月の夜の磯

○　堺市　西村みち子
そのかみを忍ぶはゆゝしつよければ唇かみて活きむ願ひに

○　淺草　露の玉
嵐來て知らぬ間に散る山さくら幸福も誇りもあるべきものか

○　城南の里　小島鈴枝
遠山の暮れゆく姿いと悲し亡き我姉の眉に似たれば

○　秋田　愛子
世の旅に疲れなやみし吾頭よ若きが故に淋しさの湧く

○　岩代　多都子
はかなさよこの花の枝たわめもちわが世の春を人はぬすめり

○　豐後　首藤今子
行く春の雨になやめる蝶のごと花にはぐれて心みだるゝ

○　信濃　世良田優子
灯の前に手を透かしつゝ血の色を眺めなどして春の夜をゐぬ

○　深川　鈴木美喜子
こぞまでは人形とりてよろこびし愛兒世になし誰にあたへむ

○　兵庫　紅雀
窓近くましら來てなく谷かげの一つ家に居て赤き灯を戀ふ

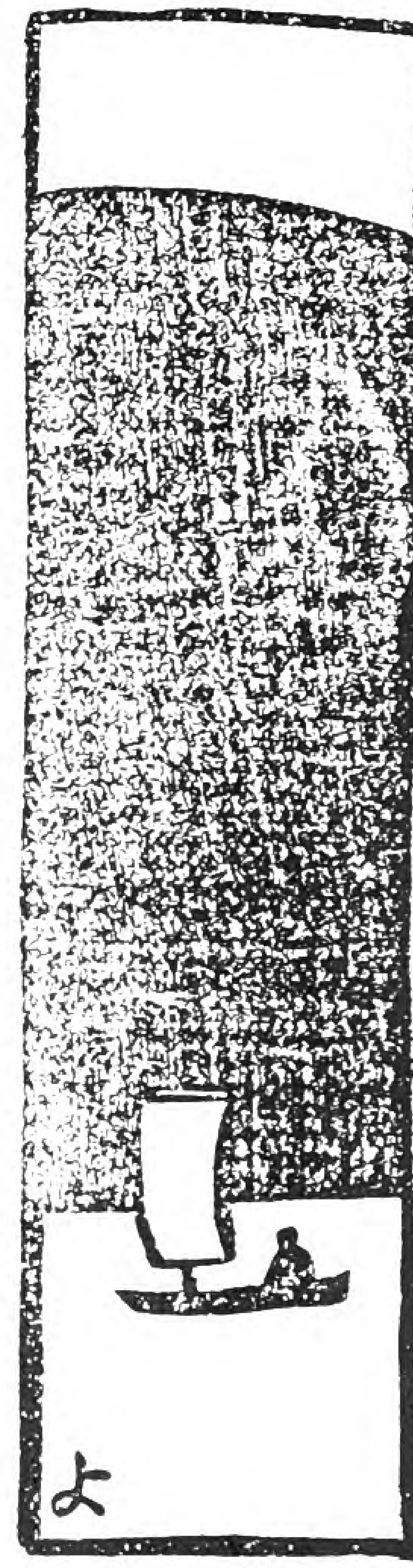
○　伊賀　中村こま子
我むねをかたらんとする日は暮れてつひにはかなく別れむとする

○　神戸市　平櫛多美子
燒山の草の芽生のなつかしさ雨後の夕日は汝が唇に似る

○　周防　重原美女子
日に月に衰へてゆくわが家と吾とを神よ如何にしたまふ

○　山城　木の花
丘の上の青玉色のよき色の木にきてせみは初ごゑをあぐ

○　高知縣　望月律子
假寢も安からざりき美くしき舞姫君に言ひよると見て



自然（散文）編輯局選

○晩春

京都　廣江曉子

大かたの花ちり果てゝ、濃艶なぼたん櫻に春の終りの惱ましい雨ふる頃、夢の樣な夜ともなれば、私の胸に小皷のしらべのやうなおぼろかな追憶の夢がゑがかれる。長い〳〵廊下であつた、編絲に名香のにほひしむ紫の房も古い簾のたれた室を右手に、左の庭の砂路には牡丹がやがて緋に白に咲く！紫衣の人に數へられたけれど、深き〳〵夜の闇に簾洩る燭の灯はとゞかぬ。白足袋の先にさゝやかな音をたてゝ、鶯ばりの廊下はぼんやりと行く程の暗がりにつゞいて、前からも後からも花の巣の夢よりさめて若鶯の深き夜を一人言するやうな同じ音がおこる。ほのかに浮ぶ白い顏、中啓の銀泥がひらめいて、やがて行き合ふ衣の袖は紫と青であつた。

そしてまた、何處かで人の聲がする、簾の垂れたどの室からか、幾重にも折れ曲つた緣側の行き合ひに立ち話しでもするらしい。

曲らうとする角の柱に、火の用心としるされた、角な行燈がかけられて、墨染の袖ももつれ合ふ計り親しげに話しながら行くうらわかい二人の僧の横顏を眉にほやかにてらして居た。行燈の灯の動かぬ程の風に、はら〳〵と行き合ひの雲間をかすめる雪の樣に花がちる赤うあらはした櫻つなぎの提灯をさげた紫衣の人青衣の人の長い廣い袖に、ちりかゝつてまたほろ〳〵と薄やみの足元にこぼれて、今にもほうつとうき上つて舞ひ出でさうに白く光る、簾のたれた室はつきて兩側ともに庭であつた。

ちら〳〵とちら〳〵と微風にやさしく身を投げかけて花がちる、春去る恨みをやう〳〵におぼえ初めた十六の上げたばかりの我が髮にちりかゝる花の、限り知らずなつかしき。それは智恩院の御忌會も果ての通夜の夜であつた、かゝる夜の廊下づたひに奧深く、髮長き女のゆくべき處ではなかつたのだけれど、やはらかにひかれた叔母さんの手をちからにすがる樣にして、私は

たゞ夢のやうにあるいた。

大殿の縁にたゝずむ、美しい尼僧の姿に心動かされて清らかな白衣に墨の衣の氣高さを忘れかね、春さりて夏ふかくやがて蟲なく頃までも、眼を閉ぢてはじつとその姿を思ひうかべて樣々の空想にふけつた、我が若き日を白蓮の花の聖さにたぐひて、有髮の尼の心持に寂しい笑をもらす事さへあつた。

咲きくるふ花の蕊とならんで無數の蠟燭がかゞやく明るい大殿に足踏み入れて、ほつと夢からさめたやうに花の香と暗がりになれてきた身を見まはした。もあふるゝ程の通夜の人にまぢつて念佛の聲の渦まく中にありし夜の不思議な心持ち。

京の九條の町にはむせぶ樣な落花のにほひこめて、あたゝかに夢にふけゐ眞夜中、見下せば夜霧に濡れてこれもまたさめたりとは思はれぬ灯の影淡く、便りない漁火とも思はれて、山間の古き都に野とも海とも。かゝる時圓き華頂の山のみさめて、徂く春の名殘を灯に惜む集ひのやうな御忌會のなつかしさ、かくてぞの中の一人なりしよろこびを、今も忘れかねて八重櫻ちる程に我が魂はいよいよふかく、灯も人も花もおぼろな、床しい鶯張りの廊下を夢む。（天賞）

地は平安の京、場所は智恩院の奥深く、落花に埋む鶯張の長廊下、紫衣の僧と、十六の少女と對照既に浮世のものにあらず、行文更に古雅、古の紫式部、清少納言等が書ける心持に似通ひて、祇園精舍の鐘の響、沙羅雙樹、花の陰、ものゝあはれのしみぐと幽遠の境に心を惹かる、想あり、京都の地、此才女を産む、蓋し偶然にあらず。（評）

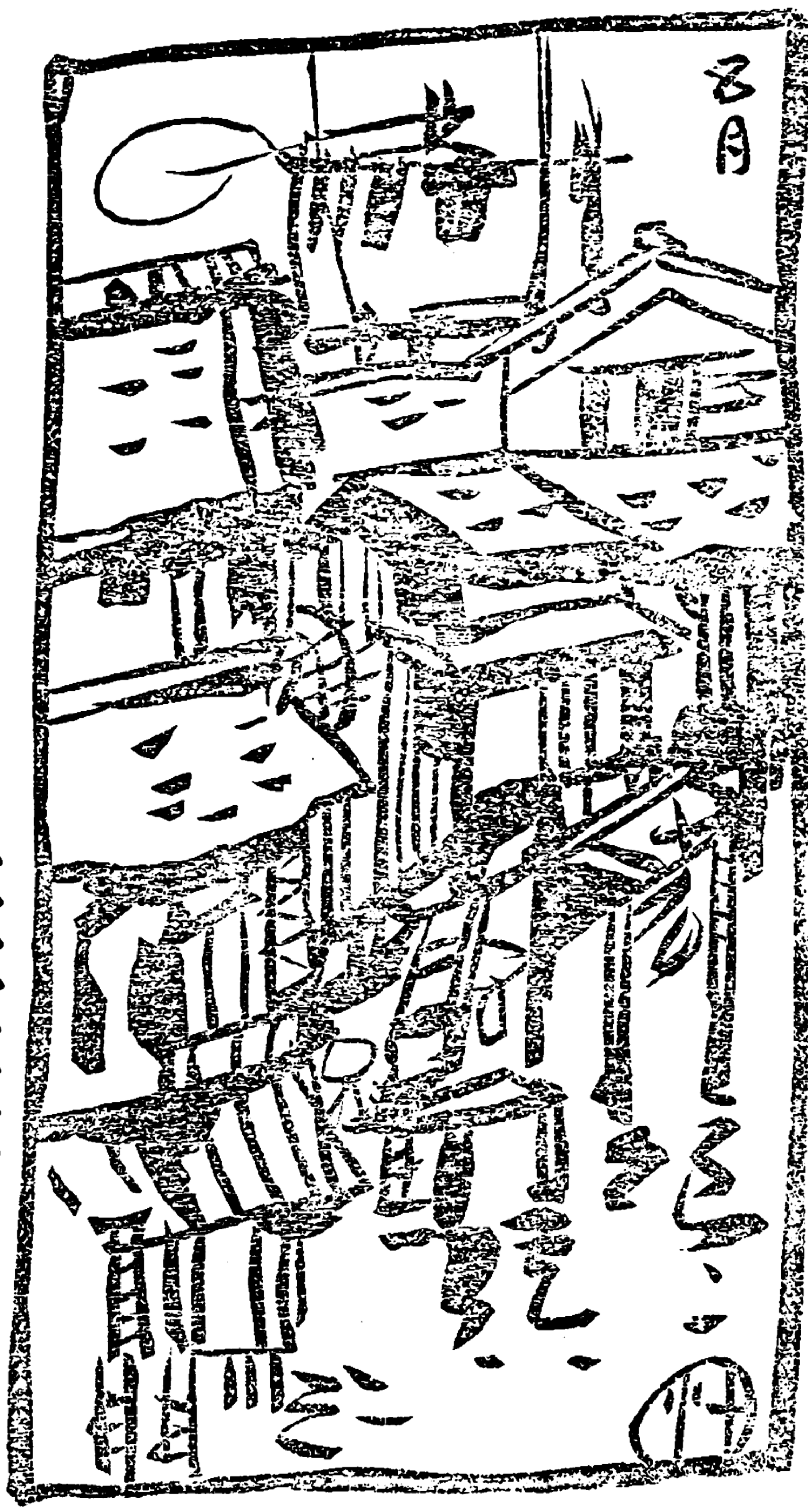
○梭の音

信濃　美水

二階の窓を明け放して、朗かな春日を浴びながら、赤い帶地を、トン、バタリ、トンバタリ、と織つてゐると、どこからともなく、味噌豆の煮える匂がたゞようてくる。窓近う初燕が、すつ、すつ、すつ、と横ぎる。私は、時々外を眺めてはうつとりとする。大きい梅の木の枝が、ひさしを越えて窓の際までのぞいてゐる。眞赤いつぼみの中に、うす紅の一重の花が、まばらに開いてゐる。梅の下枝に、小鳥籠がつるされて、中に弟の愛鳥ひはが、小さい水ばちで盛に水を浴びてゐる。色色の小鳥が庭の木々にさへずつてゐる。うぐひすは？と、時々耳をすましてゐるが、ホウホケキヨウの聲はしない。群をはなれてのきばたに、二羽のすゞめがならんでとまつて首を傾げてゐる。巣を作るのだらう母は縁がはで、冬着を解きながら「お前の梭の音を聞いてゐると、ほんとに眠くなつてしまふよ」と、さもねむさうな聲でいふ。これでも私は一生懸命だ、時々

絲が切れて困る、母が織ると、一日中にも絲をきらさない位だ、いかにも樂に面白さうにおつてみせる。

私には、どうしても眞似が出來ない、ちよつとでも母のやうに調子よくおろうとすると、すぐ三四條も一所にきれてしまふ。綺麗な赤い、まんなかに黄とオリーブが川のやうに入つてゐる、私の帶ほんとに美しい帶だもの、綺麗におらなければいけないので、しかたなく、トン、バタリ、トントン、バタリ、と織つてゐた。南の萩さんが、高いこぶしの木の下に立つて私の方を、笑つてみてゐる。梭の音で私だとわかつたのだといふ。私は、梭の音をきかれるのが、何だかはづかしいやうな氣がして、窓からひさしへはひ出た。もう白いこぶしの蕾が、ふつくりとふくらんだ私の嫌ひな垣根の黄梅も咲き初めた。むかふの田圃で摘草をするをさな子のうたう唱歌の聲が、とぎれ／＼に聞えてくる栗の木の小枝に、芝蟲の繭が一つ、搖れてゐる。綠色の綺麗なあの繭からどんな蝶々が生れるんだらう、弟にみつからないやう祈つて置く。萩さんは、柳の花をむしつては川へ流してゐる。（地賞）



五月　山口町　波多野修子

自然を描いて、これだけ甘味のある文章を作る人はいい、疑へば異性の疑ひがなきにしもあらずだ、女らしい事は書いて居るが、女らしい心持は表はれてない、これから表はれるかも知れないが、今の處では表はれてない、異性なら別問題だが、女性ならば確に異數だ暫く作物の進行を見やう。（評）

○花咲く日は

金澤　紅子

種子を蒔いて四日目の朝である。太陽が出たので私は早速庭へおりて、土塀の隅のさゝやかな園の中から幾つもの鉢植を出して、日向に並べた。二日にわたる雨を辛くもよけては居たが、しつとりと冷めたさうになつてるのを、柔かに暖かい朝の太陽にあてゝやるのがうれしかつた。

ふと思ひついたので、お彼岸はすこし過ぎて居たが五種ばかりのたねを買つて來てまいたのである。私はかういふ事には殆ど經驗がないので、ねつから工合を知らない、けれども時々耳にはさむだ、人のはなしやまた、學校の理科で先生から聞いたことなどを僅かのたよりとして、この數多の――私にとつては――草花を育てあげようといふのである。至つて不安ではあるが、彼のために常に親切であればいゝと思ふ。

細かにふるつた土をつめた鉢の面に、胡麻粒のやうな撫子のたねをおろした時、土か、種子か、見えなくなつて仕舞つて、とりかへしのつかぬ事にして仕舞つたやうな、不安な、まアこんなで果して芽が出るだらうかと誰かに云つてもみたいやうだつた。その上へ砂を少しばかりふりかけて、指さきでそつとおさへておいた――寢かせた赤ン坊の家具のすそを一寸たゝいておくやうな氣持で――。

幾日かの後、柔かい綠の芽をあげた時には、どんなに嬉しいことだらう、少しのびた頃、あの中櫺子を廻つてずつと細長くこさへた床に、植ゑかへるのだ。そして……この廢屋を飾つてコスモス、スタアフロックス、オニゲシ……と、交々、白赤紫の花がみだれるとき、どんなに樂しみなことであらう。（入賞）

細かい心遣ひが女性らしくて嬉しく思ふ。（評）

○暮春

本郷　平塚白百合

汗ばんだ桔梗色の空に、ミルクを流したやうな雲が淡く日に動いてゐる。しつとりとした機械工場の煤煙は輕動もなくぼうつと氣の抜けたやうな噴き方をして、やはらかに立のぼつてゐる。

春の殿として殘つた鬱金櫻も涙のやうにしほれてしまつて、靜かに何處ともなく大きい力が張つてくる其の瞬間のやうなしづけさが、若綠の匂ひの中に甘いさゝやきをこぼしてゐる。

フツクラと萬象を包む雰圍氣は、快よい倦怠を覺えて、夜は雨のだるい音もした。

かう何となく水をふくんだやうな四月終りの日は、思索する事さへ物憂かつた。ふれるものもなくハツタリ落つる椿を見ると、いひやうない悲しみも甘酸く流れる。一たいに濃い停滯したたまり水の中に、つかつてゐるやうな暮春の心もちよ。

さわやかな五月がくると、自由と、豁達とは強く羽ばたきして、凡てのものに活動を力づよくあたへるのだ。白く光る道には伸々して人達が、明るい顔して快よい歩調に行かふ。
私は早くそれがのぞましい。

　廢頽したやうな今の氣分は瘠地に住居する人達にふさはしからう。

　木苺の白い花がやつと夏に推移して行く爽快な明るさを見せ出した。

　空の色にはまだ光がない!!

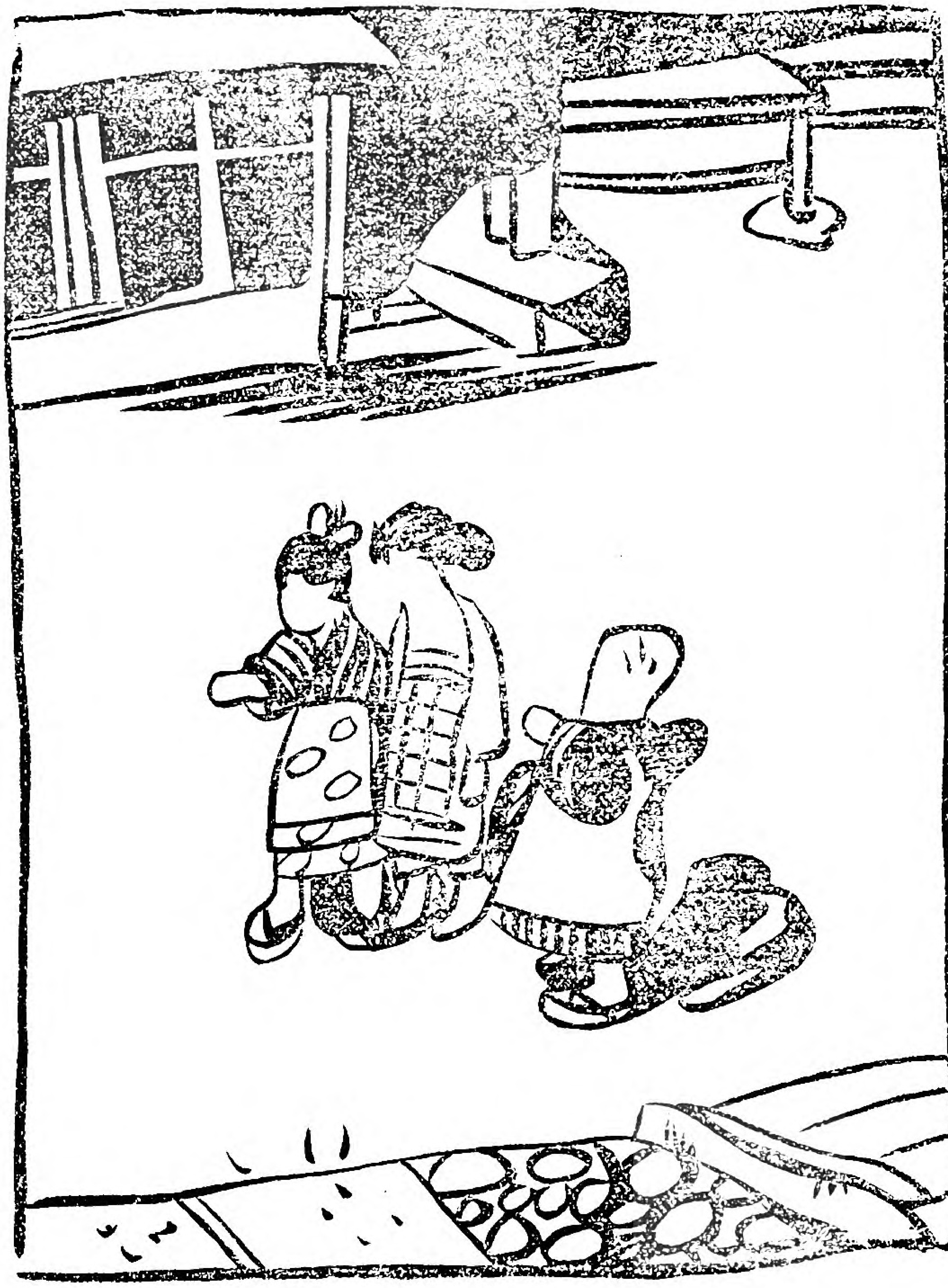
　例に因つて才氣の縦横を見る。（評）

〇櫻の命

山の女

　昨日の暖かさで川岸の櫻がライオン歯磨の粉をふりかけたやうに、どの枝も平均に半ば花となつた。

よく一しよに通る人が「これと貴女の家の前のとがこの界隈での名木



まひる　　陸前　黄川田かよ

ですねえ」と云ふのであるが、毎年細かい枝がどことなく赤みをもつ時分から、花が散つてしまつて、光澤のいゝ茶色の若葉が、緑に變つてしまふ頃までは、誰にでも目につくほどの大木だ。どつちも自分には想像のつかない年數を經てゐる。兩方とも臼の作れさうな太さの黒ずんだ幹が、青いフラシ天のやうな苔を吹いて、程よくうねつてゐるのが、花の盛には頼もしく見える。

　咲くのも散るのも早い家の前のは、今日が眞盛といふのであらう花の陰になるのも避けるやうに明るく咲き揃つた花をじつと見詰めてゐると、今にも、うすい羽となつて飛んで行くやうな身輕さを、花にだか自分の身にだか覺える。けれどそれは木の一部分に過ぎないのでほんたうは何とも言はれない寂しさに誘はれてゐるのである

つひこの間この軒下で何かの話について「春寂しいなんていふ間抜があるかい、春はみんな氣が浮くんぢやないか」と言つて「だつてさうとも

限らないよ、一方明るければ一方は暗いと同じことで、國さんだつてさうぢやないか、人はみんな、花見に行くの何のと言ふに自分一人錢は無し酒は呑めずといふ日にはどうよ」となだめるやうに言ふ大工と爭つた國さんも、今日は眞木割の手を休めて「あの櫻も長いことは無いなあ」と嘆息した。

去年までは川岸のと同じやうに、枝が密で一つ二つ咲き初める時には、まるで赤い絹絲の編物の中から、白い花が飛び出すやうに思はれたのを今年は生憎霜の下りた朝に、無理に皮を剝がれたやうに咲いたそのいぢらしさがいつまでも目に殘つてゐる。

「この櫻はたうとう藤に負けてしまうな」と、國さんは獨言のやうに言つて、瘤のある眞木へ力一ぱい斧を打込んだ。

美しい櫻へ美しい藤がからまつて、あのと言つてもこのと言つても差支ないほどの近さにあるのを、此家へ來た年から奇蹟のやうに思つてゐた私は、これから一日一日に枯れて行く櫻をじつと見てゐるのが堪へられないやうな氣がして來月咲く藤のことを思つたが、まだ寂しくつてしかたがない。自分の命にかゝはることでもあるやうに。

昨日に引きかへて、今日は四月にも三月にも珍らしいほどうすら寒い日であつたが、川岸の櫻は朝よりずつと白くなつて川でも丘でも越えて動き出しさうに見える。

時候はづれな風に一ひら二ひらとんでもないところまで散つて行く家の前の櫻には、まだうすい夕日がさしてゐる。

見かたは新しいが文章に生氣が乏しい。（評）

○二階より

翠松子

新築の倉の二階が、大層見晴しよいと、皆がそういふもので、まだ壁をぬつたばかりで、楷子段も無いのですけれど、上つて見たくてなりませんから、大工の上り下りする、あぶなさうな、楷子から、ふるひくたうとう上りました。

板を一枚どほり、張つたばかりですから、何だか板が折れて下へ、ドサリ！と落ちるやうで、足がぶるくふるひて、先へ出ません、敷居の上を渡つて、やうやく縁の手すりへ、よつかゝる事が出來ました。

そして方々を見ました。

下で見ますと、仲々大きい、耕すには、さぞ大變な事でせう、と思はれる畑が、案外少さく見えます、殊に私が作らした、草花の苗床なんか、疊一枚位にしか見えないのですもの、ほんたうに、をかしくなります。

野邊に遊ぶ時、頭の上を走る、蝶々の目にも、やはり、私なんか、少さく見えるのでせうか。

茶畑の中の古い柏の木は、こげ茶色の去年の葉をつけて居つて、春になりましたのを知らないやうです、野には紫のすみれも、黄色いたんぽぽも、笑つて居りますに……ですがまもなく、あの香のよい私の大好きな柏もちを頂けます。

見ゆる限りは、茶樹を境にした、青い麥畑で、人家は五軒ほどしかありません　瓦ぶきの家は、前の店の小さな倉ばかりで、あとは皆、草ぶきです。

其麥畑の周圍は丸く、松山で包んで居りまして、丁度、世界は此川沼も田も無い、松山の中の、青い畑ばかりで、松山の外は、海でもうそこは天と連つて居るやうな氣が致しますが、之は私が心の中で作つた想像の世界です。

東北の、まばら松の上を、よく見ますと、淡青白く山が首を出して居るのです、之は月波の山です、今日はくもつて居りますから、山もぼんやりしてますが、よい天氣の日には、青い山の上に、宅の眞白な、小猫位の物が見えるのです、それは測候所だと聞ては居りますが、ほんたうか、うそかは、まだ登山致した事がございませんから、わかりません。

ふと目を北の竹やぶに、うつした時に、ホーホケキヨーと云ふ、夏の朝を思はせるやうな、うぐひすの聲をきゝました、今日が初めてですけれどよく舌(？)がまはりますこと！どこかで鳴いて、鳴きあきて、こんな所へ飛んで來たのでせう。

南の梅畑の八重咲も、もう散つてしまつて、きたないですし、櫻は門

のかたはらに、うこんとぼたん咲きと五六本、あるつきりで、まだ固いつぼみで、つまらないでせうに、どんな氣まぐれ起して、こんなところへ來たのでせう、可愛相でなりません。

が空飛ぶ鳥の行動は自由です、さまたげるもの はあり ません んから、いやになつたら今日にも、他へ旅立つ事が出來ます、と思ふとほんたうにうらやましくてなりません。

鷄がなく。やがてもう、十時でせう。

空には、わらの灰をつかんで、なげつけたやうな、雲が出て居ります。

まもなく、麥笛も聞かれませうけれど、今日は何も耳に入るものがありません、只靜かです。

學校の先生に見せる作文と、いくらも步調は離れておないが、文章に眞實の氣があるから、他の上手に作る人よりも末の見込があります。（評）

○火事

深川　矢澤榮子

三月二十一日……午後……一時頃。

外が急にさわがしくなつた、何だらう？……と思つて居ると、近いぞ…近いぞ……と言ふ聲に、ハツと思つて飛出して見ると、白茶色の煙がモク……モク……と上つて居た、强烈な南風は、茶褐色の煙を北へ北へと吹付て來る、呪はれた街は灰色になつてしまう。

どこでせう？遠くは無い樣ですね。

洲崎ださうですよ風が惡いから大きくなりさうですな……たつみでも吹れ樣ものなら此方は灰になつて了ふでせうよ。

物見高いは江戸の常で、人々は火事だ！火事だ！とわめくばかり、そして不安の瞳で煙を見たり、おもしろさうにかけて行く人を見たりして居る。

ハツ〳〵と、ときの聲をあげて材木屋の若い男が二十人ばかりかけ出して行く、其の後から、二三人の小僧がヤアーイ……ヤアーイとつゞく、又後から犬までワン……ワン……吠ながら走る、アンマさんが、どつちへ行つたら安全かと、白い眼をパチクリ……パチクリやつて居るのを知らずに、ドシン……とぶつかつて、氣を付やがれ……横合の男が、氣を付ろい、てめえこそ氣を付ろ、この間ぬけめ、こつちは目くらだい、それでふり返つて見たらアンマがよぼ〳〵して居るのであわてゝ逃出すをかしさ、チリン〳〵と人波をかきわけて、ポンプが勢よく走つて行く。

火事はどこですか？學生が聞いた。ベランメエ火事は燒て居る所にきまつてらナア。

深川男は斯う卷舌で言つたまゝ、大手を振つて行つてしまつた、學生は、ムツトした顏して見送つて居る、常には學生も好いけれども、火事の時に、あの火事姿の勇しい男も何だか惡くは無い、だつて男らしいのですものね仕事師の姿は又いゝものよ。

卷舌の若い男を見送つて居た私の手近くで、アレ〳〵おいらんが逃げて來たよ、とお神さんが言つた。

大きな唐人まげや、つぶし島田が六人ばかり、十枚も重ねた草履をパタ……パタ……と引ずりながら、だらしない姿で逃げて來た。

妾も何も持たずに逃げて來てしまつたんだもの、どうしようね。

妾だつてそうさ、一生懸命にかけ出したんで、横腹がつつぱつてしまつたわ。

龜戸までもうどのくらゐあるんだらうね。

若い遊女はまゆをよせながら斯う言つた、年增の女は笑ひながら、これから電車へ乘つてそれから龜戸まで行くのさ、もう少しで電車道へ出るからしんぼうおしなね、遊女の對話を面白さうにめづらしさうに聞いて居た人も妾もアツとさけんだ。

だつて橋向、西平井町まで燒けて來たのですもの、パラ……パラ……ツと、四分板の燃えて居るのが飛んでくるんですもの、チリン……チリンと又ポンプが二臺行く、堀向では活動寫眞をうつして居る、車を荷を積んでハイ……ハイ……とひいて來る人や巡査がアブナイ……アブナイ……と非常 をはつて中々火事場へは入れない。

南風は益々强くなつて、灰や火を頭の上からあびせる。

詩

河井醉茗選

○弱き心の罪

ボートランド　悳美子

重い鉛が、此胸を壓し潰す
喪つた戀の苦痛。
自から招いた……
けれども、
まだ小供だつた。
私は何んにも、知らずに居た。

○

強い、チヤームを有つたなつかしい
瞳、
私の心が次第に引張られてゆく、
それから優しい微笑。
私の柔かい肌に、そつと觸れる時、
あなたの指先が、幽かに震へてゐた
けれど、
私には、どうして好いか分らなかつ
た。
夢、夢、そうだ私は夢の中を歩いて
ゐたのだ。

○

『戀する男の瞳の色……
その凡てを投げ出したやうな、
力の籠つた、切ない瞳は、言葉を交
はす以前に、既に相手の心に何物か
を語つてゐる』
何かで讀んだ記憶が思ひ出される、
あの瞳、あ、あの瞳、
それは、まさしく私の心に何か囁い
て、ゐるのだ。
けれども、私はどうして好いか分ら
なかつた。

○

フリーな少女時代………
華やかな女の春………
それもすぐ盡きるのだ。
あゝ、私は次第に老いて行く。
瞳が、そしてあなたの指先の震ひが
……
戀それが戀であつた。
から、意識した時、私の胸には暗い
淋しい、冷めたい哀愁の影が、深く
刻まれた。
私は、それから百年も、千年も生き
てるやうな、悲しい心地がする。

○

其後、一度あなたに逢ふた、
あなたの瞳は、新しい歡樂と新しい
希望に燃えて居た。
曾て、私の肌に觸れて震へた手は、
知らぬ女の肩に縋つてゐた。
夢から覺めた私は、遠い音の淡い歡
樂の影を追ふて居る。
焦悴れた頬をつたつて、熱い涙がほ
ろ／＼と落ちた。

○

戀ではない、

あなたは決して私を
戀してはゐなかつた
のだ。
過失……
それは、戀すること
を知らなかつた若い
心の罪である。
あなたの腕に抱かれ
た、知らぬ女、私は
其女を恨むことは出
來ない。
あゝ、私はあの時。
あなたの瞳の呟きに答へる言葉を知
らなかつた。
私は、まだ子供だつた。

○

けれども、
凡ての少女は。
戀を知る以前に、愛する男が進んで
戀を語つてくれるのを待つて居るの
である。



坊の春衣　　福井市　岸本てつ子

私もそうであつた
弱い娘心の、切な
い悩み……
私は戀を打ち明け
るべく、そして答
へるべく餘りに若
く、悲しかつた。
喪つた戀の苦痛！
それは私の、弱き
心の罪である。

（天賞）

これは譯詩ださうだ、原作者が何人であるか分らないのは惜しいが原稿はポートランドから來た、珍しいことだ譯詩にしても少しも譯詩らしくない、譯し方がうまいのだらう、詩を作る諸君に、好き參考を得たのを自分は欣ぶ。（評）

○暮れ行く野より

本郷　れい子

甘い悲哀になげく少女の頸よ、
ふくらむだ胸のにほひか、
夕ぐれに沈むで行く四月の野べのはかなさ。

眼路のはて………
なだらかにつゞく曠野よ
春の夕の心は際限もなく遠方にあてがるゝ。

湯氣のやうになま暖かく
い、い、
びーどろの様に冷やかな、若草の、
そのうす青い觸覺………

しつとりと濕つて行く夕まれ——
しのびよる羽蟲の群の翅音さへ
しめぐ／＼と濕つて行く春の薄暮に—
あはれわが血ばしれる眼さへ………尖り行くあせり心さへ………乳の下に燃えさかる、暗き血しほの力さへ………
しづやかに沈むで行く——たゞよふて行く、
四月の野べのくれ行くこゝろ。

たゞずむで、横はつて、やがて俯伏して
春のかひなのやさしい抱擁の中に
死のやうな眠りを與へて欲しい、ああねむりの様な死を。——
忘却の夢の死骸の、指の間に
れんげ草のしほらしい葩が
降りそゝぐ朝の光に眼醒る迄　（地賞）

此作者の空想的生活——藝術的良心は何の作から溢れてゐる、此作が以前の作より何の位進んだかと云ふことは疑問だ、絶えず作ることは好い——が、只其間に一大飛躍の時機を自ら發見し得ないときは、不斷の努力が引立つて來ない、作者自ら其時機をつくれ。（評）

○古沼

東京　白鳥　正江

うすれゆく夕暮の古沼に
負傷ひしものゝ臨終の聲の如く
降りかゝる枯葉！枯葉！
『死』の影にかゞやける反映………

おどろにふりかゝるさゞめきに
曲の色もなし——小鳥の死
絶えずくりかへす色暗き夢のかず
かず

鳥は死すとも色青き女は微笑み
計りえぬ森の闇さに心よく
ヒステリカルの夜をなつかしみ
かくして『死』の影をさまよひつゝ—
（入賞）

此作は思ひの外、苦んで出來た作であらう、見ばえはしないが、苦んだ作だと云ふことは分る、此態度で進んでゆくには何よりも個性を重んじてゆかねばならぬ。（評）

○夢のゆらぎ

京都　中野婦美子

靜かな夜
濃綠の池の面に
青白い月光は照つてゐる。

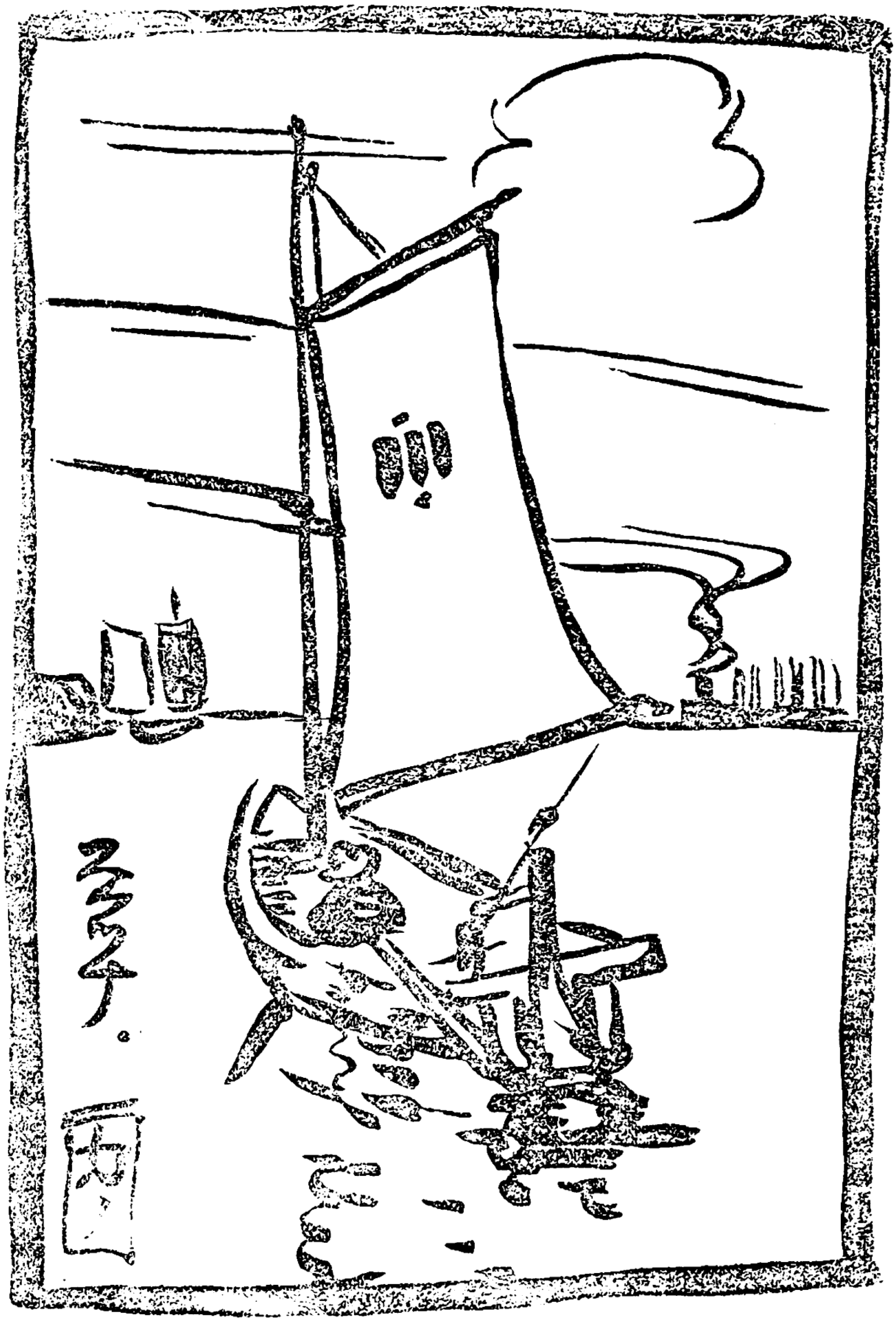
湿つた夜の歎息に、
汀の白い花は搖れる。
柔らかな夢のゆらぎ。
木叢の中から洩れてくる
マンドリンの顫音――。
私の心は、
月光の接吻けてゐる
華やかな波に、
靜に沈んで行く。

すつきりとした好い作だ。（評）

○殘れる悲しみ

富山　村山咲子

櫻もみぢの散りてゆく、波の漂ふ如くに美はしく柔らかきおもひを、われは夢む、
それは遠き昔の吾等が戀の輝きを――
されどいと鋭き官能を常に持てるがゆゑに
われは悲みの中に漂ひ
むせび泣く泪に任せ
かくてわびしき沈默の中に
われは哀れなる啞者となりて生く。
見よ、神のわれに授け給ひし烙印を
鮮かなる記憶の色を……



濱邊にて　山口縣　糯畑かの

あゝのこれる胸のかなしさもつとおちついて自分の感情を味はふやうにしなければならぬ（評）

○丘にて

横須賀　美范子

あめ上りの春の丘こそはこころよけれ
『青』に萌えいづるくさぐさ
に
黄な繻子にも似た小石のふくらみ

われは日にかゞやくこの丘の花すべてに
接吻をあたへむとする
短けれど强し、女性の作に似ず。（評）

○新芽の林
越後　星野かへで

昨夜の雨が浸込んで
あのまゝ綠が出來たのか
昨日までの裸木が
枯れた樣な枝々が
皆一樣に芽を吐いた
ぶなの林のうつくしさ。
一日うたつて、くたびれて
雨の降つたも知らないで
暖かい巣に眠つてた
小鳥が今も寺で撞く
夜明の鐘で目をさまし
林を見れば變つてる
皆薄綠に變つてる。
驚いたのか嬉しいのか
ピヨ／＼うたつて羽ばたいて
枝から枝をとびまはる。

少しも詩を見てゐない人の詩といふことが分るが、あんまり囚はれてゐないのも困る。（評）

○苦悶
越後　翡翠子

重苦しき眞夏の光りは、
濁りに濁れる堀割のそが中に、
血紅色の嘆きと溶けて行く。
泥舟の重き嘆きの悲しさに
倦み疲れたる心には思ひ出もなく、
纏いなやめる生ま暑きにほひと
飢え沈むどよめきに、
あゝ幾度か思ひ出の芽は吹かむとすれど、
たゞたゞ倦み疲れたる心には、
そが嘆かひの殘骸だにも拾ふよしもなき
かなしさ――

詩才は濫費するものでないと云ふことを特に此作者の爲に云ひたい。（評）

○氣味惡さ
本所　かすみ

眞晝の、强烈な日光を受けたる
黃黑き猫の眼の氣味惡さ――
哀れ、我が弱き心は刹那の刺戟にもろく／＼、震へぬ。
わな／＼と。
倦想に身を投げ出せし猫の心よ。
現在……汝の眼の氣味惡さを覺えしが故に禍ひかな。
我が神經は尖りて
物憂き心の弱り處に思ひ苦しむ。
猫よ。身は緣に寢ころび……安樂の想を人に思しむれど。
折に觸るれば……
悲しむが如き
鋭い眼には
常に、何者かを呪はんとしてありぬ。

下手な摸倣だ。（評）

○八重ざくら
大阪　小さき泉

八重ざくら
咲きみだるゝ美くしさ
重く沈んだ胸内を
柔らげる如に、そゝる如に
思ひになやむ我黑髮に
ちら／＼と散る八重ざくら
黃な天鵞絨の長椅子に
思ひ疲れた身をなげて
ふとしも君を忍ぶ時
悲しき追憶は近より
そのなつかしい想出を
彩らうとて……
薄暮時のわが室の窓に
ちらり／＼と舞ひ込みし
その花びら……

散文からいくらも離れてゐない。（評）

○くれなゐのよろこび
四谷　しま笹

机の上の電報をそつと開けば、うれしくも、永の旅路に出でませしいとしの君は夜の九時に、歸り給ふと知られたり。
花の時を寂し／＼暮して睦みゆく人を羨みつゝも春の日永をもどかしとみしは昨日の夢と過ぎ行きぬ。おゝまたるゝは夜の九時よ床に生けたる山櫻花瓦斯のあかりに美しく見えて長き人待と思はれぬ。せこんどきざむ時計の音も遠く近くか

すかに響く時に靜まれる夜に門のあきてつと寄
る君と我が口と、暗にもあかき喜こびの頻よ。

之は詩とも云ひかねます、お尋ねの詩と新體詩とは同じ者で、新體詩が發達するにつれ單に『詩』と云ふ名稱を用ゆるやうになりました、あなたは詩〃今の口語詩〃を思ひちがひして斯ういふものをお作りになつたのでせうこれでは殆んど散文です、詩はもつと緊縮した情調の表白でなければなりません。（評）

○森の道

羽前　長澤美也子

森の間の細い道―
裾まくり上げて歸る時、ひきつける
樣な小鳥の聲が
まぼろしのやうに
きこえる。
杉の香ひをかぎな
がら――重苦しい
までに茂つた森を
ぬけんとする
其の折――
にはかに日は暮れた。
道もなくなつた。

後の森の中から――恐しい者が聲を、立てゝ追つ
てくる。
私はゾツと寒くなつた

逃げようとあせれども走れない！
あゝ苦しい！情！情！此の時情と云ふ字は私の
頭へどんなに強くひゞいたか――
…………

とあたりを見廻したけれど
恐しい人も居ない、
氣味わるい聲も、はた美しい小鳥の聲もきこえ
ない――
あゝ今のは、
全く夢なのか知ら



街頭の女　吳市　町田浪江

○午後

廣島　荒れし花

靜かなる青綠胸ふ
くらみて
そこはかとなく歎
きあふ。
水際の並木柔かく
葉裏打ちかへし打
かへし
微風にひらめき藍
色の水に映る。
その中に一きは白
く、なやましく
李の花開く。
ほのかにも散る二
つ三つ
ひらひらひら……
水面には白き甘き
夢しき
囀羽にをさめて鷲
鳥ら眠る。
見よ―濃く若き葉
かげをこめて
うち煙る彼の地平
の遠なところを
その深きなやましき沈默の上よりは
たる氣にも調和破らんとて
眞紅き牛うなき出でぬる。
午後の日の疲れし一時。

各地誌友評論（八）

▲信濃（上）

一記者

◎投書の一番能く來るのは何處でせうと、聞かれた時に、吾人の即答し得るのは、東京附近では先づ信濃ですと云ふことだ。

◎信濃は何が故にそんなに投書家が多いのだらう、多いばかりでなく、優良な人が出る、地高うして山秀でたる自然の感化であらうか、そればかりでない、信州の人文は、あらゆる方面に心強い根を張つてゐる。

◎文壇の先輩としては、島崎藤村、金子筑水、窪田空穗、吉江孤雁、中澤臨川、木下尙江、三津木春影、太田みづほの諸氏を初め、數ふればなほ幾多の人々があらう。單り文士の側ばかりでない、畫家の方面にも多數知名の人々を出して居る。

◎此等の人々が文壇に於ける事業は、今更此處に架說するまでもない、復此等諸氏の間に、信州人として共通の氣風のあることも、少しく其人を知り、其作を知つてゐる者には首肯出來るだらう。

◎一國の勢力は、一國の人々の勢力の集りである、わが『女子文壇』に於ても、信州の女子が眼に着くのは活動する人が多いからだ。

◎『女子文壇』と信州と云へば、直ちに山田邦枝子を聯想す、先んじて誌上の名を成したからだ。

◎山田の前に安孫子美子あり、晩翠調の詩を能くした一度東京に來り、失意の結果國に歸り暫く筆を執つてゐたが、確か一昨年、亡き人の數に入つた、『女子文壇』初期の誌友として認められて居たが、惜しい哉、若うして彼女の活動は斷絕された。

◎其他現在に於て前島優梨子、太田きし子、長谷川朱女子、世良田優子、百瀨美水、樋口優香子などを初め隱れたる誌友も決して尠少でない。

◎邦枝子は東京に住居して既に三年も經てゐるから、東京の人として語つても宜いくらゐだが、當年の山田邦枝子（今の今井夫人邦枝子）ほど能く信州人の長所短所を併有してゐたものはないから、彼女に就いては

信州人として語りたい。

◎信州人とは云へ、彼女は信州に生れたのではない、西の方の國で生れた、只、幼少より高原に湛えられたる諏訪湖畔に人と成り、彼女の詩も、彼女の歌も、凡て湖畔で見た美しい夢であつた。

◎既に十五歳にして歌を作つたと云ふから、其早熟は推して知るべしだ、彼女に素養の無いことは咎むるに足らぬ、嚴格なる彼女の家庭は、邦枝子を普通の婦人としてしつけようとしたに過ぎぬ、其頃の世間の様子がせめて今日ほど進んでゐたら、彼女も今少し幸福なる藝術の國に來たであらう。

◎彼女は十七八歳にして、渾圓珠の如き詩を作つた、熱情の迸るやうな歌を詠じた　隱れては歌ひ、忍んでは書く詩文の、如何に生々した處女の熱血が注がれてゐたらう。『女子文壇』全體の調子が、未だ低く、幼い時に、彼女は進んで先覺者の位置を占めようとした、斯くて彼女は、語るに人なき寂寞の裡に、身も心も文藝にうちこんで、孤獨の寂寞を空想に慰めてゐたのである。

◎實に彼女は覺めたる女であつた、何時までも其狀態が續かう、山の彼方を懷ふ空想と、矢の如き若き日の功名心は、彼女を何時までも夢靜かなる湖畔に眠らしめなかつた。彼女の出京は偶然にして、而かも當然であつた。

◎美しい顏と、高き誇とを持つて、都會の渦捲の中へ飛込んで來た彼女の決心は、普通一般のものではなかつた。才あり智ある血氣盛んの男子ですら、反撥力で押し戻される大都會へ、彼女は何の用意もなく、無手で來て戰亂の巷に立つた。

◎元來信州人の型は、非常に怜悧で、感情的で、何處か威張つた氣象を持つてゐる、彼女も亦全然其型に嵌つた女で、自尊心が強く、感情的で、而かも怜悧であつた。

◎彼女の容姿と表情は、刻一刻に變化してゆくこと、恰も櫻咲く頃のやうだ、感情的で動き易い性格を持つてゐるだけに、周圍の刺戟に眩惑し、感動し、踴躍し呻吟し、懊惱し、將に昏倒せんとして僅に支へてゐるといふ趣があつた。

◎此も一種の自覺から、邦枝子と相前後してはる〴〵四國より出京した長曾我部菊子は、邦枝子と正反對の性格を持つてゐた。

◎菊子は底に熱情を抑へて、表は沈靜なること湖の水

の如き女だ、邦枝子は表に始終動くかたちありて、下に考を持つてゐること海の水の如き女だ、物に觸れ、事に接してゆく態度が全然違つてゐる。

◎菊子は之を放すも危險はない、邦枝子に到りては實際的に凡ての人の眼に映るだけでも危險がある、彼女は屢々問題の女となつた。

◎併しながら問題は解決された、果然彼女は結婚したのである。

◎吾人は邦枝子と云ふ『人』を語ること餘りに多きに過ぎ其作物の評論を逸し去らうとした。邦枝子の藝術的價値が當年の意氣に比して語るに足らぬ故であらうか否、必ずしも然うでない。

◎吾人は多くのお孃樣藝が、卒然として滅びて行く日の多いのを悲む一人である、邦枝子の作は、文學的の見地から進境を示したと云へまいが、當年の邦枝子として今日あるは、仍且欣ぶべきことだと思ふ。

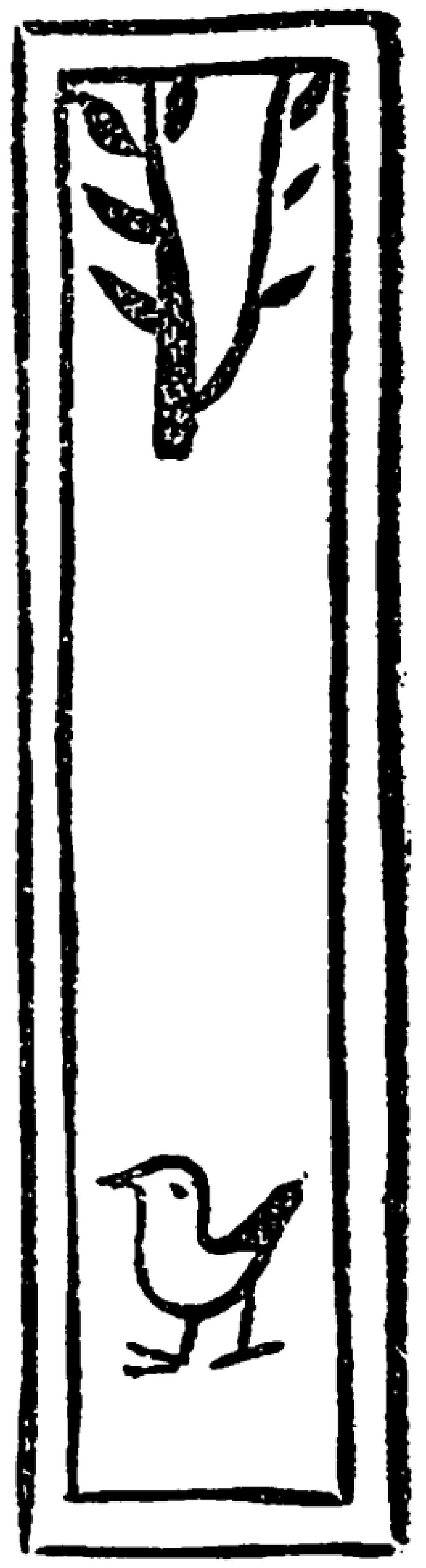
◎詩を捨てゝ散文に移つたのも當然、主觀の强烈な情緒の薄らいだのも當然、彼女は或る峠を越えたのだ、女として越えなければならぬ峠を越えたのだから、憧憬や空想は段々に其色調を薄くしてゆくかも知れぬが、之れ人生全體の色調であつて、彼女一人のかなしみではない。

◎人生の表面を知るべき女として、彼女は一人前の資格を具へてゐる、必ずしも文士たれと言はぬ、必ずしも詩歌に沒入せよと言はぬ、而かも彼女の爲すべき事業は澤山にあるべき筈だ。

◎其意味に於て吾人は聊か邦枝子の爲人に就いて多くを語つた、彼女は全然享樂の池に身を投げる女でもなかつた、世の似而非自覺者よりは、より早く覺めた女ではあつたが、更に常識的にも聰明なる女であつた。

◎才ある女は大抵反抗心を持つてゐる、反抗心も大きな反抗心――世の中の全體に對して――は或る活動の素因だが、小さな反抗心――妻として、母として――は無い方がまさつてゐる。既に妻たり母たる以上は小さな反抗心に囚はれてゐるのはつまらない、盲目なる自由を欲するとの無意味なると同じで、不覺の極みだ。

◎邦枝子の若き日は去つた。されど永遠に若く新しき人生に於て、何の顧みる處もなく、危險もなく、自由に、憚る處なく活動し得る女の一人となつた今井夫人の爲に、吾人は其存在の價値あらんことを祈るものである。



評論　編輯局選

○お神樂觀

向島　小林高子

私はお神樂が大好きである、物語が解らないでも結構だ、情がくみ取れないでもたくさんである。あの悠長な、古代的な、美しい、ぴか〳〵した樣子を見たゞけでも現世を遠退いた感がある。

喜ぶにも、泣くにも、怒るにも、笑ふにも、戰ふにも落ち付いたものだ、のんきなものだ、だから刺激がない、危險がない、只美である、上品である、義理や人情の柵をぬけてありのまゝの自己を觀じ得た氣分になる。

此氣分は刺激の多い、文明の世に住むのには必要である、人の世の刺激でクチヤ〳〵にさいなまれた神經が世をぬけ出して寸時でも、安逸をむさぼる事が出來るのは此の氣分を持つた時のみである、そして此の安逸は錦の袖が悠長になびく所に見出される、ゆるやかな太皷とつゞみの音が下界の文明の響に打ち勝つ所に得られる、老人や、小兒が馬鹿な顔をして、口を開いて見とれて居る所にあらはれるのである。

舊劇を見る時にも、これに似た樣な氣持がもてる。切腹してから隨分な長物語をしたり、すてきな愁歎場で、新派なら聲を上げて泣きくづれ樣とする所で身振をしたり、をどつたりする所はたまらなく〳〵うれしく氣持がいゝ、第一流の人間には通用しない、長くひつぱつた言葉付からして、過去の夢を織り込んだ樣な服裝からして氣に入つた、見て居るとほんとに現世を忘れてしまふ、そりや舊劇でも人情のないものはあるまい否ほとんど人情で成立つて居る、隨分泣かせられる事もあるが泣いても氣持のいゝ涙である。新派の悲劇で泣く時や、事實今の世にある、哀れな話をきいて流す涙や、新聞の三面記事の悲劇で感じる涙や（もしそんなもので泣くとすれば）何かは重苦しい壓迫を覺える涙である、强ひられる同情である、同情の裏に、泣の奥に何だかきたならしい、あさましい樣な、血の香や垢の汚れやらが胸をつく。

舊劇にはこんな氣分にはなれない、血を見ても今の

世の空氣でないからむき出しな感がしない、霞をすかして、立て込める蕭紫の烟をすかして見る樣に美しく、やはらかい氣がする。（然し舊劇にも隨分胸の惡い血なまぐさいものもある、いくら時にやはらげられても血の色の薄くならないのもある、美化されないのもあるが）お神樂に至つては如何しても此世のものゝ感がしない、お姬樣でも、馬鹿でも、鬼でも、何でも皆超然として居る。をどりながらも、ふざけながらも、戰ひながらもちつとも急がしくない、騷がず、あわてず、悠長にのんきにかまへて、見る人に濃い毒々しい感じを與へない。

お神樂を見て居る間は仙人になれる。

浮世の垢で重くなつた頭が體が、せい〳〵と輕くなる樣な氣がする、今の忙しい世に、文明の世に生きのびたいと思ふ人はお神樂を見るに限る。（拙賞）

藝術を愛するものには此氣分がなくてはならぬ、若い女だからとて只むやみに新しく〳〵と新しい刺戟ばかりに神經を疲らせるのは傷心の次第だ。（評）

○植物園を觀て

吊　露　子

私は四月十四日の日曜日に小石川の植物園に參りました、そうして未だ見ぬ内の想像と全然異つて居るのには失望もし又かうしたらといふ事も考へました。少しく云ひたい事を云はして頂きたいのです、植物園は帝國大學の附屬園といふ事である以上は、モウ少し學問的にして頂きたいのです、と云つて別にむづかしい譯でもなく、何科何科每に全部を集めて一區域にして一見して彼の科にはこんな物も屬して居るのかこれも此の科とよく合點の行く風にしたらばと思ふので、ある樣に彼處に少し此處に少しとバラ〳〵では若し其の處を通らなかつたなら遂に知らずに終るのでせう、私は大體に日本程植物といふ物に智識の淺い人民はないと思ひ、又觀察力の乏しい人民もないと思ひますから此の一區域は科每に集めるといふ事は最もいゝ事だらうと思ふのです。

若し又これが一般人民の娛樂的に開放したといふならば更に話はかうしたらと思ふのです、觀賞植物なら此の部で矢張一區域として全部をこゝへ集め、或は工業用植物と或は藥用植物とか或は製材植物とか庭園植物とかいふ風にしたら、或る人は觀賞植物に嬉び工業家は綿の異種類を見て更に考へ又製藥家はかうといふ種々な感想を起して將來に關して利する事が大だらう

と考へるのです、娯樂を兼ねて自然に利するのですから、これ以上に越した事がありませうか。
成程現在の樣にしてあれば體裁は美しくもあり結構でせうが、私はそんな所の爲に政府は設けたのでは無からうと思ふのです。
それから立札があまりに短く低い事です、先にも申した通り日本人程觀察の感念に乏しい人間は、足下にある樣な物に注意なんかしない事は定まつて居るのです偶に腰を縮めて見れば、其說明は全くに簡單を極めて、むづかしい外國語なんかはとてもわからないのです、櫻の樹の下にさくらだけでは全く物たりない說明でそんな事位は誰だつて知つて居る筈です、から私はあの立札を立つて居ても讀める位な高さにして頂きたいばかりか說明もモウ少し素人にも解し得る樣に願ふのです、立札の高い事の利は此の土手へ登るべからずと記されたあれを見てもよくわかる事です、全くに一般人民に開放したからには此の位の設備は何でもないだらうと思ふのです。
最後に申したい事は入場者があまりに公園視して居る事なのです、甚だしいのになつては鬼子のために芝生を蹂躙し盡して居る事なのです、小さい事に至つては木を折る事なんか平氣なのですから、こんな事はお互に注意したい事と思ひます。丁度此の日、泰宮樣の御成りで、より以上に私は光榮を得ました、幸に愚意に御贊成下さらば此の上なく嬉しゆう御座います。(入賞)

尤もな注文だと思ひます。(評)

○漫言

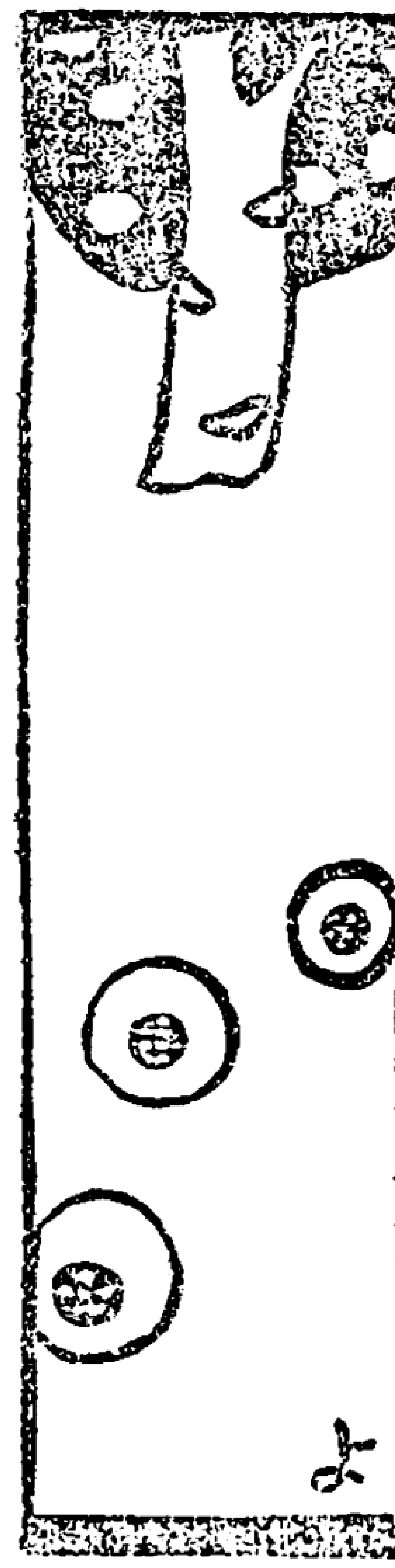
陸前　馥子

都鄙新聞地方新聞をとはず若い女の自殺を報ずるに必ず美人の二字を冠らせる。曰く美人の轢死、美人の投身、美人の縊死、美人の心中などとていづれも美人ならぬはない樣だ。

抑も自殺する女の十が十迄美人ではあるまいに誰が這麼事を云ひ初めたのであらうか、殊に身元の判明せで生前のかんばせを知るよすがもない目や鼻をすりむかれた血生臭い轢死婦人や、水脹れに脹れきつた土左衛門の君をつかまへて美人と云ふに至つては呆れざるを得ない滑稽の極であるさても美人多き世なるかな、美人と云ふはこれら自殺者許りではなく、曰く美人の萬引、美人の白浪、美人の放火、美人の詐欺等とて凡そ婆さんでない限りこの種の女へ殆ど美人の肩書を附せざるはない、ほんたうの美人こそよいつらの皮だ、美人もかう濫用されては估券の下ること實に數百等である。

估券が下らうが上らうが私の樣な不美人には何の關係もあるわけではないが馬鹿らしい、眞に美人なら云ふ迄もなく論外だが、無暗矢鱈に美人美人と云ふのはよい加減にして止めて頂き度いと思ふ。

夫婦喧嘩の、痴話喧嘩の、無理情死のと云ふ極めてつまらない事を、さながら國家の大事件でもある樣に大きい活字で仰々しく書き立てゝある三面を見る毎に、もつと細かな活字を用ひて、そして何か趣味のあるものでも載せたら如何であらうかと思はれる、何も活字が大きくなければこの種の事でも低級なる讀者の歡心を買はれないと云ふわけではあるまい



俳句

内藤鳴雪選

○(天賞)

酒に濡れし舞の扇や春の宵　静岡縣　田中ゆりゑ子

○(地賞)

暮の春戀あらばやと思ひけり　信濃　保科伊津子

○(人賞)

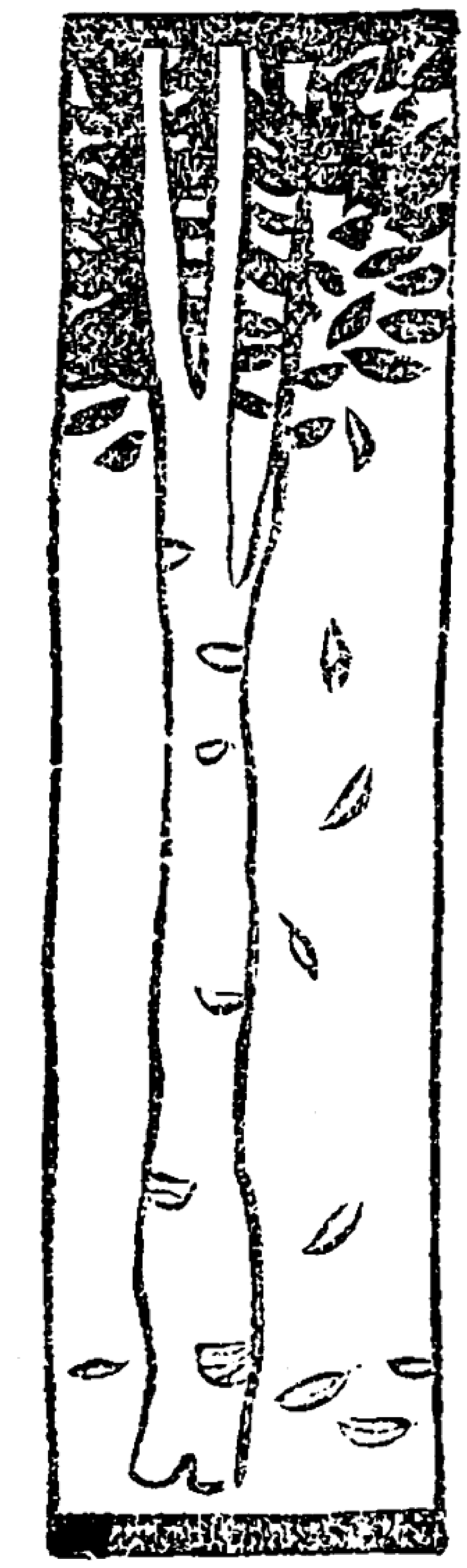
夏の日やあれは人の子日傘さす　東京　ひで子

佳作

旅の女や春雨傘に興多き　愛知縣　中村百合香
しぼり干す絹柔かき春日かな　横濱　荻月子
化粧水捨つれば來り雀の子　大阪　田野しか子
笠ぬけば春の風ふく額かな　群馬　芝るい子
鶯の鳴くや溫泉壺の朝灯　宇都宮　松井玉子
灯ともして君待つ宵の春寒し　渡島　美津子
若草のまとに弊あり弓の家　茨城縣　小堀とし子
大寺に緋桃散るなり春の夕　水戸　小湊春雨
不如歸青葉若葉の間より　岡山縣　入江曉花
風もなく虻蜂うなる日和かな　栃木縣　加藤ウメ
此雨にやつと濡れけり花の下　上毛　阿久津小駒子
草の戸や蝶の來る日は人も來る　京都市　平井せい子
菜の花や月の下行く小提灯　岡山縣　葉蘭
日あたりの縁に寢て見る木の芽かな　京都　南玉
露の朝舟曳く人や絲柳　奈良縣　紅斜子
朝風に青田見廻る男かな　岩手縣　大和田みつゑ
帆をつゞる千石船や春の海　尼ケ崎　秦子
講義する書院の前や紅の花　京都市　佐々木野菊
安宿に空眠めけり五月雨　備前　小川大同子
春の水霞の海へそゝぐなり　横須賀　いなめ
足音に蛙沈みて池の月　德島縣　行雲女
此の山の動き出でけり青嵐　磐城　齋藤靜子
時鳥雨しとくくと降る日哉　仙臺市　赤間くに女
春の水くねりくくて谷を出づ　信濃　龍の子
物かくに燈心たすや春の雨　宇都宮　松井清子
垣低く木瓜咲く家や濱の土手　兵庫　紅雀
長閑さや波の上引く舟のあと　伊賀　中村こま子
思ひ出て日記繰り返す日永かな　伊豆　渡邊やす子
梅見する加茂の僧侶の月夜かな　奈良縣　上菡女
鶯に夢の醒めたる翁かな　大和　白葩
梅の下女を照らす燈籠かな　奈良縣　上田美夜子
蜂の巣や御堂の軒の忘れ傘　備中　小見山春子
火山の火そのまゝ落ちて春の海　越後　齋川幸子
畑打つ鍬の狂ひや蝶打ち　牛込　畑中赤子
みどり野や酒に舁ぎ通る朝のほど　紀伊　宇田すが
黄鳥の聲聞く人も霧の中　美作　儒本紫
春雨に埋火おこす詩人あり　大阪　春柳
花の蔭町若衆の團居かな　大阪　花子

徒らに床に臥したり桃咲く日　美作　橋本紫
河に流り動かぬ舟ぞ波霞む　佐渡　藤村ちか子
痩畑の豆寸にして花咲きぬ　上總　鈴木喜子
谷間來てほのかに白し百合の花　下毛　美代子
藍傘の人は美くし春の雨　紀伊　夕浪
桃散りてひとり物書く机かな　佐賀　たか子
短夜の夢にも入ぬ君にして　京都　壽賀子
初雷や藤三尺の花ふるふ　秋田縣　瀧本美智子
我が罪はたれに語らん花と月　日本橋　仁村はづき
桃山や朝登り來て風輕し　廣島縣　ゝ林芳汝
磯畑に網干してある長閑さや　久留米　橋本果芽乃
湯上りの頰に心地よし花吹雪　深川　関根ツル子
暮れぬのに灯ともす里や遠蛙　群馬縣　新井つま子
飼ひならす孔雀の雛や春日和　下京　大井順子
枯野つきて家二三軒の灯の細き　伊豫　高橋政子
花の雲午砲の響ゆるやかに　山口縣　いさを
駒とめて若草を飼ふ野路哉　牛込　椿子
夕榮やはゝづき赤き草の中　城南　小島鈴枝
よき夢を鶯聞いて忘れけり　岡山市　桃の村女
客待ちの舟にしだれる柳哉　高知　あきばな
月おぼろ花もおぼろの今宵哉　土佐　吉本雪惠
うつくしき花野や露の化粧水　京都　くれなゐ
夕がすみ櫻一日の名殘哉　千住　白妙女
菜の花や何か唄ひて人の行く　豐後　首藤今子
かいま見る春美しき小寺かな　濱松市　玉枝
斷食の人の祈りや椿落つ　三重縣　米田きよ子
花咲いて京の便りの懷しき　安房　吉田新子
繼ならで寢られぬ夜やほとゝぎす　本郷　吉田操子
青簾若葉すかして見ゆる湯瀧哉　本郷　山村ことゝ子
夕暮や落花あびつゝ君と行く　山形縣　伊藤智惠子
水門の柳けぶるや春の雨　常陸　紫色女

雪の日やたゞゴーゴーと川の音　新潟縣　上村恒
草餅を呉れに來し子や花蓬　足利　飯塚米子
拾ひ物枝につるしぬ門の梅　横濱市　石川八重子
夏近き池に絲釣る翁哉　大分市　小原芳香
わが髪のほつれに薫れ若葉風　京都市　中野婦美子
いさゝかの醉ひもうれしき小六月　山口縣　椰良美那子
羅をかつぐ女や花吹雪　加賀　村田いと子
尼寺の鐘も聞えて春はゆく　京都　はづ枝
のどかさに鷄の羽ばたくあしたかな　淺草　若菜子
藏王堂大日堂の若葉かな　下澁谷　小原あい子
犇めきて露店竝みぬ春の雨　岡山市　桂木淑女
木曾人の河鹿賣るなり京に來て　日本橋　村木露子
ほふけたるたんぽゝもちりて春の暮　前橋　みづ枝
音高く椿は落ちて日の暮れぬ　山口縣　松尾倭文香
五月雨やぬれたる鷄の小屋騷ぎ　府下　倉増すゑ子
大寺の屋根ゆら〳〵と陽炎す　千葉縣　吉田きく
棹させばちり込む花や大堰川　京都　村田逸子
少し吹く風にぎはふのぼり哉　上野國　いたる子
春霞京は古り行く都かな　横須賀　美葩子
花の雨寢覺めの宿に愁あり　奈良縣　安浪ふさ子
張物す妻暖かや木の芽時　京都　君子
朝雨や寺寂として桐の花　仙臺市　春桐千枝子
ひとり來てぬるゝも嬉し花の雨　上毛　小澤竹子
白牡丹蟻が上りて遠雷す　下野　かくれ少女
耕牛の尾を吹く風や春の草　横濱市　朱い花
牧童は霞みて見えず笛の音　仙臺市　北村花代
研ぎ上げし太刀三尺や冬の月　靜岡縣　田中いし子
冴えかへる兜の星や梅の花　近江　井上千代
纖猫の通路ふさぐ棘かな　信濃　工藤きよ子
乙女等が足ひたしたり春の水　信濃　すみれ
福壽草茶釜に湯氣のかゝりけり　山口縣　いさを



初作

編輯局選

○電話の恨

京都　君子

此頃宅に電話が引けてよつぽど便利になつてよ。でも一利一害は免れぬ世の中。! 隨分電話にも恨はあつてよ。ねえ花ちやん聞いて頂戴よ。昨晩もね彼のなつかしいAさんから掛かつたのよ。初めベルが鳴つた時私よつぽど出ようかと思つたんだけど、又例の商用ですかを喰つても馬鹿らしいとわざとひかへてゐるとすかさず父が出て行つたんだわ。それでも若し私にぢやないかと、窃かに胸を躍らして耳をすましてゐると、暫くハア〳〵の二三度を言ひ續けたかと思ふと、ヨロシイと言ふなり、忽ちチリンと切つて了つてから、此方を向いて出て來る其苦い顏つたらないの。そして物の三里も下つてから澁り切つた聲で『明日本をBさん處迄返して置くからつて。?』と許り……一體誰からなんですと、私も意地が惡い、大抵は彼の人だらうとは察したけれど、わざとさういつて尋ねると、やつとAさんからとすげなく言ひ放つた切り。……其刹那の隠えっ? あゝ何たる無情の父だらう。私が不在なら仕樣もないが、現在傍に居るものを、何故一言言葉を掛けて下さらぬ。何故勝手に切つて了はれたとあまりの恨めしさに、胸は湧きかへれど詮すべなく、其場に有り合せた新聞に目を落して見詰めてゐると、其文字が忽ち二重三重になつて、果は何やら熱いものがポトリ。…… かう言へば何だそんな事と、一笑に歸して了はれるかも知れないけれど、御承知の通りAさんは京都の人ぢやないでせう。だから電話なんかも、何處から掛けてらつしやるか、皆目判らない。それに是非尋ねたい事や、言ひ度い事も澤山あつたんだわ、Aさんもきつと外に何か言ふ事があつたに違ひないと思ふわ。私さう思ふともう胸が張り裂ける樣よ。後で幾ら口惜しがつたつて、全く雲をつかむ樣取り付く島がないんだもの。電話なんか却つて恨の種とつく〴〵思つてよ。(地賞)

これは新しい恨みのかず。(評)

○北海道の春

下澁谷　小原あい子

私は十二歳の春より北海道天鹽山脈の山颪に吹かれ、石狩沿岸に成長し流離轉變の身は一定の居所さへ得なかつたので、夙から女子文壇の名はきいて居りましても、皆樣の華やかな御心より流れ出る美しい文や、血の溢るゝ樣な歌など拜見する樣になつたのはわづか昨年のことで御座います、私も一度初作の終りにでも御撰を頂いて見たいと暇さへあれば筆を把つても見ますけれど皆樣のを拜見してはまさかこんなものをと其都度丸められて仕舞ふのです、行手もわかぬ茫とした雲を辿り廣い〳〵石狩の野に立つた時、目にあまる邉りの景も、その情の萬分の一だも嘔ひ得ぬ今更の恥かしさ、しみ〴〵と身に感ずるのでございます、皆樣もよく御承知でございませう、此地は十月から翌年三月の末頃までは丈餘の雪はたえず降り積んで、他には一本の青葉を見ず、白い〳〵山又山は重疊と、其大自然は動くまいとして居るのでございます、一方二方と雲の切れた方角は必ず沙漠のやうな廣い野の山に續くので、時々吹雪をもつた大風は頻に荒み出し、雲の切目を蔽ふて時ならぬ虚空に大雲霧を罩めるやうなこともあるのです、それでも皓々と月昇る靜かな夜の山や、燦々たる旭日の廣野に輝くときは一望白銀の世と變じ、此少さき北國の少女は得も言はれぬ莊嚴な世界に放たれた心地がされて恍惚と其景色に憧れるので御座います、そよ〳〵と雲の上を春風が吹き渡るとも、紫の花も紅

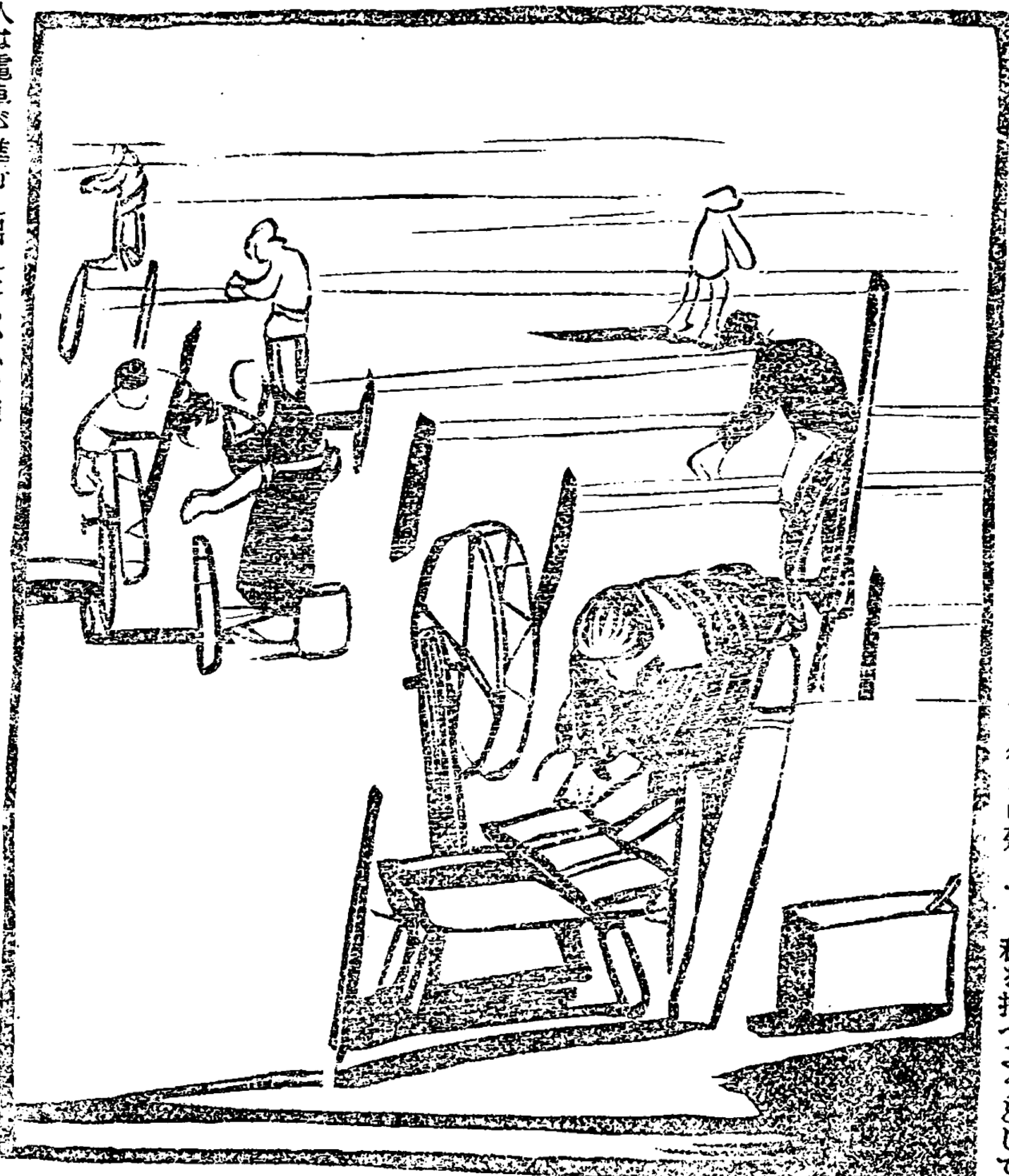
の花も咲き出るのではありません、けれどいつか是れ等の山々は白衣を脱ぎ捨て、四月の末になれば梅も咲き櫻の蕾も微笑を漏らすので、このときは熊遂ふ群も家にかへり、廣い畠や、野の果の田の中には、怖しい牡牛を曳きつれた耕しの人が小さく烏の樣に下り立つと、雲雀も歌へば小鳥も囀り一樣に浮々が誇りの春はくるので御座います。（入賞）

思ふ通りすらすらとらくに書けて居る。（評）

○てんくらべ

四谷　木いちで

其れは花の咲き初めの夜夫と二人買物から歸りに神保町から新宿行の電車に乗つた時の事でした、隣に腰掛て居た宴會歸りらしい人折詰を持て、洋服に鳥打帽を被り、酒の匂がぷんぷんしてをります、其人は電車が進行し出したら、私の腕をぐんぐんおしたり、足で蹴つたり、終には手を出して突ついて見たり致し升が、私は一向知らぬ風をして居ました。が半藏門邊で人が下りた拍子に、そつと手を後ろに廻して、私を抱へようとして居ますから、此には平氣な顔も出來ませんから思はず前の方に進みました其でも立つてしまうのは何だか此の人に負けた樣で口惜いから、夫は乗つて居るし、何方が先に立つか、堪へる丈け我慢をしようと思つて、成丈身を縮めて早く下りる所に來ればよいと、其のみ願つて居ます、前の人は相變らず、こんよく突いたり、何かして私の顔色を窺つて居ましたが、四谷見付で、たうとう下りて、下りきはに御馳走樣だなんて云ひ乍ら出て行きました、私はほつと一いき付きまして、夫も傍に掛けましたから、右の話をして、たうとう私が勝ちましたと言ふて笑つて居ましたが、傳馬町で下り、買物をしてふと右手に立つてる人を見て驚いて夫につかまりましたも道理、先の鳥打帽がちやんと來て居ます、其人はじつと立つて暫く見つめて居ましたが、私はやはり女でした



冬の朝　青山　中村弘子

再其人を見る勇氣は有ません殘念ながら此所でまけました。
此評は法師に譲るべきものかも知れぬ。（評）

○春の宵

熊本　千喜子

衣桁から不斷着を下してそつと手を通す。オヽ冷たい解けて流れる温い液が冷たい物に遇ふてつと固まる樣に、身の內が引き締まる樣に思はれる。紅い腰帶を一つ締めて、柱に凭りかゝつて、くづれるやうに坐つた白い壁も灯に匂ふ六疊の部屋、鏡臺の前には先刻投げ出して薄綠色の絹手巾と、緋鹽瀬の紙入と、鼻紙と散らかつてゐる。

衣桁の傍には、燃え立つ樣な紅い腰帶や、薄紅色の帶上げや白い紐がだらしなく引き亂れて、脫ぎ捨てた着物が小高くうづくまつてゐる。

華手なお納戸縮緬の羽織の下から、しなやかな大島お召の袷と躍り出しさうな色彩の華やかな大形の友禪縮緬の長襦袢とが、重なり合つて顏を出してゐる。

灯はこれ等の總べてを夢の樣に照して、閉切つてせまい室には衣の香が籠つて、柔く温かな空氣が靜かに漂ふてゐる。

紫の着物の上に緋鹿の子の帶をだらりと結んで、金絲の刺繡ある裾を着た女、その白い顏と月の眉とが後の金屛風に榮えて眞實に美しかつた……電燈の下に照り榮ゆる幾百の女の黑髮には、紅や靑藤やトキ色クリーム、果てはさゆらぎにもきらりと輝く寶玉などの飾が、五彩の花を散らした樣で、香水の香と人の息とに蒸される樣に頰が火照つた……それから冷たい夜風に心地よく車上にゆられつゝ走つた、町の灯の美しかつたことなど夢の樣に數時はた數分時前の繪卷物を繰つてゐると。

「御飯は……」と母樣が被束して、洋燈をねじつて默つて、着物を衣桁にお掛けなさる。パツト明るくなつた室、今掛けられた着物の振から紅の色がこぼれ落ちさう、艶やかな高髷、しなやかな撫肩、嫂婦と立つた後姿をふつと思ひ浮べて、思はず口元に笑を流した。

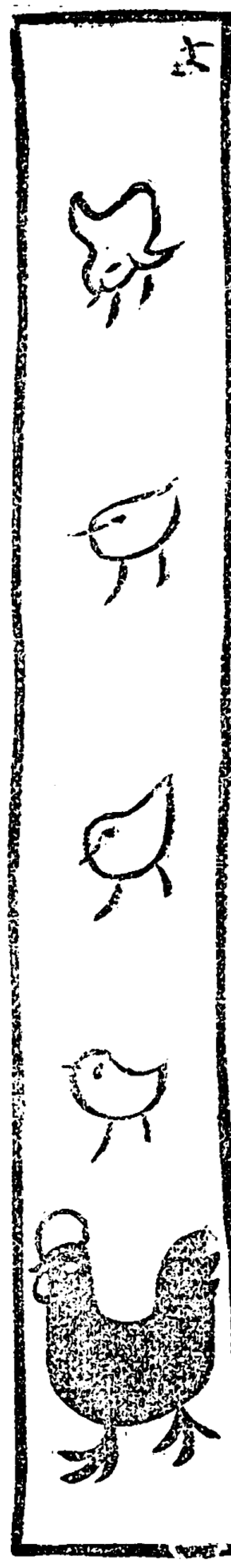
明細に描けたゞけで情趣が乏しい。（評）

○初めての投書

邑智　白須彌雪

投書仕樣仕樣とそれはほんたうに女子文壇を讀む度にそう思つてそゞろに胸の若い血を湧き立せます。けれども私はちつとも文章なんか作れません作ろう／＼とあせればあせる程胸がどき／＼して、どうしても落着く事が出來ませんもの。お終にはいら／＼つとして面倒くさい投書なんて生意氣な事やめて終ふとつひ口惜しいとは思ひながらも筆は放たれて只西の空のみ仰いで長太息の止むなきに至ります。今度こそはと筆を取つてもつまりませぬエヽぢれつたい。私には天性文才がないので御座いませうか？加へて初作は何字詰ともかいてないから外のと同じにするやらどうやら分りませぬし投稿規定に「斷じて未納税は受つけず」なんてかいてあるのですもの恥かしいのですけど私の樣な山猿に未納税とはなんの事やらちつとも判らないんですもの困つて終ひますわ、それですもの何程もがいたとて狂ふたとて追つ付くもので御座いませぬ。ですけれどもそれではなんぼうにも飽きたらぬ心地がいたします故此度は一大決心を持つてかいて見ました……やがてこれが記者先生の御手に開封せられるこんなものはつひ一生懸命赤い顏してかいたものも沒書にされる……沒書！沒書！沒書になつたとてどうしようぞ！私は元より文章なんか作る樣なそんな高尚な女ぢやあないのですもの……そんなに初つから誌上にのる樣な事はない。花は咲くべき時が來なければいたづらにあせつたとて咲くものでない、來るべき春を待たねば……その春は考へて見ればいつくるとも思はれない、けれども來るであらうと思ふところに又籠の樂しみもあるでは御座いますまいか？いまもいまとていつもだまりやの父でさへ「なあに當選するものか」つて冷かします。先生がこんなもの羞しくもなくてよくだしたとお笑ひ遊ばす御顏が目の前にちらついてたまりませぬ。けれども吁、けれども虎穴に入らなければとらの子は取れぬと申すぢやあ御座いませぬか！　私思ひ切つて投書いたしませう……筆持つ手がわな／＼とふるひます、私はなんだかあるものに、そゝり立られる樣な氣持でこれを書き終りました。……　おもてゞ父の薪割る音と母の機おる音とが變り番に長閑な春の午後三時を心地宜うひゞいてきます。どこかで勇しいにはとりの聲が………………

未納税とは郵便物に郵便切手を貼附して居ないことです。（評）



読友くらぶ

交際

○ 和歌山縣那賀郡田中村
宇　田　菅

▲一寸ムシャクシャ●●●●●●●　今までに度々誌上で名を呼んで下さつたり、又御手紙を下さつた方もありますけれども、別に御返事も致さず、差上も致しませんでした、何卒あしからず。此頃は一寸ムシヤクシヤしてますので、せめて皆様と交際でもして忘れたいと思つてます、冷淡で勝手者で變人です、それを御承知で交つて下さる方は御交際下さい、但男子の方は固く固くおことわりいたさねばなりません

○ 赤坂田町七ノ三、藤谷方
山　口　春　枝

▲都にて●●●　私は溜池の畔に淋しく暮して居るものですが此の廣い都に友も無く今後何卒く諸姉上樣末長しへに御交際を願ひます

○ K. Kodama

Piw Col

▲お知らせ●●●●　去る正月 Ko. Tama の名を以て御交際をたのみたる兒玉玉子（愚妻）事其後久しく病床にあり候處圖らずも先々週異郷の土となり候につき取り敢へず私より皆々樣へ御一報なし置き候

○ 茨城縣新治郡栗原村
村野三重子
村上みつ子

▲私等二人は●●●●●　淋しい片田舍に暮して居るもので、昨年十一月よりの愛讀者なのよ、投書は始めてで何にも出來ない不束者にて文の味も知らない乙女なのよ、何卒誌上の姉上樣方、哀れな私等を想ひやつて御玉章や、繪葉書を頂戴な必ず御返事は致しますわ

○ 仙臺市北四番町百番地
高　橋　郁　子

▲長いお手紙●●●●●　おなつかしい皆樣私は極々淋かな一軒屋に父母もなく兄弟姉妹もなく悲しい月日を送る者よ何卒お情ある皆樣妹として愛して頂戴な女學校を出たばかりの不束者よ音樂と國語と小說が大好物では皆樣長いお手紙毎日待つて居りますわ

○ 常陸下妻町
大久保芳子

▲筑饋より●●●●　野に山に都に邑に再び光榮ある人世の春は來ました、おなつかしいく誌友の皆樣私も去年の秋賴りとする母君にさきだたれまして今は毎日く淚のかわく日とてはありません何とぞく皆樣お交り下さるやう願ひますでは皆樣アデュ！!!!

○ 神田佐久間町三丁目十五番地
柏　直　操　子

▲小田原より歸りて●●●●●●●●　改めて本誌の愛讀者となりました、私はまだ十六の少女でございます、記者樣、誌友諸孃何卒御見捨なく。私も振るつて投書致します

○ 佐世保市宮地町一三七
永　田　つ　ゆ　子

▲御姉上樣がた●●●●●●　私は田舍の者でございます

末永く御交り下さいませ、私此頃體が弱いために何の樂もなく毎日〳〵淋しく暮して居ります故にお姉樣方時々レターを御惠ハ下さいませかならず御返事は差上げますからどうぞね

○ 府下豐多摩郡下戸塚村六二六
中藤方　田邊秀子

▲希望の春　戀しき皆樣妾は東都の片傍りにわび住ひして居る不束な者です、光榮有る自然と人生の春は參りました、御振ひ遊ばすは此の時でしやう、レトレチユアーなポートグラフ、レターの御交換を願ひます、御返事は必ず致しますからね。

○ 四谷區左門町十五番地豐田方
隆子

▲四谷より　妾事昨年七月より購讀なし居りますが未だ一度も投書は致しませんが誌上を拜借致しまして姉樣方の御示導に預りたいのですが何卒宜敷御願ひ申上ます姉樣方にも御近狀樣樣の御知せ下さいませ文通上のみならず御交際被下ませ

○ 京都府下葛野郡朱雀野村字西ノ京大學町　志賀絹枝

▲鳥歌ひ　蝶舞ふ頃と成りましたが誌友の御姉樣には御變りもなく御暮し遊ばされますか私は今度右の處へ轉宅致しましたが相變らず御交はり下さいませい

○ 下關市西南部町
下村安子

▲誌友の皆樣私も本誌の愛讀者なのよレターー頂戴な

○ 岡山縣備中玉島町新町
大西千登世

▲誌友の皆樣に　花咲く時も知らぬ深山木の埋れはてゝのみ暮し居ます者此度始めてお仲間へはいりました友愛暖き皆樣何卒玉章のお交りを御願ひ申ます御返事はきつと

○ 長野縣松代伊勢町山崎樣方
青木嘉子

▲私は昨年　以來より女子文壇の購讀者でありますが敬愛なる諸姉樣御見捨なく御交際を亦レターの交換を永久に御願ひ致します。

○ 金澤市西町數ノ内二番地
鷲島呉葉

▲お仲間に　私は北の國の者で……女子文壇誌上で諸姉樣方の御交際振り、うらやましゆう思つて居りましたの、どうぞこれからも、皆樣方の御仲間入をさせて戴き度うございます御返事はきつと致しますから、どなたでもレターを下さいな御願ひですワ、私は母ない身で……淋しく日を送つて居るものでございます

○ 富山縣富山市北新町衣笠方
篠原みゆき

▲北國に友もなく　淋しく暮して居る者です皆樣何卒末永く御交りを願ひます

○ 神戸
姬路好子

▲外國の少女と文通　諸姉樣に御紹介申し上げるのは極東交換倶樂部ですよ三錢切手封入してね神戸の郵船會社の福光高之といふ人に送くつたら規則書くれますわ其の會はね外國の少女と文通や繪葉書の交換が出來るのですよ私も其の一人ですのまあ御しらせまでのことよ

○ 神奈川縣三浦郡浦鄉村字船越一六一
玉置千代子

▲私は二月より　の愛讀者で御座います諸姉樣永久に御交際下さいな

○ 大阪天神橋一丁目
村田擴子

▲和歌と俳句　誌友の諸孃樣妾は和歌と俳句に趣味を持つて居ります妾と同趣味の諸孃樣は御交際を下さいませ

○ 名古屋市中區南新町一、十五
山内清子

▲淋しき學生　私は女學校に入りまして三星霜をすぎました思ふに學生ほど淋しきものはありません、なつかしき御姉上樣どうぞ御察し下され御交際を願ふと共に御手紙や繪葉書等の交換をのぞみます

○ 群馬縣新田郡木崎村赤堀
關口ちよの

▲朝鮮の愛讀諸姉樣へ　私は群馬の片田舍に住む一少女ですがおみすてなく是非御交際を願ひ升寫眞の交りも

○ 越前國敦賀町大港五三、中野常二郎方
中野幸子
同　靜江

▲妾等は櫻花咲く　四月より新らたに愛讀者となつた者でございますから何卒御見捨なく御交際を乞ふ、御返事はきつといたします故何卒レターを下さいませ

○大垣郭町電信局北　臼井やゑ子

▲友もなく　淋しく月日を送つて居るものですが哀れと御思召遊ばしたならばレターお寫眞おめぐみ下さいね御返事はかならず致します

○水戸市下市臺町濱屋方　小湊ゆみ子

▲乙女肌の様な　心地よい風が頬を撫でる様になりました私は事なしの朝な夕な淋しく暮して居りますさらば皆様よ和歌俳句を認めた、ターの交換を望みます

○芝の天流枝

▲奇遇の作者　四月號にて拝見いたしました奇遇の作者のしらなみ子様よおなつかしうございますおさしつかへなくば紙上で御住所お知らせ下さいまし

○金澤市本町一番町八十八番地　廣澤愛子

▲私は墓を好む女です　御休み毎に墓へ行つては、未だインキの香のフレッシュな、其の紙を解もなく、つくつて戀ない的もない藝術を憧憬して居ます。私はこの頃怎麼ものですか、友と話すことさへつらうございます。そして一人煩悶したうございます。私等のライフには何處までも悲哀と云ふ。暗い寂しい影がつきまたふのですもの

書籍交換

○宮城縣伊具郡丸森町五〇　小波みさほ

▲持つてる書　麗風戀風上中下、不知火、紅葉集、猛火、琵琶歌
△讀みたき書　八犬傳、忠臣義士、俳句作法闘書

○札幌區山鼻町一、二、三　一戸秀子

▲私の元に殘紅集　面影集。修養錄。空中軍艦富豪家成功憲法等種々の本がありますから繪はがきと切手にて送料を送つた方に差し上げます

●投稿は必ず出る！

▲誌友くらぶの投稿は必ず誌上に出ます▲書物雜誌の交換や、繪はがきの往復や、手紙の交際などに就いて、本誌の誌友くらぶは唯一の機關です▲近來誌友くらぶの投稿が激増して、今回も亦數頁分を次號に廻しました▲次號は特別號で紙數も充分に取れますから、殘つたものは勿論、新しく六月十五日まで來た分は出來るだけ多く載せますから、出さうと思ふ方は今が好機會です▲原稿は半紙、罫紙の外はがきでも差支ありません

○長野縣下伊那郡龍江村四〇番地　島岡しん子

△皆様の中で本誌本年一二四號　昨年分全部女學世界婦女界婦人の友婦人畫報女學講義錄昨年六月號より本年四月號迄同號にても宜しい其他御不用書籍雜誌御持合の方は御惠送下さい屆き次第相當の書籍雜誌で謝禮致します

○大阪南區日本橋三丁目柳生方　大島野の花

△若しや皆様のうちに南方の花、空穂歌集、御持ちのお方は有りませんか、妾の持つてゐる佐保姫と御交換を願ひ度う御座いますがキット前もつて御通知をお願ひ申ます

○鳥取縣八頭郡國英村小手　小林英子

▲持つて居る書物。「婦人畫報四冊」「婦人世界少し」「婦人と子供」少女世界其他種々
△讀み度き書物。「金色夜叉後編」「少女の戀」「藤村操」「若き女の手紙」
右の内一冊でもよろしゆうありますから妾の持つて居る書物と交讓して下さいな、もし御交讓して下さいます御方は御本をこちらから先に御送りします何卒ね

○攝津池田驛阪上平右衛門方　紫花

▲不用の書籍。金色夜叉（紅葉）夢二畫集「野に山に」「旅の巻」「櫻さく國」「春の巻」「さよなら」少女の戀。徒然草。「ヨへイ畫集。黒潮（蘆花）寄生木（蘆花）麗風戀風（天外）。歌集。
△入用の書籍。夢二畫集の姿の持つてゐないもの。父の罪。殘花一輪。旅順實戰記。歌集なれば何んなものでもよろしうございます。亦妾の持つてゐるものを讓受けお望のかたはおゆづり申上ます

○姫路市西二階町土井辰次方　藤原文子

▲不用の分。不如歸、秀才文壇、姫路名所繪葉書を三十枚とを持つて居ります御入用の御方は御持合の物を御送り被下さい私も直ぐ御送りしま

すよ又御手紙も交際 て被下さいませ御願ひ申ます

○徳島市八百屋町志摩方　中村玉野女

▲最近發行「女子文壇」「婦人くらぶ」「婦人世界」「文章世界」「昴」等其他數十冊の雜誌申込順に從ひ先着者へ無料にて分讓す。但希望者は郵稅相添申込の事。尚永井柳太郎「英人氣質思出の記」「夕暮」「收穫」「晶子」「白光」「醉茗」「新體詩作法」等お讓り申可候間下名迄續々御通知被下度候。

○群馬縣多野郡鬼石町五〇福田方　柴羽ことり

▲持てゐる書。土岐哀果氏歌集「泣笑」與謝野氏の「かしの葉」、文章新字典、ツルゲーネフ散文詩、愛弟通信、「牛のよだれ」、夢二書集春の卷。

△入用の書。思い出、（詩集）、南方の花、其他の詩歌集スバル、劇と詩、書籍、などと交換したし。恩出と南方の花はゆづり受てもよし！。

○廣島市外古江代古多　芳子

△求める書。「青海波」「佐保姫」「常夏」「夢の華」「舞姫」「酒ほがひ」「有明集」「山河」「覺めたる歌」「俗人」「路上」「迦具土」「山上湖上」「つゆ草」「思ひ出」「容積歌集」「新月」

▲所有の分、「別離」「永日」「春泥集」「收穫」「邪宗門」「蝶」「窓」「街」「響」「山上より」「泥人形」「草あやめ」「譯譜」「御風小品」「小品作法」「愛の書簡」「廢園」「寂しき曙」「旅より旅へ」「習作」「夢二集秋の卷」「スケッチブック」以上御希讀又は御交換を願ひます

○茨城縣新治郡高濱町　立川竹子

▲南總里見八犬傳全部御讓り申度し、御望みの御方は御一報を願ひます

○熊本縣葦北郡二見村　本村菊枝子

▲妾に日本文章學院最新の文章講義錄全部洋布クロース金文字入の極美に製本したのがあります。未だ手垢もつかぬ新本です、御入要の御方は往復はがきで御照會を願ひます。

○山形縣飽海郡酒田町寺町番外十四　高橋よし江

▲皆樣本誌昨年七月十日の增刊「新文章」をお持ちのお方もし御不用で御座いましたなら何卒御惠み下さいませんか、御禮には失禮乍ら本年の女學世界、又は少女世界、二冊差上ます何卒お願ひ致しますわ

○宇都宮市伊賀町寺内方　橋本はな

▲まことに申しかねますが皆樣のおうちに田山花袋氏著の花袋集第一をお持ちの方が御座いましたらぜひ御讓り下さいませんか、何卒一先御一報下されます樣に

○泉州泉南佐野郡中西町橋野藤平内　橋本みつ子

△皆樣の内に北原白秋樣のおもひで夜雨樣の二十八宿、谷崎潤一郎樣の青刺、近藤樣の南方の花、牧水樣の別離同人の路上等御不用の御方樣は私の「夢二畫集夏の卷」「醉茗樣の塔影」「晶子樣の戀衣」「日本及日本人一月特別號」「成功特別號浪人號」「女子文壇第七卷の十一月及十二月號」「晩翠の天地有情」と御交換して頂戴

繪葉書

○京都市醒ケ井通り魚棚北入相馬裁縫所内　江川富美子

▲知らぬ土地　妾は舊習に囚はれた父母の膝下に育ちましたのですから近郊より外へは行つた事がありませぬ故未だ見ぬ姉樣方の居ませる御地へ一度行きたいと思つて居りますが前にも申す通りの始末で中々遠い處へは連れて行つては下さりませぬ故せめて繪はがきか御手紙で知らぬ風光に憧憬れて見たいのですから繪はがきの交換をして下さりませ

○北海道後志國磯谷郡昆布　兼田ふさ子

▲いろ〱　私のところに色々の繪葉書が少しばかり有りますから何卒皆樣と御交換を御願ひ致します

○熊本市出京町二丁目熊野源八樣方　とし子

▲初めて　なつかしき誌友の皆樣よ私は此度初めて投書いたしましたのまことに不束者ですが何卒永久に御交際を又美くしい繪葉書の御交換を切に御願ひ申上ます

○下谷區仲徒士町四ノ一七、古谷方　後藤憲子

▲親しき友もなく　私は他に親しき御友達もなく毎々誌上に日を送つて居り升が繪はがきの交換を願ひ升尚永く御交際御願ひ致し升

○大阪天王寺眞法院町四五〇二　阪井露子

▲交壇の御交り　を願ひます諸孃樣よ繪はがきの交換文通を願ひます

○本郷區湯島新花町三十九　片田とみ子

▲田舍へ旅行したい　誌友のおなつかしき皆樣私は都の中央に生れてまだ田舍のよい景色に接したことはありません本年の夏休みにはどこでも好む處へ旅行してもよいと父に許されましたから是非參りたいと思ひます皆さまの中にはよい景色の處にお住ひなさる方もたくさんおありでせうからどうぞ田舍の繪端書を送つて下さいお禮には東京の繪端書をお送りいたします

○名古屋市西區鹽町三丁目森田はつ方　竹内ふみ子

▲いとしき方々　これから友が一人ふえたと思召してね繪葉書文通の交換を願ひます

○大阪府東成郡中本村本庄　福井東月

▲古郵便切手や　繪葉書の交換を愛讀者の諸姉樣方へ御願ひ致します

個人消息

○大阪市　貴美子

▲大阪の小泉貞子樣　貴孃は西區第一高等で級長をしておらしつた方で御座いませう、おなつかしうございますわ、私もセームクラスで同じ樣に机を並べた者でございますの、どうかこれからもお交り下さいませ、それから杉山花枝さまと仰しやるお方は千代子樣ぢや御座いませんかそうでしたら私是非お話かせしたい事がありますの次號で御答を

○岐阜縣可兒郡廣見村淵之上中屋敷邸内　加納雪舟子

▲田中梅野樣　去る四十四年鳥取市高等女學校を卒業なさいました田中梅野孃樣を若し御存知の御方がありましたら、失禮ですが彼孃の御住所を御知らせ下さいませ。若しお知らせ下されるならば郵税先拂でも宜敷又そうでなけりや相當のお禮をします。彼孃は鳥取女學校を卒業後奈良市の方へ行きなさつた樣子ですが奈良のお方で御存じの御方も宜敷御願ひします。奈良の女子高等師範にお這入りなされた樣にも聞いて居ますがお知らせ下されば下記まで

○濱名の里にて　靜子

▲岡山の紫苑樣　久しくお便りいたしませんがお許し下さいまし、四月頃京都吉田にて……としてお手紙下さつたきりで一寸も御住所がわかりませんでしたのでいつも淋しく日を暮らして居ります。

○京都　楓樣

▲常陸の翠松子樣　誠に御芳志ありがたうございます。何卒御住所をお報知下さいませ。東京のたつ子樣。おはがきありがたうございます。貴孃もどうぞ御住所を御報知下さいませ

○高知縣江の口町　千枝子

▲服部春子樣　五年前にお別れ致しました服部春子樣其後の御消息は……二人がよく遊んだ運動場の隅に植ゑてあつた一寸ばかりの楠も早土手より高くのびました私江の口町から小高坂の小學校へ通つてゐた千重でございます

○函館辨天局内　西野美津

▲中村房子樣　樺太の方にお伺ひ致します年は私と同じ十六歳で中村房子樣といふ方の御住所御存じの御方は何とぞおしらせ下さいませなほ愛讀者のみな樣お手紙の御交換を願ひます

編輯通信

▲誌友會に就て　誌友會開催に就いての問合せが方々からあつた、本年は都合で春季に開くことを見合した秋季に開くことゝする、今度は第三回目であるから顏ぶれも餘程違って來た會の方法も聊か違つた方法でやりたい。

▲投稿輻湊　投稿の輻湊は毎々の事であるが、近來は又それが目立つて多く、選評濟のもので載らぬものが多い、散文だけでなく、本欄へ來る特種の原稿が澤山たまつてゐる、此等は順次發表して行く筈だ、投稿家諸君も落膽せずに掲出されるのを待つて頂きたい。

▲佳作以下　の小說、散文などの從來は五號活字であつたのを、本號から六號に改めた、活字が小さくなつたのは、ものがわるくなつたのでない、右に云ふやうな投稿過多から來た餘儀ないことで、一篇でも多く掲載したいからだ。

新刊

○平家の人々　高須梅溪著

本書の批評は本欄七六頁に在り

○人性の醫學的觀察　田中祐吉著

本書の批評は本欄五七頁に在り

○空穂歌集　窪田空穂著

窪田空穂氏のまひる野と云ふ歌集は、明治の歌集の中でも、尤も好い歌集の一つであつたから誰も彼も愛讀したが、當時早く絶版になつたので書物が少く、名を聞いて讀まない人が澤山あつた。今度本書が出てまひる野の全部が加へられてあるから、喜ぶ人が多からう、まひる野以後の歌を、明暗、黎明の二大別して、近頃までの氏の作は殆んど此一冊に蒐集してある、氏の歌は寂しいけれど味ひ深く、しみ〴〵とした歌ごゝろがあつて、一首々々動かずことの出來ない或る感情と、或る意味とを持てゐる。忽卒に讀み終る歌集でなく、長く手許に置いて、或る時、或る場合に讀むと、毎に新しい同情、同感を喚起す歌集である。吾人は氏の歌に就いて猶多くを語りたいが、今は只本書の出版された歡びを述べるに止めて置く、四百頁、函入(定價金八十五錢、神田表神保町二中興館出版)

○夜の葉　森川葵村著

噂のあつた森川葵村氏の詩集「夜の葉」は愈よ出版された、體裁に於て申分はない、内容は近代人の「純なる戀愛を歌へる詩集」として吾人の感じた處を次第に述べてみよう、吾人の批評するに先だつて讀者諸嬢に先づ本書を熟讀して置かれんことを希望する、潔白なる製本、本綴(定價金六十錢、京橋畔東雲堂出版)

○劇曲平和　平木白星著

材を現時の國際關係に採り、世界の武裝的平和を罵る惡罵、單純無味なる平和に慊らざる若き天國の青年男女、眞の平和を欣求する清教徒的の神兒等を登場人物として、日本少女の服裝せる神の子が、竟に眞の平和を地上に來らしめると云ふに終る脚色である。構想の偉大なることに於て、日本在來の劇に未だ見なかつた快心の作であると斷じて可からう。―白―(定價五十錢東京日本橋區上槇町如山堂出版)

○新體女子書簡文　内海月杖著

本書三分の二は文範で、三分の一は作法を説いたものだ、作法を説いてゐる中に、吾人が見て新しいと思ふ説が多い、新代の婦人諸君が日常の書簡文を稽古するのに、尤も新しい著述である、文例の方にも新しい題が多い大抵は口語體で、僅に候文體を加へてある、四號活字だから甚だ讀みやすい樺色クロースの美しい書物、婦人の書架に飾るに適す(定價金九十錢、本郷森川町文成社出版)

○見知らぬ世界　竹久夢二著

アンノンワアヅ、未だ見たことも、行つたこともない世界が、若い人達にはある、それは何の世界であらう、一つ積んでは父のためとうたふ賽の河原であらうか、十四と云ふたらよいことにと歌ふ覗き眼鏡の中であらうか、あれも知らぬ、これも知らぬ、生の恐れ、死の歡び、見たまへ此小さな一冊の木版摺の書草紙の本を、然うして二人で見知らぬ世界を探し出さう(定價金五十錢、麴町洛陽堂出版)

○足跡　徳田秋聲作

自分は正直に云ふが未だ此小説を讀了する時間がない、先に出た「黴」の姉妹篇で、彼の書に對して云つた批評を、本書に對しても云へるだらうと思ふが、或る人は此作の方が好いとも云ふから兎に角一讀の上兩々比較してみて何か云ふことがあるかも知れぬ、此處には只出版されたことを吹聴するに止めて置く(定價金五十五錢、麴町區飯田町新潮社出版)

○新しき抒情文　山下寂水編

感情を主とした文章を書く人々の參考書で、大部分は文例である。文例の引用も善いし、註解の方法も新しい、新しいばかりでなく細かく批評してあるから、何處が善いかと云ふことも分つて初學者には便利だ、別に作法も附いて居る(定價金五十錢、神田小川町尚文館出版)

○磯千鳥　植松美佐男著

悲劇的少女小説である、此作者の少女小説は一般の少女に愛讀されると見えて、多々益々著作される、作者が若いだけに、若い女達の胸にも共鳴する或る者があるのであらう(定價金四十錢、本郷區東片町本郷書院出版)

雜報

與謝野夫人の渡歐

與謝野晶子女史は豫定の如く、五月五日午後六時半新橋發の汽車で歐羅巴の方へ出發した、旅程は敦賀まで汽車、敦賀より浦潮までは汽船に乘り、浦潮からは汽車でシベリア大陸を横斷し、前月二十日恙なくフランス巴里に着いた筈である。

夫人の洋行は少からず世人の視聽を刺戟した一個の閨秀歌人として、一個の文學者の妻として。七人の子の母として、夫人の洋行は種々の方面から觀て、婦人社會に新しいレコードを殘すであらう。

歸朝の期は來年一二月頃だと聞くから、然う永い間ではないが、婦人の身の異境の空に旅さるゝには、其興味の多きと共に、不便のことも多からう。吾人は切に與謝野氏夫妻の爲に旅中の健在を祈るものである。

世界の文豪逝く

瑞典の文豪、小說家にして脚本家たるストリンドヘルヒ氏は六十三歲の齡で、此程病死した氏は世界に聞えた文豪で、劇や小說の作が澤山あり。何れも皆世界的價値のあるものである。一種の主義を持つた人で、殊に有名な文壇ものであつたさうだ、此人の作と日本の文學とは大へに關係があつて、此人の作から影響を受けてゐることも少くない、日本で尤も多くストリンドベルヒの作を譯出したものは例の森鷗外氏で本誌昨年の新年號に掲載した『一人舞臺』と云ふ氏の飜譯も、ストリンドベルヒの作つた劇だ。

△太平洋畫會は五月に展覽會を開いた、今年は出品の點數も多く、水彩畫油畫何れにも好い作があつて、石井柏亭氏も二十餘點出品した。

△文藝協會のマグダは今後の興行を禁止された

△若山氏等の自然の初號が愈よ發行された。

六月

六月は雨の多い月です、からつゆでない限りは雨が多い、降りみ降らずみ五月雨の頃で、毎日じとじとと鬱陶しい天氣がつゞく、併し一旦晴れるとなると所謂梅雨晴で、周圍の光景が一變します。草は伸びる、木は茂る、木の實は大きくなる。田が青くなる、何處も彼處も開け放して、初夏の風を通す快さ。金魚鉢や、水盤や、つりしのぶや、風鈴や、靑すだれや、日本の家に相應した期節のかざりが、周圍の空氣と調和するのを以て月並式だと罵倒し去るのは、よけいな苦勞です。

ネルやセルの着心地のよい六月は、女の着物が薄くなるためでせうか、女が美しく見えると誰でも云ひます。夏らしい白地に、涼しさうな一重帶でも締めて、夕方の打水した巷を歩いてゐる若い女達の姿は、全く美しく見えます。電燈よりも瓦斯燈の情緒のなつかしい時です、室内の瓦斯燈にせよ木の間のアーク燈にせよ、此頃の白い燈火、靑い燈火は涼しくて好い、宵の間でも灯の疲れた夜明でも――。

日曜　二日　九日　十六日　二十三日　三十日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る ▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること ▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること ▲小說は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以内 ▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲詩友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る ▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行内外とし總振假名をつけること ▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は ▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す ▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢 ▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す ▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす 定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇 定價　每月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◉特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘

◉普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘

◉半年分（特別二冊 普通四冊）前金壹圓九錢　送料拾壹錢

◉壹年分（特別四冊 普通八冊）前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵劵代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▽廣告掲載料　申込期限 發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓（七百廿四字 三十二行）
貳等割引　一頁貳拾圓
參等割引　一頁拾五圓
半頁拾圓
一行四拾錢（一行五號活字 二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂
其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年五月二十五日印刷納本
明治四十五年六月一日第八年第六號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　女子文壇社
東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂
東海堂、良明堂、大阪盛文館外

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇 普通號 定價金拾五錢 郵税壹錢五厘